

博士論文

東アジア文化の原構造  
－相互理解へのアプローチ－

2016年3月

追手門学院大学大学院経営学研究科

安隨 友和

## 目 次

はじめに	5
第1章 異文化間コミュニケーション	10
第2章 日本文化、中国文化、朝鮮文化の原構造	17
I. 「龍」と「鳳凰」	17
II. 中国の「天」思想と日本文化の柔構造	21
(1) 中国の「天」思想にみる立体構造	21
(2) 柔軟な日本文化の基本構造	27
(3) 中国と日本における「中」の概念	32
III. 朝鮮と琉球への影響	35
(1) 中華と朝鮮	36
①被侵略の歴史	
②対外不信と地縁・血縁	
③事大と「恨」	
④事大と「小中華」	
(2) 琉球からみた中華	47
①首里城	
②明との関係	
③冊封と文化面での影響	
IV. 伝統建築の思想	53
(1) 自然に対する態度	54
(2) 四合院	57
(3) 客家土楼	59
(4) 日本の伝統建築様式	60
(5) 李氏朝鮮の両班住宅	64

第3章 東アジア各国文化の論理演算モデル	67
(1) 論理演算モデルー大陸、半島、島嶼	67
①大陸 (中国)	
②半島 (朝鮮)	
③島嶼 (日本)	
(2) 東アジアモデル間の交渉、衝突	73
第4章 東アジアと近代西洋文明	76
(1) アヘン戦争	76
(2) 清とフランス、ロシアとの抗争	80
(3) 明治維新と近代化	83
(4) 日清、日露戦争から日中戦争へ	85
(5) 明治維新以降戦前までの日本モデル	92
第5章 海外との文化交流の地	98
(1) 長崎に生きる中国文化	99
①興福寺、崇福寺	
②諏訪神社 長崎くんち	
③唐人屋敷とチャイナタウン	
④孔子廟 中国歴代博物館	
(2) 中国、近代欧米との交流地としての神戸	107
①第一の開港 大輪田泊と日宋貿易	
②足利義満の朝貢貿易と江戸幕府の鎖国	
③神戸開港	
④神戸の華僑	
⑤文明開化の西の拠点として	
⑥清との関係の変化	
第6章 潜規則と暗黙の了解	123
(1) 中華の復活	124

（２）一方の常識は他方の非常識	127
（３）相互理解のためのフレームワーク	129
（４）中国的「潜規則」の領域	132
①共産党の一党独裁	
②面子は法を超える	
③為我主義的個人重視の行動規範	
④「ウチ・ソト」意識と崗位	
⑤個人主義の米・中比較	
（５）日本的「暗黙の了解」の領域	151
①集団・組織第一主義	
②曖昧さを以て美德とする	
おわりに 相互理解の促進に向けて	158

はじめに

日本と中国は「一衣帯水」<sup>1</sup>の関係と言われながらも「近くて遠い」国である。本稿を執筆するにあたっての原点は私自身の中国での実務経験にある。その中で異なる考え方、行動規範がある<sup>2</sup>ことに身をもって気づいた。そういう目で見ているうちに表面に現れる考え方や行動の背景にはもっと深いところでの何かが働いているのではないかと考えるようになった。

我々が日常接するマスコミやインターネットの情報でもやはり異なる考え方があふれている。それは「なぜ?」「どうして?」と感ずることそのものである。両国の間の相互理解をさらに深化させる必要があると誰もが感じながら、そのこと自体をどうすればいいのかわからない、現実的な方法論が見当たらず、言うは易く行うは難しの典型になっている。

韓国、北朝鮮との関係も同様である。日本と東アジア近隣諸国との間で良好な近所づきあいがうまくできない。なぜか?

同じ東アジアの国で、古代には中国を師とし「漢倭奴国王」と封じられ、その後遣隋使、遣唐使の活動を通じて当時の先進国、中国から多くの文明や制度を採り入れ国造りをしてきた日本。朝鮮は日本よりもさらに強い影響を受けてきた。地続きのロケーションにあることが時に領土争いを生む一方で、満州族の清王朝が成立した後は自らこそが「中華」であるとする「小中華思想」を生んだ。ともすれば根は同じなのだから、同じアジア人だからそんなに違うはずはないと思うことがさらにその違いを必要以上に際立たせてしまう。

「日本は中国を基準にして日本風アレンジした文化である」と考える中国人、一方日本人は「中国文化の影響を受けてきたし、そもそも漢字を使う国は今は世界で中国と日本だけではないか」。韓国人には小中華の考えのもと、「日本は文化的には劣等」という意識もある。古代朝鮮半島から日本に渡った人々が先進の文化、技術を伝え教化しそれが日本の国づくりの基礎となったとするものである。

「同文同種」という意識の中でお互いにそう努力をしなくても分かり合えるのではという甘い期待が生まれるがこの期待は徐々に崩れていく。身近な例で言うと、同じ漢字表現

<sup>1</sup> 隋の文帝楊堅が南朝・陳を攻め統一を果たすが、陳を攻める際に「一衣帯水」（衣帯のように狭い川）と天然の要害であった長江を表現した。（稲田孝、立間洋介、村松暎編『中国の故事名言集』：10-12頁。）

<sup>2</sup> 中国で駐在経験のある数人に簡単なヒアリング調査を試みたところ、私同様に異なる考え方、規範を感じていた。（巻末にヒアリング結果）これらの意見をリストアップするだけでは表面的なマニュアルになってしまう。このことから「原構造」を考える必要があると感じた。

でも中国語と日本語で意味が異なる「同字異意」とでもいうべき単語がたくさんある。『先生<sup>xiansheng</sup>』は日本語では尊敬の意を含めたことばであるが、中国では「〇〇さん」という軽い表現で、日本語でいう先生は『老師<sup>laoshi</sup>』という。日中の民間交流が始まった初期には中国で「先生」と呼ばれて気をよくしていた人もいた。『勉強<sup>mianqiang</sup>』は「なんとか頑張る」とか「無理矢理に」という意味で、当然「値引き」の意味はない。日本語の勉強は『学習<sup>xuexi</sup>』である。『去<sup>qu</sup>』は日本語では「去る」、中国語では「行く」。方向が正反対である。『愛人<sup>airen</sup>』『老婆<sup>laopo</sup>』はともに「奥さん」の意味である。『酒店<sup>jiudian</sup>』はホテル、『手紙<sup>shouzhi</sup>』はトイレットペーパー、『汽車<sup>qiche</sup>』は自動車、このように同文ゆえに逆に誤解を生みやすい環境にある。

ベネディクト，R．は異文化の相互理解の重要性について、「日本をして、日本人の国たらしめているもののみならず、アメリカをしてアメリカ人の、フランスをしてフランス人の、ロシアをしてロシア人の国たらしめているところのものについても、我々が依然として最も漠とした、また最もかたよった観念を抱いているということである。この知識を欠いているために、世界の国々が互いに誤解しあっている。我々は、悶着がたんに似たり寄ったりの二つのことがらの間に起こったものにすぎない場合に、とうてい和解することのできない大きな差異があるように思い込み、逆にある国民が、その経験と価値体系の全体によって、我々の意図したところのものとまるで異なった行動指針を心の中に抱いているさいに、共通の目的をもっているなどということをして口にする。我々は彼らの習慣や価値がどんなものか、ということを見出す機会をもとうとしない。もしそうしたならば、ある行動指針は、それが我々の知っているものと違うからといって、必ずしも悪いとは限らない、ということが発見されるのであるが」<sup>3</sup>と云う。相手に対する理解が足りないことは、小さなことを大事に変える。

では、どう理解していけばいいのか。表に現われてくるマスコミなどの情報はともすれば商業主義的になりがちである。これをいくら集めても理解が進むとは思えない。ここは、その根本へのアプローチが必要だ。

本稿ではその根本を「原構造」という言葉で表現し表題とした。ある民族や国家の価値観や文化はその社会に属する人々がその風土の条件や社会環境の中でそれも歴史的な伝統も踏まえて生み出される。それを生み出す基本的な価値意識を「原構造」と定義する。この「原構造」は一旦形成されるとなかなか変わらない。それは人は生まれながらにしてあ

<sup>3</sup> ベネディクト，R．(2005)『菊と刀』: 25頁。

る民族に所属しその社会のなかで育ち、また次の世代を育てるからである。

丸山（1961）が思想のありかたとして言及した「ササラ型」と「タコツボ型」<sup>4</sup>のササラの根本は何かを理解することによってそこから枝分かれした個々の現象、ササラの先端が理解しやすくなるだろうと考えてみた。ササラはもとのところが共通していてそこから分かれている。19世紀後半、ヨーロッパでは学問の世界でも法律、政治、経済、心理など専門化、独立化が進んだが、その根本はギリシャ、中世、ルネサンスとつながる長い歴史的伝統にあるとした。ちなみに日本に移植された時は根が切り離されていた。そのため日本は「タコツボ」型、それぞれが孤立して並列している。

東アジアで言えば、その「もと」はどう考えても中国文明でありその考え方である。この大文明が自らの中華のなかでどう変容しつつもつながってきたのか、周辺にある朝鮮や日本、琉球にはどういう影響を及ぼしたのか及ぼさなかったのか。

中国をどう理解するかという方程式はその淵源を4000年の歴史にはぐくまれた中国人の宇宙観からはじまり、儒教思想、中華思想という古代中国からの伝統的観念から導き出されるものが第一点。西洋文明との衝突が起こったここ170年あまりの世界観の変化によると考えられるもの、とりわけ日本との関係の大きな変化が第二点。さらには現在に直接結びつく共産党価値観の中での中国という第三点。これらの複数の糸が複雑に織りなす経糸と考えられる歴史的観念と現実の体制である共産党政権下の中国という緯糸を解きほぐしながら理解することが必要である。それぞれの糸の長さは4000年から改革開放以降の30年まで長短はあるが、長短にかかわらず現在の中国にあるいは中国人の考え方に一定の基準、規範を与えていることは間違いない。

本稿の構成は、

まず、第1章で異文化間のコミュニケーションの難しさと相互理解の重要性についてシタラム、K. S. (1985)の先行研究<sup>5</sup>をもとに検証する。第2章で中国文化、日本文化、朝鮮文化の原構造へのアプローチを開始する。中華と周辺民族の社会構造のモデルを提示しその特徴を見ておくことでそんなには違わないと思っていた中国、朝鮮、日本の価値観や考え方には大きな違いがあることを確認する。さらに、それぞれの民族の伝統建築を切り口としてその思想を見ておく。というのは文化と呼ばれるものはある地域で生活を営む人々

---

<sup>4</sup> 丸山真男(1961)『日本の思想』: 143頁。ササラは竹の先を細かくいくつにも割ったもの

<sup>5</sup> シタラム, K. S. (1985)『異文化間コミュニケーション』

が共通認識としてもっていることすれば、その生活基盤たる住居はその地域の気候、地理的要因や伝統的な慣習、考え方などその地で生きるための文化、社会の基本だろうと考えたからである。これらの分析をもとにして第3章ではこれを論理演算モデルにあてはめて考えてみる。こうすることによってそれぞれの思考パターンの特徴をかなり一般化することが可能になる。

ここまでは東アジアの域内で生まれ育まれてきた東洋の文化ということであるが、19世紀半ばから西洋文明との衝突が始まる。第4章ではその歴史の動きに合わせ社会構造のモデルがどう変化したのか、しなかったのかを中国、朝鮮、日本それぞれに見ていく。この中で最も大きく変化したのは日本であったし、その問題は結果として近隣諸国から指摘される「歴史認識」に直接的に関連している。そうは言っても考え方や価値観が違うからと言って突き放してしまえば依然として近隣諸国との近所づきあいは改善しない。違いは違いとして認識し、その上で異文化相互理解を深めることで共存共栄の途が見えるのではないかという期待をこめて第5章で日本の二つの都市の事例を見ておく。一つは長崎、もう一つは神戸である。長崎は江戸鎖国期から海外に開いた窓であり神戸は明治の開港後、西欧文化の受け入れ窓口ともいえる機能を果たした。そして最後の第6章に現在の日本人と中国人の考え方の違いを「ジョハリの窓」風に分類してみた。これによって日本人には分かりにくい中国人の考え方、その逆に中国人には理解しがたい日本人の考え、行動といったものが「そうだったのか」という感覚で理解してもらえれば良いと考えている。それがわかることで相互理解は進みやすくなるのではという期待をもっている。

なお、本稿では社会学や心理学でよく用いられる統計的手法—質問紙、面接による調査と分析—は採用しなかった。現段階でよく理解できていない他の文化、価値観を理解することから始めるには、まずはその克服から始めなければならない。ある程度の理解、認識ができたあとで数量的、統計的分析が有効になるだろうと考えたためである。質問紙調査なども考えようによってはお互いを知らない者がマスコミなどの情報だけで判断してその結果が「お互いを信用できない」という者が大多数だった、といったことになってはかえって誤解を増幅しかねない。

本稿の中では「文化」と「文明」ということばが多く出てくるが、その定義について触れておく。まず「文化」とは人間が自然に手を加えて形成してきた衣食住をはじめ科学、技術、芸術、道徳、宗教、政治などの物心両面の成果である。「文明」とはほぼ同義に用い



られることが多いが、人間の精神的な生活にかかわるものを「文化」と呼び、技術的発展のニュアンスの強い「文明」と区別する（広辞苑）。本稿においても同様な意味において「西洋文化」「西洋文明」というような使い方をする。

また「中国」と「中華」については「中国」は自然地理的な物理的な領域を示し、国家としての地域を表すのに対し、「中華」<sup>6</sup>は「中華思想」「中華文明」といった思想、文明を含めた広義の文化的なということばとして表現し地理的、物理的な領域を示すものではない。

---

<sup>6</sup> 第3章（1）①大陸(中国)も参照

## 第1章 異文化間コミュニケーション

東アジアの日本と中国、韓国は相互理解を深めなければ将来に対して無責任である。西欧やアメリカから見れば、日本と中国は同じ東洋文化圏であり儒教、仏教思想をもつ国であるから社会体制は異なっても、類似した文化をもつと思われるかもしれない。しかし当事国からすれば、同じ根をもつ「同文同種」ゆえに異なる考え方や価値観にことさら敏感になり、必要以上にその違いを強調しがちであることも事実である。それは文化的価値観は類似項が比較的多くても、その政治、経済、軍事に対する考え方の違いに基づく国家的価値観の大きなギャップによって人々の行動につながる態度や慣習に違いが出てきていることも一因であろう。ともあれ、異なる文化を持つ人と人とのコミュニケーションや相互理解は簡単ではない。アメリカであれば、自国内に多様な人種、民族が居てその出身ごとに独自の文化をもっている。異なる文化を持つ人々とのコミュニケーションの取り方や相互理解を進める、あるいは共存していくためのルールや考え方などについて日々、訓練される状況にある。合衆国はそういう状況を前提として国づくりをしてきた。中国にも 56 もの民族がいるのではないと言われるのはもちろん承知しているが、現在は文化的にはその人口の 90%超を占める漢民族を中心とする国家である。現にウイグル族の新疆ウイグル自治区やチベット族の西藏自治区などは民族を巡るトラブルが頻発している。異文化、異民族問題は同一国内でも難問になる。外国の異文化、異民族との相互理解はさらに容易ではない。

そもそも異文化間のコミュニケーションは難しい。シタラム, K. S. は図 1 に示すように「同じ文化間でのコミュニケーションは文化的類似性が強くコミュニケーションをとることは比較的容易だが、一つの国の中でも異人種間となるとそれぞれの出自の文化的背景が異なるために類似と考えられる範囲は小さくなる。さらに異国、異文化間となると類似性がほとんど無くなる」<sup>7</sup>という。

---

<sup>7</sup> シタラム, K. S. (1985)『異文化間コミュニケーション』: 44 頁。

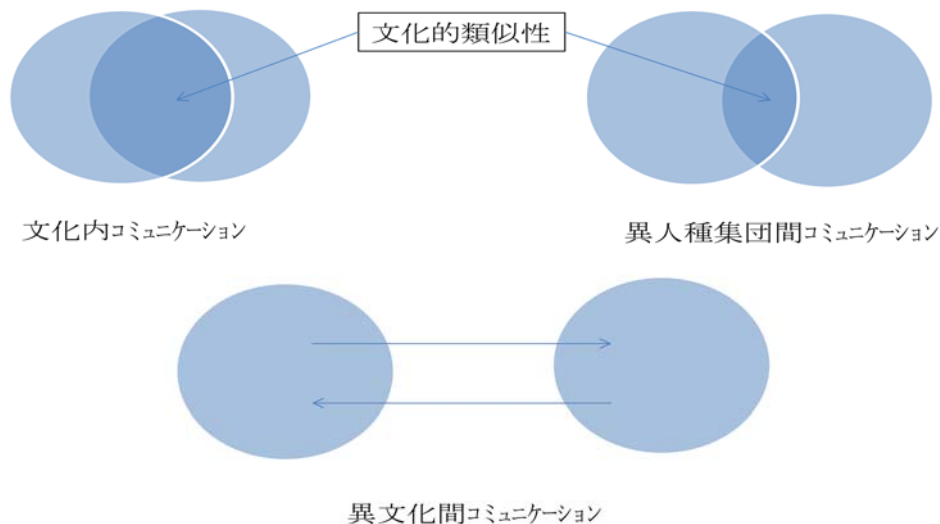


図 1 文化間、人種間コミュニケーション

それゆえ、効果的なコミュニケーションを行うためには相手文化を理解することから始めなければならないと述べている。そのためには、それぞれの文化価値がどこにあるかを認識する必要があるとし、29 の価値項目をリストアップした。その各項目について、欧米文化、東洋文化、黒人文化、アフリカ文化、イスラム文化の一義的重要価値、二義的価値、三義的価値と無関係な価値に分類した<sup>8</sup>。グローバルに見ると、文化の類型はこのような括りになるのかもしれないが、この観点でいくと日本と中国は同じ東洋文化にひとまとめになってしまう。が現実には日本、中国の間にも政治、経済体制や歴史とその見方である歴史観の違いによって文化的差異が徐々に際立ってきている。言うまでもなく、文化の持つ価値観はそれに属する人々の行動を導く基準となる。またある文化に属する人々は他の文化を否定的に見ることも往々にしてある。人は生まれた時からその特定の文化の中で育っていく。無意識のうちにその価値を引き継いでいくことになる。

シタラムの 29 の価値項目とその分類は図 2 の通りである。これを現在の状況下で再度俯瞰してみると、半分近い 13 項目で日本と中国の間で価値の順位が異なってきているようである。29 の価値といくつかの例を挙げながらレビューしてみる。

<sup>8</sup> シタラム, K. S. (1985) 『異文化間コミュニケーション』: 236 頁。

## 価値分類システム

価値	一義的	二義的	三義的	無関連
個人主義	欧	黒	東	イ
母性	黒東	イ欧	—	—
社会階層	欧東イア	黒	—	—
男らしさ	黒イ東欧ア	—	—	—
感謝	東ア	イ黒	欧	—
平穩	東	黒	欧ア	イ
お金	欧ア黒	イ	東	—
謙遜	東	黒アイ	—	欧
時間厳守	欧	黒	イ東	ア
救済主義	欧	イ	—	東黒ア
カルマ	東	—	—	イ欧黒ア
一番	欧	黒	—	東アイ
積極性(攻撃性)	欧黒	イ	ア東	—
集団への責任	東アイ	黒	—	欧
年長者への尊敬	東アイ	黒	—	欧
若者の尊重	欧	イア黒東	—	—
客へのもてなし	東ア	黒	イ欧	—
相続した財産	東	黒ア	欧	イ
環境の尊重	東	黒ア	欧	イ
肌の色	東欧黒	イ	—	ア
農耕地の神聖さ	東	ア	—	黒イ欧
女性の平等	欧	東黒	ア	イ
人間の尊厳	欧黒	東アイ	—	—
能率	欧	黒	東イ	—
愛国的行為	黒イア東	欧	—	—
宗教	欧黒イア東	—	—	—
権威主義	東イア	欧黒	—	—
教育	欧黒	東アイ	—	—
率直さ	欧	黒東イア	—	—

凡例——欧 = 欧米文化  
 東 = 東洋文化  
 黒 = 黒人文化  
 ア = アフリカ文化  
 イ = イスラム教文化

図 2 価値分類システム

・「個人主義」という価値項目がある。当然欧米文化では一義的価値である。東洋文化は三義的価値と分類されている。現在の中国では欧米とは異なる背景をもつ独特の個人主義的行動が多くなっている。50年前の毛沢東政権の文化大革命では、多くの人々が走資派とか知識分子という黒五類<sup>9</sup>に入るというレッテルを張られる、大衆に批判され失脚する、あるいは社会的に抹殺されてしまうということが起きた。そのため、この中で生き残るためには「個を守る」ことがまず最優先の関心事であった。さらに時代が進み改革・開放期に入ると鄧小平の「先に豊かになれる者から豊かになってその富を社会全体に還元しよう」という先富論に導かれ、個人の才覚、能力をもって豊かさを我れ先に求める行動が目立つようになった。欧米の自由主義とは異なる背景を持つ個人主義が強くなってきている。これとは逆に「集団」という価値は東洋文化では第一義に分類されているが、これは日本にあてはまる。最近では従来に比べ、「個」を大切にするようになってきたが、依然として世界の中では相対的に言えば集団主義、あるいは「自らの周囲の期待を考慮した行動」をとることに価値があると考えている。一方、中国では共産主義だが集団主義的な行動、思考は少なくなっていると考えられる。

・「権威主義」は、東洋文化では一義的価値と位置付けられている。権威主義とは権威に服従するという個人の姿勢や社会体制であり、政治権力が限られた指導者に集中し、権威者に同調しないことは反逆と受けとめられる。これは共産党独裁政権下にある中国では典型的にみられるが、戦後の民主主義日本はそうではなくなっているのとみるのが妥当であろうし、中国でも権威主義的とひとくくりにはできない状況も生まれてきつつある。

・「感謝」「平穩」「謙遜」といった項目も東洋文化では一義的と分類されている。この項目は欧米文化では三義的あるいは無関係な価値としている。昨今の中国の様々な動きからみるとこれらの価値が一義的とはいえない状況である。これらは元来、儒教的、仏教的な要素が強く反映したものと考えられるが、中国では文化大革命時に起きた「批林批孔」運動<sup>10</sup>に見られるように、儒教を否定したことも大きな要因になっていると言えよう。

・「お金」これは欧米では一義的、東洋文化では三義的とされている。現在の中国では経済成長が国を守るという意識が強くなってきている。共産中国の初期、毛沢東時代は結果と

---

<sup>9</sup> 黒五類は地主、富農、反革命分子、悪人、右派分子として社会的差別を受けた。(産経新聞(1999)「毛沢東秘録」取材班『毛沢東秘録(上)』:184頁。)

<sup>10</sup> 1973~76年。71年に党内No.2の林彪が毛沢東との権力闘争に敗れモンゴル上空で墜死。その林彪と保守勢力を代表する孔子思想を批判し、孔子思想をもつ権力者を打倒しようとする全国運動。江青らの「四人組」が主導し暗に周恩来を批判した。(産経新聞「毛沢東秘録」取材班(1999)『毛沢東秘録(下)』:231-236頁。)

して貧しいながらも平等という状況であったが、改革・開放政策の後には豊かさを求め、つい最近までの2ケタの経済成長、ここ数年はスローダウンしたとはいえ7%程度の成長を続けている。これくらいの成長率がないと13億の人口の多くにまで恩恵が行き届かない。それを実感できるのが「お金」である。先に述べた先富論と相まって個人の行動レベルでもお金に関する価値が第一義になり、今や欧米文化以上に重要な価値である。

・「積極性」あるいは「攻撃性」という価値は欧米文化では一義的、東洋文化では三義的とされている。これも現在の中国は一義的になったと言ってよい。黄海、東シナ海、南シナ海で多くの隣国との問題を抱え、その行動は攻撃的とさえ映る。さらに国内でも新疆ウイグル自治区や西藏チベット自治区では少数民族とのトラブルも力によって治安を保っている。つまり、国内的にも周辺諸国に対しても軍事的、経済的に影響力を強めようとしている。

・「時間厳守」「能率」という価値がある。いずれも欧米では一義的、東洋では三義的とされている。これらは日本こそが一義的で、日本の戦後復興、経済成長はまさにこれらを基本的な考え方とした勤勉性や日本的集団主義の成果と言える。一方、中国は悠久の時間軸を持つこともあって長期的な思考に優れている。目先の時間、能率というよりは中長期的な戦略、布石、構想をもって事にあたることを得意としている。

このように1976年ごろには同じ東洋文化として括られていた日本と中国であるが、現在は異なる文化として理解した方が妥当であろう。

また、この頃の日本人論や日本文化論にも日本対欧米という構図が多いと韓国人学者李御寧(1984)<sup>11</sup>は言う。「欧米社会になれば日本独特と短絡させる思考があつて、実は韓国や東洋一般に共通するものも多い」のであって、「日本人や日本文化の特性を明確化しようとするならば、同じ儒教文化的、仏教文化的、漢字文化的共通項をもつ中国や韓国との差異を明らかにすることがより強調されてしかるべきである」と。

シタラムの分析が間違っていると言っているのではない。1976年と言えば中国は毛沢東、周恩来が死去し文化大革命が終結した年で、共産中国の初期体制が終わった年である。毛の時代は半鎖国状態<sup>12</sup>になっており、中国に関する情報が絶対的に不足していたことと、

<sup>11</sup> 李御寧(1984)『「縮み」志向の日本人』: 15、20頁。

<sup>12</sup> 国連加盟は認められず、アメリカの資本主義を帝国主義とし、中ソ対立は解けず、国内では文化大革

その後の約 40 年の改革・開放政策の中で、中国社会が大きく変わったということである。シタラムの主旨は異文化間のコミュニケーションを機能させるためには、相手の文化的価値を理解することから始めるということである。個々の事象についてはその時々、国家的価値も合わせて再構築していかなければならない。日本、中国の関係は相互に相手をどう理解しているかという点についても、時とともに変化してきた。日本人が中国を見るときには歴史的、文化的価値観を縦軸とし、現在の共産党政権の考え方を横軸としてその交差点でどのような現象が起きているのかを理解していく必要がある。とにかく日本人は物事を単純明快にするほうを好み、「右向け右」で一致団結、思想統一、周知徹底し「いい」と思えば突っ走る性質で、当然ながらこのことの長所、短所がある。一方、中国人は複雑性を好むとまでは言わないが、複雑な事象をそのまま認識するという複眼の見方を重要視する。反対の概念すらも重要である。「陰」と「陽」の組み合わせによって世界は成立すると考えた陰陽二元論では、反対の概念があるからこそ一方が存在する、反対概念がなくなれば自分の存在意義がなくなる、と考える。したがって、「矛盾」や「呉越同舟」も問題なく成立するのである<sup>13</sup>。

シタラムの指摘から 40 年近くの時間が経った。その間に急速にグローバル化が進展し、世界各国、各地域との交流も日常的なものになり、異文化とのコミュニケーションの重要性はますます増してきた。訪日外国人の数も 2013 年には初めて 1000 万人を突破、14 年には 1300 万人を超えた。韓国、中国、台湾の人たちでその半数以上を占めている。

日本は後にも述べるが外国文化を積極的に受け入れてはきた。とりわけ、明治の「和魂洋才」はその典型である。しかし、一方でそれまで外国文化の中心的存在であった中国文化をその周辺に追いやってしまった。欧米文化を取り入れて近代化が進展するとともにその他の文化は極端に劣位に位置づけた。近代化の中身は経済力と軍事力の強化であった。

そもそも文化に優劣があるものではない、とする文化相対主義の立場がある。キリスト教的欧米文化が優位にあるという発想は過去に植民地政策につながった。日本もその影響を強く受けて侵略の歴史をつくってしまった。近代化の程度が文化の優劣を示すという勘違いが不幸を生んだ。「行き過ぎ」た自文化中心主義（エスノセントリズム）は「行き過ぎ」

---

命による混乱、疲弊があつて国際的にも孤立していた。1972 年のニクソン訪中による米中接近以降徐々に西側諸国との共存関係が進展する。

<sup>13</sup> 金谷治(1993)『中国思想を考える』: 93-108 頁。

たナショナリズムに容易に変化しやすい。グローバル化が進む中で、それぞれの国、地域の動静は一気に国際社会に拡散する。「行き過ぎ」も国内で収束すればまだいいがそうならないのがグローバル化の時代である。

ASEAN（東南アジア諸国連合）はよく見てみると、それぞれの国がそれぞれの宗教を信仰している。タイは仏教、インドネシア、マレーシアはイスラム教、シンガポールは華人が多いので儒教的、フィリピンはキリスト教である。宗教の違いは一つ間違えば戦争の悲劇につながる可能性さえあるが、それでもまとまることは可能であることを示している。

グローバル化の進展とともに海外で活躍する日本人も増加している。異文化に対する無知や偏見、誤解は要らぬ摩擦や軋轢を生む。とりわけ近隣諸国の文化については過去に日本の侵略という不幸な時代があっただけにそれも含めた理解を深めることが肝要である。一方で、日本の文化を外に向け正しく発信する努力も政府から個人のレベルに至るあらゆる人々、場面で必要である。

日本人は異文化を理解することに関しては積極的であろうか。どうもそう得意ではないようだ。異文化の中で生まれた製品やしくみを好奇心旺盛に取り入れて日本化してしまうことは得意だが、その根本的なところの理解に関しては無関心という態度ではないだろうか。その国の人が何を信じ、何に価値を置き、どのように生活しているのかということまでは理解が進んでいかない。

日本は多くの欧米諸国とは「自由と民主主義という価値観」を共有するというが、では価値観の異なる国とはどう向き合うのか。シタラムの言う「知ること」「理解すること」から事ははじまる。本稿のテーマである東アジア関係ではとりわけこの点が重要である。



## 第2章 日本文化、中国文化、朝鮮文化の原構造

相互理解を進めるにあたって何から始めるのか。もちろん日々起きる様々なメディアの伝える情報に関心を持つことは大切な態度である。その一方で両者の異なる考え方、価値観を生む原構造にアプローチしてみるのも大事な視点であると思う。そこで、この章では世界四大文明の一つである中国文明と古代日本の関係、中国文化の基本構造とその周辺国である朝鮮、日本がどのように強大な中国文化を受け取りながら自らの文化を築いていったのか、そして人々が生活をしていく基盤となる住居、伝統建築についての考え方という視点から原構造にアプローチしてみることにする。

文化現象はある社会組織に属する人々がその風土の条件や社会に与えられた環境の中で生み出される。その文化現象を生み出す基本的価値意識を「原構造」と呼ぶことにする。

ここで中国、朝鮮、日本を取り上げてその類似性、相違性を確認していくのは、中国文明という大文明は当然のことながらその周辺に対して大きな影響力をもち、派生的なダイナミクスを励起するがその型は三通りある。村上(1998)によると、「一つは北方の騎馬遊牧民族を誘致、吸収するダイナミクス、二つは隣接地帯に同系の衛星文明を造りだすダイナミクス、三つ目がさらにその周辺に独自の文明を誘発するダイナミクスである。一つ目にあたるのが、モンゴルの元や女真族の清、二つ目が朝鮮や越南(ベトナム)、三番目が日本ということになる」<sup>14</sup>。本稿ではそういうカテゴリーの代表として北方民族を同化した中国と朝鮮、日本を検討対象としていくこととする。もちろん視点として他の要素もあるだろうが、まずこの点から検討を進める。

### I. 「龍」と「鳳凰」

中国は四大文明発祥地の一つである。従来、黄河文明がその源として取り上げられてきたが、最近ではこれと並んで長江文明もその一つであると言われている。北の黄河が畑作・放牧の文明であるのに対し、南の長江が稲作・漁撈の文明である。それぞれの文明の権威

---

<sup>14</sup> 村上泰亮(1998)『文明の多系史観』: 116-117頁。

の象徴として北は「龍」、南は「鳳凰」がある<sup>15</sup>。

安田（2001）によると「龍」の文明は7000年前には現在の遼寧省、内モンゴル自治区あたりに起こったものである。同じ時期、南には「太陽」の文明があった。南、すなわち長江流域では稲作・漁撈を糧としていたので「太陽」の運行に合わせて生活をコントロールしていた。その太陽を運んでくるとされる「鳥」も信仰の対象となっていた。遺跡からは鳥が太陽を抱えている図も発掘されており、「鳳凰」のルーツはこの鳥信仰にある。

地球の気候の変化、寒冷化に伴ない、6000年前頃から北方の漢民族が南下した。5000年前には北の紅山文化<sup>16</sup>は衰退し4000年前には崩壊した。「龍」は南下する。「龍」の強さは行く先々でその土地の信仰の対象と融合し生き延びていったことにある。「鳳凰」を駆逐するのではなく、同化させていった。この「龍」の進化する力がやがて中華文明を代表するシンボルとなる<sup>17</sup>。

南の長江文明は苗族<sup>ミャオ</sup>を中心にしてしたが、北からの圧迫によって南へ移動せざるを得なかった。一部は雲南、貴州の山間地へまた一部は台湾、日本へも文化は流れていったとされている。この北から南への移動は何度も起こっている。気候の要因もあるが戦乱、異民族の侵入も北から南への民族移動を起こしている。例えば華北から広州、福建へ戦乱をのがれて移動した客家<sup>ハツカ</sup>はたびたび南下した。秦成立期に南方に対する防衛力として、次は北方民族の侵入による五胡十六国<sup>18</sup>の混乱、唐が滅亡したあとの五代十国<sup>19</sup>期やその後のモンゴルの侵入、さらに明末から清の成立にいたる混乱期に南へ難を逃れて移動している<sup>20</sup>。基本的に中国の北部は、異民族との争いの歴史である。このインパクトによって南への移動は断続的に起きている。結果として北の文明が南下していくことになる。

「龍」の起源は古代中国において、農民らが蛇の体、猪の頭、鹿の角、牛の耳、羊のひげ、鷹のつめ、魚の鱗を組み合わせてつくりこれを「龍」と呼んだことに始まる。天に昇り海に入り、雲をおこし雨を降らせ、雷、閃光を引き起こす。南下したあと、「龍」は江、

<sup>15</sup> 異説もある。例えば「龍は東南アジアで信仰される水神で、この文化を北方に持ち込んだのが夏人で後世の中国文明の基礎をつくった」（岡田英弘(2014)『岡田英弘著作集IVシナとは何か』: 199-200 頁。）

<sup>16</sup> 安田喜憲(2001)『龍の文明・太陽の文明』: 17 頁。遼寧省から内モンゴル自治区にかけての地域

<sup>17</sup> 安田 前掲書: 98-106 頁。

<sup>18</sup> 304~439年 西晋王朝崩壊後、北方民族が侵入。五胡とは匈奴、羯、鮮卑、氐、羌。これらに漢族を加えて十六国が割拠して戦い興亡した。（貝塚茂樹(1969)『中国の歴史（中）』: 10,16 頁。）

<sup>19</sup> 907~959年 わずか54年間に中原に5つの王朝（後梁、後唐、後晋、後漢、後周）が興亡した。辺境や中原より南には十国の地方政権が割拠していた。（貝塚茂樹(1969) 前掲書: 106 頁。）

<sup>20</sup> 高木桂蔵(1991)『客家』: 64-68 頁。

湖、海を司る「水神」とも言われるようになった。多くの村落が「龍」を祀り、干ばつの時には宗教儀式を行い、「龍」の助けを求めた。

「龍」は中国文化の中で、最も重要な形象の一つである。人々の生活場面の至るところに現れている。建築、宝石、陶磁器などの工芸品の他、各種の祝日の形象にも活躍する。中国人は「龍」を威力の象徴として尊崇している。「龍」年生まれの子供は大望を抱き、強い個性を持つと信じられている。北京故宮の九龍壁<sup>21</sup>も有名な建築物である。人々が「龍」を好み、尊敬を集めるようになり、皇帝は人間の「龍」として君臨することを願い、衣服は「龍袍」、冠は「龍冠」、椅子は「龍椅」というように「龍」は皇帝のシンボルとなった。民衆の間では正月 15 日の元宵節の節句に新しい一年の「風調雨順」（風、雨がうまく調節される状態）を願い「龍舞」を行うようになった。日本にも蛇踊りとして伝わっている。また、「龍舟競賽」（ドラゴンボートレース）<sup>22</sup>は旧暦の 5 月 5 日、端午の節句の重要イベントである。人々の生活の中にも「龍」という文字を使った品は多い。「龍眼」は果物、皮をむくと種が龍の眼のように見える。「龍井茶」は有名な緑茶の一種、龍井は枯れることのない井戸、泉を意味する、その泉は海につながっており、そこには龍がいる。「龍須面」は龍のひげのような細い面。「龍爪槐」は木の枝が垂れている様が龍の爪によく似ている樹木。「龍柏」は木の幹がらせん状に曲がりながら成長する。「龍卷風」はその字の通り竜巻。「龍飛風舞」龍が飛び、風が舞うという意味で書道で筆勢が生き生きしている様子を指す。

北方から南下してきた「龍」に追われた「鳳凰」は雲南、貴州そして台湾、日本へ逃れた。では日本ではどう伝わってきたのだろうか。「鳳凰」は五行説が広まってからは中国の伝説上の神獣でもある「朱雀」と同一視された。「朱雀」は方角は南を守護し四季では夏を表し、色は赤である。因みに、四神と呼ばれる神獣は「朱雀」の他、東、春、青を代表する「青龍」、西、秋、白の「白虎」、北、冬、黒の「玄武」である。

「朱雀」「鳳凰」はこの四神の中でも最も日本で受け入れられていて、共感をもたれていると考えられる。唐の都長安に習った平城宮、平安宮の南の大門は「朱雀門」である。宇治の平等院鳳凰堂、金閣、銀閣の閣上には「鳳凰」の装飾、現一万円札の図案も「鳳凰」であるし、各地で五穀豊穡や無病息災を祈る、あるいは感謝する祭礼の神輿の上にも「鳳凰」が飾られることが多い。これらのことは中国大陸から種々の文化が伝わってきた中で

---

<sup>21</sup> 九龍の「九」は明、清代には最大の陽数として吉祥の数字。

<sup>22</sup> 日本でも長崎や相生（兵庫）のペーロン（白龍）祭、沖縄のハーリー（爬龍）として海の安全、豊漁を祈願している。

稲作を中心とした農耕民族である日本人が素直に受け入れ易い象徴であったといえるだろう。



図 3 平等院 鳳凰（著者撮影：2015年3月）

さらに安田（2001）は日本神話との関係についても述べている<sup>23</sup>。高天原はなぜ南九州なのかという素朴な問いの答えが「天孫降臨のニニギが天下った場所は鹿児島県の薩摩半島西岸」<sup>24</sup>、すなわち長江から海上へ出れば黒潮に乗って到着する陸地として最も可能性の高い場所であるとした。つまりニニギは稲作・漁撈の文明をもってやってきた。そしてそこには太陽の神アマテラスがいた。ニニギの孫は神武天皇であるがその東征の道案内をしたのはやはりヤタガラスという鳥であった。つまり長江文明のキーワードである太陽、鳥、稲作は日本神話の中に作りこまれている。

このことは、王朝を支える税制や役務の制度や、中央の官僚機構、都市設計など政権の統治にかかわる事柄は遣唐使などを通じて「龍」の文明を取り入れ、その一方で民の生活レベルの農業、漁業については「鳳凰」の文明を取り入れながら、日本化を図っていったことを示している。中国では「龍」の文明が勝ち残ったが、日本では「龍」も「鳳凰」も受け入れている。

<sup>23</sup> 安田喜憲(2001)『龍の文明・太陽の文明』：138-144頁。

<sup>24</sup> 諸説あり。天孫降臨の場所は高千穂峰とされ、そこから薩摩半島へ向かう。また高千穂も宮崎県高千穂と鹿児島県霧島の説あり。(上田正昭(2010)『新版 日本神話』：209—212頁。千田稔(2013)『古事記の宇宙』：101-104頁。)

## Ⅱ. 中国の「天」思想と日本文化の柔構造

### (1) 中国の「天」思想にみる立体構造

中国は自民族の文化をどう構築してきたと理解すればいいか。中国の構造を図示してみると、下図のようになるのではないかとまずは提案してみたい。この場合、立体構造で説明するのが適当である。

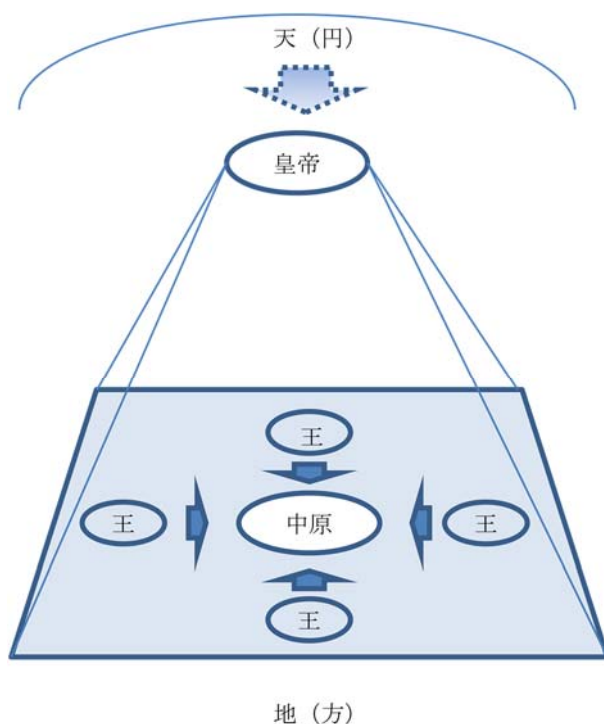


図 4 中華思想—天命、天円地方、中原

それは、中国古来からの伝統的な「天命思想」「中華思想」という「天」を中心とする宇宙観、世界観と現実の世界である「地」とのタテの関係を表すためである。そこにおける「天」と「地」の形は「天円地方」、つまり天は円く地は方形であるとする<sup>25</sup>。北京の天壇（図 5）は円形であり地壇は方形の祭壇である。中国の世界観の源は「天」にある。方形の「地」には各地にその地域を治める「王」がいる。

<sup>25</sup> 葛兆光(2014)『中国再考』: 42-44 頁。

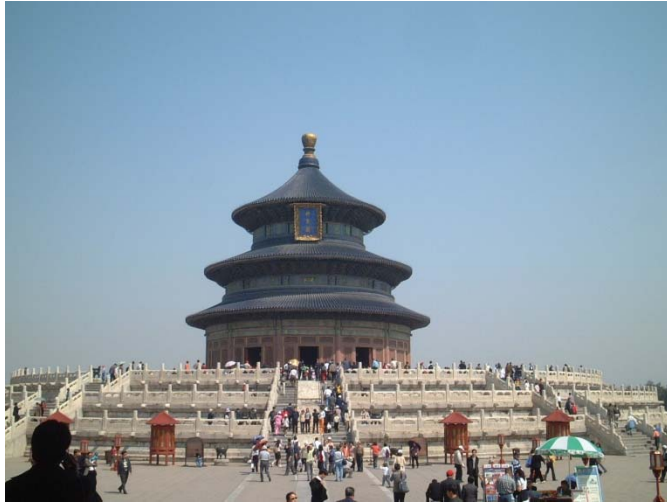


図 5 北京・天壇（著者撮影：2002年5月）

その枠組みの中で地上の平面空間では、誰が「天」に代ってこの地を治めるのかという壮絶な争いが繰り広げられる。この地が現実的に言うと図4の「中原」である。中原は黄河文明発祥の土地であり、現在の河南省と山東省、河北省、山西省、陝西省の一部に広がる平原地帯である。「中原に鹿を逐う」<sup>26</sup> という成語があるように、中原は戦略上の最重要地域であった。鹿は天下を意味している。中原を制する者が天下を取ることである。ちなみに歴代王朝の多くが都とした北京はこの中原の北端、咸陽、長安（現在の西安）は西端、建業は東端、洛陽はその中央部に位置している。

4000年の歴史を持つ中国では、歴代の王朝が国を治めてきたが、これはすべて「天」がその意思にかなった者（天子）に天命を下し天下を治めさせたということになる。天子は身を慎み徳を磨き民を養い導くことを求められる。これを「天命思想」<sup>27</sup>と言う。この「天」の威光が届くところ、範囲を「中華」とした。ここは「天」の恵みを最もよく享受できる地域であり、世界の中心であり、最も文明の進んだところである。そしてその周囲には「南蛮」「東夷」「北狄」「西戎」といった「天」の光が十分には届かないところがある。この地域の人々は中華に比べて劣っているのであるから「中華皇帝」に対して朝貢を行うことによって、その恩恵にあずかることができるとした。そのまた外側には「化外」といって「天」の光のまったく届かないさらに野蛮な未開の世界があると考えていた。中華を上位に夷狄

<sup>26</sup> 史記淮陰侯列伝「秦、鹿を失い天下ともにこれを逐う」。なお淮陰侯は漢の劉邦旗下の名将韓信のこと。（和田武司・市川宏(1997)『中国の故事名言』：211頁。司馬遷(1995)『史記6列伝二』：235頁。）

<sup>27</sup> 壇上茂(2012)『永樂帝』：21頁。

を下位におく、これが「華夷思想」<sup>28</sup>である。タテの「天命思想」とヨコの「華夷思想」、これを合わせた世界が中華が世界の中心で最も華やかなところ、文化の進んだところという「中華思想」である。これを図示すると図6のように表現できる

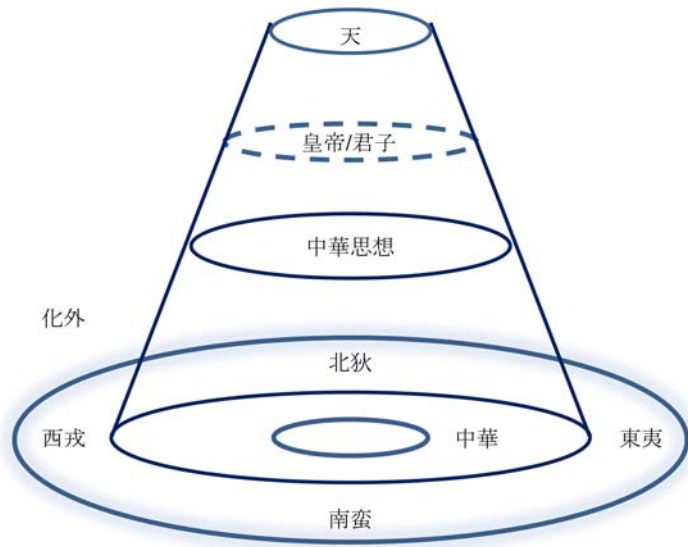


図6 中華思想 — 華夷思想

「易姓革命」と呼ばれる中国独特の言い回しがある。誰かの王朝の治世が乱れ民が苦しむような事態になれば、「天」は統治者を変える。王朝の「姓」を「易」える「易姓革命」である。そして「天命」を受けるべく中心を確保するために争うのである。この場合の図6における底面中央の楕円空間は権力であるとするとその中心が空いている、または図4の「中原」という場所を制する者がいない、ということである。秦滅亡後の漢の劉邦と楚の項羽の争い、後漢滅亡から隋の統一までの400年近い時間をかけた五胡十六国と言われる北狄もが参戦した争い、宋の弱体化とモンゴル族の元による支配、明が衰えると今度は満州族の清が帝国を築く。モンゴル族や満州族といった従来の非漢民族による統治も含めての易姓革命である。

新しい王朝が立つと、当面は繁栄に向う。新しい王朝が立ったということは従前の王朝が弱体化し、民が困窮していたからでありそのレベルからみれば改善に向かう。繁栄すると民は豊かになり人口が増える。一方では食糧も新しい開拓、開墾で増加するものの、たいていの場合、人口の急増には追いつかない。その結果、食糧不足が常態化し凶作や洪水

<sup>28</sup> 壇上茂(2012)『永楽帝』: 19頁。

などの自然災害でもあろうものならたちまち大飢饉となる。社会は乱れ、王朝は衰退する。『漢書』に「王以民为天 民以食为天」<sup>29</sup>という言葉がある。王は民を以て天と為す、民は食を以て天と為す。民にとっては食べることができればいい治政なのである。人口と食糧問題はいつの時代でも為政者にとって重要課題である。

1979年からの計画生育政策、いわゆる「一人っ子政策」<sup>30</sup>もこの延長線にあるとっていい。人口の基数が大きいだけにその影響も他の国では想像できない大きさである。もちろん、「一人っ子政策」は社会に多かれ少なかれ歪みを生む。子供たちが「小皇帝」「小公主」と呼ばれ、教育熱が異常なまでに沸騰し、電子ゲームやインターネットに一人で夢中になり、結果、対人能力に難がでるといったようになったとも言われている。それでも国家生存のためには必要な施策だった。

「易姓革命」という社会の大変動にも中国人は対応する知恵を本来的に持っている。つまり、「為政者（トップ）は変わるもの」という認識がある。これまで4000年の歴史の中でどれだけの王朝が興っては消えていったか。それでも中国は生きている、それどころか変わると進化していると考えている。だから、人々はこの代替可能なトップがどうあれ、自分の身を守る知恵を持っている。これが「為我主義的個人中心」の考え<sup>31</sup>である。

「為我主義」とは、中国春秋・戦国時代の諸子百家の一人である楊朱の考え方である。自己の主体性を確立し社会的なものには左右されない安定を確保し、個人として幸福な人生を送ることが自然であり大切であるとした<sup>32</sup>。楊朱の時代は戦国七雄が覇を競ったときであり、そういう戦乱の中で争いに巻き込まれることなく生きたいとする考えがあつて不思議ではない。先が見えない状況に置かれた時には支持されやすい考え方と言えよう。墨子の兼愛説、すなわち関係が近い人も遠い人も平等に愛するという考えとは対極に位置づけられている。また孔孟よりは老荘の「無為自然」の考えに近いと考えられる。

中国の思想と言えは孔子、儒教と一言で片づけられることも多いが、実際は孔孟の他に老荘の思想や諸子百家と言われるように多様な考えがあり、これを矛盾なく時局に応じて使い分けることができるのである。秦は法家思想で統治したが漢は儒家、儒教を国教とした。

社会的な変動には影響されない、であるから為政者が変わることを恐れていない。むしろ

---

<sup>29</sup> ウェブサイト：百度百科「民以食为天」

<sup>30</sup> 2015年10月の中央委員会第5回全体会議（5中全会）でこの政策は廃止されることになった。

<sup>31</sup> 本稿第6章（4）③参照

<sup>32</sup> 宇野哲人(1980)『中国思想』：135-138頁。



ろ変わることによって、新しい文明、文化を国土に残していつてくれる。黙って見ておれば、そのうち自分のものになる。モンゴル族の元は広大な版図を残していった。アヘン戦争で完敗したイギリスには寒村であった香港を世界の国際金融、貿易の中心都市に成長させてもらって、その上で中国に還ってきた。ドイツに占領されていた青島には世界有数のビールを作ってもらった。ロシアや日本も鉄道や建築物を東北地方に残し今も大学や銀行や政府系機関が活用している。

異民族に支配されるということは日本人では殆ど想像がつかない。そんなことはこれまでもないしこれからもないと信じている、というより考えたこともない。それでさえ時間という軸を意識することによって時が経てばプラスに転じることが可能であるという懐の深さと知恵を持っている。時間の観念をどう捉えるかは中国を考える上で重要なポイントの一つである。広大な土地を元手に時間を稼ぐということが可能なのである。毛沢東の「長征」も逃げの一手で時間を稼いだと解釈することも可能である<sup>33</sup>。時間が悠長であることは中華の世界が持続することが前提である。そこは信じて疑わない。であるから国家というか王朝の興亡などにもさして動揺しない態度が生まれる。

それは同時に、為政者がどう変わろうが、混乱が続いてもその中で生き延びてみせるという強さを民はもたなければいけない、どんな状況下においても生き延びる、これこそ中国的個人主義の原型ではないか。

「中華思想」に国境という概念はそぐわない。「天」の威光が強く届くところが「中華」、弱いところが「夷狄」、届かないところは「化外」である。「夷狄」は朝貢とそれに対して中華皇帝の威光を示すための冊封をもって応える。威光が届けば、直接「中華」に組み入れることも可能である。「天」に代って統治する「皇帝、君子」は力が強い時と弱体化する時がある。力の強いとき、例えば明の永楽帝や清の乾隆帝の治世は図6で言うと「皇帝、君子」の楕円が左右に拡大すると見る。すると、一定の「天」から地上に向けて延びる線が左右に開き、南蛮、東夷、北狄、西戎の領域をウチに取り込んでいく形となる。明の永楽帝は鄭和に命じ7度の南海遠征を行った(図7)。東南アジア、インド、アラビア半島、東アフリカまで鄭和の船団は30数か国に遠征し航海のたびにその国の使節団を明に連れ帰り、朝貢させた<sup>34</sup>。清の乾隆期は「十全武功」<sup>35</sup>といわれる完全無欠(十全)の外征を行

<sup>33</sup> 竹内実(1967)『中国の思想』: 10頁。

<sup>34</sup> 檀上寛(2012)『永楽帝』: 241-246頁。

い、直接統治、間接統治を合わせて支配構造を確立した。その範囲は西は東トルキスタン、ネパール、南はベトナム、ミャンマー、東は台湾にまで及び歴史上最大の版図を確保した。強くなれば「天」の威光が届く領域が拡大するのである。

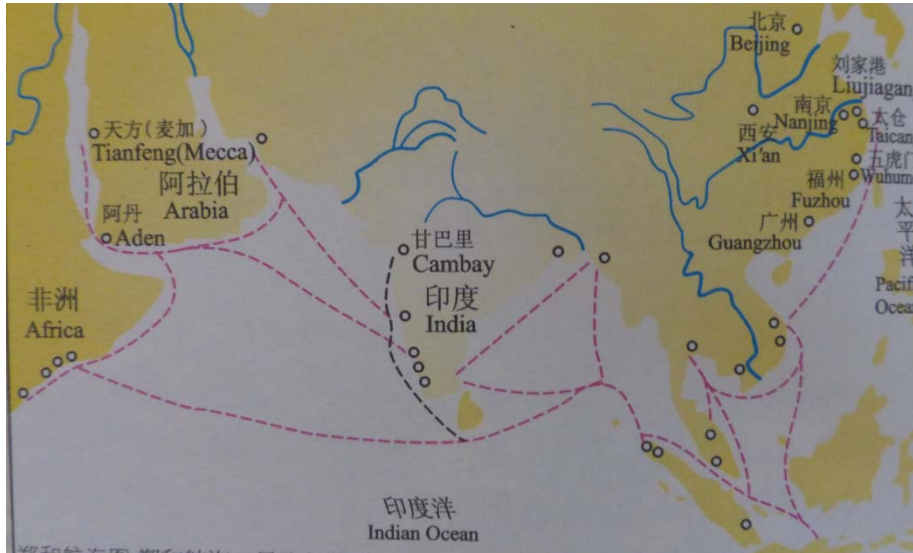


図 7 鄭和の南海遠征図（中国歴史常識系列編委会(2007)「中国歴史常識」：146 頁。）

この中華の力の強弱によって、最も影響を受けたのが朝鮮半島である。漢が強大であった武帝の頃は漢四郡（楽浪、真番、臨屯、玄菟郡）が設置され半島北部は漢民族の直接の支配下に入った。唐が強大な時、半島は高句麗、百濟、新羅の三国が覇を競っていたが、唐の力を活用することに成功した新羅が半島の統一を実現する。また中華が明、半島が李氏朝鮮の時代はそれぞれが安定した政権であり朝鮮は明との冊封体制に入ることによって安全保障を一層確実なものにしていた。逆に中華が弱体であった五胡十六国の時代には半島も三国の分裂状態が続いた。宋も文化的には多くの事績があるが、軍事力では決して強いとは言えなかった。この時には、朝鮮半島からみても中華は頼りにならず、北方の異民族、契丹や女真族の金との抗争が続いた。そして宋が衰退したあとは中華もろともモンゴル(元)の支配を受けた。さらに言えば、清が弱体化したあとは日本の侵略を受けることになる。

葛兆光（2014）は国境と中国の領域について「中国には政治的意味の国境と文化的意味の領域がある。・・・この両者間に緊張関係が存在する」<sup>36</sup> 「中国は無辺の『帝国』意

<sup>35</sup> 石橋崇雄(2011)『大清帝国への道』：182 頁。

<sup>36</sup> 葛兆光(2014)『中国再考』：61 頁。

識の中に有限の『国家』観念を有し、有限の『国家』認識の中に無辺の『帝国』イメージを留めている」<sup>37</sup>と述べているが、この文化的意味こそ「中華思想」である。先の図6で見ると「天」を頂点とするタテの関係が文化的意味を表し、下平面が表す地上の概念の中で「華夷思想」と現実に存在する「国境」との間に緊張関係が存在しているということである。

この項の最後に、現在の共産党政権の動きを図6で見直してみる。この場合、国家の「中心的価値、文化」を下平面中央にある楕円空間で表現する。1949年の人民共和国建設以来、理想の共産主義社会を実現しようとする考えがその中心にあった。しかしながら、その政策が「大躍進運動」の失敗や「文化大革命」による混乱で機能しなくなると、人々の生活は困窮にあえぎ、理想の共産主義社会は中心から次第に離れていく。そこで政権は舵を切った。舵を切らなければ「易姓革命」を呼んだかもしれない。代ってその中心に入ってきたのが「改革開放」であり農業、工業、科学技術、軍事の「四つの近代化」政策強化である。そしてさらに一段推し進めたのが「社会主義自由経済」体制である。これは明らかに共産党政権誕生のときに目指した形とは異なる。しかし現実には舵を切った。そして、その成果として世界第二位の経済力と急拡大する軍事力を確保するに至っている。その中で、人々の生活が改善に向かう限り「社会主義自由経済」という体制に変化はない。そうならなければ「社会主義自由経済」も中心から次第に離れ、また新しい考え方を呼び込むことになる。

## (2) 柔軟な日本文化の基本構造

神話とは「現実の生活とそれを取りまく世界の事物の起源や存在論的な意味を象徴的に説く説話」(広辞苑)で、それぞれの文化の中での制度、習慣に意味を持たせており、その民族の世界観、宇宙観を表現したものと考えられる。河合(1982)も『古事記』は日本人の根底として、思想、宗教、社会などの構造の目に見えぬ支えとして存在しているように思われる」<sup>38</sup>と評価した。

『古事記』冒頭の表現には、「天地はじめてひらけし時、高天原に成れる神の名は

<sup>37</sup> 葛兆光(2014)『中国再考』: 72頁。

<sup>38</sup> 河合隼雄(1982)『中空構造日本の深層』: 29頁。

アメノミナカヌシノカミ、次に高御産巢日神、次に神産巢日神。この三柱の神はみな<sup>ひとりのみ</sup>独神となりまして、身を隠したまひき。」とある。千田(2013)は「アメノミナカヌシの構想は道教の最高神<sup>39</sup>に対応するものとして天の中心に置くという考え方が『古事記』編纂の意図であった」<sup>40</sup>とみている。タカミムスヒ、カミムスヒの二つのムスヒは生成の霊力を持ち、万物は全て「陰」「陽」の組み合わせで成り立つという万物生成思想を受け入れるなら、ムスヒは二柱でなければならない。つまりアメノミナカヌシを中心に置いておくことに意味があったとする。これは道教の考え方のもとになる『老子』の宇宙の根源についての「道生一 一生二 二生三 三生萬物。萬物負陰而抱陽、沖氣以為和」ということばに行きつく。「道は一を生み、一は二を生む。二は三を生み、三は万物を生む。万物は陰と陽を持っており中氣がこれを調和させる」ということであるが、世界は「一」が「二」を生むことから始まる。「一」は「中氣」、「二」は「天」と「地」、あるいは「陰」と「陽」と考えると「一」と「二」が万物生成の「三」を生み出すということになる<sup>41</sup>。日本神話の『古事記』でさえも中国道教の影響を排除できないということである。

河合が挙げる第二、第三の例がある。三神の中心に「無為」の神があるとする。「天」のアマテラスと「地」のスサノヲ、「山」のホデリと「海」のホヨリの神の中央に「無為」のツクヨミ、ホスセリが存在する。このことが日本人の思想、宗教、社会構造のプロトタイプとなっていると言う<sup>42</sup>。

アメノミナカヌシ、タカミムスヒ、カミムスヒに続いて二柱の神が現れるがすぐに姿を消す。それ以降に<sup>かみよななよ</sup>神世七代と呼ばれる神々が次々に現れる。その最後の一組が国生みのイザナギ、イザナミである。イザナギ、イザナミによって十四の島と二十三柱の神々が生まれるがイザナミは火の神を生んだ後、命を落としてしまう。イザナギは黄泉の国からイザナミを連れ帰ろうとするも果たせず逃げ帰る。そして黄泉の国の穢れを払うため禊を行い、アマテラス、ツクヨミ、スサノヲの三柱を生む。

スサノヲは地上の出雲国に降りるが、その六代目の孫がオオクニヌシである。オオクニヌシの国造りで繁栄した出雲を天上のアマテラスは国譲りを強要し自らの直系で治めることとした。「天孫降臨」、アマテラスの孫、ニニギが地上に降りたのである。

<sup>39</sup> 道教の最高神は「三清一元始天尊、靈宝天尊、太上老君」説と「玉皇大帝」説がある(二階堂善弘(2002)『中国の神様』: 125-145頁。)

<sup>40</sup> 千田稔(2013)『古事記の宇宙』37-46,50頁。

<sup>41</sup> 湯浅邦弘(2014)『入門 老荘思想』: 125-126頁。坂出祥伸(2010)『日本と道教文化』: 18頁。

<sup>42</sup> 河合隼雄(1982)『中空構造日本の深層』: 30-35頁。

ホ德里、ホスセリ、ホヲリの三柱は高天原から降臨したニニギとコノハナノサクヤヒメとの間に生まれた。ホ德里は海幸彦、ホヲリは山幸彦である。このケースではホスセリが姿を現すことはない。海幸彦と山幸彦は支配権を巡って争うが、弟の山幸彦が権力を掌握する。この山幸彦の孫がカムヤマトイハレビコノミコト、後の神武天皇である。

つまり、河合の言う思想、宗教、社会構造のプロトタイプは、たとえ「天」と「地」、「山」と「海」のように相対立する概念があっても、その中間に両者のバランスをとり全体をおさめてしまう機能を内包していたということである。

そう考えていくと、日本文化はもともと独自の文化を築いてきたというよりは、外部からの刺激を受けながらそれを評価しあるものはそのまま定着させ、あるものは従来もっていたものと融合させ、またあるものは棄却しながら、文化を育ててきたと言える。いくつかの事例を見てみる。

552年、仏教が朝鮮半島を経由して伝わってきた<sup>43</sup>。日本にはすでに「カミ」<sup>44</sup>という崇拜の対象があった。ここから崇仏派の蘇我氏と排仏派の物部氏、中臣氏の対立が続くことになるが、50年余りの後、推古天皇、聖徳太子は604年の十七条憲法で「篤く三宝（ホケ）を敬え」と仏教奨励の方針を示し、607年には「神仏を合わせ拝する」として神仏習合をはかった。つまり「カミ」と「仏」の二つの中心をいずれかを排除するのではなく両者の融合した新しい信仰の形式を作り出した。

漢字は古代中国の偉大な発明である。漢字を周辺国に伝え、教化していくことで中華文明の優越性を示し、「華夷思想」に基づく冊封体制を築く大きな原動力になった<sup>45</sup>。陸続きの朝鮮、ベトナムに加え、朝鮮半島を経由して5世紀頃には日本にも伝わってきた。文字を持たない古代日本人は漢字を学んだ。しかし、中華の大陸の文化や生活様式に基づいて作られた漢字は必ずしも島国日本のそれとは完全には適合しない。そこで漢字の日本化が進んでいく。天武天皇期には「国字」と言われる和製漢字が考案され<sup>46</sup>、平安期には仮名が工夫された。こうして輸入してきた漢字に日本の文化、生活に適合する国字、仮名を加えて日本語としての体系を整えていく。

---

<sup>43</sup> 538年説もある

<sup>44</sup> 一神教の絶対「神」に対しあえてここでは「カミ」と表現した。日本の「カミ」はアマテラズからトイレの神まで八百万である。

<sup>45</sup> 平野聡(2014)『「反日」中国の文明史』: 31,51-52頁。より「優れた」中国文明が恩恵あふれた教化を行い、より「劣った」漢字を用いない人々が中国文明を尊敬するという構図が中国文明の世界観の核心、

<sup>46</sup> 王敏(2008)『日本と中国』: 17頁。

隋、唐の時代の遣隋使、遣唐使を通じて、宋代には日宋貿易を通じて、中国から統治のしくみ、典礼書、暦、楽器、仏像、仏典、香料、薬、工芸品など様々な中国文化が持ち込まれた<sup>47</sup>。遣唐使や中国からの渡来人がもたらした文化、文明は平城京、平安京の町づくりや律令制、租庸調の税制などの統治機構として受け入れた他、モノについては権威の源として、あるいは貿易による財源、富として時の為政者の力の強力な後ろ盾となった。中国伝来の文物を一部は模倣し、一部は活用し、一部は棄却して日本化を図ったのである。因みに、中国では隋代から清末まで1300年余り続いた「科挙」<sup>48</sup>による官吏任用法や宋代からの伝統的な女性美の一つとも言えるが奇習「纏足」の習俗は棄却された。「科挙」が日本で受け入れられなかったのは平安時代貴族の官位は世襲されており、この権益を崩しかねない「科挙」は危険な仕組みと認識された。また「纏足」も生活の基本活動に不適ということで採用されなかった。農業、稲作は定住して手間ひまのかかる作業が続く。そのため女性もその労働に従事することが必要であった。「纏足」は生産活動にとって不利であった。

19世紀になると、欧米列強の東アジア進出が始まる。産業革命を経たその技術、経済力に支えられた軍事力は中国、日本をはじめとする東南アジア、東アジアの諸国にとって脅威であった。インド、ミャンマーはイギリスに、ベトナム、ラオス、カンボジアはフランスに、インドネシアはオランダに、フィリピンはスペインの支配下で植民地化された。中国もアヘン戦争以降国土の一部が半植民地化された。日本も1853年の黒船来航以降、その脅威にさらされながら、開国、明治維新で政治権力を幕府から天皇に移し、「和魂洋才」をスローガンに欧米列強を手本として国体をつくることにした。とりわけ直接の脅威となった軍事力の強化に国をあげてまい進した結果、50年後には国際連盟の常任理事国になるまでに国力をつけることとなった。これも欧米文明の刺激を「和魂洋才」ということば通り、精神的には「和」（日本人）であるが、それ以外は欧米の才（学問）をすべて学び取るということをやった。しくみ、制度をフランス、ドイツ、イギリスを師として学ぶ。

ここで漢字と仮名で成立していた日本語も新たな刺激を受ける。アルファベットを使う各国語（英語、フランス語、ドイツ語）で表現された事柄ををどう理解し日本語に翻訳す

---

<sup>47</sup> 河添房江(2014)『唐物の文化史』：12,13,21-28,32,42-48,96-104頁。

<sup>48</sup> 587年隋の文帝によって始まった。中央集権体制確立のために地方政府に高級官僚を派遣するため中央では官吏を数多く育成する必要があった。試験の内容は儒教の教典（四書五経）と詩文作成能力。（宮崎市定(1963)『科挙』：2-4,10-17頁。）

るかという難問にぶつかることになる。この時にも多くの新しい日本語を創造しカタカナも活用しながら新しい語彙を増やしていった。ここで日本語とアルファベットの融合が成ったということである。

第二次大戦後の日本は敗戦によってこれまで築き上げてきたものが「無」に帰したような状態であった。そこに入り込んだのがアメリカそのものであった。対共産勢力との対決姿勢、その極東の機関として日本を位置づけ、経済的には自由経済体制の一員としてアメリカの国益に資するように考えた。政治、経済、軍事、文化あらゆる分野でアメリカ色が強くなった。復興の中心を経済に置いた日本は結果として言えば、1968年にGNPで世界第二位にまで回復、成長をした。アメリカを中心とする西側陣営の中で経済大国として貢献できるまでになった。この推進力となった要因は高い技術力、円安基調、設備投資促進などもあるが、ベネディクト、R. やヴォーゲル、E. F. らが指摘するような戦後日本人にかかわる考え方、態度、すなわち集団主義、勤勉性やそれを支える年功序列、終身雇用などの制度があいまってこの驚異的な成功を得た。これもアメリカ流の合理主義と日本流の情緒的人間関係が融合して30年以上の時間をかけて日本型の経済社会を作り上げたものと理解できる。

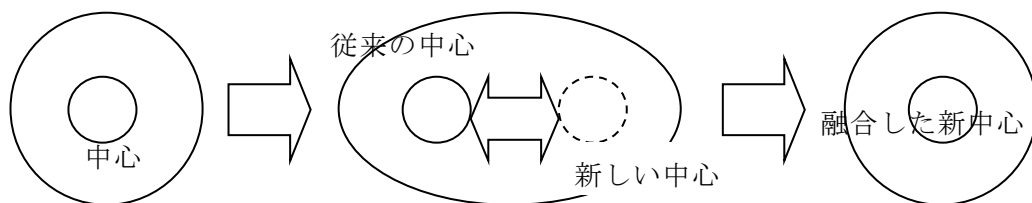


図 8 日本モデル

このように見てくると図8のように、日本には中心となる価値や概念があっても、そこに別の概念が入ってくると、それをまずは取り込み二つの中心（焦点）を形作る。二つの中心（焦点）は相互に反発したり融合したりしながら互いに干渉しつつ一定の時間を経て一つの中心を再び形成するというプロセスを無意識のうちに内包して文化を洗練させてきたと考えることができる<sup>49</sup>。

<sup>49</sup> 藤田正(1990)『内なる赤穂浪士』: 179頁。江戸末期の天皇と幕府を楕円における二つの焦点と見做しそれを統合しようとする明治の江戸遷都などの例をとり、その統一が成された時には二つの焦点が正円の中心となる。日本人は二つの焦点をもつがそれを調整するのが「老」の役割であるとした。

### (3) 中国と日本における「中」の概念

ここで中国における「中」と日本が考える「中」について触れておく。(1)で述べてきたように、中国の「中」は地平の真ん中、中央であり「中華」は世界の真ん中であって華やかに文化が開いたところ、ということになる。平面の中に位置づけられ「華夷思想」における「華」でもある。さらに突き詰めていうと「天」に認められた「天子」のいるところであり、地政学的にいうと「中原」である。ここを押さえることが天子となる第一の条件となる。このように概念的にも現実的にも「中」は存在する。

一方、日本では「中」はどのように捉えられてきたのだろうか。『古事記』における「葦原の中つ国」という表現がこれに近い位置づけとなる。『古事記』における「葦原の中つ国」は日本の国土を意味している。この位置は天上にある「高天原」と地下にある「黄泉の国」(死者の国)、「根の国」の中間にある。すなわち天上と地下という想像上の空間の間にある。『古事記』では、国生みのイザナギ、イザナミの二神が高天原からみて下界の混沌としたところに国づくりを始める。二神は「天の浮橋」に立ち「天の沼矛<sup>ぬぼこ</sup>」でかき混ぜると矛からその潮が落ち島ができた。これがオノコロ島である。これをはじめとして次々に島をつくり国生みを続けた。さらに二神は多くの神をも生むが、イザナミは火の神を生んだところで大火傷を負い、命を落としてしまう。イザナギは妻イザナミを連れ戻そうと黄泉の国に赴くが果たせず、高天原に戻りそこでアマテラス、ツクヨミ、スサノヲの三神を生む。イザナギは天上、地下、中を走り回っている。

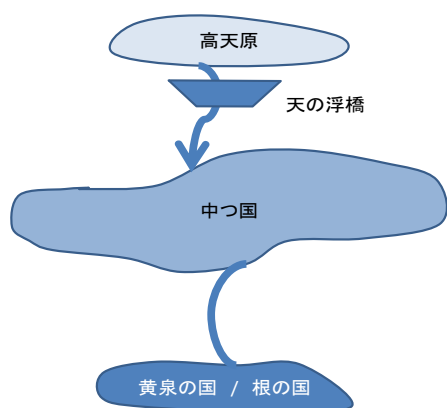


図 9 古事記の宇宙観—高天原、中つ国、黄泉の国



アマテラスは昼の世界、ツクヨミは夜の世界を統べていたが、スサノヲは乱暴が過ぎ高天原を追われ地上に遣わされた。そこでクシナダヒメを娶りその六代後の子孫がオオナムヂ（のちオオクニヌシ）である。オオナムヂは「中つ国」であるいは「根の国」で多くの試練に会うがそれを克服し、地上の主となり出雲を平定、すなわち「葦原の中つ国」を治めることになった。高天原から「中つ国」の繁栄をみたアマテラスはここは自分の子が治めるにふさわしいところとしてニニギを降臨（天孫降臨）させるのである。この古事記の宇宙観を図示すると図9のようになる。

この神話の中では「中つ国」は高天原と黄泉の国、根の国の間にあって、どろどろしたところをかきまぜて作ったということからもかなり不安定な想像上の空間になる。中国が「中」を地平面上の具体的な、現実的な場所をもとに位置づけるのとは対照的に上下、垂直軸での「中」にあり抽象的、曖昧である。スサノヲは高天原、中つ国、黄泉の国を、オオナムヂは中つ国、根の国をタテ方向に行き来している。

そして、中つ国に降臨したニニギのひ孫が神武天皇となり、ここから日本の皇統がはじまるのである。

さて、この『古事記』あるいはその後に著された『日本書紀』、いずれも天武天皇（在位 673-686 年）の命によって編纂されたものである。この時期は日本が国として成立しようとする時であり、そのために天皇統治にその正統性があることを説明し、権威を確保することが必要であった。さらにこの時期は白村江の戦いのあと多くの百濟をはじめ朝鮮半島から多くの帰化人が渡来していたし、それまでに派遣した遣唐使の情報もあった。百濟の王仁は儒教や論語などの漢籍を日本に伝えたとされる。天武天皇は律令の整備についても命を下しており、この完成が 701 年の大宝律令である。この唐の様式に倣った律令によって、天皇を中心とした中央集権の行政官僚機構が日本で初めて出来上がった。当然、政権が支配していた地域全体に適用された。すなわち日本が日本として目に見える形で成立したとも言える。これらのことは、『記紀』編纂の時期にはかなりの量の「中華」の情報を持っておりこれを消化できる能力を有していたことを示している。『記紀』編纂はこれを下敷きとしていかに日本の天皇支配の正当性を神話と歴史の双方から説明するかが最大の目的であった。単に「無」から物語を作るのではなく、時の東アジアの先進国「中華」である唐に対してどういう思想をもって国の基とするのかという課題がその編纂者には与

えられたのである。「中華」に対抗できるだけのストーリーを必要としていた<sup>50</sup>と考えていい。そのストーリーこそが『記紀』なのである。

そこでは、中国の「天」に替わって日本では「カミ」が位置づけられる。「天」は姿、かたちを見せることはないが、「カミ」は「天孫降臨」し地上に姿を見せる。「天」はひとつであるがカミは八百万である。地上を統治するものは中国では「中原」を制圧し、「天命」を受けた皇帝であり、治世が乱れれば「易姓革命」によって統治者を替えるが、日本では「カミ」が自ら降臨しているので替わりはいない。

中華思想、華夷思想についても日本版「中華思想」があらわれる。日本版「中華思想」は中国から見れば日本は東夷であるが、その東夷の中の「中国」と位置づけていた。とりわけ『日本書紀』には、「帰化」「化帰」の語が用いられているが、この態度は朝鮮半島からの「渡来」した人々を天皇、あるいは国家の教化が及ばないところの「化外」の人が「王化」を慕って渡来したと解釈したのである。『大宝令』にも「化外の人帰化せば・・・」とある<sup>51</sup>。さらに律令制度における「夷狄」「蕃国」「隣国」とは何か。「夷狄」とは「毛人（蝦夷）、肥人、阿麻弥人等の類」、「蕃国」は朝鮮諸国であり「高（高句麗）、百（百濟）、新（新羅）」、「隣国」は「大唐」である<sup>52</sup>。これが、当時の対外意識である。

少し寄り道をする。1300年前から中国、日本、朝鮮の対外意識というか世界観は実は衝突していたということになる。中国は自らを中華とし、朝鮮は東夷、日本は化外と見ている。朝鮮は中国を中華、自らを東夷であり、日本は化外、これは中国と同じ認識であるが、時代が下って異民族が中原を支配し王朝（清）を建てたあとは自らこそが中華（小中華）であると認識した。日本は自らを中華、中国は隣国、朝鮮は蕃国と見た。それぞれが、東洋の国でありながらそれぞれがオリエンタリズム的な態度である。なお、オリエンタリズムという言葉は異文化に対する蔑視、偏見という意味で使用している<sup>53</sup>。

青木(2001)は「このオリエンタリズムが表面化するのには、政治的、経済的、文化的に優位に立った社会や国が、異なる文化や社会を見てそれを一種の蔑みの対象とするときであ

---

<sup>50</sup> 「物語」によって求心力の強化をねらった。現在でも伝えたいコンセプトを物語化することで強く印象づける「ストーリーテリング」という手法がある。（参考文献としてデニング，S. (2012)『ストーリーテリングのリーダーシップ』）

<sup>51</sup> 上田正昭(2013)『渡来の古代史』：16-18頁。

<sup>52</sup> 上田正昭(2013) 前掲書：29-32頁。

<sup>53</sup> 青木保(2001)『異文化理解』：91-93頁。1978年サイド，E.『オリエンタリズム』発刊以降、西欧世界からみて中東地域に対する蔑み、偏見を示す言葉になった。

る。近代日本のアジアに対する態度はそういう態度であったし、今もその痕跡が残っている。例えば韓国の文化に対しては植民地支配もあって理解の対象にならなかったが、韓国人は日本文化の多くは朝鮮半島から渡っていったものであり、儒教も中国より一層純粋な形で受け継いでいるという自負がある。日本人はこういうそれぞれの自文化に対する誇りと他の文化に対する無理解やオリエンタリズムが不幸な歴史をつくっているということを理解しようとしな。日本人は「近代化の達成度合い」という単純な「基準」をもって異文化を見てしまう、切ってしまうという傾向が強い<sup>54</sup>と言う。それが都合がいいし、居心地がいいからである。

中華の「天命思想」は「カミ」と「天皇」の関係に置き換えられ、「華夷思想」は日本版として存続させることで本家中華に対抗する立場を持たせた。この他、先に述べたように、『古事記』はじめの三神は道教の影響を強く受けていることから見ても、「中華」を師としながらもその独自性をストーリー化することで統治の正統性、永続性を確保しようとしたと言えよう。

一方で白川（1980）によれば、「中国の神話は孤立的で非体系的である。そのためストーリー性が弱く、神話なき国とも言われる。それは、中国の人々の合理的、実利主義的な国民性が影響しているのだろう<sup>55</sup>と言う。伊藤（1996）も「中国にすぐれた古代文明が開化したこと、筆録文化が発達したことが神話不毛な国にした。春秋戦国時代における焦眉の課題はいかにして国家を富強にし乱世を治めるかという政治的課題であり、そのため言論・思想は経世の学に傾注し現実主義的思想が喧伝された<sup>56</sup>と言う。そうとするならば何千年の歴史をもつ中国人の国民性もまた一貫して変化せずこれも「原構造」の一つと言えよう。

### Ⅲ. 朝鮮と琉球への影響

古代から東アジアの文化は中華を中心とする中華思想に大きな影響を受けてきた。日本も倭国の時代から「漢委奴国王」として漢皇帝から封ぜられ、遣隋使、遣唐使を派遣して

---

<sup>54</sup> 青木保(2001)『異文化理解』: 96-98 頁。

<sup>55</sup> 白川静(1980)『中国の神話』: 11-12 頁。

<sup>56</sup> 伊藤清司(1996)『中国の神話・伝説』: 3-4 頁。

その統治のしくみや文明を学習しながら一方では日本の国情に合わせあるものは取り入れ、あるものは棄却し、あるものは改良を加えながら国造りを進めてきた。「和魂漢才」という考えのもとに日本の伝統の中に中華の才を取り入れようとしてきた。遣唐使が廃止されたあと、しばらくは日本独自の国風文化が盛んになるが、室町幕府の足利義満は明に朝貢し一時的には冊封体制に組み込まれた<sup>57</sup>。江戸幕府は冊封体制からは離脱していたが、林羅山とその子孫は幕府の大学頭という役職を世襲し忠、義、孝といった儒教道徳をもって封建社会の形成に貢献した<sup>58</sup>。

このように日本は歴史的にみて直接的に中華の冊封体制に組み込まれていた時間は短い、少なからずその影響を受けてきたことは間違いない。

では、中華の地続きである朝鮮や統一王朝ができてからそれが滅ぶまで一貫して冊封体制下にあった琉球はどういう影響を受け、どう対応してきたのであろうか。ここでは、中華の周辺である朝鮮、琉球が中華からもっとも強い影響を受けてきたと考え、その国際環境の中でどういう文化や価値観を育ててきたかについて検討を進めることとする。

## (1) 中華と朝鮮

朝鮮の文化や価値観を形づくる原構造はどのように考えればいいのかであろうか。基本的な枠組みとしての第一点は中華を範とする冊封体制に参加した国としての立ち位置である。第二は統治思想をして李氏朝鮮 520 年は儒教・朱子学をその中心に据えたこと、第三はこれらを本家の中華以上に純粋に徹底してきたことである。

### ① 被侵略の歴史

まず、朝鮮は中華に対する冊封国であったことである。これは自らの意思でそうしたという面とともにそうせざるを得なかったという事情があった。それは西に中華、北には強力な異民族の存在があり、半島はそれらの強国に侵略されてきたという歴史である。

前漢の武帝は半島の西北部に楽浪、臨屯、真番、玄菟の四郡を設置した。朝鮮は未だ部族社会である。

---

<sup>57</sup> 河添房江(2014)『唐物の文化史』: 132 頁。壇上寛(2012)『永楽帝』: 231-237 頁。

<sup>58</sup> 揖斐高(2014)『江戸幕府と儒学者』: i 頁。

7世紀、朝鮮半島は高句麗、新羅、百済の三国が並び半島の主導権を争っていた(図10)。半島北部の高句麗はその前の世紀から中華を統一した隋の侵入を受けていたが、何とか持ちこたえていた。中華が唐になっても同様に脅威に晒されていた。



図10 朝鮮三国時代 (姜在彦(2006)『歴史物語 朝鮮半島』: 28頁。)

新羅はこの局面を打開するため、この唐と同盟を結んだ。同盟と言っても強大な唐の支配下に入るとのことである<sup>59</sup>。この新羅、唐の連合軍はまず百済を打ち破った(660年)。百済は敗れたものの何とか国を再興せんと南の倭国(日本)に支援を求め、日本もこれに応じた。663年の白村江の戦いである。当時の日本は大化の改新(645年)から日も浅く国家の統治体制の整備を始めたばかりである。海を渡って外国と戦うほどの国力はなく、百済、倭の連合軍はあっけなく敗れ去り百済は滅亡する。668年に新羅・唐の連合軍は高句麗も滅ぼし、半島の統一を達成する。

<sup>59</sup> 中国王朝との冊封関係は高句麗は355年、百済372年、新羅は遅れて565年から(上田正昭(2013)『渡来の古代史』: 200頁。)

このあと敗れた百済、高句麗から多くの人が渡来人として日本に逃れてくる<sup>60</sup>。形は亡命というのに近いだろうが、彼らのもつ知識や技術は国づくりをはじめたばかりの日本には貴重なものであり大いに重用された。また戦勝国の新羅からも戦乱を逃れて渡来人は来日した。新羅の秦氏、百済の漢氏、高句麗の高麗氏などは軍事、外交の官僚や、灌漑治水技術あるいは寺社の創建<sup>61</sup>など多くの分野で活躍したのである。

朝鮮半島に安定した統一王朝が現れるのは 936 年の高麗である。中国では 960 年に宋が五代十国の混乱をおさめ統一すると、高麗は朝貢国になる。しかし宋も高麗も北方の異民族との抗争に悩まされていた。高麗は契丹の侵入を受け朝貢を強いられ鴨緑江付近の女真族とも抗争が続く。1115 年には女真族が金を興し、高麗は金に強要され服属、朝貢する。次にはモンゴルが興り、金はこのモンゴルに圧迫される。高麗もモンゴルの侵入を許し降伏させられる。さらに元（モンゴル）は 1274 年と 1281 年には朝鮮半島を經由して日本侵攻（元寇）を企てる。7 年にわたり元に協力し補給兵站基地となった高麗も大いに国力を疲弊させた。

このように領土を陸続きで接する強大な隣国が存在し、これと戦っても勝ち目がない状況では、どこかの強国の属国となっても連合していくしか国家、民族が生き残るすべがなかったということも言えるだろう。

元が急速に衰えをみせ、大陸では朱元璋が漢民族王朝「明」を建国する。朝鮮ではこれまで通り元に従うか<sup>62</sup>、明に仕えるかの議論が起こっていた。高麗の武将李成桂は高麗王の命で明と戦うべく鴨緑江対岸に布陣していたが、いわゆるクーデターで高麗の首都開京を落とし（1388 年威化島回軍）、自ら親明の王朝李氏朝鮮を建国した。この経緯から見ると、李氏朝鮮が明の冊封国になり、儒教・朱子学を統治論理として採用することは全く自然である。事大の対象は明でありその関係を強化しておくことがすなわち国家と民族の存在を保証するのである。徹底して事大し徹底して儒教思想・朱子学で統治することで、明から評価をもらうことが生き残り策なのである。その努力の結果、後に朝鮮が中華から「東方礼儀之国」と評価され、自らも「小中華」を自認するまでになる。

李氏朝鮮と明との朝貢、冊封体制は比較的安定した関係にあった。李氏朝鮮は四代世宗

---

<sup>60</sup> 朝鮮半島からの渡来はこれ以前からもあったが白村江の戦い後も多い時期（上田正昭(2013)『渡来の古代史』：46 頁。）

<sup>61</sup> 秦氏はイナリ信仰や広隆寺、松尾大社の創建に関わった（上田正昭(2013) 前掲書：55-72 頁。）

<sup>62</sup> 元に服従した後、高麗王は王妃を元から送り込まれ、姻戚関係にあった。（姜在彦(2006)『歴史物語 朝鮮半島』：117 頁。）

(在位 1418-1450 年)の時が最盛といわれる。世宗の治世も儒教・朱子学を中心とする思想で展開された。「集賢殿」を設置し<sup>63</sup>、政治や学問の研究をすすめる人材を育成した。ここで儒教思想・朱子学を学びその人材が行政各所に配置された。自然科学の分野でも天文観測や気象に関する器材も制作された。これらは自然災害は天子の政治が良くないことに天が警鐘を鳴らしているとする儒教的発想を朝鮮でも確認するためであるとともに農作業の日程計画を策定するために必要であるとされた。さらに、農業技術も『農事直説』<sup>64</sup>という形でまとめられ、全国に展開され実際の収穫量の増加に寄与したし、その印刷技術は広く書籍という形で様々な知識の普及に貢献した。さらに有名な事績がハングルの創作である。漢字は庶民には解読に難度が高いことから庶民が自らの意思を表すにはどうしても容易に理解できる文字が必要と考えた。しかし官僚の多くは自らが科挙に合格し、難解な漢字を理解できることが支配者層としての特権を維持、確保できると考えていたため、ハングルには基本的に反対の立場をとり、実際には李朝末期まで普及が始まらなかった。

李氏朝鮮、建国から 200 年、ここで国際情勢は大きく変化する。一つは想定外ともいえる日本の半島への侵攻であり、もう一つは頼みの明の衰退と清の勃興である。

秀吉の朝鮮侵攻、1592 年と 97 年の文禄・慶長の役である。文禄の役（壬辰倭乱）では朝鮮は敗北を重ねたが、明が援軍を派遣したことで戦線は膠着状態となった。慶長の役（丁酉再乱）はその途中に秀吉が死去したことで日本側が引き上げたのであるが、この戦役は戦場となった朝鮮社会を著しく疲弊させた。明もまた莫大な戦費のために国力を弱めることになり、清への王朝交代の遠因となった。

30 年後、満州を地盤とする金（清）は 1627 年以降、朝鮮に侵入し清への服従と朝貢を迫り、武力でかなわない朝鮮は屈辱的な和議を結ばざるを得なかった（1636 年三田渡の屈辱<sup>65</sup>）。1644 年、中国では明が滅び、清が王朝を建てた。これは朝鮮からみると「中華」と認識して朝貢していた明がなくなり、「夷狄」であって中華ではない「金」が中華になってしまったということになる。中華が夷狄に支配されている状況は、明という中華の本家に倣ってきた朝鮮こそが今や「中華」の伝統を引き継ぐことができるとする「小中華思想」を生んだ。一方で夷狄であっても中華を制した清には軍事力、政治力で到底勝つことは不可能であるからこの清に従っていくしか生き延びる方法はないとする消極的「事大主義」

---

<sup>63</sup> 姜在彦(2006)『歴史物語 朝鮮半島』: 149-150 頁。

<sup>64</sup> 宮嶋博史(1995)『両班』: 81-87 頁。

<sup>65</sup> 仁祖は清のホンタイジに屈辱的な臣下の礼をとらされ、蛮族と見ていた清に服従させられた。(金両基(1989)『物語韓国史』: 273-276 頁。姜在彦(2006)『歴史物語 朝鮮半島』: 186-187 頁。)

の考え方もより明確に意識されるようになった。

## ② 対外不信と地縁・血縁

度重なる外敵との戦いと事大主義は朝鮮の人々の価値観や行動規範に大きな影響を与えている。外敵の侵入を何度も何度も許してきたこと、さらにそれは朝鮮人自らが仕掛けたものではないこと、また結果としてそのほとんどは屈服を強いられるという結果を招いたこと、しかしそれでも朝鮮の国家、民族は生き残っているということ、これらのことから推し量ると、どうしても朝鮮人からすると周りの国や人々との接触や交流というものはいい結果を残さない、できることなら回避したい、となる。周辺は信用できない、何をされるかわかったものじゃないと認識される。

対外関係だけでなく、国内的にもこの考え方が現われている。李氏朝鮮の500年を通して、王のもと実際の政権運営を行うのは両班と呼ばれる高級官僚である。彼らは「朋党」と呼ばれる派閥に別れて公然と権力争いをしてきた。建国当初は勲旧派と士林派、士林派は西人派と東人派に分裂、さらに東人は南人と北人、西人は老論と少論にというように分裂を繰り返し、抗争する。この権力闘争に勝利した派は相手派閥を徹底的に粛清、排除する。支配階級の最上位に位置する両班でさえ、安全、安心の保証はない。

これを中華と対比して図示すると図11のようになる。

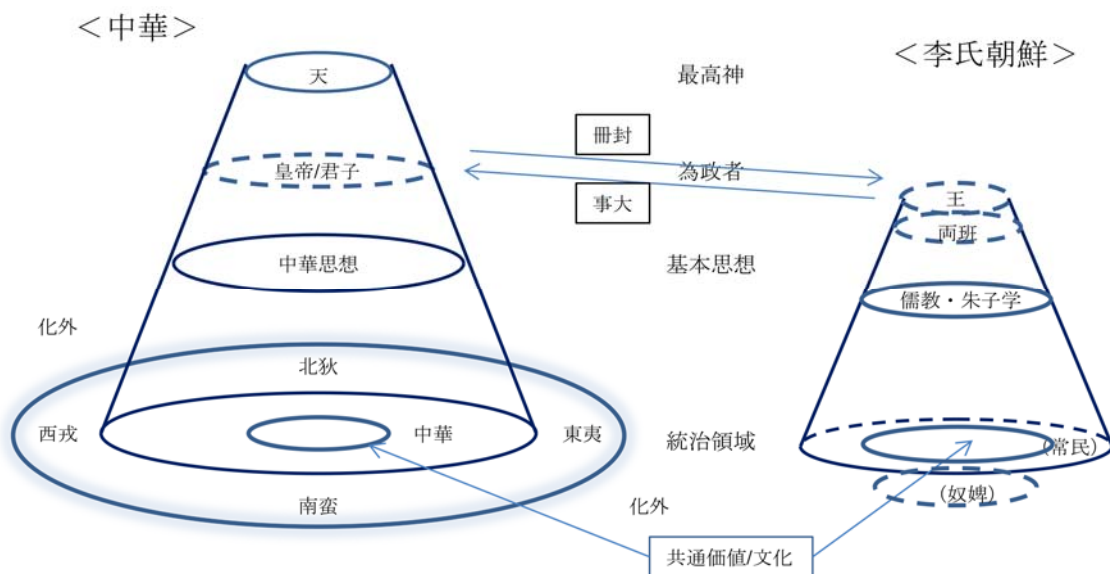


図 11 中国モデルと朝鮮モデル



朝鮮では「天」は意識されない。「天」は中華に属する。したがって「地」が中心になる。中華では各地の「王」が中原を巡って争い、勝者に天命が下り「皇帝」となるが、朝鮮は中華と朝貢、冊封関係にあるので「朝鮮国王」に封ぜられるのみである。その王の絶対権力に関与すべく高級官僚両班の争いが起こる。図 12 では両班 A,B,C,D が争い、B が王の信頼を得たという形である。その際、A,C,D は徹底して排除されることが多いのである。この両班は後に述べる「本貫」を背負っているのといわば土地(出身地)の争いでもある。

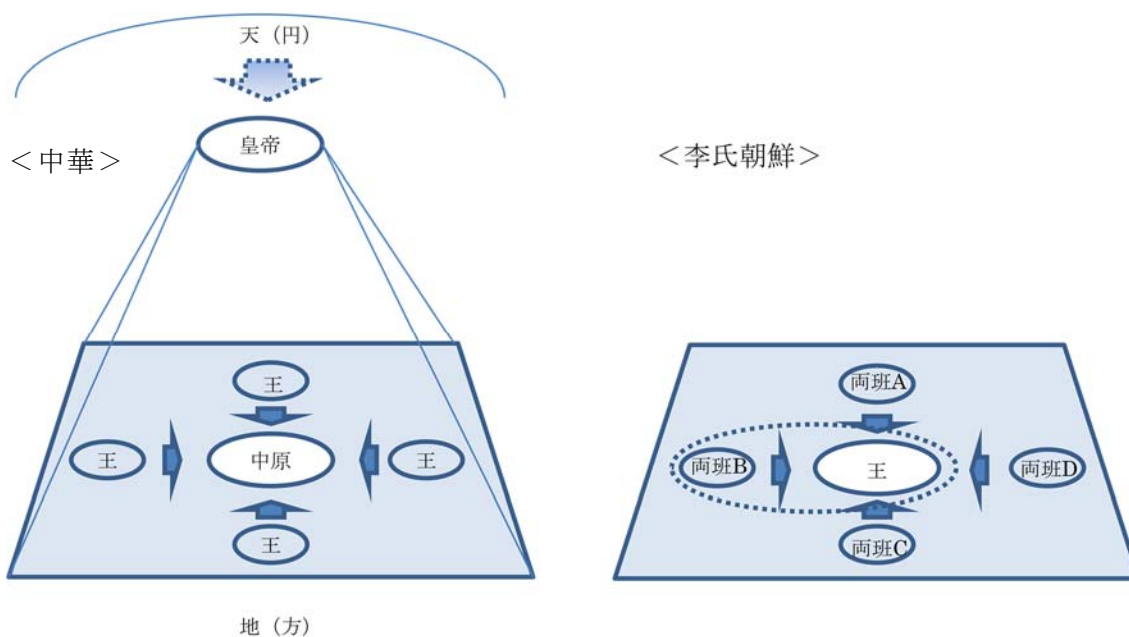


図 12 中華と李氏朝鮮の権力構造

となれば、いったい信用、信頼できるものは何なのか、行き着くところは結局、血のつながりしかないということになる。これは儒教思想とも合致する。親子の関係にみる自然な愛情を基としてそれを親族、同族、朋友へ広げていくという道理である。この愛情の拡大はそのまま統治の思想につながるのである。李朝末期の安東金氏は純祖、憲宗、哲宗の三代、60年近い間王妃をを送りこむことに成功し外戚として一族が主要ポストを独占し実権を握った。その次の高宗の時もその王妃を出した閔氏一族が高宗の父「大院君」との抗争に勝利し一族による政権となった。時代は下って解放後の李承晩政権は北部黄海道出身、朴正熙政権は嶺南慶尚道出身でそれぞれの出身地の人材が活躍したと言われる。

朝鮮で家系は非常に大切にされている。「族譜」という氏族代々の家系図がある。その

際に「本貫」(宗族の始祖の発祥の地)も大事な要素である。どこどこの〇氏という言い方(たとえば金海金氏、慶州金氏など)で表現する。出身地は土地との結びつきを表し李氏朝鮮の時代は「同姓同本不婚」という決まりもあってより重要さが増していた。現在の在日の韓国人の墓を調査・言及した研究があるがその墓石には図 13 のように「本貫」が記載されているものが多いと言う<sup>66</sup>。海外へ出て依然として「本貫」の意識は強い。

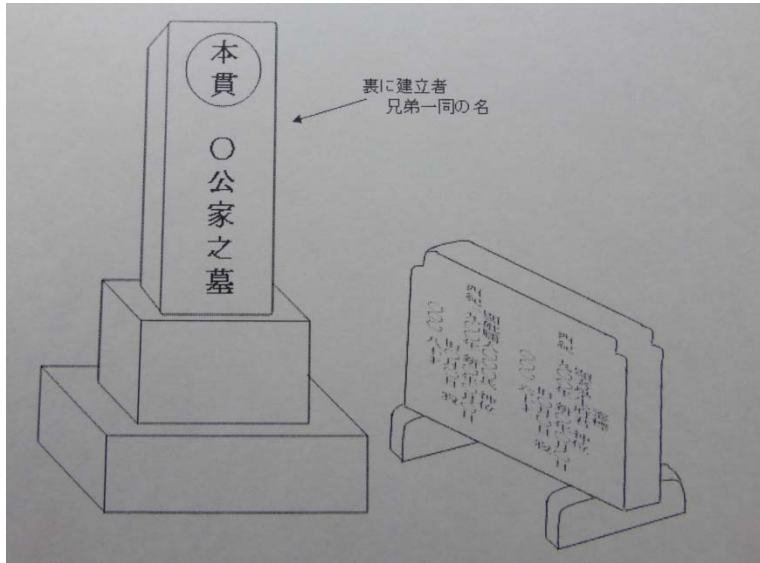


図 13 墓石への本貫の記載 (渡辺正恵(2013)「在日コリアンの定着」: 105 頁。)

このように、朝鮮の人々は出身地(土地)との関係を非常に大事にする。中華は「天」との関係を重視するが、朝鮮では「地」を中心に考える。「天」はほとんど意識されていない。それは中華皇帝が「天」に代る天子として君臨しその皇帝に臣下の礼をとる以上、「天」を朝鮮が直接に意識したりすることは困難であるからだ。したがって、「地」とのつながりをいかに統治に活用していくのかということが政権の重要課題になる。

古田(1995)は朝鮮民族は外国から輸入したシステムやイデオロギーを純化させ、エスカレートさせる傾向がある<sup>67</sup>という。この場合の外国は主として中国である。中国でも「ウチ、ソト」意識は強いが、朝鮮ではさらに純化され極端になっている。それが「ウリ」「ナム」である。

<sup>66</sup> 渡辺正恵(2013)「在日コリアンの定着」追手門学院経営学研究科博士論文: 105 頁。

<sup>67</sup> 古田博司(1995)『朝鮮民族を読み解く』: 22 頁。

「ウリ」は最も中核となる血族から宗族、同郷人、知人と広がっていくが、その中心はあくまで血族である。この血族の結束を強める機能を果たすのが祭祀である。元来、祖先崇拝を大切にする民族であり、祖先はほぼ四代前まで祀られていく。その命日には祭祀をとり行わなければならない。最近では四代であるから年に八回である。もともとは十代までさかのぼったという。かなりの経済的負担にはなるが大事な行事である。

キリスト教では人が死ぬと天国に行き、仏教では輪廻転生する。儒教では魂はこの世にいるから「人は死んでも家族とともに暮らす」ことを理想とする死生観をもっている。そのために裕福な家には「祠堂」がある。この祭祀に関係する人々が「ウリ」の中核である。

「ウリ」は社会に危険が大きいほど縮み、その中核を守り、逆に社会が安定すれば宗族、同郷人、知人へと広がっていく。一族の誰かが出世すればそのご相伴にあずかるというのは当然のことという意識をもち、当人もその一族を養う責任があると認識している。この考えが強すぎると事件性をもった腐敗を生むのは当然の成り行きともいえる。

### ③ 事大と「恨」

このように度重なる外敵の侵入は対外不信とその裏返しともいえる「ウリ」意識の強さを生んだ。では、もう一つの要因である「事大主義」はどのような価値観につながっていくのだろうか。

生存のために「大」に「事<sup>つか</sup>」えることだから、「大」の命令は絶対である。さもなくば生存に関わる。したがって服従が常態化する関係になる。理不尽であろうと泣き寝入り、耐えるしかないというのが現実的な対応にならざるを得ない。

こういう辛抱が壬辰倭乱（文禄の役）、丁酉再乱（慶長の役）の日本の侵攻に対しては、明に援軍を送ってもらうことでこれを斥けた。19世紀末の壬午軍乱<sup>68</sup>や甲申政変<sup>69</sup>の国内の騒乱に対しても要請を受けた清の袁世凱がこれを鎮圧した。これで辛抱してきた成果があったとも言える。

李圭泰（1995）<sup>70</sup>や古田（1995）<sup>71</sup>は朝鮮の民の基本的な情緒が「恨<sup>はん</sup>」にあると言う。

<sup>68</sup> 1882年、閔氏政権の腐敗に対して「大院君」が起こしたクーデター（金重明（2013）『物語 朝鮮王朝の滅亡』：117-122頁。）

<sup>69</sup> 1884年、親清派（事大）に対して起こした独立派のクーデター（金重明（2013）前掲書：122-124頁。）

<sup>70</sup> 李圭泰（1995）『韓国人の情緒構造』：126-130頁。

「恨」は怨念を抱く状態で外部要因を憎悪し、それを抱く自分を悲しむということであって、元来朝鮮の文化、価値観が外部からのショックに対して外向的な処理を不道徳、内向的な処理を美德としていたことをその背景として持つ。つまり形式上は服従しつつも内面では自己を正当化させ精神的にバランスをとって処理してしまうということである。

「恨」という文字は中国でも日本でも同様な意味合いで使われるが、その情緒的意味合いは朝鮮が最も厳しいものである。

「大」に対する被害者という意識は自分が「大」の立場に立つと自分より弱い立場の人間に対して同じような振る舞い、態度をとるということを往々にして生む。朝鮮の社会構造は厳格な身分制度を持っていた。ここには儒教思想が差別を容認するということがある。

「人間は精神的、肉体的に平等に生まれたものではない。したがって社会の階級は絶対に廃止してはいけない。無差別の平等は悪平等である」<sup>72</sup>という考えである。「五倫」という対人関係におけるあるべき姿、すなわち君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信という五つの関係を基本としてそれぞれがそのふさわしい役割を果たすことを説いている。これが強調されすぎたためであろうか、朝鮮では社会の身分制度が厳格に機能し、男女の関係においても男尊女卑が当然のように考えられるようになった。

両班、中人、常民、奴婢という階層区分はその上位階層の横暴にもみえる行為を正当化できるしくみでもあった。また中華に倣った科擧の制度も両班の特権を守るためにも機能した。もちろん優秀な人材を発掘し官僚として活躍させるというのが本来の目的であるが、制度も手を入れないと制度疲労を起こす。科擧に合格するためには難解な漢字を解し、儒学の教典への深い理解が必要である。そのためにはその学習のために一族をあげて長期的に経済的な支援もしなくてはならない。それだけの負担が可能なのはやはり両班の家系だけということになり、時とともに次第に世襲化されていく。また、壬辰倭乱（文禄の役）、丁酉再乱（慶長の役）のあとは国家財政が破綻しそれを賄うために一定の金を払えば両班の階級に上がれるという制度さえあった。

この社会階層は「恨」を生み出す。指導者層は事大主義の相手に、庶民は官僚に「恨」の情緒をもつのである。

両班の制度疲労は 19 世紀末、つまり李氏朝鮮の終末には極限に達していた。この時期、イギリスの女性旅行家イザベラ・バードは『朝鮮紀行』の中で以下のような記述をしてい

---

<sup>71</sup> 古田博司(1995)『朝鮮民族を読み解く』：158 頁。

<sup>72</sup> 宇野哲人(1980)『中国思想』：62 頁。

る。「国民のエネルギーは眠ったままである。上流階級は愚かきわまりない社会的義務にしばられ無為に人生を送っている。中流階級には出世の道が開かれていない。下層階級はオオカミ<sup>73</sup>から戸口を守るのに必要なだけの労働しかせず……。 (中略) 階級による特権、貴族と官僚による搾取、司法の不在、労働と比例しない収入の不安定、最悪の因習を繰り返してきた政府、策略をめぐるすどろぼう官僚、……」<sup>74</sup>「朝鮮には階級がふたつしかない。盗む側と盗まれる側である」<sup>75</sup>「負債はだれもがかかえている。しかし彼らは働いても報酬が得られる保証のない制度のもとで暮らしているのであり、稼いでいると噂された者、ゆとりを得たと評判が流れた者は、強欲な官吏とその配下に目をつけられたり、近くの両班から借金を申し込まれたりするのがオチなのである」<sup>76</sup>。

#### ④ 事大と「小中華」

事大主義に対する内的処理の方法として「恨」による処理の他に、もう一つ方法がある。それは自らが「中華」になってしまうことである。そうすれば「事大」しているという精神的な負担は大幅に軽減されるだろう。中華からみて朝鮮も中華と評価してもらえればいいわけである。そのためにはまず形式的な不足があってはいけない。儒教の五常の一つ、「礼」は上下の関係の礼節を守ることが社会秩序を安定させる。また様々な行事で決められた動き、発言、服装などを順守していくことも大切な形式である。「東方礼儀之国」と言われた朝鮮ではこういうことが墨守されていた。冊封使を迎える「迎恩門」や歓待の場でもある「慕華館」を建て中華に対する臣従の意を表現し、国内では徹底した儒教中心主義で統治した。つまり、他の思想や考えを積極的に排除したのである。図 14 は図 11 の朝鮮モデルを上から俯瞰したもので、徹底して朱子学を統治の思想としたがゆえに、外部からの情報、刺激を受け入れる余地が例えば日本モデル（図 14 右）と比べて圧倒的に少ないと考えられる。

---

<sup>73</sup> 官僚、両班のこと

<sup>74</sup> バード, I. (1998) 『朝鮮紀行』: 556 頁。

<sup>75</sup> バード, I. (1998) 前掲書: 558 頁。

<sup>76</sup> バード, I. (1998) 前掲書: 110 頁。

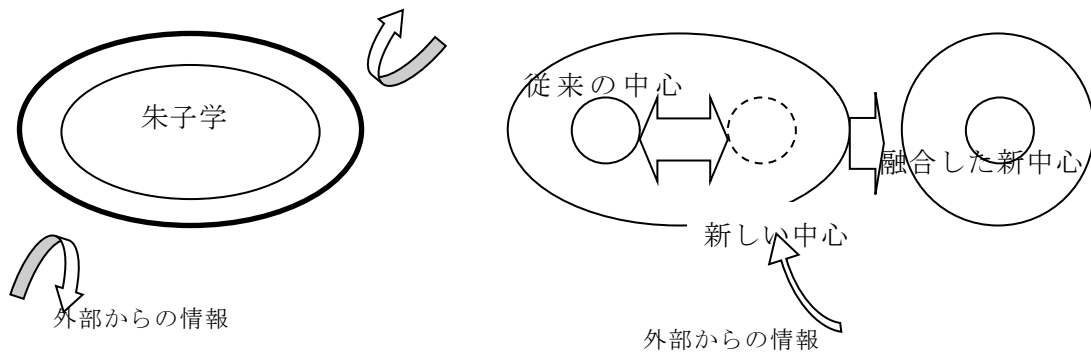


図 14 朝鮮モデル (2)

(右) 日本モデル (既出)

これは、当然ながら先に触れた朝鮮が数多くの侵略を受けてきたことによる対外不信とその裏返しとも言える「小中華」としての生き方に大きく影響されたものであろう。日本が良くも悪くも中国や西洋からの文化、文明を取り入れながら自分なりに消化、改良してきたこととはかなりの対照をなしている。

仏教は高麗王朝までは発展してきたが李氏朝鮮は基本的に「崇儒排仏」である。大王世宗は儒教の根本的な思想を解説した「三綱行実図」<sup>77</sup>を配布し強制、圧制ではなく儒教教化によって民を導くことで社会秩序を正そうとした。そのためこの「三綱行実図」は難解な漢字を避け絵で説明されている。時代は下るが天主教も弾圧した。18世紀後半、正祖のときに天主教を弾圧するか保護するかの最初の論争が起きた。次の純祖（在位 1800-1834年）は幼君で即位したため貞純大妃が垂簾聴政を執ったが、この時天主教は王権や儒教を損なうものとして禁教令を發布、弾圧に動いた<sup>78</sup>。さらに憲宗（在位 1834-1849年）も「己亥迫害」（1839年）、「丙午迫害」と呼ばれる天主教弾圧を行いフランス人神父を処刑し、外交問題に発展する<sup>79</sup>。

このことは、王権を守る事と儒教中心主義に固執するあまり他の外部情報（外国文化や思想、技術）の流入を妨げる結果となった。朝鮮でも李氏朝鮮が建ったころはこのこと自体が鮮度を持っていた。そのため儒教中心の統治は社会に活力を生んだ。しかし李氏朝鮮500年の後半には国際情勢も大きく変化しているが環境変化への対応を遅らせることにつ

<sup>77</sup> 君臣、父子、夫婦三綱の模範となる行実を絵で説明した。（ウェブサイト：国立国会図書館「続三綱行実図」）

<sup>78</sup> 姜在彦(2006)『歴史物語 朝鮮半島』: 213-214 頁。

<sup>79</sup> 六反田豊監修(2013)『朝鮮王朝がわかる』: 124-125 頁。

ながってしまった。

## (2) 琉球からみた中華

朝鮮とともに琉球王国も中華の冊封国であった。琉球王国は日本や中国、東南アジア諸国との外交、貿易を通じて独特の文化を築いていた。1429年に尚巴志が統一して以来、1879年の琉球処分によって沖縄県となるまで450年の王国である。ただし1404年からは明の冊封体制下であり、1609年以降は実質的に薩摩藩の支配下にあった。薩摩の侵攻を受け琉球国王尚寧は降伏する、このことを明に報告した際、万暦帝は「貢期が遅れることはおんみの責任ではない。おんみはどうか人民をいたわり、国の守りを固くして自立をはかり、十年ののち物資が豊かになるのをまってまた朝貢するがよい」と勅諭した<sup>80</sup>。琉球と明の関係を端的に表しているのではないか。

### ①首里城

首里城の正殿は日本様式と中国様式の両方を取り入れた独特の建築である。日本様式としては唐破風、中国様式として龍頭棟飾りが目立つ。正殿の向かって右に建つ南殿は日本的儀式や薩摩藩の接待所として、左の北殿は明からの冊封使を接待する場所として使われていた。首里城全体の建物配置は中国風である。中庭（御庭）を囲む形で正殿、北殿、南殿が建ち、御庭で儀式、行事が行われたのは中国の伝統建築と似たものである。

---

<sup>80</sup> 原田禹雄(2003)『琉球と中国』: 54-55頁。

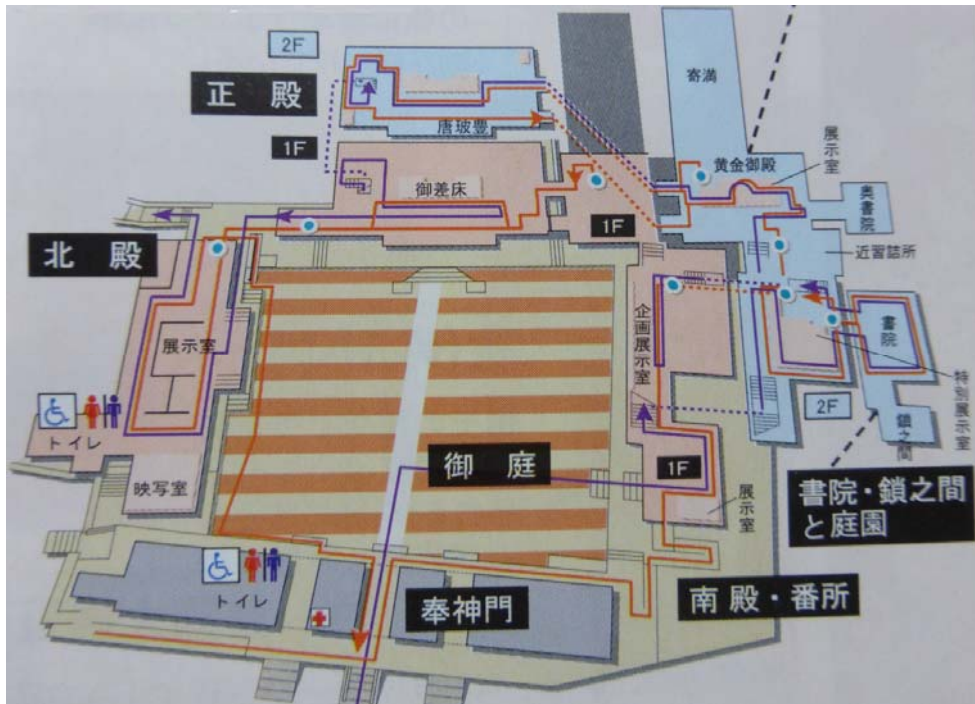


図 15 首里城配置（首里城公園管理センター）

さて、この首里城はなぜ西向きか、ということに疑問があった。平城京も平安京も朝鮮ソウルの景福宮も長安に倣い南向きであり、冊封体制の優等生の琉球が西向きというのはなぜか。首里城内での説明では「国王は太陽として尊敬されており東を背にしたので」という説があるとのことである。

有名な「守礼の門」は、1579年の尚永冊封の時の詔「琉球国は遠く海浜にあって、謹んで皇帝の教化に従い、代々来貢につとめ、守礼之邦となえるにふさわしい」<sup>81</sup>によって建てられている。

城内では「表」と「内」の取次ぎに「鈴」が使われている。御庭に面した公の空間「表」と御内原（正殿の裏に位置）と言う私の空間「内」があるが、この内、外に用がある場合に「鈴」を鳴らして合図を送ったのである。このしくみは江戸城とよく似ている。江戸城も表（公）中奥、大奥（女性の居住空間）と空間を厳格に区分していたが、将軍が大奥に入るときには「御鈴廊下」で鈴を鳴らしたのと共通したしかけである。ちなみに首里城の御内原は江戸城の大奥同様男子禁制であった。

琉球は中国と日本に挟まれて両国との国際関係に気遣いながら王国の運営をしていたのである。

<sup>81</sup> 原田禹雄(2003)『琉球と中国』: 48頁。



## ②明との関係

中国との関係では 1372 年に中山王・察度が明に初めて朝貢を行い、続いて 1380 年に山南王・承察度<sup>しょうさつど</sup>、83 年に山北王・帕尼芝<sup>ぱにじ</sup>も朝貢をはじめ、各王は以降毎年のように朝貢船を送った<sup>82</sup>。明は 1368 年に朱元璋によってたてられた王朝であるから、その直後に琉球に対して「朝貢」を促していたということになる。1392 年からは察度が「国子監」という明の最高学府に留学生<sup>83</sup>を送り政治体制、文化などの学習を通じて明との交流を深めていた。なおこの留学はその後 500 年にわたって継続されている。1404 年には初めて冊封使が琉球に来て察度の子武寧を琉球国王に封じた。

異民族モンゴルの元王朝を北方へ退けた明は「中華」の再構築、すなわち華夷思想の基づく周辺国との関係強化に取り組んでいた。とりわけ三代永楽帝<sup>84</sup>は朝貢国が多いほど中華皇帝が有徳者、すなわち「天」が認めた「天子」としてふさわしいと考えていた。鄭和の 7 回にわたる南海遠征もその一環である。この遠征は東南アジア、インド洋、ペルシヤ湾、紅海、アフリカ東岸にまで及び、30 数ヶ国を訪問し使節団を伴って帰国した送り返した。

また琉球が冊封体制に組み込まれた頃は、元の衰退以降周辺国との交易は政権のコントロールが効かず民間貿易が中心となっていて、倭寇や海賊も暗躍していた。明はこれを唐代の秩序ある交易体制に戻したいと考え、海禁政策<sup>85</sup>をとり交易を朝貢に限ることとした。交易を国家主導で確保しようとしたのである。海禁政策では明の自国船も海に出られない、琉球のみならず、シャムやアユタヤ、マラッカなどとの交易もできない。そこで代わりに海洋国である琉球に、朝貢も欠かさず臣下の礼をとる琉球にその肩代わりをさせようとした。琉球は察度王のころから明との人の交流があり福建からの渡来人も多くいた<sup>86</sup>。これら渡来人は航海、通訳、文書、造船などの技術、技能をもっており琉球にとって貴重な人

<sup>82</sup> 高良倉吉(2012)『琉球の時代』: 65,74,76 頁。

<sup>83</sup> 「官生」と言う。(沖縄県立博物館・美術館(2014)『久米村』: 12 頁。)

<sup>84</sup> 在位 1402~1424 年。永楽帝は太祖朱元璋の第四子であったが、皇太子が早逝したため皇位を継いだ皇太孫(建文帝)に対し靖難の変というクーデターで皇位を奪ったという弱みがあった。(壇上寛(2012)『永楽帝』: 230 頁。)

<sup>85</sup> 海賊や密貿易を取り締まるために民間貿易を規制した。(高良倉吉(2012) 前掲書: 106-109 頁。)

<sup>86</sup> 「閩人三十六姓」が渡来した(高良倉吉(2012) 前掲書: 69 頁。沖縄県立博物館・美術館(2014) 前掲書: 6 頁。) 閩は福建のこと、三十六姓は多くの姓のこと

材であった。その任を果たすのに最も適切な国であった。また、東南アジア各国にはすでに渡航していた中国人華僑がいた。そのため、多くの場合に障害となる言葉も問題なくクリアーし、琉球は東南アジア、中国、日本、朝鮮を含む「大交易圏」をネットワーク化した。貴重な中国の物資を入手できることが交易を優位にサポートした。その結果、琉球の朝貢は増加し朝貢以上の回賜（朝貢に対する返礼）もあって大きな利益を得ることになった。こうして琉球は海洋王国として繁栄を築いていった。

実際、琉球の明に対する朝貢回数は関係国間でトップであった。しかし、この繁栄もポルトガルが東南アジアへ進出しマラッカ王国を滅ぼす<sup>87</sup>(1511年)など拠点を拡大するにつれ琉球との交易も圧迫されていった。さらに明の海禁政策も次第に緩みを見せ中国人による民間交易も増加していった。こういった琉球をとりまく環境の変化で次第に中継貿易国としての琉球のポジションは次第に低下していった。

### ③冊封と文化面での影響

冊封体制下の琉球国王の代が変われば、中国は皇帝の勅書、王冠などを冊封使に持たせて派遣した。一行は300～500人にも上り滞在期間も半年以上である。冊封使を迎える行事を「冊封七宴」<sup>88</sup>と言い豪華な宮廷料理と華やかな芸能が演じられた。この宴は国家行事であり王国の威信をかけたものになる。また首里城や王が用いる権威の象徴である「龍」の図案は中華のそれとは異なっていて、爪が4本である<sup>89</sup>。中華皇帝は5本の爪をもっていた。これは中華皇帝に敬意をはらい、遠慮した形と言われている。なお、朝鮮の「龍」も同じ4爪である。ちなみに中国古代の壁画などに現れる龍の爪は三本だったり四本だったりするが、宋代になって天子の独裁権力が確立されてのち、龍は五爪に定まったらしい<sup>90</sup>。

「おかんせんおどり御冠船踊」はその名の通り、王冠を携えた船がやってくるのでこれを接待する踊りである。御冠船は22回来航したが、この回数は舞踊、音楽を徐々に進化させ、現在の琉球舞踊、音楽にも大きな影響を与えている。

<sup>87</sup> 高良倉吉(2012)『琉球の時代』: 273頁。

<sup>88</sup> 諭祭の宴、冊封の宴、中秋の宴、重陽の宴、餞別の宴、拝辞の宴、望舟の宴の七宴（原田禹雄(2003)『琉球と中国』: 143-148頁。）

<sup>89</sup> 首里城内での説明にある。(2014年11月1日)

<sup>90</sup> 宮崎市定(1995)『中国文明論集』: 341-343頁。



図 16 冊封儀式 左：正殿前の闕庭<sup>91</sup>に向かい琉球国王以下重臣が座す形式 首里城展示  
 右：国王の三跪九叩頭の礼 首里城祭での儀式再現 （2014年11月著者撮影）



図 17 冊封使接待 左：首里城北殿 右：識名園<sup>92</sup>（2014年11月著者撮影）

漆器は琉球の気候に合った工芸品である。漆を乾燥させる高い湿度、温度と発色させるための紫外線は琉球漆器のあざやかさのもとになっている。冊封使をもてなす宮廷料理の代表とされる東道盆<sup>とうんだいぼん</sup>はもともと漆器の容器である。東道は宴会などの主人という意味の中国語である。その上で中国、日本との交易で螺鈿、沈金などの加飾の技法を取り入れていった。やちむんと呼ばれる焼きものも中国の白磁や南蛮焼が伝わり日本の技術も取り入れて発展した。織物で「紅型」と言う貴族用の衣装の文様は殆どが中国伝来の龍や鳳凰などが多いが、緋の文様は日常的な自然や風物を図案化したものである。

<sup>91</sup> 冊封使の立つ場所

<sup>92</sup> 琉球王家の別邸であり、冊封使の迎賓館でもある。

信仰の面でも先祖伝来の御嶽信仰<sup>93</sup>があったが、日本からは仏教、神道が中国からは媽祖信仰<sup>94</sup>が伝わっている。那覇の天后宮（図 18）は明の永楽年間に作られたと言われており、日本で最初に航海の女神媽祖を祀ったところであろう。明の冊封使は福建から船団で琉球にやってくる。自らのこととして航海安全を祈ることが必要であった。当時は冊封使を拝命することは命がけで任務を果たすことであった。



図 18 那覇天后宮（2014年11月著者撮影）



図 19 シーサー（沖縄県立博物館にて 2014年11月著者撮影）

シーサー（図 19）は悪霊退散の魔除けだが、獅子像を中国語読みしたものである。石敢當（図 20）という魔除けもある。T字路などの突き当りにある石柱で、魔物は直進しかできないので石敢當にぶつかって消えるというもので、やはり中国からの伝来である。

93 祖先神のいるところで村を守護してくれる。神女が祭事を行い、男性は入れない。斎場御嶽は王国最高の御嶽。

94 本稿第5章(1)③にも媽祖について記述



図 20 石敢當 (沖縄県立博物館にて 2014年11月著者撮影)

冊封、朝貢体制は朝貢国は中国皇帝の臣下ということであるが、貿易や文化の面では琉球の側にも大きなメリットがあったのも事実であろう。

国際情勢はさらに変化する。1587年薩摩は秀吉の九州平定に屈し91年には朝鮮出兵のため琉球へも島津氏を經由して派兵を要請するがこれに琉球は応じなかった。このことを一つの口実として薩摩島津氏は1609年琉球を攻めた。薩摩の力は圧倒的で琉球は降伏する。その結果、形式上は依然として琉球王国ながら実質的に日本の体制に組み込まれることとなった。それから270年後の1879年、明治政府の「琉球処分」によって琉球王国は解体された。

#### IV. 伝統建築の思想

ここで少し横道にそれるかもしれないと思いつつ、中国の伝統建築の思想を探ってみようと思う。それは実は横道ではなく本道であるかもしれないと思うからである。文化は一定の領域に暮らす人々が共通認識としてもっていなければならないということを前提とするならば、生活の基盤となる建築物は人々に共通する地理的、気候的環境や伝統的な生活慣習やさらには建築に活用できる素材などが要素となってその地域の文化、社会を形成するひとつの形と考えられる。人々がどう生きるかが文化の原点にある。伝統建築はその生き方を具象化したものの一つである。かつて和辻は代表的著書『風土』(1979)で、モンス

ーン、沙漠、牧場という三類型を設定しその自然環境が人間の精神構造に大きな影響を与えていると述べた。自然環境にどう人々が立ち向かうのか、その第一歩はどう生活するのか、どう生活空間を確保するのかということであり、それ自体が民族、文化、社会の特性に大きく影響を与えていると考えてよいと思う。また合田（1993）も「文化を生み出す基盤として風土の特色を的確に把握する必要がある。日本と中国では文化を生み出す自然環境が異なる。文化の違いは結局、風土やそこから生じる生活様式の違いの考察に帰着する」<sup>95</sup>と述べる。

中国は東西 5200 k m。南北 5500 k m、広大な領土である。したがって自然環境も地方地方で大きく異なり生活様式も様々である。伝統建築で見ると、中原には四合院形式、北方のモンゴル自治区では移動に適したパオ（包）。長江沿いの水郷地帯では川と共生できる形式の建築、高温多湿の南部の少数民族は高床式住居に住む。他にチベットの石積み式の住居や黄土高原には横穴式の窑洞<sup>ヤオトン</sup><sup>96</sup>もある。ここでは、歴史的にも政治的にも最も大きな影響力のあった北京、中原の四合院とのちに華僑を多く輩出し経済力と同胞意識の強い客家の土楼を取り上げることにする。

また、日本の寝殿造、書院造と朝鮮の兩班住宅を取り上げ、民族性や文化の違いを考察する。

## （1）自然に対する態度

建築の思想の背景には「自然」に対する態度の違いがある。

中国人にとって自然は克服すべき相手である。大陸の自然の脅威はけた外れである。「沙塵暴」と呼ばれる砂嵐は空を覆い尽くすほどのものであるし、大河長江もしばしば氾濫し流域に甚大な被害をもたらす。最近では1998年の大洪水で湖北省省都の武漢や江西省の九江で甚大な被害が発生した。一方、華北を流れる黄河は水不足である（「断流」と言われる）。上流域での工業発展によって取水され下流の大都市である北京、天津に水が来ない。そこで政府は2002年、「南水北調」というプロジェクトを立ち上げた。これは豊かな長江の水

<sup>95</sup> 合田究(1993)『雲烟の国』: 10頁。

<sup>96</sup> 黄土に横穴を掘ってつくる住居で気温差が少ない。暑い夏、寒い冬に対処する住居形式。(茂木計一郎・稲次敏郎・片山和俊(1991)『中国民居の空間を探る』: 10頁。) 習近平総書記も下放時代に暮らしたという。(富坂聡(2013)『習近平と中国の終焉』: 94頁。加藤隆則(2013)『「反日」中国の真実』: 120頁。)

を北の大都市に運河を掘って供給しようとするもので、図 21 に示す東、中央、西の三線が計画され、2013 年には、東と中央が完成している。総延長 4170 k m に及ぶ巨大プロジェクトである。



図 21 南水北調路線図（ウェブサイト：中国の「南水北調プロジェクト」）

この発想はもとは 1952 年に毛沢東主席が「南方水多北方水少、如有可能借点水来也是可以的」（南方は水が多く、北方は少ない。もし可能なら水を借りてくることもいい）と構想したことに始まる<sup>97</sup>とされている。自然を克服すべき相手としてのプロジェクトは 60 年経った今も進行中である。

水との戦いは中国では現存するもので紀元前 3 世紀のものがある。現在の四川省・都江堰である。ここは省都・成都から北西 48 k m の位置にあるが、ここを岷江<sup>98</sup>という大河が流れている。川の水量は多いのだが、成都盆地へは取り込めず盆地は水不足の状態であった。そこで蜀の大守李冰、李二郎の父子がこの大河の中に中洲を建設し、流れを分け成都に穏やかに水を引き込んだ。この結果、蜀の発展の基盤となり後に「天府之国」と称される大穀倉地帯となる。これは秦始皇帝が中国を統一する前のことであり、その凄さが伝わってくる世界遺産である。図 22 の写真中央が築いた中洲、都江堰である。

この広大な自然、荒削りでむき出しの自然が人々の考え方や生活様式に影響を与えないということは考えられないのである。土地の広大さは時間の観念も悠長さにつながる。せ

97 高多理吉(2014)「世界の水危機」『国際貿易と投資』: 65 頁。(「国際貿易投資研究所」ホームページ)

98 四川省を流れる長江左岸の支流

かせかしない体質になる。意識する時間軸は日本人に比べると長い。それこそ王朝の興亡にも大きな動揺はせず、達観して生きるという観念を生む。



図 22 都江堰 (2002年8月筆者撮影)

日本では自然は崇拜の対象になり、神格化されてしまうこともある。古代日本人は山、川、巨石、巨木といったものをカミとして祀った。自然現象が人々の生活に悪い影響を及ぼす時に、それはカミの怒りであると捉え、怒りを鎮めるために自然を崇敬していく。自然はカミであるから、何とかその恵みに浴したい、自然と共生することが生活の安定の基本であると考ええる。

これを日本の一つの文化とするならば、建築にもその考え方は反映される。自然に対する畏敬や自然を受け入れて一体化するような発想になる。高温多湿な気候風土の中で、森林資源は比較的豊かにある。木材は耐久性もあり調湿機能もあるのでこれを主材として使う。雨も多いから「壁」ではなくまず「屋根」から建物を発想する。一つの「屋根」の建物を「棟」と言うが、一棟で足らなければ二棟、三棟と拡大する。屋根を巨大化するのではなく棟を増やす。寝殿造にしても書院造にしても庭園が大切な要素である。山水自然を配し、鑑賞や儀式的空間として重要な機能を果たしている。また、「軒」が深いことも特徴とされている。これも雨が多い気候であっても多少の風雨であればこれを避ける、また夏の暑さ、日光を直射させないためにも深い軒は機能している。

極端に言うとも日本人は自然を「山紫水明」、中国人は「窮山悪水」(何もない山で災害を



もたらす)<sup>99</sup>と考える。それだけ中国人にとっては大陸の自然は厳しいものなのである。

## (2) 四合院

中国伝統建築様式の代表的なものに四合院がある。建築様式は、その地域の歴史的要素、人々の生活環境や様式、さらに気候条件などの自然条件などによっても規定される。四合院には、中国人の現在にも通じる考え方的一端があるのではないだろうか。

まず四合院の構成を簡単に紹介する(図23)。全体としては口の字型の平面となっておりそれを構成する四棟が内側を向き、院子<sup>Yuanzi</sup>と呼ばれる中庭を取り囲んでいる。またコの字型で構成される三合院もある<sup>100</sup>。中心となる建屋は「正房」であり、ここは主人の居間であり応接間である。その隣の「耳房」は主人の寝室、「廂房」には家族の部屋や食堂を配する。人の流れから見ると大門を入ると「壁」(ついたてのような壁、目隠しをする壁)があり、正房の正面には「門」(これも目隠し)がある。

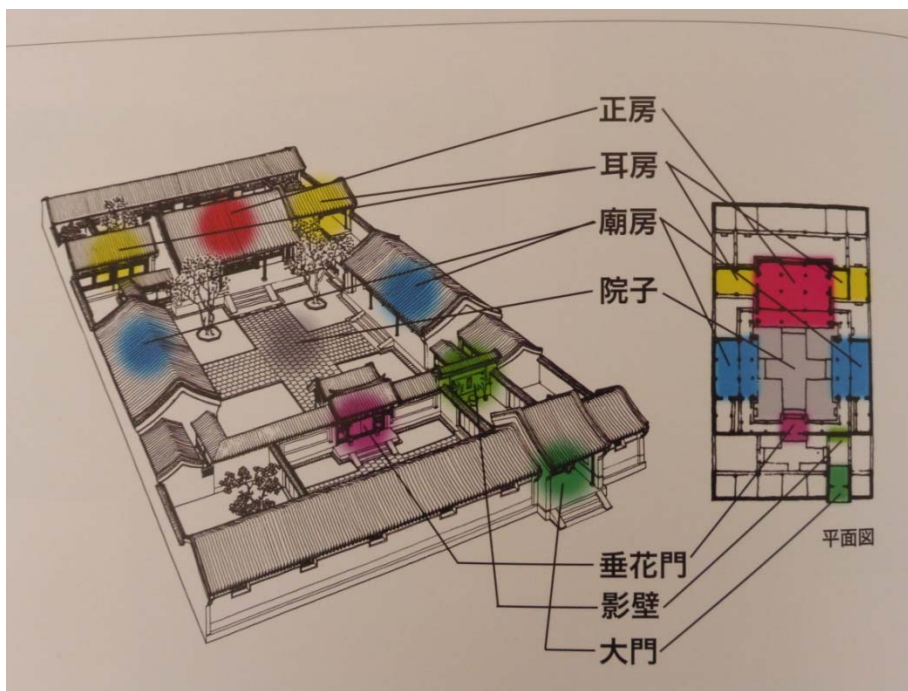


図 23 四合院見取図 (国立歴史民俗博物館編(2009)「日本建築は特異なのか」: 67 頁。)

図中の廟房は廂房の誤り (同書正誤表)

<sup>99</sup> 孔健(1997)『中国人から見た日本人』: 7 頁。

<sup>100</sup> 国立歴史民俗博物館(2009)『日本建築は特異なのか』: 66 頁。

まず特徴と言えるのは平面図では分かりにくいですが、周囲を「土壁」で囲んでいることである。この壁は外部に向かっては開いておらず、閉鎖的である。一方、内部には開放的である。これは「守り」の構えで、外敵から自らを守る、厳しい自然環境から守ることを第一の考えとし、これを「土壁」で形にしている<sup>101</sup>。

四合院は今から 2000 年前の漢代にはすでに中原で成立し定型化されていたと言われている。中原は黄河文明発祥の土地であり、現在の河南省を中心とする平原でこの地を支配することが権力を握り覇権を獲得することであった。中国最初の統一王朝である秦は始皇帝の死後、急速に力を失い、次の覇権を目指して、最終的には漢の劉邦と楚の項羽が争った。この両雄決戦になる前には多くの群雄が勝ち残りレースに参戦していた。中原は戦略上の最重要領域であった。中原に住む人々にとって、田畑は戦場と化しその生活基盤が脅かされる悲惨な状況であった。そういう環境下での住居思想が「守り」になるのは当然の成り行きである。

二つ目の特徴は中央にある中庭、「院子」である。ここは屋根のない空間である。院子から上を見ると空（天）が見える。これを徽州<sup>102</sup>では天井という。日本語の天井は家屋の内部の上板であるが、中国語での天井は天に繋がる井（戸）である<sup>103</sup>。井戸は地下だけではなく天に向かってもある。ちなみに日本語でいう天井は中国語では<sup>tianhuabǎn</sup>天花板という。ここにあるのは天地一体思想であり、ここが公的な場、儀式の場になる。天命を受けた天子が天に代って広場に集まる臣下に命を下す、その時は「天子南面す」<sup>104</sup>で北から南に向かって立つ。この「天命思想」を一つの形にしたのが四合院の建築様式になっている。広場が院子、その北側に地面から一段高くなった「基壇」の上に堂屋を建て、その一族なり家族の長がそこに暮らす場所とする。したがって「南面」も「基壇」も四合院の重要な構成要素である<sup>105</sup>。

この考え方をさらに城市の規模にまで拡大してみる。北京の故宫とその南にある天安門広場を想像するといいが、天子のいる宮殿が造られその前に大きな広場がある。宮殿を中心に政治を行う官庁が置かれる。その周囲には町が整備される。広い意味でこれが城内で、その周囲を壁で囲い込む。その壁の外は郊外、さらに平原、原野があってその向こうには

---

<sup>101</sup> 茂木計一郎他(1991)『中国民居の空間を探る』：24 頁。

<sup>102</sup> 安徽省南部のこと

<sup>103</sup> 茂木計一郎他(1991) 前掲書：47 頁。

<sup>104</sup> 「天」の象徴、北極星を背にして立つ形

<sup>105</sup> 茂木計一郎他(1991) 前掲書：25 頁。

「華夷思想」の「夷」がいる。このように城市規模まで拡大すると「華夷思想」「中華思想」も目に見える形で表現できる。ちなみに秦代から建設が始まった万里の長城も北方の夷敵に備える北の壁である。

### (3) 客家土楼

中国南部の福建省、広東省、江西省の山あいの地に客家土楼と呼ばれる世界遺産の建築群がある。周囲を土壁で造った一辺、あるいは直径が 50 メートル前後もある。3 階ないし 5 階建の巨大な方形、円形の集合住宅である。客家は少数民族ではなく、中原の戦乱を逃れて南方へ逃れてきた漢民族の集団である。秦の末期の「中原に鹿を逐う」時代に最初の移動があった。その後五胡十六国の戦乱、唐の末期の黄巢の乱、モンゴル族の侵入など、混乱による中原の戦場化が契機になっている<sup>106</sup>。南下したもののその地域はもともと人口も多く平地に入ることはできない。そこで止むを得ず山間地に居住する。客家の「客」は南下した先の地域に住む先住民からみてよそから来た人、つまり「客」ということから客家と呼ばれる。「土楼」の土壁は主として敵の火器による攻撃から守るためである。四合院同様、いやそれ以上に嚴重に外部に向かっては閉鎖されている。集団で動き、集団で生活する。「守り」を重視した構えである。当然のように団結心の強い集団となる。内部に「院子」を配する。左右対称の形、構造は彼らがもともと中原で住んでいたであろう四合院の考え方をとっている。「客」とはいえ決して歓迎されたわけではない。常に「先住民」や「北方からの脅威」を意識しながら生活を成立させなければならず、建築物を大規模化し、大集団をもって守りを固め、一方で経済的には自給自足を成立させた。この集団の中では女性がウチを取り仕切り男性はソトに出て稼ぐというのが基本的な役割分担であった。そのため中国人女性の伝統美とされてきた「纏足」は客家では採用されない<sup>107</sup>。働けないからである。また男はソトに出る。華僑となって東南アジアや日本、アメリカへも渡っている。華僑の出身地を見ると福建人、潮州人、客家人、広東人が多数を占めている。

<sup>106</sup> 高木桂蔵(1991)『客家』: 64-65 頁。

<sup>107</sup> 瀬川昌久(1993)『客家』: 26 頁。



図 24 客家土楼（2012年6月著者撮影）

（左上）土楼俯瞰

（右上）土楼内部

（左下）共同井戸

（右下）土楼中央の祠堂

#### （4）日本の伝統建築様式

日本の伝統建築には平安期の貴族の住居である寝殿造、室町からの武家の屋敷の特徴ともなる書院造、さらに江戸期には茶室を備えた数寄屋造という様式が見られる。寝殿造は寝殿（正殿）を中心に、南に庭園、東西と北に対屋を置きそれを渡殿でつなぐという大規模なつくりである、その時々々の権力、権威の象徴としての建築になっており、庭には、池や橋を配し、諸国の名景を模したもの、坪庭には野の趣を表現するなど贅を尽くしたもの

である。寝殿や対は主人とその家族の居所であるとともに儀礼、行事の舞台となった。寝殿は広い空間となっていて、必要に応じて屏風、御簾、几帳などで仕切るという非常に開放性があり、柔軟性の高い調度品を持っていた。南庭も儀式の場として使われた。対は東西の他、北にも置かれ、北はよりプライベートな空間であった。主として主人の妻が居たところであることから「北の方」という別称が生まれたと言われる。東西の対から南に向かって廊が伸び、中門が設けられている。この門は東西の外門（東門、西門）から入って、もう一度、中門（東中門、西中門）を通過して儀式の場へ入る形をとっている。中門の付近には車宿（牛車を置く）、隨身所。侍所（家内の事務所）も配置されている<sup>108</sup>。



図 25 寝殿造見取図（ウェブサイト：京都市歴史資料館情報提供システム）

『源氏物語』に描かれた邸宅二条院の想定平面図。寝殿造の典型的な形

この時代を考えると、唐の建築様式の影響を受けて当然と思われるが、大きく二点異なるところが見える。一つは入口である、中国様式では南もしくは南東に設けられるが寝殿造りでは東、西になる<sup>109</sup>。もう一つは中央の庭、中国では空間とするが日本では池や橋など自然を人工的に配置する。これにも日本人の自然に対する態度が影響していると考えられる。南庭の先に人工的とはいえ自然風景を置くのは自然を敬い、自然と人が一体化することが大切とし、そこに「美」を感じる、そういうことをこの家の主人は客人に見せるこ

<sup>108</sup> ウェブサイト：京都市歴史資料館情報提供システム「寝殿造りから書院造りへ」

<sup>109</sup> 本田博太郎(2013)『日本の建築』：88-89 頁。「南に門を開かず東西に門を開いている点は内裏ともシナの住宅とも全く違っており、その理由は明らかではない」「閉鎖的な中庭空間や左右対称形はなくなり、配置は自由に、自然を取り入れた庭園とこれに臨む殿舎配置の面白さを求めた」

とでその権威を示すことができたのであろう。自然を南においてこれを主役にしたのであるから、そこに人の出入りする門を置くのは邪魔になるし、人工の自然は寢殿や南庭から見るように作られているのだから、ここに入口があると最初にこの庭を裏から眺めることになってしまうのである。自然に対する態度の違いが建築様式にも中国様式を基礎としながらも日本なりの修正を加えている。さらに屏風や几帳といった間仕切り用の家具は一定のスペースをいかにも効率的に活用するという知恵とともにそれ自体の芸術性を発達させるという特徴的な役割を果たした。

室町期から武家社会では書院造が主流になる。この造りには現代の日本建築に取り入れられる多くの要素が含まれており、その意味から現代日本につながる伝統的様式の代表格と言えよう。「座敷」、「床の間」「違い棚」「角柱」「襖」「障子」「縁側」などが標準的な造りに含まれている。もともと、書院は主人の書斎であったものを接客空間としても使えるように工夫したものである。つまりある空間が二重の機能を持つということになる。

この書院造の原型と言われるのが銀閣寺・東求堂であることは広く知られている。もとは8代将軍足利義政の山荘でありその後臨濟宗の寺院となった。東求堂内の書院同仁齋は四畳半間取りの中で茶の湯、庭園、茶器などの鑑賞を通じて客をもてなす空間として成立した。



図 26 書院造 銀閣寺・東求堂 (2015年3月著者撮影(左)、同寺案内資料(右))

こういった造りの中で「外壁」は大きな意味を持たない。壁というよりは仕切り、境界、塀というイメージである。内部は「表」と「裏」に区分けされている。「表」は「公」、「裏」は「私」である。書院は「公」の代表的な空間であり、床の間や違い棚には工芸品、生け

花、掛け軸などが飾られ、庭に面している。接客用のスペースが大変に広い。一方、「私」の中心は「茶の間」で、そこが家族の生活の場である。たいていは北の奥のほうに位置している。

武家住宅の基本とも言える書院造を踏襲する徳川幕府の本拠、江戸城の空間配置を見ておく。規模が最大級にまで拡大することになるこの空間はまず「表向」と「奥向」に分けられ「表向」はさらに「表」と「中奥」に区別される。「表」と「奥」の間に「中奥」という空間が設定されるのである。「表向」は政事を行う役所的機能空間、「中奥」は主人が日常生活を行う空間で、「奥向」は夫人の生活空間である。北から南に向かって「奥向」「中奥」「表」と並んでいる。この中で「中奥」のもつ影響力は絶大であった。それは「中奥」の東側には將軍側近の居場所（御用部屋）があり、つまり大老や老中は將軍の座所に集まり政事を議した。この御用部屋の上の間は大老、老中、下の間には若年寄の部屋である。つまり重要政務はこの將軍の生活空間の「中奥」において決していたということになる<sup>110</sup>。「中」を造り出すことでそこに重要機能を集中させたのである。第2章で触れたように曖昧な状況下で、あるいはあいに対する概念がある中で「中」をどう造り出すかは日本文化では重要なポイントである。

京の町屋では「奥」というのは特別の客を迎える「公」空間がある。二つの公空間がある。一般の客は表の「店」で、特別な客は「奥」の座敷で応待する。つまり特別な客には「私」空間をも含めて開示し、その意を伝える形をとる。ここでは小ぶりながら「表」「奥」、さらに坪庭をも含めてこれを客の接待に活用するという書院造の伝統が生きている。

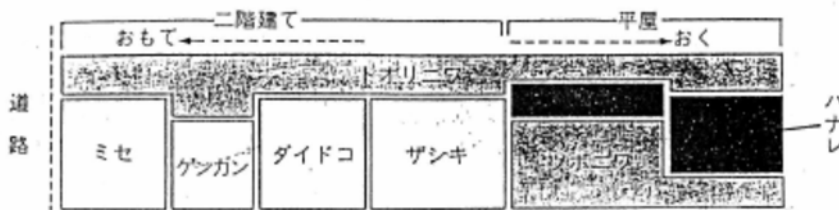


図 27 京町家の間取り例（張慧芳(1995)「中国と日本のすまい」大阪女子大学人文社会学研究科修士論文）

中国の四合院が、家族、一族の団結、外からの守りを重視しているのに対し、日本の書

<sup>110</sup> 藤田正(1990)『内なる赤穂浪士』: 157-158 頁。

院造りはソトの客の接待、接見を優先した造りと言えるだろう。「表」と「奥」を明確に区分する考え方は「公」「私」の区別をつけることにつながる。また日本固有の事情としての絶対的なスペース不足から「続き間」で時によって大きなスペースをつくることを可能にする一方、普段は「襖」で仕切っておいて使い勝手を確保するという工夫も生まれている。

(5) 李氏朝鮮の両班住宅

朝鮮の伝統建築で代表的なものに李氏朝鮮期の両班住宅がある。この両班住宅は半島の自然、気候への順応と当時の統治思想である朱子学の影響を強く受けていると考えられる。図 28 はその見取図である。

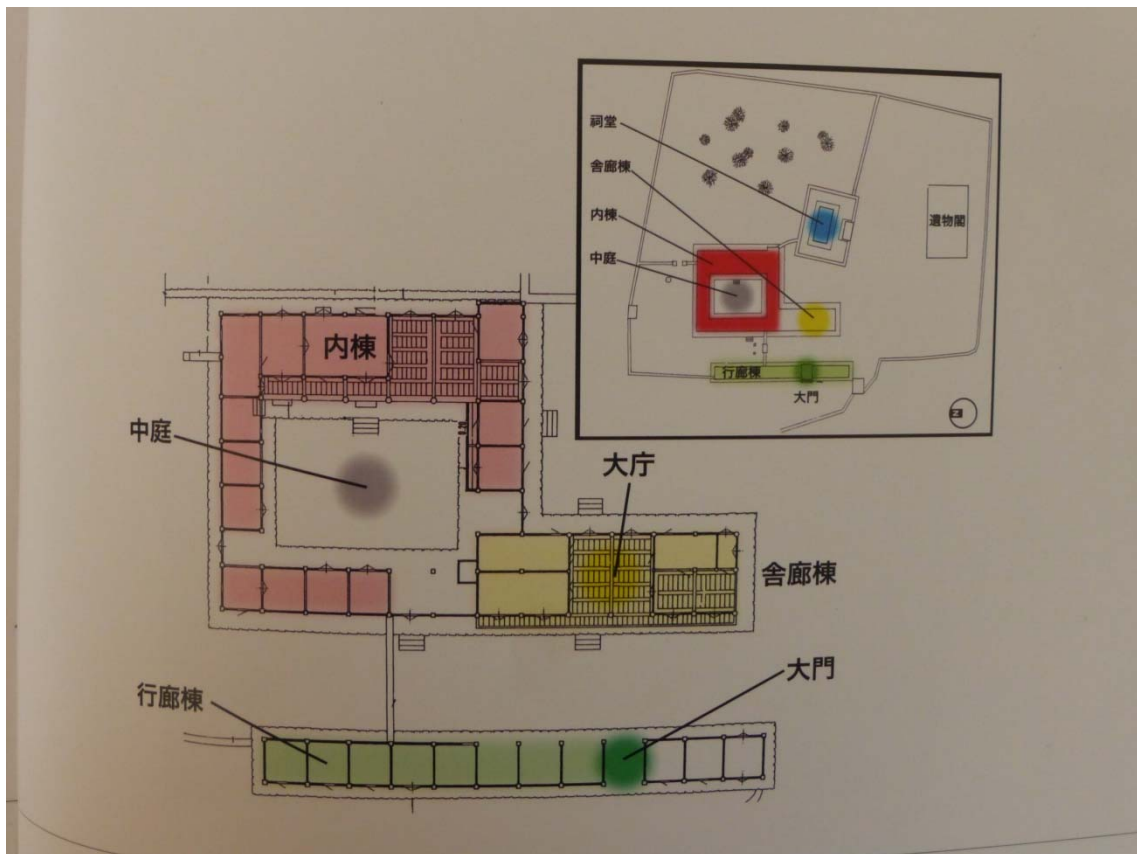


図 28 両班住宅 忠孝堂(国立歴史民俗博物館編(2009)「日本建築は特異なのか」:70 頁。)

まず、この見取図を説明すると、<sup>ヘランチエ</sup>行廊棟、<sup>サランチエ</sup>舎廊棟、<sup>アンチエ</sup>内棟、<sup>サダン</sup>祠堂、遺物閣の五棟が敷地に配置されている。大門を入ると正面に舎廊棟がある。ここは主人がいる男性専用の棟である。左手の門を入ると内棟に入り、ここは女性家族と子供の生活空間である。



最初に、朱子学の影響が強いと述べたが、その点について簡単に触れておく。朱子学の大きな柱は「理気二元論」である。すべては形而上の「理」と形而下の「気」から成り立っている。この両者は不離不雑の関係にあり互いに単独では存在できない。「気」は常に運動していて、万物を構成する要素である。この「気」の運動に対して秩序を与えるのが「理」である。「気」の運動状態が大きい状態を「陽」、小さい状態を「陰」と言う。この「陰」「陽」の組み合わせによって物質を形作る要素である五行、すなわち木、火、土、金、水が生成されこの五行の配合によって様々な物質が生み出されるとするのである。

この陰陽説、五行説という思想を実践段階に応用したものに「風水」や「四柱推命」「漢方医療」などがあるという構造になる。

さて両班住宅に戻る。まず両班住宅の立地は風水にしたがって「背山臨水」、山を背にし水に臨むところが良いとされる。自然に溶け込むような形である。また配置は中国の四合院のように左右対称の形ではない。これは半島には平地が少なく山あいの土地に住宅を建てることを前提とした場合、自然との融合、朱子学思想から左右対称形が変容したのであろう。

建物の配置は陰陽説に従っている。主人の居場所であり客をもてなす舎廊棟は敷地の東側（陽）にある。女性の生活空間である内棟はその西側（陰）にある。これは朱子学における身分秩序としての「男女の別」を形として表している。舎廊棟を少し詳しく見てみると、中央に板の間（マル）の大庁がある、両側がオンドル房である。板の間（マル）はオンドルがない、寒い空間である。一方、オンドル房は暖かい空間である。ここにも身分秩序を表す形がある<sup>111</sup>。オンドル房には主人や年長者、板の間（マル）には目下の者が位置することで儒教、朱子学における五常の「長幼の序」「君臣の義」を形として表すことができる。さらにこの見取図では一段と高い床を舎廊棟の東側に設けている<sup>112</sup>。これもここに主人が位置することでその地位にふさわしい形態を表す形である。

祖先崇拜も祠堂を一つの建物とすることで崇敬の念を強く表しているし、その位置も主人の居る東側でかつ敷地の中で高いところがいいのである。この見取図では分からないが「山背臨水」で建てられていたなら図の上側が山側となるので高い位置と想定できる。

このように朝鮮の両班住宅はその主人が両班であることから、その両班たるゆえんを体現する建築となっている、つまり、両班たるには漢文をよくし朱子学を修め、科挙という

<sup>111</sup> ウェブサイト：韓国観光公社(2015)「伝統的韓国家屋」

<sup>112</sup> 国立歴史民俗博物館編(2009)『日本建築は特異なのか』：71頁。

難関を突破することで得た地位であるから、その思想を忠実に表現するのも当然とも言える。

本章は論文「中国文化の原構造へのアプローチ」（追手門経営論集第 20 巻第 2 号 2014 年）および論文「冊封体制下の中華とその周辺」（追手門学院大学経営学学生論集 2014 年第 20 号）に加筆、修正した。

### 第3章 東アジア各国文化の論理演算モデル

第2章で相互理解のための視点を二つ準備した。一つは古代以来の伝統思想と考えられるものである。中国で言えば「中華思想」とそのもととなる「天命思想」「華夷思想」がある。朝鮮では李氏朝鮮期の「儒教・朱子学」がその中心を占め、地勢的に「事大主義」や「小中華思想」を生んだ。日本では神道、仏教、儒教に西洋文化が同居した独特のいいとこどり文化が作られた。

もう一つはその思想の影響を強く受けた伝統建築である。先にも述べたが住宅はその環境としての自然、人々が日々の生活を営んでいく上の価値や心情、もっと基本的には何をもって生きていくのかといった要素を具現したものと考えられる。その観点からみて中国の「団結、守り」の思想、朝鮮の「朱子学」の思想、日本の「接待」の思想は一つの文化的側面を端的に表している。

そこで、この章ではこの東アジアの国の文化の諸相を論理演算モデルを用いて、大陸、半島、島嶼という地政学的区別も念頭に置きながら整理をする。次にそのモデルが互いに干渉したり交渉したりするということが起こった場合に、あるいはそれぞれのモデルが別の巨大なモデルと衝突したときにそれぞれがどういう反応を示すのか、どうことが起きるのか、このことを仮説として提案したい。この仮説が成立するならば、このことを起点として互いの置かれた環境や文化の違いを超えた相互理解が進展しやすくなるのではないかと考える。

#### (1) 論理演算モデルー大陸、半島、島嶼

自らの属する領域には一般的に共有される概念が存在する。そこに別の領域に属する概念が接近してきた時にどういう反応をするのかということを考えてみる。

文化と言われる概念は特定の民族や国家に固有の部分と他の文化との交流の結果、変容してきたものとの集合体であると言える。それは自らの文化になかったものが他にあるからそれを取り入れることにメリットがあるからそうなるという意味で必然である。古代から何の変化もないというような文化は存在しないだろう。他の文化はもとより文明の発展

や、生活環境の変化やまた国家が成立すればその価値観によっても変容をするであろう。

しかし、その変容はなし崩しに起こってくるのではなく、もとの文化に内包されるある思想や価値観、人々の意識によって反応のしかたが異なってくるのではないかと考える。同じ2つの物質を化合するにしても温度条件が異なれば反応が異なるように。つまり、本稿のテーマである東アジアでもその民族、国家によって反応が異なった結果が歴史的に認められる。

東アジアの三つの地域、すなわち大陸（中国）、半島（朝鮮）、島嶼（日本）という地政学的な位置の違いもあるが、そこに住む民族、国家は別の概念が接近し、何らかの行動を起こさなければ危機存亡の危険に瀕すると考えたときそれぞれ特徴的な動きを示した。結論を先に言うなら一つは「選択」、一つは「択一」、一つは「融合」である。

論理演算をベン図で表すことができる。ベン図は複数の集合の関係を図式化したものである。これを用いて二つの命題が現われた際に大陸、半島、島嶼の国家、民族がとった対処のしかたを説明する。用いるベン図は「論理積」「排他的論理和」「論理和」(図 29)である。ベン図を用いるのは、問題を構造的に捉え、図として共有することで、理解がしやすくなるからである<sup>113</sup>。

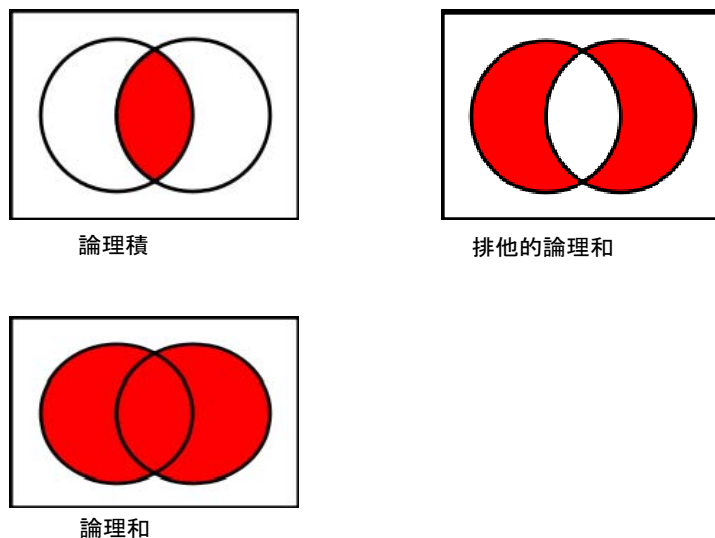


図 29 論理演算モデル<sup>114</sup>

<sup>113</sup> 齋藤孝(2012)『数学力は国語力』: 74 頁。

<sup>114</sup> 図中で塗りつぶした部分が「真」である。

「論理積」は二つの命題がともに「真」であることを表し、「論理和」は二つの命題のうちどちらかもしくは双方が「真」である、また「排他的論理和」は二つの命題のうちいずれか一方のみが「真」であることを示している。

### ①大陸（中国）

中国はこの地域で最も早く文明が興ったところである。周辺に比べて一段高い文明を築いた。世界の中心（中）であり、そこは最も盛んで華やかな（華）ところである。これが基本になる。そこからそこを統治する者は「天」の意を受けた「天子」であるとする「天命思想」や「華夷思想」が生まれてくる。周辺とは「華夷思想」に基づき、「朝貢」と「冊封」の外交関係が成立した。「中華」には必要なものは何でもあるし、欲すれば周辺から何でも手に入るという状況にあった。貨幣経済の基本となる「銀」が足りなければ、朝鮮や日本から調達し、兵器となる馬、硫黄（火薬の原料）、刀剣などは毎年のように琉球が朝貢品として持ってきた<sup>115</sup>。清代乾隆帝の時、交易を求めてきたイギリス使節に対し「中華には何でもあるので特段、貴国と交易する必要はないが、どうしてもというなら慈悲の心をもって貿易をしてもいい」<sup>116</sup>という態度であった。この状況を図 30 における左側の円 A とする。

しかし、それから 1 世紀の間に世界は激変した。産業革命によって急速に文明を進化させた欧米列強が強大な軍事力を伴って再び、中華の前に現れた。このとき、中華は、世界には中華以外にも世界の中心があることを認めざるを得なくなった、と同時に一気に国家存亡の危機に直面する。これを排除するだけの武力はなく、改めて西洋列強の文明の進化には恐れ入るしかなかった。これを図 30 の右の円 B とする。ここで「中華」が取った考え方は中華の考え方やしくみは変えないが西洋のもので使えるものは使っていこうという西洋文明の選択的採用であった。あくまで「中華」のためになるということが前提である。いくら有用なものでも「中華」を損なうものは採用しない。A、B 二つの命題がともに「真」であるところを取り出す。左の円の範囲の中である部分だけが融合するのである。その部

<sup>115</sup> 高良倉吉(2012)『琉球の時代』: 113-117 頁。

<sup>116</sup> 陳舜臣(1985)『実録 アヘン戦争』: 44-45 頁。岡本隆司編(2013)『中国経済史』: 200 頁。

分を取り込んでまた新たな正円ひとつを創り出して本来の A の部分に取り込む。これが大陸、中国の考え方である。

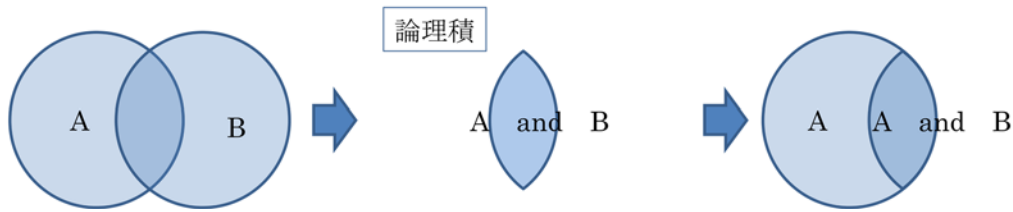


図 30 大陸の「選択」のプロセス

もう少し例を追加しておこう。異民族の清が王朝を建てたとき、少数の満州族が中華皇帝となって統治するにはあまりの困難が予想されたが、清は従来の明の中華体制、諸制度を温存、維持したうえで支配理念にも朱子学を中心とする儒家思想を取り入れ、満漢の融合をはかった。科举による人材登用も踏襲した。軍事面でも満州独特の八旗制に満・蒙・漢の併用や官僚も満・漢併用をする<sup>117</sup>など、侵入してきた側の満州族がこの中華の体制(左の円)を壊さずに注意深く同化していった。有名な「満漢全席」<sup>118</sup>などは満州族と漢民族の料理の粋を集めた宮廷料理である。中華のプライドにさわらなかったことが 270 年にわたる長期王朝を実現した。逆に、同じ異民族でもモンゴル系の元は、モンゴル人至上主義をとり、人材登用にあたっては中華伝統の科举には興味をもたず、側近を登用するなど中国人と中国文化を認めない政策を取った<sup>119</sup>。中国の統治に政策らしいものを持たず、さらには内部抗争もあって 100 年にも満たない短命王朝となった。つまり、「中華」のしくみを温存すれば安定し、その逆はうまくいかない。

さらに遡って、仏教は中国での発展は限定的であった。仏教思想が発展するということは皇帝以外にブッダというもう一つ別の中心をもつことになる。これは「中華」から見ると不安定要素であり、治世の攪乱要因になる恐れがある。キリストやアラーのような絶対神をもつ宗教が大きな勢力をもつことは「中華」にとって好ましくない。あっても小さな集団であるうちは容認できるが、ある一定の限度を超えると中華を混乱させる「邪教」となりかねない。

<sup>117</sup> 貝塚茂樹(1970)『中国の歴史(下)』: 66 頁。石橋崇雄(2011)『大清帝国への道』: 57 頁。

<sup>118</sup> 石橋崇雄(2011) 前掲書: 23 頁。

<sup>119</sup> 宮崎市定(1963)『科举』: 5 頁。貝塚茂樹(1970)『中国の歴史(中)』: 192,194 頁。

## ②半島（朝鮮）

半島は先に行く行き止まりがあるということである。つまり追い詰められると逃げ場がないのであるから追い詰められないようにしておくという安全保障の確保が半島国家にとって最重要課題である。さらに朝鮮半島を見れば、西には強力な「中華」があり、北方にも次々と有力な勢力が現われてくる。契丹、女真（金）、モンゴルなどである。そのため半島の政権は常に強い相手との連合をすることを好むと好まざるとに関わらず念頭に置くほかなかった。

高麗王朝期は中華では宋が統一するが北方から契丹の侵入を受け、さらに女真とも抗争を起こした。いずれも相手方の勢力が強く、最終的には服属させられる。さらにモンゴルが興るとさらに強烈な侵入を許し完全に支配下に組み込まれてしまう。

元が弱体化した後、明、続いて清と比較的安定した中華が統治することから朝鮮はこの両王朝に朝貢、冊封の外交関係を結んで安全を確保することになる。

朝鮮は強力な周辺国から脅かされてきた、つまりは「服従するのかしないのか」「属国になるかならないのか」「朝貢せよ、さもなくば・・・」という形での選択肢しか残っていなかったのである。AかBかのどちらかが真であるという排他的論理和の考え方である。

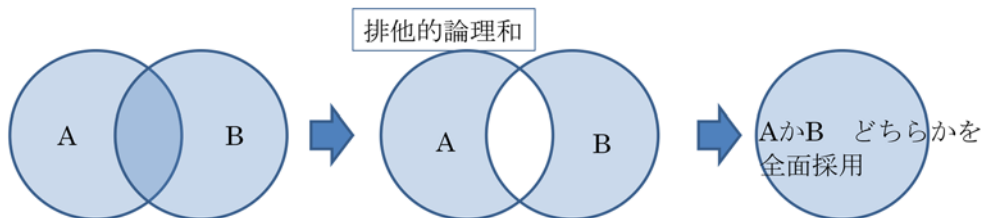


図 31 半島の「択一」のプロセス

この二者択一的な思考はこういった国際関係の中での受動的立場だけでなく国内でも多く見受けられる。比較的安定していた李氏朝鮮期でも国王を取り巻く中央の両班らは「朋党」を組んで実質支配権闘争を繰り広げる。勲旧派對士林派、西人派對東人派、老論派對少論派など、国王の支持を巡って抗争が続く。この場合も勝者、敗者は明確で敗者は完全に排除、粛清される。つまり二者択一の勝負である。

またこの王朝は儒教（朱子学）を国教とし他の宗教は排斥、弾圧した。前王朝の高麗朝は仏教を奨励していたが、明に対して臣従の姿勢を取った李朝は徹底的に朱子学を統治思

想として導入した。この朱子学中心の思想を図 31 における左の円とする。例えば、右の円に西洋から天主教が伝えられてくると、1801 年の辛酉教難<sup>120</sup>と呼ばれる徹底弾圧によって西洋学術の研究も断絶した。さらに後に「中華」と同様に欧米文明との衝突が起きた時にも西洋文明に対する拒絶<sup>121</sup>、二者択一で融合はせずという姿勢が結果として近代化への歩みを遅らせてしまったと言えるだろう。「択一」の考え方は外圧においてそうせざるを得ないこともあるが、その経験値は民族、国家の内部的にも蓄積されていったと考えられる。

朱子学は日本の江戸幕府でも官学であったが、それによって他の思想や学問が弾圧されることはなかった。そのゆるさと朝鮮の厳格さの差は大きな差を生むことになった。

さらに社会構造からみても、「持てる者」は徹底的に富を独占し、「持たざる者」は何も持つことはなく少しでも持てばそれを狙われるということになった。大きくは良民と賤民としかない身分制度もそれを助長する。また男尊女卑も儒教の差等を認めることの影響が極端に出たもので「女必従夫」や「三従之道」「四徳」などの言葉は女性が守るべき態度や心構え<sup>122</sup>を説いたものである。

### ③島嶼（日本）

このように見てくると、島国の日本は「融合」を旨としてきた。東アジアの果てにあって、大陸から半島を経由して、あるいは海路で文明、文化が伝わってきたが、所詮辺境であるからその伝わり方は陸続きの地域に比べると希薄なものであった。それだけに貴重なものであったとも言えよう。とすれば、まずはそれが何物なのかともかく取り入れてみようとする態度が通常であると考えられる。図 32 において従来の考えを左の円とし、新しい情報を右の円とした時、どちらかが「真」である領域をつくる。まずは腹に収めた上で消化して融合して新しい円を創り出す。

<sup>120</sup> 貞純王后による弾圧で天主教に名を借りた反対派の肅清という性格もあった。（金重明(2013)『物語朝鮮王朝の滅亡』：70,77 頁。）

<sup>121</sup> 大院君は徹底した鎖国攘夷政策をとり、1866 年 1 月には天主教弾圧令を發布、8000 余人を処刑（金重明(2013) 前掲書：93 頁。）

<sup>122</sup> 六反田豊監修(2013)『朝鮮王朝がわかる』：24-25 頁。なお四徳は婦徳（礼節ある道德）、婦言（丁寧で品ある言葉づかい）、婦容（清潔で見苦しくない）、婦功（家事、品のある立ち居振る舞い）



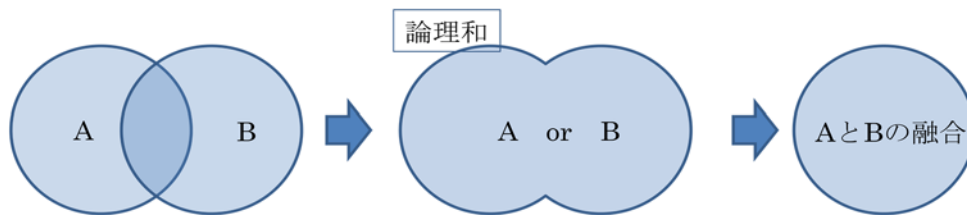


図 32 島嶼の「融合」のプロセス

そういう意味では日本は本来何ものだったのか、一貫して拠って立つアイデンティティは何なのかということが見えにくい国家、民族である。それゆえに日本人論などという議論が盛んなのである。

先にも述べたように、仏教の伝来は神道との習合で決着をつけた。漢字は中華で使う環境が異なるのでともかく取り入れた後、使い方の面で仮名を発明して環境に適合させた。明治に至ってはまっしぐらに西洋文明の吸収に向かいその中での矛盾は後で解決するという態度であった。

## (2) 東アジアモデル間の交渉、衝突

この論理積発想文化、排他的論理和文化、論理和文化がお互いに干渉、交渉しあうとどういうことが起こるのか、まずこのことを仮説モデルとして提案する。文化それ自体の干渉とそれぞれの文化をもつ人たちの交渉をを前提として考えるとそれぞれの文化がもつ、ある意味では当事者は無意識であるかもしれないが、その文化特性によってその土俵がある程度規定されてしまうことがあるということを認識しておくことができる。

まず、論理積的文化を持つ人（以下、これを<A>と呼ぶ）と論理和的文化（<C>と呼ぶ）が互いに交渉した場合をまず検討する。

<A>は自らの文化にそれまで形成してきた一定の枠組みをもつ。その範囲の中では<C>をはじめとする他の文化を吸収、受け入れることができる。一方、<C>はまずは他の文化を取り入れて、その後でそれまでの<C>の文化とどう折り合いをつけるかを考える、うまく融合できれば文化は進歩したと判断する。

この<A>と<C>の干渉は結論を先に言えば短期的には<A>が優位に働くというのが第一の仮説である。<C>は<A>をまずは受け入れることを前提にしているのに対し、

<A>は<C>の不都合なところは拒否することから入る。これは心理的には<A>は自分にとって何ら不都合は生じない。<C>にとっては欲求不満が残る。短期的にみた<C>の欲求不満は、その時点では<A>のつくる枠組みを理解できないことにある。一般的に言ってこの<A>の無条件拒否の事情が説明されることは少ない。これはどこの文化でもそうだが自らの文化がなぜそうなっているかということとその文化の外にいる人に論理的に説明することは大変難しいことだからである。それは、人は生まれた時からの環境、教育、しつけ、宗教、民族性などで徐々に自然になんとなく文化、価値観を身につけていくのであって、そこに生きた人のみが共有できるものだからである。逆に言えば外部の人間は知識において理解はできるが、それ以上の以心伝心というレベルでの理解は無理と言わざるを得ない。つまり複数の文化をもつ人が交渉した時、お互いが持つ暗黙の了解事項に戸惑うが、その傾向は<A>の交渉相手方に強く表れる。

しかし長期的な視点でみると答えは逆になる。短期での現実的な観点とはその時点における断面図での判断である。<A>は<C>のもつ価値の内、一部にしか着目できない。それもそれが<A>の枠組みの中で有用かどうかの一点で判断される。<C>のもつ価値をその一部だけ切り離して捉えると表面の模倣的同化はできるだろうが、その内にある精神からいえば思想、考え方を同じにすることは困難である。技術でいえば製品の根本を支える目に見えにくい素材特性レベルの評価などは切り捨てられて形式的な模倣になる。したがって、<A>の同化したあとの自律的な発展力は決して強いものとはならない。そのことが<A>からみると、思ったような期待したほどの成果が得られないストレスになって現れてくる。また<C>がそのストレス解消の向かう先になってしまう。

次に論理和文化（<C>）と排他的論理積（以下<B>と言う）の交渉について検討する。<B>は基本的にAまたはBという二者択一型であるからそのどちらかを選択することになる。残りの一方は棄却される。つまり<B><C>が干渉しあって<B>が<C>を採用すればその他のものはすべて価値を失う。

<C>から見れば採用されれば全面採用だが、その逆の場合はその理由が明確にならないことが多い。その時の国家的価値に大きく左右されることもあるし、一種のムードとかブームといった気分的なもので動くことがその特徴である。王政復古の明治以降の日本はこの<B>の型であったと言えよう。西洋文化を全面的に導入し、そのために不都合なものは捨てた。廃藩置県で士族階級は没落し、国家神道が力を増し廃仏毀釈で仏教もダメージを受けた。そのあとの軍国主義はさらに徹底した一つだけの価値、大東亜共栄のみを基

準とした。西洋文明に追いつき追い越すという国家的目標はその植民地政策も含めて見習った。

たしかに明治以降、第二次世界大戦の敗戦までの75年間は<B>であったが、江戸時代までと戦後の日本は<C>の型であったと言えよう。一方、朝鮮は李氏朝鮮の朱子学思想や支配階級のウリ意識などによって伝統的に<B>の色合いが濃いと考えられる。

この<A><B><C>という型は前に述べたように自然になんとなく身についたものだから変化しにくいと考えられるが、明治以降の日本のように危急存亡に接したときにはその生存のために「変わりうる」ことはあるだろう。しかしそれはその民族、国家が本来自然にもっていたものとは異なるので何か居心地の悪い状況を作り出しやすいとも言える。

いずれにせよこの論理積文化と論理和文化、排他的論理和文化の間では必ず摩擦がおきる。前にも述べたが文化はある一定の時空の中に生まれた人々が好むと好まざるとに拘わらず、論理的、非論理的を問わず、共通の認識として価値を共有するからそれがうまく他者に対して説明できないこともままあることなのである。このうまく説明できないがそれぞれの文化に共通認識としてあるものをどう認識していくかが異文化理解の課題である。

## 第4章 東アジアと近代西洋文明

ここまで、東アジアの古代から近世にかけてのそれぞれの地域の動向とその中にみられる文化的価値について概観してきた。その中心にあるのは大陸、中華の思想であった。この中華思想を受け入れ模倣していくのかどうか、あるいは拒絶するのかどうか、またはそこからもたらされる文明や統治のしくみや制度といったものをどう活かすのか、あるいは棄却するのか、いずれにしても基準は中華にあった。つまり東アジアは中華を中心とした国際秩序があり文化圏が成立していた。

そこに突如、異文化が衝撃的に出現した。西洋文化である。この異文化との衝突はあまりに激しく、暴力的な側面を持っていた。そのため東アジア各国は生き残りをかけた対応を迫られることになった。その過程において各国の国家的価値観に大きな差異を生んだ。西洋に向かう日本、西洋を利用しようとする中国、西洋を拒否した朝鮮という大きな構図である。この反応は前章で述べた伝統的価値観に基づいたモデルと同じだったのか、それとも違うのか。いずれにせよこのことによって中国、朝鮮、日本は西洋列強とのかかわりの中で、いち早く列強入りした日本が両国を侵略するという歴史を刻むことになった。これが第三の下敷きである。とかく、日本人は過去のことは済んだこととしてしまいたがる傾向があるが、この三枚目の下敷きの理解なしに近隣諸国との相互理解は進まない。

### (1) アヘン戦争

170年前(1840年)、アヘン戦争である。

アヘン戦争について日本人は一般的に関心が薄いように思われる。アヘン戦争よりそのあとのペリー来航が非常に大切な事件として扱われてきた。それは基本的にイギリスと清との戦いであること、その結果、清が西欧列強に植民地化されていくきっかけとなったことぐらいの認識とともに日本との関係においては第二義的にしか受け止められていない。しかし、ペリー来航の前にこの戦争がありこのことが日本に情報としてあったためその後の対応の速さが決まったとも考えられる。このアヘン戦争を単にイギリスと清の戦争とするよりは、西洋文明対東洋文明の初めての戦いと捉えた方がより妥当である。この戦争を

通じて西洋文明が一步も二歩も進化していることが明白になり、そのことに対する東洋、東アジアの各国はそれぞれの国情に応じた対応をとることになる。

当時、イギリスは清との貿易において大幅な輸入超過であり、それを解消するために既にイギリスの植民地であったインドで栽培したアヘンを密輸出し、インド経由で輸入超過の解消を図ろうとしていた。清はアヘンの輸入を禁止していたが、アヘンの密輸量は図 33 の通りである。密輸であるから正確な数字は分からない。しかし、戦争前の 10 年に急増していること、戦争直前には清の年間歳入が 4000 万両という中で 1400~1500 万両のアヘン代金を負担しなければならない状況であったことは間違いなさそうである。これによって通貨、銀は騰貴した。1830 年頃には銀一両が銅銭 1200 文であったがアヘン戦争時には 2000 文になった<sup>123</sup>。庶民は銅銭を使っていたので実質大增税で大いに困窮してしまった訳である。

西暦	密輸量
1817	3698箱 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">1箱：60Kg</span>
1821	4770
1825	9066
1829	14388
1833	21659
1838	28307 (1400-1500万両)*

\*清の年間歳入  
4000万両

図 33 アヘン密輸量（陳舜臣『実録 アヘン戦争』：62 頁より著者作成）

アヘン中毒と経済面で広東地方の社会が混乱し、この取締りのために清朝北京政府は「アヘン亡国論」を唱えた湖広総督であった林則徐を政府全権特命大臣として派遣、厳しい対応を取った。林則徐は広州の公行（清の特許商社であり、交易を独占していた。10 社程度）に対し、「今後一切アヘンを持ち込まないこと、持ち込めば人は死刑、物は没収」という指令を出し、同時にイギリス商人に対し「誓約書」を取るよう要求した。しかしイギリス側はこれを拒否、清は夷館（外国人居留館）を取り囲み、食料供給を断つ。イギリス

<sup>123</sup> 陳舜臣(1985)『実録 アヘン戦争』：60,62-63 頁。

はアヘン2万箱を供出したものの「誓約書」は書かず、駐清商務監督エリオットはマカオへ退避。林則徐は供出されたアヘンを23日もかけて焼却処分にした<sup>124</sup>。これに反発したイギリス艦が九龍沖、川鼻沖で清艦隊と交戦、実質的にアヘン戦争が始まった。事態を重視したイギリス本国も議会で艦隊派遣を承認し東洋艦隊が組織された<sup>125</sup>。

艦隊は防備の硬い広東を封鎖しただけで、舟山（現在の浙江省）、北京に近い天津・大沽を一気に攻めた。清国政府は広州での応戦を想定していたため、天津への攻撃にあわてふためき講和派の琦善をイギリスとの交渉にあたらせ、イギリスが広州まで撤退すれば、林則徐を罷免するとした。いったんはイギリス艦隊は撤収するも清内部では対英強硬論が強まったことで再びイギリス艦隊は長江以南の沿岸都市を制圧した。長江を上り、南京まで攻め込まれたことで清は投降した（図34参照）。2年にわたる戦争の結果、1842年南京条約が締結され、清は賠償金2100万銀貨のほか、香港割譲、広東、厦門、福州、寧波、上海の開港、さらにイギリスの治外法権などを認めざるを得なかった。さらに、アメリカ、フランスとの間でも1844年、それぞれ望厦条約、黄埔条約を締結させられた。一方的な不平等条約である。

---

<sup>124</sup> 中国常識系列編委会(2007)『中国歴史常識』: 164-166頁。

<sup>125</sup> 吉澤誠一郎(2010)『清朝と近代世界』: 50-54頁。陳舜臣(1985)『実録 アヘン戦争』: 190-208頁。中国常識系列編委会(2007) 前掲書: 168頁。



図 34 アヘン戦争形勢図（中国常識系列編委会(2007)『中国歴史常識』：168 頁。）

南京条約により、清は5都市を開港し、アヘン貿易も事実上公認されたが、イギリスは想定していたほどの利益をあげることができず、一方で清内部では反英運動が盛んになっていた。イギリスは南京条約の權益をさらに拡大するため、条約改定を申し出た。しかし、清はこの理不尽な要求を当然のように拒否した。

そこに 1856～60 年には第二次アヘン戦争とも呼ばれるアロー戦争が起きる。イギリス船籍のアロー号を清の官憲が臨検したことが発端となり、イギリス艦隊が広州付近へ進出、清は反英運動が再び活発になり広州のイギリス人居留地が焼き討ちされるなどの事件も起きた。イギリスはフランスにも出兵を要請し英仏連合軍として広州を占領、さらに北上して天津を占領し、北京への圧力を加えた。武力に勝る連合軍に敗れた清は天津条約を締結した。その内容は、外国公使の北京駐在の承認、宣教師の内地での布教の承認、賠償金の支払い等である。1859 年白河の防衛工事を取り壊せとの英仏の要求を再び清は拒否、連合

軍は天津・大沽の砲台を襲うが清軍の反撃により一時退却、60年には態勢を立て直し、改めて大沽、天津を攻略、北京へ侵攻し占領した<sup>126</sup>。この時、清の全盛期に建てられた離宮円明園（図 35）もフランス軍によって略奪、破壊された。1860年北京条約がロシアの調停で取り交わされ、天津の開港、九龍半島のイギリスへの割譲、キリスト教の布教の容認などが決まった。調停したロシアも沿海州（外満州）を割譲させた。



図 35 円明園（中国常識系列編委会(2007)『中国歴史常識』：173頁。）

この戦争によってイギリス、フランスさらにはロシア、アメリカの列強の軍事力を背景とした植民地支配、帝国主義勢力の前に清はなすすべなく敗れ去った。深刻な歴史の一つは軍事力の劣勢によって中国は半植民地化されたということである。

## （2）清とフランス、ロシアの抗争

清はアロー戦争と同時期に国内では太平天国の乱<sup>127</sup>が起きていた。まさに内憂外患であった。これは、広州客家出身の洪秀全がキリスト教の影響を受け、「上帝を信ずれば天国に行ける」という上帝教をもって、困窮する民の支持を得て立ち上がった反権力武装集団であった。1851年のことである。その後、太平天国軍は破竹の進撃を続け、53年には武昌

<sup>126</sup> 吉澤誠一郎(2010)『清朝と近代世界』：88-96頁。中国常識系列編委会(2007)『中国歴史常識』：173頁。

<sup>127</sup> 岡本隆司(2011)『李鴻章』：22-30頁。吉澤誠一郎(2010) 前掲書：62-70頁。



(現武漢) から南京を落とし、ここを天京と改名して根拠地とした。さらに北伐軍は北京を目指す、これは天津近郊まで迫るものの清軍の反攻で 1855 年に全滅する。北伐は失敗したが、60 年に入ると、江南デルタ地域へ進出、常州、無錫、蘇州を攻略し上海に迫った。上海は外国人も多く、彼らは自国民のよる自衛の武装隊を持つ一方、外国人の傭兵部隊を持って自衛にあたっていた。さらに、太平天国軍と交戦をしていた曾国藩率いる「湘軍」<sup>128</sup>に支援を要請、曾国藩は了解はするものの実際の兵力が足りない。そこで腹心の李鴻章をして新たに「淮軍」を立ち上げさせ、この軍を江南に向かわせることとした。李鴻章の「淮軍」は長江を下って上海に入城。そこで、外国人部隊を見て自軍の武器の脆弱さを認識し、緊急に洋式の武装、装備を整え 63, 64 年には太平天国軍を圧倒する<sup>129</sup>。あわせて天京を攻めた「湘軍」により 15 年に亘る内乱が収束することになった。

これによりアヘン戦争、アロー戦争の対外衝突、太平天国の内乱に一応の決着がつき、「同治中興」といわれる時代が 10 年ほど続くが、いよいよ「中華思想」が列強との間で軋轢を生み再び対外関係に緊張が漂ってくる。フランスと天津、ベトナムで、ロシアと新疆で、そして日本と台湾、朝鮮をめぐる争う事態が次々に起こる。

1870 年、天津教案といわれる事件が起きる。フランスはカトリック教会 (図 36) を設け布教活動をしていた。そこには孤児院が併設されていた。この年は凶作、疫病の流行もあり、孤児院に関するデマが流れていた。誘拐や子供が殺されていたというようなことである。フランス領事フォンタニエが役所に銃の威嚇を含めた激しい抗議をし、役所の外へ出たところ大勢の群衆が集まっており、これに向けて発砲をした。怒った群衆はフォンタニエを殺害し、教会、孤児院も襲撃した<sup>130</sup>。

---

<sup>128</sup> 「湘」は湖南省のこと。李鴻章の「淮」は淮河 (主に安徽省) のこと

<sup>129</sup> 岡本隆司(2011)『李鴻章』: 60 頁。

<sup>130</sup> 岡本隆司(2011) 前掲書: 86-88 頁。吉澤誠一郎(2010)『清朝と近代世界』: 107-109 頁。

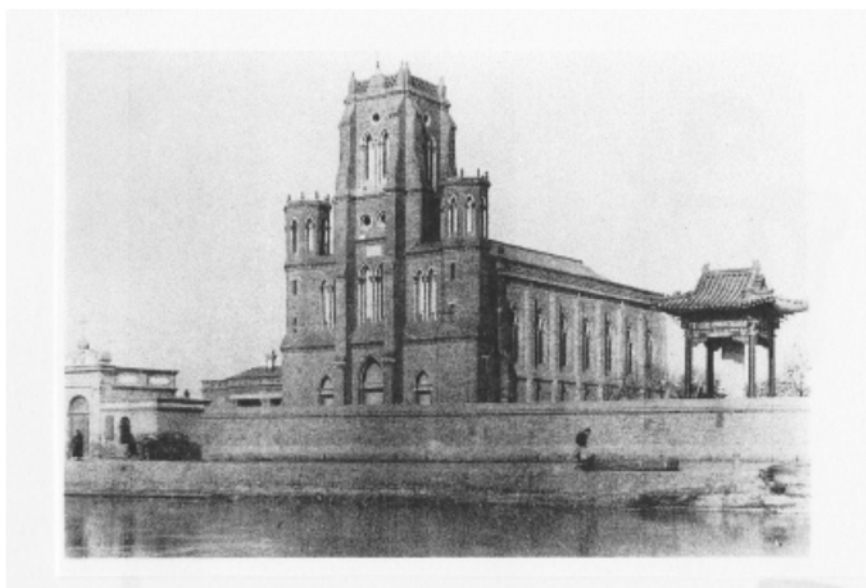


図 36 天津・望海楼教堂（1869年）（人民美術出版社(2000)「天津舊影」：97頁。）

これが教案である（中国語で「教」は宗教、「案」は事件の意）が、天津という地はアロー戦争で連合軍に占領され、またいくつかの列強との条約調印の場でもあり、もともとキリスト教やその活動に対しての被害者意識、社会的な反感をもっていたのではないかと考えられる。まだまだこの時は儒教を軸とした考え、行動が支持されていたし、教案の犯人に対しても同情的な空気があったが、事件は事件、領事殺害という事実に対して清は謝罪と賠償金支払いを行った。しかし世論は対外強硬論が強くなっていく。

さらにフランスとはベトナムでも衝突する。フランスはアロー戦争時にベトナム出兵し、ベトナム南部を植民地化していた。さらに 70 年代には侵略を拡大、軍事的にはフランス保護下に入る。しかし、表面上は「ベトナムは独立した国家である」と規定していた。これは、ベトナムは「中華思想」に基づく属国であると主張する清と対立するものでありフランスと清は一方で交渉しつつ、一方で軍事衝突を繰り返していた。82年にはハノイへ両軍が侵攻、84年には台湾での戦役もあるが、結局 1885年に天津条約が結ばれ、決着をみる。やはり軍事力に勝るフランスによりベトナムは保護されることとなり、清の属国としての認識、介入は破棄された<sup>131</sup>。この段階で南方に対する中華秩序は崩壊したというところが重要である。

ロシアも勢力を拡大していた。アロー戦争の条約仲介で東では沿海州を割譲させていたが、西の新疆でもムスリムを含めた 3つの勢力が争う構図となっていた。ムスリムの反乱

<sup>131</sup> 吉澤誠一郎(2010)『清朝と近代世界』：194-197頁。

は清によって征圧され、ロシアとの間では、1881年にサンクトペテルブルグ条約が結ばれた。ロシアが占領していたイリ地方の一部を清に返還し、このあと清露の基本的な国境線が確定した<sup>132</sup>。新疆省が成立したことで、そこのウイグル人は清国人になるということの意味している。

### (3) 明治維新と近代化

列強の東アジアへの進出を注視していた日本。1853年、アメリカから黒船来航、開国を迫られる。1858年修好通商条約をアメリカ、イギリスなど5か国と不平等条約を締結させられ、59年には横浜、長崎、函館を開港した。その後薩摩、長州はイギリス艦隊、またはイギリス、フランス、オランダ、アメリカと薩英戦争(1863年)、下関戦争(1864年)でその文明と軍事力の優秀さを理解した。また、この頃上海に渡った高杉晋作は太平天国軍の鎮圧に向かう清軍が西洋の軍隊の力を借りなければならないほどに衰え、一方欧米軍の練兵やアームストロング砲などの最新兵器を見てこのままでは日本も欧米の植民地になってしまいかねない危険性を感じ取り、列強と同じような軍備、経済力を持つ必要性を認識していた<sup>133</sup>。空気は大きく攘夷から開国、明治維新へ向かう。

明治維新には多くの国家目標があった。中央集権体制とそれに伴う版籍奉還、廃藩置県、議会の創設、憲法をはじめとする法の整備、身分制の廃止、富国強兵の軍事力強化、殖産興業をスローガンとする産業・経済、神仏判然令から廃仏毀釈へ向かう宗教・思想などあらゆる分野での維新であった。

福澤諭吉は明治維新から間もない時期に、「1853年、ペリーが来て条約を結んでから、我が国の人民は初めて西洋の存在を知り、その文明の有様が我が国と大いに異なっていることを知って驚き、人心の騒乱を生じた。・・・この人心騒乱は日本国民が文明に進もうとして発奮していることだ。今までの文明に満足せず西洋文明を手に入れたいという熱心さの表れなのだ。これは、我が国の文明が西洋文明に並ぶか追い抜くまで変わらないだろう。」<sup>134</sup>とその時勢をみたように後進国日本が近代国家に生まれ変わるために避けて通れない

<sup>132</sup> 岡本隆司(2011)『李鴻章』: 129-135頁。吉澤誠一郎(2010)『清朝と近代世界』: 127-137頁。

<sup>133</sup> 松本健一(1993)『近代アジア精神史の試み』: 35-40頁。

<sup>134</sup> 福澤諭吉(2013)『現代語訳 文明論之概略』: 12頁。

道であった。それも急いで達成しなければ列強によって植民地化されかねないという危機感の中での騒乱であった。つまりこの維新のような革命期においては伝統的に日本が培ってきた<論理和>的発想ではなく、<排他的論理和>の原理が優先されたのである。これは日本が独立を守れるかどうかという背水の陣であったからである<sup>135</sup>。

維新についてはその内容が非常に広範になる。その中で思想、文化面から少し触れておく。

福澤（1875）は「我国の状態を観察して外国に及ばないところは学術、経済、法律の三つ、その原因は国民の無知無学」<sup>136</sup>と言い切った。その法律が整備されていない日本は欧米からみれば、開国はしたものの欧米流の権利、義務を明確にした法がなければ何をされるかわかったものでない、そういう法体系が整備、遵守されるような状況になるまでは不平等条約の象徴でもある「治外法権」の確保は必須なのである。

なりふり構わず西洋に追いつくべく整備された明治の憲法をはじめとする法体系は国民生活との間に大きなズレがあった<sup>137</sup>。例えば、「和の精神」「喧嘩両成敗」「まるくおさめる」といった日本の国民生活における伝統的な社会秩序は欧州の法体系とはその不確定性、非固定性において逆におさまりの悪いものであった。欧州の法体系は権利、義務を明確化し曖昧さを極力排除し、基本的にシロクロをはっきりつけることを目指す。一方日本では権利の過度の主張は周囲からシロい眼で見られ、契約などもわざとあいまいにしておき問題がおきればその状況に応じてうまく解決しようとする。この間に無理が生じるのである。それでも欧米列強から一等国として認められることが安政の不平等条約の解消の大前提と考えた政治上の要請もあり、まずは「丸のみ」して取り入れたのである。そしてこの「丸のみ」は明治末までにすべての不平等条約改正がなされたことで初期の目的は達した。

もう一点は神仏分離と廃仏毀釈である。神も仏も維新の対象であった。王政復古の号令は神武天皇の国家に戻るということである。天孫降臨の流れをもって天皇の絶対権威を確認する必要があった。幼帝を擁して維新政府を運営するためには天皇の絶対性確保は絶対条件であった。また開国をして欧米列強との交際をしていく中では、キリスト教の浸透はある程度不可避であった<sup>138</sup>。清を半植民地化するのにも多くの宣教師が現地に深く入り

---

<sup>135</sup> 第3章(2)参照

<sup>136</sup> 福澤諭吉(2009)『現代語訳 学問のすすめ』: 49-5頁。0

<sup>137</sup> 川島武宣(1967)『日本人の法意識』: 5,146,163,172頁。

<sup>138</sup> 安丸良夫(1979)『神々の明治維新』: 3-4頁。

込んで活動をしていることは当然承知をしていた。これに対抗するためには国民全体での意識統一が必要であった。それまで神仏は習合してきたが、ここにきて国家神道に一本化することが国の生き残りに重要な要素だったのである。

では、この維新は誰が引っ張ってきたのか。通常、歴史上革命的とされる案件には個人の指導者の名があがる。それが、明治維新にはない。それだけ多くの人材が大目標の達成に向けた意思統一をはかり、それぞれの持ち場で活動をした。維新三傑と言われる西郷隆盛は軍事、大久保利通は殖産興業、木戸孝允は法体制という具合である。当然その過程においては各分野の優先順位や多数派工作などでの衝突や合従連衡は見られる<sup>139</sup>ものの、この集団指導体制は、考えてみれば後に明確化されるように極めて日本的で日本人の「和」の精神そのものであり、その結果わずか 50 年で野蛮国が当時の一流先進国に追いつくという世界史上稀に見る大革命であり模倣しがたい特殊な事例となっているのである。

福澤の見立て通りに突っ走ってきた明治の日本であったが、日清、日露戦争後の明治 39 年、岡倉天心は英文で出版した『茶の本』で曰く、「西洋人は日本が平和のおだやかな技芸に耽っていた時、野蛮国とみなしていたものである。だが、日本が満州の戦場で大殺戮を犯しはじめて以来、文明国と呼んでいる。・・・もしもわが国が文明国となるために身の毛もよだつ戦争の栄光に抛らなければならないとしたら、我々は喜んで野蛮人でいよう。」<sup>140</sup>とその行き過ぎた行動を振り返っている。つまり<排他的論理和>の型は、他を寄せ付けない強さと裏腹にその考え、価値に猛進するあまり、行き過ぎの愚を犯しやすいのである。このあとの日本は進むべき方向性、あるいは国際社会の中で果たすべき役割を見失って行く。

#### (4) 日清、日露戦争から日中戦争へ

清がどうしても避けることができない隣国日本の動きが活発になってくる。明治維新を経て、富国強兵の道をひた走る日本は清からみても次第に脅威となりつつあった。日本は 1858 年にアメリカ、イギリス、フランスなど 5 か国と「修好通商条約」を締結し、開国の方針を明確にし、その後も数か国と同様の対応をとってきた。1871 年清とも通商条約を

<sup>139</sup> 坂野潤治・大野健一(2010)『明治維新 1858-1881』: 23,27,34-35 頁。

<sup>140</sup> 岡倉天心(1994)『茶の本』: 15-16 頁。

結ぶが、これは不平等条約ではなく日清対等の精神で結ばれたものである。その内容では相互不可侵、その対象を「両国に属する封土」<sup>141</sup>としている。この言葉がその後の日清関係を振り回すことになる。もう一点は他国の干渉があれば相互に提携し助け合うというものである。明らかに西洋列強の侵略に共同してあたるという主旨である。つまり、この条約は日本の動きを領土的にはけん制し、西洋列強に対抗するということになる。

さて、問題の発端は琉球である。琉球は江戸時代初期から薩摩を通して日本が間接支配をしていたが、一方で琉球は清にも朝貢をしていた。その琉球を明治政府は「琉球処分」という形で明確に日本の支配下に置いた。1979年の沖縄県の設置である。当然この動きに清は反発をし、日清間で交渉は持たれたものの決着しないまま棚上げとなった。清は琉球を属国とみなしており、「日清修好条規」における「封土」であるとしたが日本は「封土」には属国は含まないとの解釈である。属国、朝貢は「中華思想」そのものであり、これと西欧、日本の考える「自主、独立」との戦いとも言える。

清から見れば清の封土たる琉球を勝手に自国に組み入れる日本は条約を無視する危険な隣国であるという認識に立ち、とりわけ次の衝突予想地点である朝鮮は北京にも近く、またロシアの南下政策上の要衝であることからその重要性は安全保障上も琉球以上と考え、軍事力とりわけ海軍の強化を進めていった。北洋艦隊が編成され、旅順港も整備された。ドイツから戦艦「定遠」「鎮遠」も主力艦として購入した。

その朝鮮ではまさに事大主義、すなわち清の属国として大に事えるという考え方と独立を目指す考え方がありこれは清・日がその考えを代弁している構図であった。1882年、壬午の軍乱が起きる。失脚していた国王の父「大院君」が起こしたクーデターである。政権を握っていた親日開化派の閔妃一族は清軍・袁世凱に保護され、袁はこの乱を鎮圧する。日本公使館も襲撃された。乱はほどなく終結し大院君は天津へ連行された。乱後、日本、清ともに軍を駐留させ一触即発状態となる。閔妃一族はこの経緯から親日から清への事大に宗旨替える。85年には甲申政変、これは独立・開化派が起こしたクーデターである。これもすぐに鎮圧されるが、またも日清両国は再び対峙する。この政変の事後処理をするため、伊藤博文、李鴻章が天津で交渉、天津条約が締結され、両軍の撤退と今後派兵の際には相互に通知義務を負うことが確認された。この項は日清戦争までの10年は有効に機能した。このような緊張状態の中、1894年、東学党の乱（甲午農民戦争）が起きる。朝鮮政府はこれを独力で鎮圧できず清の援軍を求めた。ここで、清は「属国」であることを世

<sup>141</sup> 岡本隆司(2011)『李鴻章』: 105-110頁。

界に示すにはいい機会ととらえ、日本に通告、派兵に踏み切った。日本は朝鮮の自主独立を脅かす清軍を退去させることを朝鮮政府に要求し、ついに日清戦争が勃発、戦いそのものは平壤の戦い、黄海海戦と日本が勝利（清にとってはまさかの敗退<sup>142</sup>）し、アメリカの調停で下関条約調印。伊藤、李は再び顔を合わせ、朝鮮の自主独立、遼東半島、台湾、澎湖列島の日本への割譲、日本への最恵国待遇などが決められた。清仏戦争でのベトナム北部の中華秩序の喪失に続いて東夷の属国たる朝鮮における中華秩序の喪失となったことが重要である。合わせて、懸案となっていた琉球の日本への帰属についても決着をみたのである。中国からみれば、中華の威信を打ち砕いた日本という認識が強く刷り込まれることになった。

しかし、日本が遼東半島を支配することは欧米列強にとっては自らの権益確保に不都合である。ロシア、フランス、ドイツの「三国干渉」で遼東半島の領有はならなかった。この三国の軍事力による恫喝に、日本は屈服せざるを得なかった。その一方で、ドイツは膠州湾（青島）を占領、ロシアは旅順、大連（遼東半島）の租借を強要、列強による清国内の利権を奪いあう形となった。

この下関条約が現在の尖閣問題に直接つながっている。白井（2013）も指摘しているとおり、台湾、澎湖列島の中に尖閣列島が含まれるのかどうかということである<sup>143</sup>。含まれるとすれば、第二次世界大戦後のサンフランシスコ講和条約<sup>144</sup>で中国に返還されたとみなすことになり、含まれなければ沖縄県の一部としてアメリカの管理下にあり、沖縄返還と同時に尖閣も日本に返還されたと考えられるのである。

その後、日本は極東で南下政策をとるロシアと衝突しほぼ奇跡的と言ってもいい勝利を得る。アメリカの仲介でポーツマス条約が締結される。勝ったものの国力は疲弊し賠償金を確保できず国内の不満は各地で暴動にまで発展した。一方で国際的には日本は欧米列強が無視できない地位を確保するに至った。朝鮮半島ではロシアの南下政策の脅威がなくなったが、日本の影響力が増大し 1910 年には日本による朝鮮併合、つまりは植民地として経営することになる。

ここが歴史の流れの中で大きなポイントだった。欧米列強の力を見せつけられて明治維

---

<sup>142</sup> 北洋海軍は当時、ドイツから購入した定遠、鎮遠を主力艦に東洋一の威容を誇り、1886年、91年に長崎等へ寄港、示威運動を実施していた。（大谷正(2014)『日清戦争』：23-24頁。岡本隆司(2011)『李鴻章』：171-172頁。安井三吉(2005)『帝国日本と華僑』：39-46頁。）

<sup>143</sup> 白井聡(2013)『永続敗戦論』：68-69頁。

<sup>144</sup> 第二条（b）日本国は台湾及び澎湖列島に対するすべての権利、権限および請求権を放棄する。

新が目指した富国強兵は清、ロシアを破るまでになり、懸案であった不平等条約の是正も達成し、列強と並びたつ国家づくりが達成された時期であった。経済も軽工業から重工業まで日本的な産業革命がおきていた。憲法をはじめ法体系が整備され外国による治外法権はなくなり、関税自主権も回復した。欧米列強も日本を無視できない国家として認めざるをえない国際環境になった。維新から 40 年、当初目標を達成して次の国家目標をどう設定するかの分水嶺だった。また、脱亜入欧からアジア回帰が可能だった唯一のポイントだったかもしれない。

世界は第一次世界大戦に向かった。

ヨーロッパでは 1914 年のサラエボ事件<sup>145</sup>を契機として第一次世界大戦が勃発する。日本は日英同盟にもとづいてドイツに宣戦布告、その租借地中国山東半島の膠州湾を攻略した。ヨーロッパでは 1000 万人以上の戦死者を出し各国の国土も荒廃したが、遠く離れた東アジアの日本はこの戦争をドイツの権益を自らが確保する機会として捉えていた。

孫文の辛亥革命により清が崩壊し中華民国となったが、中国の国力は弱体化していた。日本から対華二十一カ条の要求（1915 年）を突き付けられることとなり、第一次大戦でドイツが敗れたことで、山東半島の一部の租借権が日本に移ることになった。パリの講和会議では、戦争による恐怖と悲劇と荒廃を経験し、そこを起点として国際平和をめざすヨーロッパの国々の中であって、その実感がなく自国の権益拡大に熱心な日本との間には大きな溝ができていた。

この日本の「対華二十一カ条要求」と第一次世界大戦後のパリ講和条約で山東省の権益が戦勝国であるはずの中国に戻らず、ドイツから日本に譲渡されたことで、北京政府への反発、「五・四運動」<sup>146</sup>が起こり、反日・愛国の動きが活発になる。こうした反日の動きに日本国内でも懸念を抱く人々もいた。民本主義の思想家吉野作造は「中国で排日思想が高まっているのには日本人にも問題があり、日本人の支那人に対する態度が悪いからである」<sup>147</sup>「従来の国際関係は帝国主義、強い者勝ちでありましたけれども・・・皆四民平等

---

<sup>145</sup> サラエボでオーストリア皇位継承者が暗殺され、オーストリアはセルビアに宣戦布告、これをドイツが支持。これにイギリスが宣戦布告し大戦になる。

<sup>146</sup> パリ講和条約の結果を受けて、1919 年 5 月 4 日北京大学などの学生が天安門に集結、抗議示威活動を行った。翌日以降ストライキと政府の鎮圧活動で逮捕者を出したが、多くの市民が学生を支持、パリの代表団にも条約にサインしないよう働きかけが行われた。逮捕者は釈放され代表団は条約へのサインを拒否した。（中国常識系列編委会(2007)『中国歴史常識』：187 頁。）

<sup>147</sup> 細谷雄一(2015)『歴史認識とは何か』：86 頁。



の原則を国際間にも応用して相和し相信じて新しい国際関係を立てなければならない」<sup>148</sup> また原敬（1918年首相就任）は政府の対中外交があまりに強圧的で国際社会から非難を受けていることについて、「外交なるものは徒に強硬を装てできるものではない」「日本国民は侵略的民族だ、軍事以外の文化が欠如する民族だという欧米の誤解を丁寧に解いていかねばならない」として「日本は国際協調を基礎にその潮流に積極的に加わるべきだ」と考えていたが、この時多くの日本人は帝国主義を国際政治の本質だと捉えており、新しい国際社会に対する理解があまりにも不足していた<sup>149</sup>。

中国では国際交渉の場面で弱腰であった北京政府を倒し国民革命を目指すために国民党と共産党が手を組む（国共合作）。1928年北京政府が崩壊すると、思想の異なる国民党と共産党は内戦状態に入る。武力で優勢にある国民党は1930年から数回にわたって掃共の戦いを実行していくが、劣勢の共産党は拠点としていた瑞金を脱出、いわゆる「長征」（1934年）を始める。一方国際環境は中国にとって急速に悪化する。日本は柳条湖事件（1931年）を起こし満州に攻め込んだ。関東軍は東京からの政府訓令を無視するなど独善的な行動をとるようになっていた。パリ講和会議で規定された国際連盟はその趣旨を「締約国は戦争に訴えない義務」「国際協力を促進し平和と安全を達成する」こととし、日本はその常任理事国であった。その中での満州事変の勃発は国際世論の反発と日本に対する不信を増大させることになった。その一方、国内ではこの関東軍の動きを喝采するポピュリズムが高まった。筒井（2015）はこの時期の「大衆」の動向にも注目する。「陸軍の急進的行動の背景には、新聞の煽動により満洲事変を熱狂的歓呼で迎える大衆の世論があった。明治以来顕現してきた大衆の政治的力の発露でもあった。とくに中国に対するものはマグマのように溜まっていて満洲事変に対しその爆発的支持という形で発露したといえよう。大正後期以降は知識人的国際協調主義の強くなっていた時代であっただけに大衆的ナショナリズムは強い力で抑制されていて満洲事変以降爆発的に表に現れた」<sup>150</sup>

時の若槻首相、幣原外相もこれを追認せざるを得なかった<sup>151</sup>。この状況を若槻自身の回顧録で見てみる。「9月初めのある朝、陸軍大臣から満洲事変の第一声を受けた。政府はただちに臨時閣議を開き、事態を拡大せしめないという方針を定め、陸軍大臣をして満州のわが軍に通達せしめた。爾来政府は毎日のように閣議を開き、陸軍大臣を促し、命令の不徹

<sup>148</sup> 細谷雄一(2015)『歴史認識とは何か』：87頁。

<sup>149</sup> 細谷雄一(2015) 前掲書：88-89頁。

<sup>150</sup> 筒井清忠(2015)『満洲事変はなぜ起きたのか』：186頁。

<sup>151</sup> 細谷雄一(2015) 前掲書：134頁。

底を責めたのであるが満州軍の行動は政府の命令にもかかわらず、ますます進展してやまない。私はそこで陸軍次官、参謀次長を呼び、満州軍の行動は、日本の対外的立場をはなはだしく不利にするもので国家のために憂慮に堪えない、両君は大臣および総長を助けて政府の命令が必ず実行されるよう取り計らわねばならんと嚴重に訓令した。・・・満州軍が事を起こした時、満州軍は林朝鮮軍司令官に援兵を求め、林は直ちに二個師団を派兵した。元来、軍隊を外国に派遣するには勅裁を受けねばならない。しかるに朝鮮軍司令官はこの手続きを経ないで派兵してしまった。・・・内閣が事件不拡大方針を定め、陸軍大臣をしてこれを満州軍に通達せしめたのに満州軍はなおその前進を止めない。日本の軍隊が日本政府の命令にしたがわないという奇怪な事態となった。」<sup>152</sup>

これは満蒙の現地側からするとどうだったのか。関東軍はもともと日露戦争の講和条約（ポーツマス条約）で譲渡された東清鉄道の旅順・長春間の守備隊であったが、次第にそれにとどまらず在満軍事機関として權益を軍事力によって保護する役割を担うようになっており、対ソ防衛を遂行する主体となっていた。第一次大戦以降、戦争の形態は大消耗戦を勝ち抜く装備の革新と補充を支える工業力、国民の動員力が不可欠になりいわゆる総力戦に耐えなければならないことになっていった。日本は軍需品を自給するためには鉄や石炭を必要としそのためには満州權益確保はその生命線であった。併合した朝鮮統治の安定にとっても満洲はソ連の脅威からみて同様に生命線であった。加えて満蒙にも共産主義運動が盛んになっておりこれが在満朝鮮人にも影響をはじめていた。これらの組織が各地で蜂起しその治安維持は重大な問題になっていたのである<sup>153</sup>。

1933年3月日本は国際連盟を脱退し国際的にも孤立する。

政府の関東軍の活動不拡大方針の中で、現実の事態は拡大する。国民党、共産党は2度目の合作を行う。国内の権力争いを一時休止して抗日を優先するという合意である（西安事件 1936年）。1937年盧溝橋事件をきっかけにして中国大陸を戦場とした支那事変<sup>154</sup>に突入する。時の近衛内閣も不拡大方針、現地解決を表明し、近衛自身も南京に飛び、蒋介石との会談をしようとしたが実現には至らなかった<sup>155</sup>。

国民革命軍は対日抗戦の主力として消耗が激しかった一方で、共産党の紅軍も国民革命

<sup>152</sup> 若槻禮次郎(1983)『明治・大正・昭和政界秘史』: 334頁。

<sup>153</sup> 山室信一(1993)『キメラ』: 26-40頁。

<sup>154</sup> 事変 両国とも宣戦布告を行わなかったため事変と呼ばれる

<sup>155</sup> 酒井三郎(1992)『昭和研究会』: 80頁。

軍第八路軍となるがこちらは後方でのゲリラ戦中心の闘いで体力を温存することができた<sup>156</sup>。

1940年の第二次近衛内閣の最重要課題は、三国同盟と対米交渉にあった。日独伊三国同盟は結果としては同年9月に調印されたのであるが、その締結に向けては賛成、反対の立場が鮮明になっていた。もともと防共がねらいのポイントであったが、1939年8月に独ソ不可侵条約が締結され、これによって三国同盟は四か国（日、独、伊、ソ）の連携になると見られた。このことによって三国同盟はさらに強力になりアメリカもうかつに手をだせない状況になるとの観測があった<sup>157</sup>。一方では海軍を中心に、この同盟はアメリカを英仏側に追いやり、日本は米英を相手に戦わねばならなくなるという同盟反対派があった<sup>158</sup>。

さらに対米交渉では有名なハルの四原則<sup>159</sup>をもとに交渉が行われ戦争回避の筋道がたてられた。近衛とルーズベルト大統領の直接会談も計画されたが、松岡外相の反対、不可侵条約があった両国独ソの開戦（1941年6月）、日本軍の南部仏印進駐（同7月）、アメリカの対日石油禁輸（同8月）と日米開戦に向かった。

1941年12月日本は米、英に宣戦布告し太平洋戦争に突入していく。「大東亜共栄圏」の建設を通じて世界の平和に寄与するという政策であったが、南方への進出による石油確保が最重要事項であったのである。

その前の1938年には国家総動員法が成立していた。戦争遂行のためには国家の人的、物的資源を総動員することを可能としていた。政治体制では挙国一致体制が取られた。これは本来支那事変の処理とヨーロッパ情勢の変転に対応するために既成政党の離合集散ではなく、国民各界各層を一丸とすることを目指し、その具体策として大政翼賛会が設立されたが、これも軍主導の戦争遂行機関と変質してしまった。イギリスの諺に「軍隊は最良の召使いであるが、それが主人になったら最後、最悪の主人公になる」というのがあるそう<sup>160</sup>がその典型となった。

1945年第二次世界大戦は日本の無条件降伏で終戦する。

中国は戦勝国となる。が、見方を変えると国民党、共産党の共通の敵がいなくなったわけで、合作していた国共は再び内戦状態になる。戦力的には圧倒的に優勢であった国民党

---

<sup>156</sup> 平野聡(2014)『反日中国の文明史』: 144頁。

<sup>157</sup> 酒井三郎(1992)『昭和研究会』: 211頁。

<sup>158</sup> 酒井三郎(1992) 前掲書: 217頁。

<sup>159</sup> 日米交渉の前提として提示した四原則、①相互に主権尊重、領土不可侵、②内政不干涉、③機会均等、④太平洋の現状を武力で変更しない（酒井三郎(1992) 前掲書: 251頁。）

<sup>160</sup> 宮崎市定(1963)『科挙』: 210頁。

軍ではあったが、共産党軍は解放区に敵を誘い込むことで局地で優勢な戦局を作り抗戦した<sup>161</sup>。その一方で、経済政策の失敗で極端なインフレが起き、国民経済が破綻しさらに大飢饉が華北、華中を襲い次第に人民の支持は共産党に向かった。こうした状況を見て開放区で国民党軍を迎え撃つ戦略の共産党軍が華北からついに南下した。1948年から49年にかけての三大戦役（遼瀋、淮海、平津）で国民党軍を破り、共産党による「中華人民共和国」が誕生する。三大戦役の中でも特に重要なのが淮海戦役だろう。共産党軍から見れば、地盤の華北から南へ向かい中国「中原」を制する戦いであった。ここで勝利することは南からの国民党軍の脅威を排除し北京、天津の開放（平津戦役）を容易にし、政権に圧倒的に近づくことを意味していた。「中原」を制することの重要性については先に述べた通りである。現代でも「中原に鹿を追う」は生きていた。

#### （5）明治維新以降戦前までの日本モデル

明治維新以前は何か新しい価値や考え方が日本にもたらせられても、それと従来からの日本の伝統的な価値をうまく融合させて新しい価値や基準をつくりあげていくという＜論理和＞的発想が日本の特徴と言えた。

島尾（2013）は茶道の祖とされる珠光の言葉を引いて、「茶の道で最も大事なものは「和」と「漢」との境界を「まぎらかす」ことである。「唐物」つまり中国から持ち込まれた茶碗や墨蹟（禅僧の書）ばかりを使っていた茶の世界に、備前・信楽の焼き物など「和物」の道具も持ち込んで、区別なく使おうとする。中国からもたらされた茶を、自分たちの住む「和」の世界に馴染ませる。それによって今に続く「茶の湯」がうまれることになる。これは日本文化のテーマでもあった。「和」と「漢」の対は仮名と漢字、和歌と漢詩、やまと絵と唐絵、和食と中華・・・というようにいくらかもある。外の文化を取り入れて、こちらの文化と対にする。その両方を合わせたものが、全体として自分の文化という構造は、他には見られない日本文化の特徴である」<sup>162</sup>と述べている。日本文化はもとより、他の文化を取り込みながら発展させていくという受動型ともいえる体質をもっていた。

しかし維新以降この考え方は大きな変容をした。中国モデルに似た発想に変わり、基軸

<sup>161</sup> 小野信爾(1977)『人民中国への道』: 178頁。 国民党軍 430万人、共産党軍 120万人

<sup>162</sup> 島尾新(2013)『和漢のさかいをまぎらかす』: 10-11頁。

をしっかりと構成して国家建設の方向付けをしようとした。つまり中国でいう「天」の位置に「神」をおいた。(図 37 左)「神」の流れをくむ統治者として「天皇」を位置づけた。中国ではこの位置は「天命」を受けた「皇帝」である。そして統治の思想は「近代化」、「和魂」と「洋才」を組み合わせるといのが実態は「洋才」をどれだけ取り入れられるかということに価値のある「和魂洋才」であった。明治末期の日清、日露戦争までこの洋才取り入れの「近代化」達成で突っ走り、その戦役の勝利という結果をもって、いわゆる「一等国」になった、というよりなってしまった。

丸山(1961)のこたばを借りると、「開国」という意味には自己を外、つまり国際社会に開くと同時に、国際社会に対して自己を国＝統一国家として画するという両面性が内包されている。その両面の課題に直面したのがアジアの後進地域に共通する運命であった。この運命に圧倒されずにこれを自主的に切り開いたのは日本だけであった。しかし、思想的伝統(中国における儒教のような)の強靱な基軸を欠いていたという事情から来る問題性がいまや爆発的に出現せざるを得なかったのである<sup>163</sup>ここで言う中国の基軸が「天命思想」「華夷思想」であり、そういう基軸をもたない日本は儒教、仏教、神道、西洋文化などを無理やり共存させた「皇国思想」という格好になっており、そのことが自己矛盾を起こしているということ、それが大問題なのである。それを無理やり整理したのが明治維新であるが、日本の柔軟性は一方の側面からみると、思想の混乱、不整合を生むということでもある。

その混乱は日清・日露戦争のあと、より明確になっていく。日清戦争で朝鮮の自主独立を達成し、日露戦争でロシアの南下政策に歯止めをかけるとともに目標としてきた西欧諸国に追いついたと認識ができるということは、反面西欧中心の国際秩序に日本は組み込まれてしまったということでもある。ともあれ維新以降 50 年たらずで国家目標としてきた「近代化」は達成した。

---

<sup>163</sup> 丸山真男(1961)『日本の思想』: 10-11 頁。

明治維新～

日清、日露戦争以降

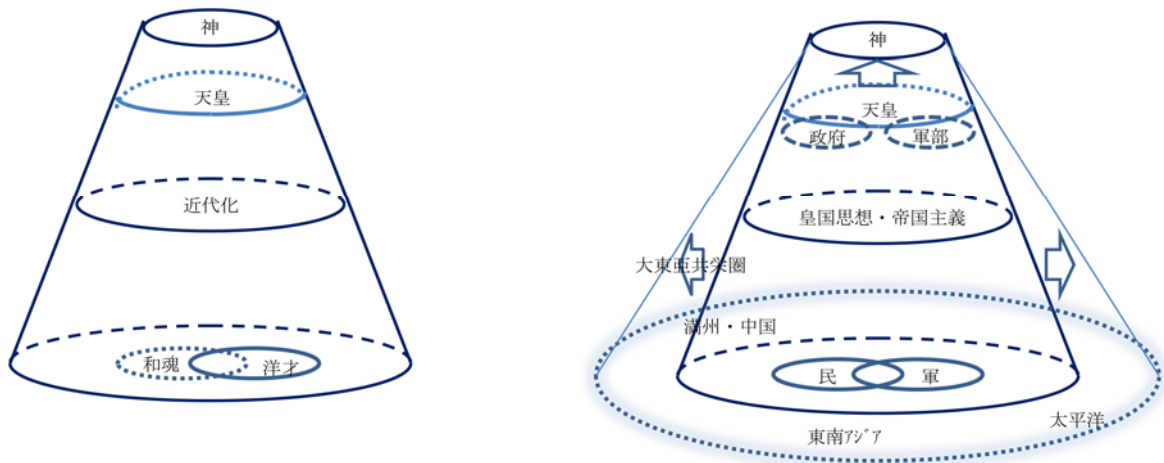


図 37 明治以降の日本モデル

問題はそこからである。「近代化」の達成度合いが国家の、あるいは文明の優劣であるという勘違いが生まれた。神がかり的な勝利を得て、「皇国」「神国」日本は世界で最も優れた国家、民族である、したがっていくら戦っても負けるわけがないという誤認が悲惨な結果を生む。この優秀な日本が中心となって東アジア、東南アジアに新しい国際秩序をつくるのだという方向に向いてしまった。図 37 右のような構造に変化したのである。

満州事変から日中戦争、太平洋戦争に向かう中で、「八紘一宇」という造語<sup>164</sup>が海外に向かう行為を正当化するためのスローガンとなった。「八紘一宇」のもともとの意味は世界全体をおおって一つの家にする、ということであるが、この時には「皇化に従わない国家、民族を取り除きその上で各国家、民族の自立自存しつつ協力しあって発展する」という意味で使われた。極端な自国中心主義である<sup>165</sup>。その力の源泉は言うまでもなく軍事力であった。このころから「天皇は神の流れをくむ人」から「現人神」となって、神と等しい存在と捉えられるようになった<sup>166</sup>。これが、図 37 右の天皇が神に向かって上昇する矢印である。そして「八紘一宇」は最終的には大東亜共栄圏ということばで表現されることになるが、皇国日本の影響力を中国大陸、南方、太平洋地域に拡大しようとする左右向きの矢印である。そしてこの時代の考え方は「皇国思想」であり「帝国主義」であった。

<sup>164</sup> 田中智学（宗教家）の造語。（島田裕巳(2015)『八紘一宇』：28頁。）

<sup>165</sup> 島田裕巳(2015) 前掲書：23,27頁。

<sup>166</sup> 昭和12年文部省「国体の本義」（島田裕巳(2015) 前掲書：33頁。）

明治憲法によって軍の統帥権は天皇にありその命令以外に軍を動かすことができないとされていた。図 37 右に示す天皇の直下に表現する二つの機能集団として「政府」と「軍部」がある。実際には暗黙の了解事項であって天皇が具体的に指示を出すことはないが、軍は少なくとも内閣の指示を受けない、文民は軍の行動を制御できないということであった。内閣の一員である陸軍大臣、海軍大臣であっても軍に指示することはできないしくみになっていた。

これは中根（1967）のいうタテ社会の集団組織の構造の特徴<sup>167</sup>をよく表している。

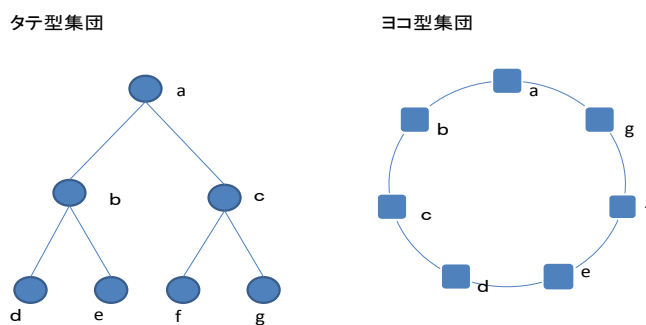


図 38 タテ型集団、ヨコ型集団の内部構造（中根千枝(1967)『タテ社会の人間関係』：115 頁。）

図 38 に見えるように当時の日本のタテ社会は a のトップに天皇を拝し、b に内閣、c に軍という構造であったために文民統制が効かなかったということである。しかしこの構造はここに至るまでの近代化の過程では大きな力を発揮していたことも事実である。トップの方針は末端まで上位下達で迅速に行われ集団としての意思統一が成立しやすく実行力に富む構造である。例えば「終戦の詔勅」には「爾<sup>なんじしんみん</sup>臣民」という言葉が 5 回、「帝国臣民」が 2 回ある。臣民とは君主国において君主に支配される者、絶対服従を求められる者であるから、国民に対する強い命令である。「臣民」という言葉は皇族以外のすべての国民を意味する。その中にはそれまでの国政の中心であった「軍」を含んでいるし「国家総動員」に対する終戦の命令、つまりこの体制を終わらせるということである。極めて難しい局面ではトップの決断、命令がなければ状況は変えることができない。それしか方法がないと

<sup>167</sup> 中根千枝(1967)『タテ社会の人間関係』：114-127 頁。

というのが日本の組織構造だったのである。

戦後日本の社会構造は明治以降の社会構造（図 37）から大きく変化し図 39 のようになった。

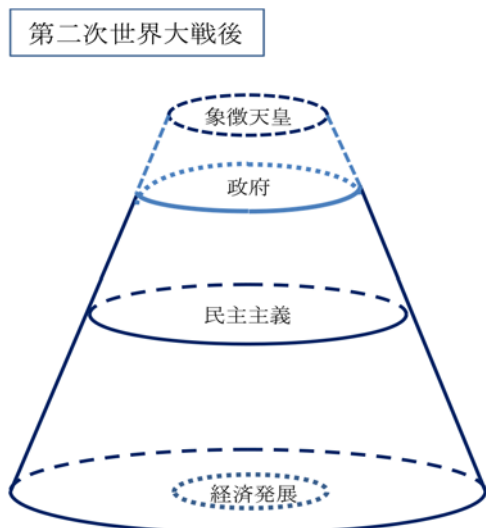


図 39 第二次大戦後の日本モデル

神であった天皇は国民の象徴となり、政府が権力の頂点に立つ。民主主義を統治の思想とし経済を立て直すことを中心的価値としそれによって国民生活の向上を目指すという構造である。中根の言うタテ型の集団構造（図 38）は軍を否定した戦後日本の経済再建においても威力を発揮した。上から下への号令一つで全員がその目標に向かって突進する動員力を持っている。この集団は目標が明確で a が心身とも健全で全集団の成員の人間関係がうまくいってれば効力を存分に発揮するがそうでなければ派閥、分裂につながり破局に向かう危険性をもはらんでいる。経済再建の過程ではこれがいい方向に機能した。「士は主の主を知らず」と言うがタテ型集団の a と d、e は必ずしもつながらない。コミュニケーション連鎖をつなぐためには a は自分の考えを 100% 表現し b は a の考えを 100% 理解し、それを d、e に伝えることが必要になるが現実には不可能である。こういう状況では d は b を越えて a の考えを推測することが起きるが、経済再建という大目標では一致していた。

西欧列強に迫られ日本は幕末に開国はした。その西欧の圧力は東アジアや南太平洋地域を植民地化することであった。その西欧と並ぶ近代化を為した日本が次に目指すは、消極的な開国から積極的な開国、つまりアジア、太平洋での西欧列強の植民地支配をアジアの手に取り戻すというストーリーを作ったのである。強くて優秀な民族がそうでない周辺の



民族を指導しながら共存支配していくのだと。先の丸山の言にあるように基軸を持たない日本が無理矢理に基軸を作るとその底の浅さから混乱し、「大東亜共栄圏」という発想に繋がっていったのである。最大の問題は中国モデルでも見てきたが、強い政権を目指した時は外に向けてその領域を広げることでその政権の正統性を国内的に確保しようとする傾向があるということだ。ただ中国モデルでは、特に王朝が交替した時にその正統性を証明するべく、周辺の国々が朝貢に応じ冊封体制にはいるという、例えば朝鮮、琉球でみてきたように表面上はソフトな拡大であったが、日本が拡大したこのときのモデルは西欧列強を中心とした植民地政策に倣った力による拡大であった。

本章（１）（２）は論文「長期思考の中国」（追手門学院大学経営学学生論集 2013 年第 19 号）をもとに大幅に加筆、修正した。

## 第5章 海外との文化交流の地

異文化と接触することは自らのもつ文化を異なるものに接することである。つまり新しいものを取り入れることによって自分たちの生活がより便利になったり豊かになったりする可能性を持っている。「和魂漢才」「和魂洋才」などの考え方はその典型である。

日本において海外との交流が盛んであったところとして、明治以前では鎖国政策の中、唯一海外に向かって開いていた長崎があげられる。とりわけ出島でのオランダと、新地での中国との交易とその情報収集、文化交流は鎖国政策をとる幕府のアンテナ機能を果たしていた。

また明治の開国は横浜、函館、長崎、神戸、新潟の港を開くことから始まったが、その中で代表的な地として神戸を取り上げてみる。明治の近代化は西洋文化の取り入れから始まる。第3章でみてきたモデルからすると、日本得意の<論理和>的発想でまずは取り入れてみるということである。<論理和>には二つの中心が必要だが、この時期の二つの中心は江戸期までの伝統的な日本的思考や文化と産業革命を経た西欧の文明・文化である。神戸は日本の伝統文化というものの典型にはなっていなかった。それは日本の伝統文化というものは何と言っても農業生産を基礎に置くものであったのだが、神戸には農業を発展させるだけのスペースがなかった。農業に依拠するのではなく、それまでの兵庫津を中心にした物流戦略拠点としての地域特性を基本としていた。そのため、二つの中心の一つが強力ではないために、二つの中心の間における葛藤が起りにくい土地柄であり、外来文化の取り入れ口、あるいは味見場としては恰好の地であったといえるだろう。

その結果、神戸が他の都市よりも開港は遅れたものの、そのために先行した開港場に比べて混乱が少なく交流が進展したことや経済の中心大阪の外港としてまた日本の代表港として長く発展したことにつながっていく。

この日本のある都市の経験がグローバル化が進み異文化との接触が当時と比べてはるかに日常化した現在にも通用する態度や考え方についての示唆を与えてくれているのではないかと考えてみた。

なお、本章以降は日本文化と中国文化の交流、相互理解という観点から記述する。ここでの見方、考え方というものが日本、中国両国間だけでなく他の文化をもつ国や人々との相互理解にも十分に通用することを願っている。

## (1) 長崎に生きる中国文化

幕府は全国の諸大名が海外との交易によって財政力をつけることを懸念し、鎖国政策をとり、長崎を直轄領としてその富を独占することを目論んでいた。日本は200余年後の幕末1859年になってアメリカ、イギリス、フランス、ロシア、オランダの五カ国と修好通商条約を締結し、正式に長崎、横浜、函館、神戸、新潟を開港する。その200年以上も前から長崎はオランダ、ポルトガル、清と交易を行い、海外の文明、文化を取り入れてきた。そのため、現在に至るまでこの町には当時から現在に至るまで海外文化とりわけ中国文化が息づいている。

例えば、毎年秋に行われる長崎の氏神、諏訪神社の大祭で有名な「長崎くんち」では蛇踊り（龍踊）の他、龍船、獅子踊など中国由来の出し物が奉納される。7月に行われるペーロン（白龍）競争も中国からの伝来である。中国式寺院としては興福寺、崇福寺があり原爆で焼失した福濟寺とあわせて唐三ヶ寺と言われた。また孔子廟は海外ではもっとも本格的な中国様式の廟である。さらに横浜、神戸と並ぶチャイナタウンもあり、長崎チャンポンは福建人が考案した名物料理である。

### ① 興福寺、崇福寺

興福寺、崇福寺、福濟寺の三寺の建立は中国人の出身地別に集まった人々によってなされている。日本人なら一つあればいいではないかと思うところであるが、中国人は同郷意識が非常に強い。元々、共同体が地縁血縁でできあがっており、その共同体間では争いが絶えなかったという歴史を持っている。そのため、信じるに足るのはそういった地縁血縁関係が基礎になっているのである。さらに言葉も地方によって異なるため、異郷の人とは言葉が通じにくいということもある。このことはさておき、これらの寺は中国様式で、本堂には航海の安全を守る媽祖、商売繁栄の関帝が祀られている。

江戸時代初期1612年幕府はキリスト教禁止令を發布した。信長以来キリスト教は布教活動も保護されていたが、豊臣政権は宣教師追放を行い、家康も教徒の団結、幕府への抵抗を未然に防ぐため禁止令を出した。長崎の中国人は自らがキリスト教徒でないことを証

明する必要もあり、寺を建立する。1620年、南京地方の出身者によって興福寺(図40左)が建ち、初代住持に真円、2代目住持は黙子。黙子の中島川に架かる「眼鏡橋」を架けたことでも有名である<sup>168</sup>。もともと、ここには木橋が架かっていたが大雨の度に流され、周辺の住人たちが困っていた。そこで中国人の技術と資金で頑丈な石橋をかけ安心して両岸を行き来できるようにしたと言う。3代目は逸然。逸然は後に宇治に黄檗宗萬福寺を創建した隠元禅師を日本に招聘した。隠元は1654年に来日し約1年、興福寺に滞在したのち、江戸に向かった。高僧隠元の来日は多くの中国の文化人を日本に引き寄せた。いんげん豆、れんこん、茄子、もやしといった農作物の他、煎茶、建築、美術、印鑑、書道、料理などが伝わってきた<sup>169</sup>。またこの高僧隠元を渡日のために、鄭成功が航海に尽力をしたと言われている<sup>170</sup>。



図40 興福寺(左) 崇福寺(右) (2013年9月、2014年2月著者撮影)

鄭成功も日本との関係の深い人物である。明代末期の軍人、政治家である。母は日本人、平戸の田川松。1644年、明が滅び満州族の清が立つ。鄭成功は満州族による支配を嫌いこの時の抵抗勢力として「反清復明」を掲げ戦った。その過程で清に「遷界令」(山東から広東までの海岸線から15キロ以内に住民が住まないこととして鄭の海軍勢力を海上に孤立させる)を出させる程の力をもっていた。そのため鄭成功は台湾で先に占領していたオランダ軍と戦い、ここに本拠を移さざるを得なかった。しかしこのことは、後からみれば台

<sup>168</sup> 参照：本稿「おわりに」

<sup>169</sup> 大本山萬福寺編(1997)『黄檗山萬福禅寺』:4頁。

<sup>170</sup> 長崎県企画(2011)『旅する長崎学16』:44-45頁。

湾を中国領化することとなり、その基礎を築いた人物として中国国内でも評価が高い<sup>171</sup>。本拠地廈門のコロンス島には「鄭成功記念館」(図 41)があり、日本では近松門左衛門の「国姓爺合戦」の主人公として描かれたほか、長崎県平戸にも「鄭成功記念館」がある。中国、台湾、日本各国から評価されているのである。

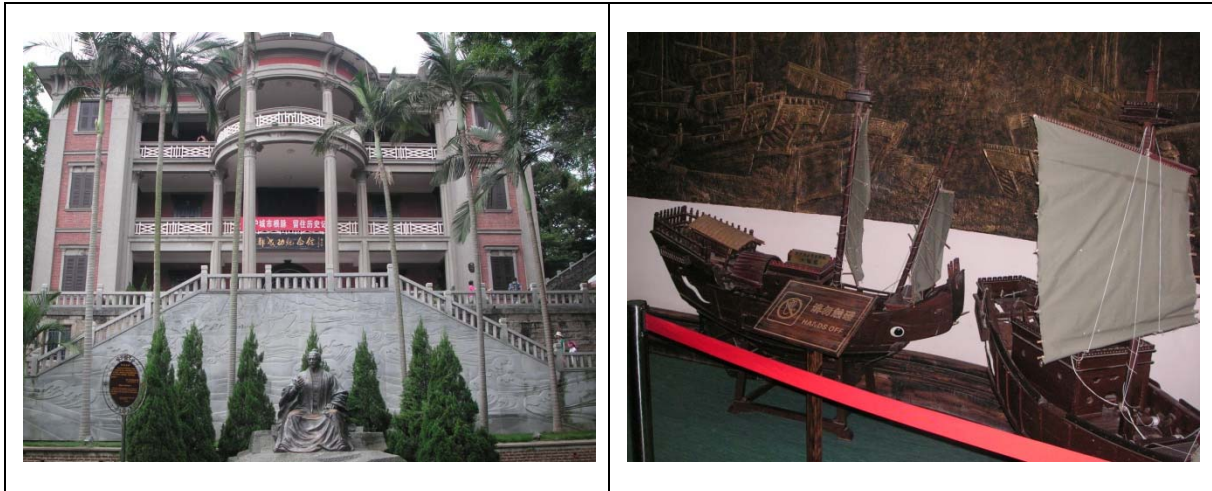


図 41 鄭成功記念館 廈門・コロンス島 (2012年6月著者撮影)

次に崇福寺(図 40 右)、1629年に福州人が福州の僧超然を迎え建立した。明末期の建築様式をそのまま輸入したものである。この寺院の境内に大釜があるが、これは天和の飢饉(1682年)の際、鍛冶屋町の職人にこの釜をつくってもらい、長崎の民に施粥を行ったものとされている。またこの寺では毎年、「中国盆」という供養が行われる。これは旧暦7月1日から30日間、あの世の鬼が解き放たれ、現世に現れる。それが悪事をはたらかないようにご馳走を与え、読経で慰めるためという。寺の祭壇には多くの供物、堂内には鬼専用の三十六軒堂(商店街)ができる、と言ってもプレートであるが。最終日には爆竹、太鼓、獅子舞など賑やかに鬼をあの世へ送り返す。霊を現世でもてなすこういった行事は大陸では殆ど見なくなったとのことだが、異国・長崎で伝統が続いている<sup>172</sup>。

福濟寺は現在は原爆で焼失してしまっているが、当時は唐三か寺の中でも最大規模だったとのことである。

## ② 諏訪神社 長崎くんち

<sup>171</sup> 中国常識系列編委会(2007)『中国歴史常識』: 154頁。石橋崇雄(2011)『大清帝国への道』: 151-152頁。

<sup>172</sup> 長崎県企画(2011)『旅する長崎学 17』: 46-47頁。陳優継(2009)『ちゃんぽんと長崎華僑』: 173-193頁。

龍踊<sup>173</sup>（蛇踊り）は諏訪神社（図 42 左）秋の大祭の名物となった奉納出し物である。諏訪神社は 1625 年に再興され、長崎の氏神となった。現在も氏子 43 町が 7 年に一度順番に出し物を奉納することになっている。この「龍踊」（図 42 右）はもともと中国の雨乞い儀式で龍が天に昇り、水に潜り、雷光を呼び雨を降らせ作物の順調な生育と豊作を祈るものである。長崎の唐人屋敷に住む中国人たちが、隣接する籠町の住民にこの踊りを教え、道具、衣装一式も贈ったことから始まっており、今では籠町はじめ 4 つの町の奉納出し物となっている。この他にも中国起源の出し物として唐人船、龍舟、獅子舞などがあり、くちを盛り上げる。



図 42 諏訪神社（左）蛇踊り（右）（2013 年 9 月、2014 年 2 月著者撮影）

### ③ 唐人屋敷とチャイナタウン

1635 年、幕府は長崎以外での対中貿易を禁止、その結果、各地に居住していた中国人が長崎に集まってくるようになった。1670 年代には 1 万人の中国人がいたと言われている。

1685 年、幕府は「定高制」<sup>174</sup>を発布、金、銀の海外への過剰な流出を防ぐため、年間の貿易取り扱い額に上限を設けたのである。その結果、長崎へ交易のため危険を冒してやってきた唐船も取引ができずそのまま帰港しなければならないことも起こりだした。これ

<sup>173</sup> 長崎県企画(2011)『旅する長崎学 17』: 43 頁。

<sup>174</sup> 横山宏章(2011)『長崎唐人屋敷の謎』: 171 頁。

が次第に増加し 88 年には 117 隻中 77 隻が貿易不許可になった。そうすると「上有政策、下有対策」（上に政策あり、下には対抗する対策がある）の中国のことわざ通り、対策を講じるのであるが、結果「密貿易」の増加となってしまった。そこでこの「密貿易」の取締りと貿易の統制を強化するため、また中国人を一箇所に集め管理を容易にするため「唐人屋敷」を建設する。170 年もの長きにわたって屋敷は続くが、1859 年の開国と共に、屋敷制は撤廃された。現在は 3 つの堂が残っているのみである。

土神堂（1691 年）。土神信仰は中国古来からの民間信仰で土地や家を守り、豊作、金運、治病の神である。

天后堂（1736 年）。南京地方の船主による建立。航海安全の神、媽祖のほか、右に関帝、左に観世音菩薩を祀る。

観音堂（1737 年）。福建出身の船主による建立。観世音菩薩と関帝を祀る。

さて、この唐人屋敷の天后堂、興福寺、崇福寺（図 43）の媽祖堂。媽祖を祀る堂が目立つ。媽祖は唐船の中にも祀られており、長崎に入港すると出港するまでの間、この像を天后堂、媽祖堂に移していたのである。この船から堂までの行列を再現したものが「媽祖行列」で現在、長崎の春節祭（長崎ランタンフェスティバル）で目玉行事の一つとなっている。

媽祖は宋代 960 年生まれの福建女性である。子供のころから神通力をもっていたとされ、家族が海難事故で亡くなるとそれを悲しみ、家を出て航海安全の神になったと言われている。また媽祖には「千里眼」「順風耳」という二人の家来がいるが、もとは金精、水精という妖怪で農作物を荒らし人々が困っていたところ、媽祖がその神通力で悪行を改めさせ従えた。二人は千里先のものを見、音を聞くことができることから航海には大いに役立つわけである。媽祖はもともと福建を中心とした中国南方の沿岸地域で信仰を集めていたが、次第に北方にも広がり、清代 1684 年には「天后」に封じられ、媽祖を祀る廟を「天后宮」と呼ぶようになった。華北の天津（図 44）や山東半島の港町にもこの「天后宮」があるが、文化大革命の時に「迷信、非科学を排除」という徹底した方針で多くの廟が破壊されてしまっている。また香港、台湾でも媽祖信仰は厚いものがある。ちなみに日本でも神戸、大阪の関帝廟には関帝と合わせて媽祖（天后）が祀られているし、横浜中華街には「関帝廟」「媽祖廟」がそれぞれにある。華僑の人々の多い町には商売の神、関帝とともに航海の神、天后が民間信仰として息づいている。



図 43 崇福寺媽祖堂 (2013年9月著者撮影)

中央に媽祖像、左右手前に媽祖を守る順風耳と千里眼の二鬼神



図 44 天津天后宮 (2013年10月郭二曉氏撮影)

1859年のイギリス、アメリカ等5カ国との修好通商条約は外国人に指定された居留地への在留を認めたが、清との条約批准は1871年まで遅れていた。そのため中国人の立場は不安定なものになり、居留地に住むことができず市中へ出ざるを得なくなった。経済活動の面では一部の者は欧米人の会社を利用しながら交易活動を続けていた。一方で中国貿易の倉庫があった新地地区には中国人得意の出身地別貿易会社が設立されていた。その結果、新地が経済活動の中心となり、現在の新地中華街に発展していくのである。

しかしその前にいくつもの困難があった。清と日本が対立する構図が続いていた。明治以降、琉球処分、日清戦争、対華二十一か条要求、満州事変、日中戦争というように清、中華民国とは後から振り返れば戦うことを前提とした二国間関係にあった。日清の関係が



不穏ななか、長崎の中国人も安心して商売ができる状態ではなかったであろう。列強ロシアの極東の南下政策を阻止したい日本は朝鮮を極めて重要な対露防衛ラインと考えていた。清は朝鮮は冊封体制の属国であるから自らの影響力を確保しておきたいと考えていた。日本が琉球処分のように朝鮮にも進出してくることは北京防衛の観点からも何が何でも避けたい事態であった。東学党の乱をきっかけにして日清戦争（甲午戦争）が勃発することになる。

しかし特記すべきは、この時期この長崎において県知事大森鐘一は「・・・たとえ日清両国間にいかなる関係あるも、在留華僑人民に対し充分の保護をあたうるは当然の儀につき反目敵視粗暴の挙動これなきよう、あい心得べし」と述べ華人保護を行ったことである<sup>175</sup>。長崎には国家間の衝突時でさえ、華僑との関係を重視する態度があった。

#### ④ 孔子廟、中国歴代博物館

孔子廟の起源は 1676 年まで遡る。儒学者向井元升が立山書院という儒学塾を開いた。その子、元成が 1711 年に長崎聖堂をたて、儒学教育の他、対中貿易でも重要な役割を果たした。時代が下って、1893 年、清朝政府領事館と在日華僑によって孔子廟（図 45）が建てられた。日本で唯一の本格的な中国様式の廟である。その特徴としては基本的には中国曲阜（孔子生誕の地）の孔子廟に倣ったものであり、堂の屋根は華南様式の先がそりあがった形状で瓦には華北の瑠璃瓦が使われている。また回廊には「論語」16018 文字が掲示されている。建築年は日清戦争の直前であることを考えると、長崎との関係、あるいは華僑の熱意を相当に重視していたものと考えられることができる。また現在の建物は 1967 年に大改修されたものである<sup>176</sup>。

孔子廟は中国国内の他、長崎のように華僑が多く住む国、地域に建立されている。これは孔子、儒教が中国人にとっての精神的な支えとなっていることを示していると同時に、中華の中心的思想である儒教を海外に広める拠点としての役割もあったのではないだろうか。それだけ当時の中国人の自らの中華思想に対する自信を覗かせている。

東京には 1690 年、林羅山の湯島聖堂が孔子廟として建てられた。湯島聖堂はその後、

<sup>175</sup> 陳優継(2009)『ちゃんぽんと長崎華僑』：29 頁。長崎県企画(2011)「旅する長崎学 17」：36 頁。

<sup>176</sup> 陳優継(2009) 前掲書：198-200 頁。長崎県企画(2011) 前掲書：8-9 頁。

幕府直轄の昌平坂学問所<sup>177</sup>（通称昌平黌）となった。明治維新後、学問所を廃して文部省が設置され学問所跡地に東京師範学校、東京女子師範学校を設立、現在の筑波大学、お茶の水女子大学へつながっていく<sup>178</sup>。

また、台湾、ベトナム、マレーシア、タイなどでも孔子廟は見られる。下の写真データ（図 46）はベトナム・ハノイの文廟である。



図 45 長崎孔子廟 右：大成殿内部、孔子坐像（2013年9月著者撮影）

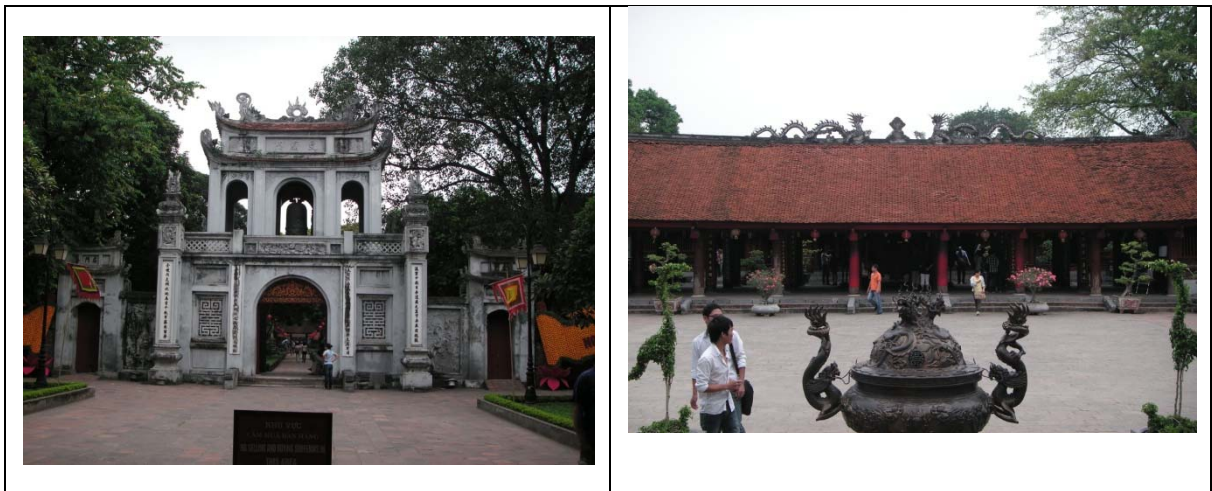


図 46 ベトナム・ハノイ文廟 右：同 国子監（2012年10月著者撮影）

1070年建立。ベトナムで最初の大学に。

<sup>177</sup> 昌平は曲阜近郊の孔子生誕の地名（蜂屋邦夫(1997)『孔子』：16頁。）

<sup>178</sup> ウェブサイト：斯文会(2015)「史跡湯島聖堂」

長崎孔子廟には 1983 年、中国歴代博物館が併設された。これは、当時の日中国交回復後の、「日中友好」ムードも時代の背景としてはあっただろうが、両国の相互理解と文化交流を目的としている。ここには中国国内の博物館が所蔵する国宝級文物が提供され展示されている。海外の博物館の中でも異例の扱いになっている。

このように鎖国の時代にあつて、長崎は特別な地位を与えられていたとはいえここに入ってきた中国を中心とする異国文化は長崎の発展と繁栄に大きな影響を与えた。その異国文化が単に異なる文化と認識されていれば、今日の長崎のもつ国際色豊かな雰囲気はできなかったであろう。中国から入ってきた文化は日常生活に近いところで生きている。先に述べた黙子如定の眼鏡橋、諏訪神社の長崎くんち、春節のランタンフェスティバル、夏のペーロン競争や精霊流し<sup>179</sup>、さらには長崎チャンポン<sup>180</sup>などいずれも長崎では日常である。これらのものが今に残りまたそれが長崎を特徴づける要素になったのは華僑たちが異国長崎での生活にいかにとけこもうとし、その結果としてともに生活を豊かにしようという姿勢と実践の結果と言えよう。

## (2) 近代欧米、中国との交流地としての神戸

### ①第一の開港 大輪田泊と日宋貿易

神戸の港は「務古の水門」や「敏馬の浜」という表現が日本書紀、万葉集や宋書に記されているのが初めである。務古の水門はその場所が今の西宮であったという説と神戸であるという説があるが確かなことは分からない。また敏馬の浜は現在の敏馬神社あたりであるとされている。いずれも 5 世紀頃、中国、朝鮮との交易の窓口になっていた<sup>181</sup>ことは確かである。

その後、平清盛によって大輪田泊が修築されここが日宋貿易の拠点となって平氏政権の経済的基盤を為した。これが神戸の港都として発展する礎となった。

<sup>179</sup> もとは唐人屋敷で死者の靈魂を故郷へ送り返す祭祀「彩舟（さいしゅう）流し」と言われる。（長崎県(2011)『旅する長崎学 17』：47 頁。）

<sup>180</sup> 中国人の知り合い同士の挨拶は「吃飯了嗎？」(chi fan le ma:ごはん食べた?)。これを福建語では“シャボン”というがこれがなまって“チャンポン”。料理のものは福建の郷土料理。（陳優継(2009)『ちゃんぽんと長崎華僑』：41 頁。）

<sup>181</sup> 鳥居幸雄(1982)『神戸港 1500 年』：4 頁。

清盛の父、忠盛は院の代理で肥前・神埼を治めていた。そこで日宋貿易を始める。清盛は肥後守から安芸守、播磨守を経て太宰大貳と出世していく過程で瀬戸内の制海権を確立していった。大輪田泊が西国を押さえる要衝であり、貿易を通じた経済の拠点と判断した清盛はこの大輪田泊の改修に取り組んだ。この港は南東からの風波に弱い（南東に向かって開いている）のでこれを防ぐための防波堤として人工島を築くという工事であった。今になって思えば、ポートアイランドや六甲アイランドの造成という大型の「山、海へ行く」プロジェクトは清盛がその先駆けだったかもしれない。

1170年には宋人を福原に迎え入れ、後白河院との謁見を実現させている。72年には宋皇帝からの後白河院、清盛への御物に対し清盛が返礼を行い、これを契機に日宋貿易はさらに拡大していった<sup>182</sup>。その結果、従来の貿易拠点であった大宰府を外し大輪田（神戸）で宋船と直接取引が行われるようになった。80年には清盛は福原遷都を強行する。

日宋貿易によって、平家には唐物と呼ばれた陶磁器、文房具、書籍、香料、塗料をはじめ金（楊州）、珠（荊州）、綾（呉郡）、錦（蜀江）といった中国の有名産地の最高級品が蓄積されていった<sup>183</sup>。これらは法皇、天皇への献上品となりまた一部は各種行事の引き出物をして重宝された。つまり、「唐物」は平家の武家政治にとって武力だけではない権力維持のための文化的権威の象徴でもあった。

## ②足利義満の朝貢貿易と江戸幕府の鎖国

室町時代に入ると、三代将軍足利義満が明の冊封体制に入り朝貢貿易が始まる。倭寇の海賊行為に悩む明は輸出入を国として管理下に置くことで貿易による経済利益の独占をはかった。周辺諸国に対しては明と交易するためには朝貢体制に入ることが事実上の条件となっていたのである。朝貢国を増やすことが明皇帝の権威を確保するという目的がその背景にあった。中華を中心とする国際秩序を漢民族の明が再構築するためにはどうしても必要なことであった。朝貢国が多いことは中華皇帝に従う国が多い、それだけ皇帝の権威が広く行きわたっているということの証明になるのである<sup>184</sup>。この日本側の発着港が兵庫津

---

<sup>182</sup> 鳥居幸雄(1982)『神戸港 1500年』: 85-86頁。

<sup>183</sup> 河添房江(2014)『唐物の文化史』: 102頁。

<sup>184</sup> 壇上寛(2012)『永楽帝』: 230-234頁。河添房江(2014) 前掲書: 132頁。

であった。朝貢は明からの回賜が進貢品の価値よりもはるかに大きかったことで幕府の財政にも大いに貢献した。明は経済的な損得よりも明を中心とする東アジアにおける国際秩序の再構築がそれほどまでに重要だったのである。こういう国際秩序をつくれた中国の歴代王朝は繁栄し、これに失敗した王朝は短命に終わっている。例えば隋は高句麗征伐を四度も試みたが失敗、わずか 37 年の短命に終わったが、唐は高句麗を新羅との連合で破り、周辺地域を統括するための「都護府」<sup>185</sup>を機能させ、290 年の長期王朝をつくった。つまり属国を従え朝貢させられるかどうかはその皇帝が天命を受けた正統な天子であるかどうかを判断する大きな材料になるのである。とりわけこの支配権の確立は王朝の創設初期で決まる。

さらに琉球船、朝鮮船も入港し兵庫津は日本の海の玄関としての役割を担っていた。

江戸時代は幕府が鎖国政策を取ったため国際港としての役割はなくなったが、商都大坂の外港として西国、北国の物資が海上輸送されるようになった。これによって大量輸送が可能になり、各地からの貨物が兵庫に集約されここで小型船に積み替えられて川底の浅い大坂に運ばれた。北前船を経営した北風家や蝦夷地交易、択捉にまで拠点をもった高田屋嘉兵衛も有名な商人で神戸の発展に大きな貢献をした<sup>186</sup>。

### ③神戸開港

長崎が江戸時代までの対外窓口であり、オランダや中国（明）との交易拠点として異国文化と交わっていたが、安政の開国後は横浜やそこからは遅れたものの神戸にその中心が移っていった。

横浜や神戸は中国、オランダだけではなくイギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、ロシアといった欧米に向けて開いた窓となった。

神戸の開港は横浜などから 9 年遅れた 1868 年である。これは、都京都に近いことで勅許が下りなかったためとされている。さらにその開港の立ち上がりがスムーズにいったわけでもない。この年、神戸事件が三宮神社前（図 43 左）の西国街道で起こる。

---

<sup>185</sup> 安東（満州、朝鮮）、安北（外蒙古）、単于（内蒙古）、北庭（天山北路）、安西（天山南路、中央アジア）、安南（南海諸国）の六都護府を設置（貝塚茂樹 1969『中国の歴史（中）』：84 頁。）

<sup>186</sup> 鳥居幸雄(1982)『神戸港 1500 年』：131-135 頁。



図 47 神戸事件碑（左） 伊藤博文公銅像台座（右） （2015年4月著者撮影）

これは朝廷の命で摂津西宮警備のため東へ向かう備前藩の隊列をフランス人水兵が横切ったことを侮辱行為<sup>187</sup>としてその水兵を負傷させ、市中での各国艦隊の警備隊との銃撃戦にまで発展してしまったものである。死者はなかったものの列強各国は居留地防衛のためとして艦隊から出動し市内を占拠するに至った。この事件は明治新政府にとっては初めての外交紛争交渉事件となり、その始末如何によってはさらに大きな武力衝突に発展することや最悪の場合、つまり新政府が列強と強硬な対決姿勢を取っていたなら武力によって神戸が植民地とされてしまう危険性もあったが、政府は東久世通禧や伊藤博文を派遣して事態の收拾にあたり、備前藩隊長滝善三郎の切腹で決着をつけた<sup>188</sup>。実は、神戸開港にあたって、こういう外国人とのトラブルを想定しこれを避けるため西国街道を迂回して通行できる「徳川道」（石屋村～大蔵谷、図 48）を設けていたが残念ながら機能しなかったということになる。

しかし、振り返ってみれば負傷させたのは事実としても全面謝罪と責任者の切腹で決着をつけざるを得なかったのは当時の武力を背景とした列強と日本の力関係を端的に表している。現に神戸港には各国の艦隊が神戸開港で停泊していたし、この事件で港内に停泊していた日本船が拘束された。

ともあれこの迅速な処置を行ったのが伊藤博文で初代の兵庫県知事に就任する。のちに総理大臣を務める伊藤博文の銅像が市内の大倉山公園にあったが、現在は台座のみである（図 47 右）。銅像は第二次世界大戦中の 1942 年に金属供出されたためである。

187 このような侮辱行為は「切捨御免」が従来の国内慣習

188 内山正熊(1983)『神戸事件』: 15-21 頁。

この神戸事件もお互いに少し相手方の慣習を承知していれば、あるいは相手方の言葉が理解できれば防げた事案であり無知、無理解が国家レベルでの交渉にまで発展してしまったものとも言える。それは、列強側に治外法権が存在し、圧倒的に強い立場を背景とした、軍の市中でのにらみ合いは、恐怖を覚えずにはいられない事態である。日本人から見ると維新直前まで攘夷論が盛んであったことからすれば、対外恐怖は改めて認識されなおしたと言える。



図 48 東灘区の徳川道起点の標（2015年5月著者撮影）

開港に伴い「外国人居留地」が設けられた。東は旧生田川（現フラワーロード）西は鯉川筋、北は旧西国街道（神戸事件はここでおきた）、南は海までの地域である。ここに欧米各国からの貿易商らが居住し事業を行った。ただ、この外国人居留地を造成するのに予定通りことが進まず、その対策として「雑居地」を居留地の西（宇治川まで）、北（山麓まで）に設けた。造成遅れの結果として雑居地は日本人と欧米人、清国人ともに暮らす場所になり、そこに「国際交流」が生まれた。さらに山麓には「異人館」と今も呼ばれる洋風建築群が出来上がった。図 49 はその代表的建築の風見鶏の館、旧トーマス邸である。

居留地は英人 J.W.ハートが設計（図 50）し、南北の幹線、街路樹、緑地帯、下水道、車、歩道の区別、レクリエーション用の広場（現東遊園地）などが配置され、現在に至っても観光拠点の一つになっている。ハート設計の区割りは戦禍や大地震を越えて今も同じだ。ただ、この居留地は治外法権の場であり日本の施政権が及ばないところであった。近代化のショーウインドウであるとともに、不平等条約の所産でもあった。



図 49 北野異人館 通称風見鶏の館 (2015年4月著者撮影)



図 50 居留地計画図 J.W.ハート 1870 (ウェブサイト：神戸市立中央図書館<sup>189)</sup>)

<sup>189</sup> ウェブサイト：神戸市立図書館「貴重資料デジタルアーカイブス」



図 51 左の旧居留地 15 番館は当時アメリカ領事館であった。現存する唯一の遺構であったが 1995 年の阪神・淡路大震災で倒壊したもののその部材を回収することから始め、震災前の姿を取り戻した。国指定の重要文化財である。図 51 右の下水道も当時のものである。



図 51 旧居留地 15 番館 (左) 下水道 (右) (2015 年 4 月 著者撮影)

一方で、日本から海外へ移住する人がいた。この人々に対しても神戸はその拠点となった。1868 年のハワイへの移住先駆者 (153 名) から始まり、1908 年に最初のブラジル移民船笠戸丸が出港して以来 25 万人の移民を送り出してきた。その拠点が神戸移民収容所 (図 52 1928 年設立、現「海外移住と文化の交流センター」) であった。海外移住者はここで移住についての研修を受け、神戸港へ向かったのである。現在では全世界に約 350 万人の日系人 (出典：海外日系人協会) がいるが、そのルーツはここにある。



図 52 「海外移住と文化の交流センター」 (左) とメリケンパークの「希望の船出」像 (右)  
(2015 年 5 月 著者撮影)

#### ④神戸の華僑

中国人はというと、神戸開港時には清国との間で条約<sup>190</sup>未締結であったため、居留地には入れなかった。「無条約国民」だったのである。しかし、開港と同時に長崎から十数名の華僑が移ってきた<sup>191</sup>のが始まりで、翌年には 500 名を超えた<sup>192</sup>。まずは通訳、買弁（貿易の仲介）を業とし、住居は居留地の西隣に集まっていた。この場所が現在の南京町（チャイナタウン）である。華僑、華人はその土地での生活基盤としてチャイナタウンをつくることから始めるのである。集まって居住し安全を確保し情報を交換する。四合院や土楼に見られるような「集合して守りからはいる」という形の海外版ともいえる。しかし神戸の場合は決して閉鎖的ではなかった。雑居地という条件もあって、日本人と華僑が接する場でもあった<sup>193</sup>。



図 53 南京町 春節祭（2015 年 2 月 著者撮影）

江戸鎖国期には、日本にとって中国文化は長崎を窓口として、大変価値のあるものであった。しかし、明治の開港は欧米列強の軍事力を背景とした強制が働き、しかもその強さに恐れ入った結果である。したがってこれまでの師であった中国もともに尊敬の対象から

<sup>190</sup> 1858 年米、英、仏、露、蘭の五か国と修好通商条約を締結していたが清国との条約は 1871 年の日清修好条規まで待たねばならなかった。

<sup>191</sup> 「神戸華僑歴史博物館」館内パンフレットより

<sup>192</sup> 呉宏明・高橋真一(2015)『南京町と神戸華僑』: 14 頁。

<sup>193</sup> 呉宏明・高橋真一(2015) 前掲書: 20 頁。

離れてしまった。それほどに欧米の力と文明は強烈であった。これまでの文明ではなく西洋文明を手に入れなければならないという大目標ができたのである。憧れの対象が欧米に移り、相対的に中国は遅れた文明と認識された。福澤は言う、「中国がうまくいくのは第一に君主がすばらしい、聡明な人間であること、第二に公平で賢い役人が私心、私欲なくこれを助け民に愛情をもって接することが必要であるが、そんなことはできていない。とどのつまりは外国人の支配に屈しているではないか」<sup>194</sup>。つまり、中華思想をもとにすると、天から統治の委託を受けた皇帝とその実務部隊である役人が「天」に代って「民」のためにと意識と行動をとらなければこの思想は成立しない。

しかしながら、開港時に日本に居住していた中国人の役割は現実には極めて大きいものがあった。というよりも日本人が何も知らない中でいきなり外国人と交渉をしなければならない立場に置かれたということである。産品を輸出する場合に殆どのモノは中国人の手に委ねねばならなかった。神戸からもマッチ、綿糸、干魚、椎茸、寒天などが輸出されたが、彼らの働きなしにはモノは動かなかった。華僑は中国本土だけでなく東南アジアはじめ各国に拡がっていた。彼らの知識、情報、資金は豊富であった。欧米との貿易にも買弁としてその仲介をしたのは彼らである。

華僑は海外に出ると出身地別の「幫」をつくる。長崎では出身地別に寺をつくった。南京出身者の興福寺、福建人の崇福寺、泉州・漳州出身者は福濟寺というように。神戸でも出身地別に幫<sup>195</sup>ができていたが、これはどうしても派閥的になり何かと支障が多かった。そこで清国駐神戸理事の発起で「神阪中華会館」(1893年)が設立された。清朝政府の出先機関が「中華」の名のもとに統一組織を作ったのである<sup>196</sup>。

神戸の諏訪神社(図 54 右)は今も中国人の崇敬者が多い。中国式の参拝も可能な道具が備えられ、明代の扁額も奉納されている<sup>197</sup>。提灯には中国人にめでたいと言われる赤い文字で名が書かれている。諏訪神社は長崎も神戸も華僑の信仰を集めている。神戸へやってきた最初の華僑が長崎からだったことと関連があるのかもしれない。

華僑の人々の信仰を集める関帝廟。神戸の華僑も早くから関帝を祀っていた。1888年に大阪布施の長樂寺が廢寺になるのを神戸に移し、関帝廟とした(図 54 左)。長樂寺は長崎興福寺に招かれた隠元禪師が後に宇治に創建した黄檗宗萬福寺に繋がる寺であった。関帝

<sup>194</sup> 福澤諭吉(2009)『学問のすすめ』: 142-143 頁。

<sup>195</sup> 呉越は三江、他に福建、広東出身者で幫を作っていた。(安井三吉(2005)『帝国日本と華僑』: 48 頁。)

<sup>196</sup> 安井三吉(2005) 前掲書: 50 頁。

<sup>197</sup> 兵庫県神社庁神戸市支部編著(2000)『神戸の神社』: 53 頁。

廟は関帝聖君を主神に観音菩薩と天后聖母（媽祖）を祀っている<sup>198</sup>。チャイナタウンで安全を確保し業を為す、そのよりどころともなる「関帝廟」である。一般に関帝廟は「武廟」と言われるが武人関羽が慕われるのは「信義」の厚さが商売をしていく上で最も重要なこととされることからと言われている。また天后聖母は航海の女神、中国大陸の海岸、台湾、東南アジア各地や長崎、那覇など華僑居住地で祀られているが、当然のように神戸にも祀られた。



図 54 関帝廟（左） 諏訪神社（右） （2013年7月著者撮影）

諏訪神社に奉納された提灯には「黒字」で日本人、「赤字」で華僑の人名が書かれている

#### ⑤文明開化の西の拠点として

明治新政府は富国強兵、殖産興業を旗印に近代化実現、列強の仲間入りを目指して突っ走った。この西欧先進文化の取り入れ口を西の神戸、東の横浜が担うことになった。これは日本の将来を決定づけるほどの大きな使命と認識された。

新政府の最初の大仕事である廃藩置県である。中央政府は幕府から朝廷に移ったものの、各地の大名が治める藩の存在は中央集権体制を構築する上で大きな課題であった。明治2年には多くの大名から版籍奉還が行われ、新政府が土地と人民を管理することになったが、実態は大名が知藩事として管理するものであった。また政府直轄地には府、県が置かれ中央政府の直接管理となった。旧大名の藩あり、新政府直轄の府、県ありの複雑な非効率な

<sup>198</sup> 中華会館(1998)「小冊子関帝廟」：8-19頁。神戸市教育委員会編(1975)『神戸の史跡』：87頁。

地方統治体制であった。その後明治4年（1871年）詔勅によって3府302県の体制、直後に3府72県に再統合された。さらに明治9年（1876年）には3府35県まで合併が進んだ。このプロセスにおいて、神戸を擁する兵庫県について、「開港場を持つ兵庫の県力が貧弱なのは好ましくない」（大久保利通）として摂津、播磨、但馬、丹波、淡路の旧五か国を兵庫県として合体させた<sup>199</sup>。神戸を文明の取り入れ口として、輸出入拠点として発展させていくために豊かな農業地域であった播磨、但馬などからの税収を確保しようとしたのである。摂津の旧三田藩、尼崎藩、播磨の旧姫路藩、明石藩、竜野藩、林田藩、赤穂藩、山崎藩、安志藩、三日月藩、三草藩、小野藩、但馬の出石藩、村岡藩、豊岡藩、丹波の篠山藩、柏原藩、さらに徳島藩から淡路も加えた大兵庫が実現した<sup>200</sup>。

文明開化取り入れの役割を背負った神戸は、当然のように貿易業が盛んになった。初めは外国人貿易商や清国の買弁らに依存していた取引も次第に自らの手で取引ができるようになった。とりわけ紡績業が盛んになることで、製品輸入から原料（綿花）の輸入が増加し、関西五綿<sup>201</sup>といわれる商社が神戸を拠点にして活躍し、明治末には取扱い量で日本人が外国商人を超えた。輸出品では茶、生糸が殆どであったが軽工業品のマッチが有力な輸出品になった。外貨を稼げる国産品としてその方向性を示す意味において大きな価値がある産業であった。

神戸の商人は国の最前線で最初に外国商人と接する日本人であった。関税自主権のない不平等条約下でも日本人はこれまで彼らが植民地として扱ってきた国とは違うということを示さねばという思いがあった。それがバネになっていたような会社があった。

鈴木商店<sup>202</sup>である。鈴木商店は1874年（明治7年）の創業であるから、文明開化の取り入れをその中心地、神戸で実践してきた企業である。当初は外国産砂糖を居留地貿易で外国商館から買い入れ国内に販売するという形で業をなしていた。創業者鈴木岩治郎が急死（1894年）すると夫人のよねが店主となり、金子直吉、柳田富士松の番頭を中心とした経営に変わっていく。折しも日清戦争が勃発し、台湾が日本に割譲されると当地の樟腦の販売権を獲得しこれが躍進の契機となった。躍進の第一歩は軽工業への進出であった。樟腦（現日本精化）、ハッカ（現鈴木薄荷）、セルロイド生産（現ダイセル）である。また鈴木商店にとってはその原点である精糖事業は何としても取り込みたい事業であった。金子

<sup>199</sup> 崎山昌廣監修(2006)『神戸学』: 57頁。

<sup>200</sup> 松尾正人(1986)『廃藩置県』: 241頁。

<sup>201</sup> 伊藤忠、丸紅、日本綿花、東洋綿花、江商の五社（崎山昌廣監修(2006) 前掲書: 88頁。）

<sup>202</sup> ウェブサイト「鈴木商店記念館」ホームページ, 崎山昌廣監修(2006) 前掲書: 88-89頁。

は北九州に大里精糖所を建設、これを大日本精糖に譲渡することで資金力がつけさらに事業の多角化を進める。

日露戦争を境にして重工業へ業容を拡大していく。神戸でも鉄鋼産業が興ったが、うまくいかず鈴木商店がそれを引き受けることになった（現神戸製鋼所）。また人造絹糸の国産化にも取り組み帝国人造絹糸（現帝人）を設立した。第一次世界大戦の勃発（1914年）で船舶の不足を見込み、造船業への進出も目指した。兵庫県相生の播磨造船所が鈴木商店に買収を要請、これを受ける形で鈴木は膨大な投資を行い相生の町の形を変えるほどの影響をもたらした（現IHI）。神戸では開国後から外国人が小規模な造船所をたてていたが、1871年には政府も官営の兵庫製作所（のち兵庫造船所）を開設、これを1886年に川崎正蔵が払い下げを受けて川崎造船所となった。さらに1905年には三菱造船所が設立されていた。この時期では外国と対等に取引できる産業を国として興すにはまず政府が官営で資本投下しそのあとで民間に払い下げるというのが効果的な手法であったのである。長崎造船所、富岡製糸場、高島炭鉱、三池炭鉱、佐渡金山、生野銀山、札幌麦酒醸造所などが該当する。

第一次世界大戦の戦争景気で、鈴木商店は大成功を収め、1917年には売上高で日本一の商社となり、のちに総合商社の源流と言われるまでの実績を上げた。が、この景気は米価の高騰を招いた。高騰は売り惜しみ、買占めを呼び社会不安をあおった。この矛先が米を扱う商店に向かった。1918年8月、全国主要都市で米騒動が起り神戸では鈴木商店が焼打ちにあい本店は焼失した。またこの直後に第一次大戦が終結し、景気も一転不況になり、強烈な向かい風になった。加えて関東大震災のため不良債権が増加、1927年（昭和2）には金融恐慌が発生、資金を台湾銀行からの融資に依存していた財務体質のぜい弱な鈴木商店は一気に破綻した。

開港場は海外との接点であるが故に、戦争や恐慌などの影響もまともに受けることになる。好況になれば人も流入してくる。不況になればスラム化する。浮き沈みも激しく交錯する。鈴木商店もその大波に翻弄されたと言えよう。

## ⑥清との関係の変化

日清戦争に先立つ八年前と三年前、清の北洋艦隊が日本に来航した。この艦隊はアヘン戦争後、清も「洋務運動」を進めその中で海軍力を増強してきた成果であった。ドイツか

ら輸入した旗艦「定遠」「鎮遠」はじめ「濟遠」「威遠」などの艦隊は当時東洋一の威容を誇った。1886年には長崎へ寄港したがそこでは長崎事件<sup>203</sup>を起こした。これは上陸した清軍水兵と日本人巡查の衝突事件である。事件の詳細は省くが、外国に行って事件を起こすことは一般的に言って行った方が強い立場にあると認識した時であろう。そういう意味では北洋艦隊は自ら「強い」と自認していたはずである。

二度目は1891年の親善訪問である。長崎、神戸、横浜、東京へ来航した。在日華僑はもちろん祖国の艦隊を熱烈歓迎した。日本側も北洋艦隊の来訪を歓迎した反面、清を脅威と感じるような雰囲気も生まれていた。つまり海軍力の強化は何がなんでも急がねばならないというコンセンサスを生んだのである<sup>204</sup>。

日清戦争に至る動きは既に述べた。この戦争で日本は北洋艦隊を破り勝利したのであるが、その時の在日華僑はどうだったか。戦争であるから国交は断絶され日清修好条規は失効した。つまり華僑の人々は無条約国民になった。領事裁判権がなくなった。多くの華僑が日本を離れた。1893年に在日華僑は5343人だったが翌年は1576人に、兵庫県でも1004人が455人になった<sup>205</sup>。戦争が日本に優位に推移したこともあり、中華会館が襲撃されるなどの事件も起こった。

日清戦争後、清の空気が変わった。清の改革を唱える康有為や梁啓超の戊戌の政変は失敗に終わったが、彼らが亡命したのは日本であった。後に梁は「我が国、四千余年の大夢の喚醒はじつに日清戦争の敗戦、台湾割譲、賠償金二億両に始まる」と述べた<sup>206</sup>。その梁啓超は1899年神戸で華僑たちに近代的教育の重要性を訴え、これがきっかけとなって翌年神戸華僑同文学校（現神戸中華同文学校）が設立された<sup>207</sup>。そして梁は1906年から11年の帰国まで神戸・須磨に居を構えていた<sup>208</sup>。孫文も何度も来日して辛亥革命の準備を進めた。そして清から日本への留学生が増加した。1896年の13人の留学生から始まり1905年には8000から1万人規模にまで達した<sup>209</sup>。華僑も増えた。これは維新以降近代化に成功したもとなつた西洋文化を漢字を使う日本で学ぶためである。すでに西周らは儒教的

---

<sup>203</sup> 安井三吉(2005)『帝国日本と華僑』: 39頁。

<sup>204</sup> 安井三吉(2005) 前掲書: 41-46頁。

<sup>205</sup> 安井三吉(2005) 前掲書: 61頁。

<sup>206</sup> 加藤徹(2005)『西太后』: 213

<sup>207</sup> 呉宏明・高橋晋一(2015)『南京町と神戸華僑』: 240頁。陳徳仁・安井三吉(2002)『孫文と神戸』: 45頁。

<sup>208</sup> 陳徳仁・安井三吉(2002) 前掲書: 72頁。

<sup>209</sup> 安井三吉(2005) 前掲書: 162頁。

あるいは仏教的素養をもとに洋学を志しその翻訳に努めていた<sup>210</sup>。そのため清の近代化には遠い西欧よりも日本で学ぶ方が効果的、効率的であった。あくまでも日本あるいは日本文化を学ぶのではなく日本で西洋文化を学ぶのではあるが、流れが変わったことは間違いない。

義和団の乱<sup>211</sup>を経て清朝はますます弱体化し、1911年孫文の辛亥革命<sup>212</sup>で滅亡する。一方、欧州では第一次世界大戦が勃発、日本はドイツに対し膠州湾（山東半島・青島）を中国に返還させるという理由で開戦し勝利したが、これを中国に引き渡すことを拒否した。さらに翌1915年、「対華二十一ヶ条」要求<sup>213</sup>を突き付け、抗日運動を誘発した。第一次世界大戦が終了し、パリでの講和会議で中国の二十一ヶ条要求撤廃や膠州湾返還の請求は英・米・仏・伊・日の反対で棄却され、北京の学生を中心とした抗議行動「五・四運動」が始まった。その後、日本は青島返還を行った（1922年）が、すでに民族運動は一定のレベルを超えていた。ここに日中の対立激化の構図が確定してしまったのである。日清戦争は両国の直接の戦争であったが、まだそこまでの対立には至っていなかった。敗れた清が日本に留学生を送り西洋文明を学ぶという行動をとった。今回は、日中が直接争うのではなくドイツと日本が膠州湾で戦ったのであるが、膠州湾をドイツから中国に返還させるという開戦の大義と対華二十一ヶ条要求という結果の処理に対して民族意識に目覚めつつあった中国人民の大きな反発を生んだ。ここはその後の日中関係のねじれの大きな原点の一つである。

孫文はその晩年1924年11月に神戸で「大亜細亜問題」と題して講演<sup>214</sup>を行ったが、その結語として「日本はもともと王道文化を備えていたが明治以来霸道の文化をうまく吸収して今日の強盛を築き上げた。日本、中国が中心になってアジア諸民族の団結をはかり、王道の文化によって霸道の文化を感化していこう。日本民族はすでに欧米の霸道の文化に

---

<sup>210</sup> 例えば“philosophy”は「哲学」と訳されていた。西洋思想を儒教的素養で解釈した。（大橋良介(1992)『日本的なもの、ヨーロッパ的なもの』: 41-50頁。）哲学、科学関係の用語は西周の訳によるものが多い。

<sup>211</sup> キリスト教会と中国一般人の対立から「扶清滅洋」を掲げて山東省から天津、北京へ進撃した。実質政権を握る西太后はこれを利用して外国勢力をたたこうとしたが、北京の外国人、施設が犠牲になるに及び列強8か国連合軍が天津を占領、北京に入城した。西太后、光緒帝は西安へ逃避した。（中国常識系列編委会(2007)『中国歴史常識』: 181-183頁。）

<sup>212</sup> 孫文と革命党が「三民主義」（民族、民権、民生）を掲げ1911年10月武昌蜂起をきっかけに多くの省が呼応し清の統治を終わらせ、中華民国が成立した。（中国常識系列編委会(2007) 前掲書: 184-186頁。）

<sup>213</sup> 日中両国の懸案解決のための日本側から袁世凱政権への要求。日本が大戦に参加して派兵占領した山東省の旧ドイツ権益を日本に譲渡すること、関東州の租借期限を99年に延長すること、日本人が満蒙で土地の所有、賃借権を得ることなどから成る。（貝塚茂樹(1970)『中国の歴史(下)』: 160-164頁。）

<sup>214</sup> 陳徳仁・安井三吉(2002)『孫文と神戸』: 260頁。



到達したのであるが、亜細亜王道の本質をも有している。今日以後において、日本が世界文化の前途に対して西方覇道の獵犬となるか、あるいは東方王道の干城となるか、日本人が慎重に考慮してその一を選ぶべきである」と。図 54 はその講演会の様子である。会場の神戸高等女学校は現在の兵庫県庁の位置にあった。



図 55 孫文の講演「大アジア主義」1924年11月28日 於：神戸高等女学校  
(陳徳仁・安井三吉(2002)『孫文と神戸』：257頁。)

図 56 左は神戸・舞子の孫文記念館、元は華僑呉錦堂の別荘である。呉錦堂はマッチや綿花の貿易に携わり、のち日本国籍を取得した。神戸中華同文学校設立など神戸の華僑社会の基礎を築いた。図 56 右は中国・南京の孫文の陵墓・中山陵である。陵門への階段は392段あり、当時の中国の人口3億9200万人に由来している。



図 56 左：孫文記念館 移情閣（神戸・舞子）（2013年9月著者撮影）  
右：中山陵（中国・南京）（2002年8月著者撮影）

神戸華僑歴史博物館に「落地生根」の額がある。落地生根とは一人の人間が故郷を遠く離れて、海を越え異国の地にわたり、その土地の人たちと睦みあい、その地の習慣にもなじみ、家業をおこし、子や孫に囲まれて円満な家庭を築き、やがてはその地に帰する<sup>215</sup>さまをいう。これが華僑の生き方であると考えている<sup>216</sup>。

この生き方を受け入れる場としての神戸があった。ともかく明治開港以来外国文化の受け入れ拠点としてともかくまずは受け入れてみようとするよく言えば積極進取の雰囲気があった。そのもとをたどれば開港時に居留地造成が遅れたために外国人が雑居地に住み、日常的な市民との交流が発生したことや、開港が横浜などに比べて遅れたために先行地の事例を学習することができたこともあげられるが、やはり最も大事な点はそこに住む外国人の考え方であったのではと考えられる。その後、神戸は 1938 年に阪神大水害で市域はほぼ壊滅、1945 年には米軍の空襲でも壊滅、1995 年の阪神淡路大震災でも壊滅と町も市民も破壊された。直近の大震災時には多くの華僑は日本人と同じように被災したが、日本人と同じように避難、行動した。華僑だけがまとまった集団行動をとることはしなかった。その一方でチャイナタウン南京町では早くからカセットコンロで炊き出しを行った<sup>217</sup>。この店頭屋台型の販売方法は今では南京町ではおなじみの光景になっている。市民レベルでの協力、共生の関係づくりの重要性を改めて示したのである。

本章(1)は論文「中国文化と日本の地域文化①長崎」(追手門学院大学経済・経営院生論集第11号2013年)の一部を加筆、修正した。

---

<sup>215</sup> 1870年、開港から2年後には華僑は棺が故郷へ帰れない者のために中国人墓地「中華義荘」を購入した。(安井三吉(2005)『帝国日本と華僑』:32頁。)

<sup>216</sup> 「神戸華僑歴史博物館」館内パンフレット

<sup>217</sup> 呉宏明・高橋晋一(2015)『南京町と神戸華僑』:65-67,75-76頁。

## 第6章 暗黙の了解と潜規則

翻ってみれば、戦後アメリカから見て日本は「なぜ？」の対象であった。太平洋戦争の直接の敵の行動はアメリカ人には理解を超えていた。戦争勝利の後の占領政策を立案するためにも極めて重要な「なぜ？」であった。ベネディクト、R. の『菊と刀』は日本を外部、世間を基準にした「恥」の文化、欧米は倫理基準を内面化した「罪」の文化と位置づけ、「なぜ？」の解明に大きな一歩をしるした。ベンダサン、I. 『日本人とユダヤ人』も海外から見て「日本をどう理解するか」をユダヤ人を軸に文化比較を試みている。その後、日本の戦後復興、高度経済成長を見て、またしてもアメリカは「なぜ？」、わずか30年の間に日本は世界の経済大国にまで成長してきたのかという疑問をもった。ヴォーゲル、E. F. 『ジャパン アズ ナンバーワン』は日本の企業文化を分析しその力の源泉を日本人のもつ「勤勉性」「学習意欲」に求めた。これは儒教的な特徴をもつポイントをも指摘している。つまり勤勉で誠実な仕事ぶりや企業を一つの家と見立てる考え方は年功序列や終身雇用につながる。そこにタテ社会の特徴であるトップの指揮のもとに末端のメンバーまでの意思統一の迅速さと徹底ぶりを加えれば組織集団の機能を最大限に引き出すことが可能だったのである。ただし、これは戦後復興を目指す中で主として欧米に追いつけ追い越せというそれぞれの集団が目指す目標が比較的明確化されていて、問題があればそれを改善していくことが肝要な時に適合するものであった。

一方でトム・ピーターズ、T. /ウオーターマン、R. H. は『エクセレント・カンパニー』で、「ジャパン」に負けないアメリカの優良企業の分析を進め、その条件を提示するとともに、米国企業を目指すべき方向性と自信を示している。こうして、『菊と刀』や『エクセレント・カンパニー』はその時代のニーズ、それも第二次世界大戦の戦後処理政策や1980年代の日米貿易摩擦というより経済戦争にアメリカがいかに対応していくかについて大きな指針を与えた。

そうして日本がまたしても欧米諸国を経済面でもキャッチアップしたとき、やはり次のイノベーションをどう起こすかで留まっていた。自らイノベーションを起こすほどのビジョンや独創性はまだ持ち合わせていなかった。追いつけ追い越すという中での必死の動きの中で、その次を考える余裕はなかった。そしてバブルが崩壊し経済は停滞した。

「改革開放」から40年近くの時間が経過し、世界の中での存在感を増す中国の考え方が政治、経済、国際関係の中で徐々に明らかになり、そのことに「なぜ？」と反応する日本がいる、という新しい構図が生まれてきた。かつてアメリカが日本に抱いた「なぜ？」を日本の視点から中国の「なぜ？」を検討していきたい。

ここをどう理解し共存共栄の道をめざすのか、これが現在の課題である。この点を、これまで述べてきた、大きく分ければ2枚の下敷き—古代からの中華の考え、西洋文明との衝突—とそれに付随する東アジア周辺諸国の動きを考慮しながら、さらに現在の共産党政権の考え方をあわせて理解する必要がある。現在、目の前に起こる現象のみを見ていれば、お互いの国民がお互いを信頼できる、できない、好き、嫌いという反応ばかりになってしまいそれでは何の進歩も望めない。相互理解は相手の言うことに耳を傾けるだけでなく、その考え方がどうして生まれるのかまで思料することで相互理解が進むのではないかと考えている。

#### (1) 中華の復活

170年前から50年間は欧米列強により、その後の50年は日本によりその経済力を背景とした軍事力によって中国は苦難の時を余儀なくされた。かつて中華思想をもって東アジアの秩序をつくってきた中国にとっては、屈辱に近いものであった。

その力の源泉たる経済力と軍事力を世界のトップレベルに回復させること、これが中国の悲願である。

経済力は2010年、改革開放政策を始めて30年を経て、GDPで日本を抜き世界第2位となった。近年やや成長率は鈍化しているものの依然7%程度の成長を続けている。

2014年では

第1位	アメリカ	1735兆ドル、
第2位	中国	1036兆ドル
第3位	日本	460兆ドル

(出典：ウェブサイト：GLOBAL NOTE「世界の名目GDP 国別ランキング統計・推移(IMF)」)となっており日本をすでに大きく引き離し、アメリカの60%程度にまで達している。ただし国民一人当たりで見ると、

第11位 アメリカ 54370ドル

第27位 日本 36222ドル

第80位 中国 7572ドル

(出典：ウェブサイト：GLOBAL NOTE「世界の1人当たり名目GDP 国別ランキング推移 (IMF)」)

である。中国国内の経済格差、貧富の差は大きく、ジニ係数も 0.469 (出典：ウェブサイト：中国網 Japanese「中国のジニ係数、6年連続で低下 所得格差が縮小」) である。改善はされてはきているものの暴動危険レベルとされる 0.4 を上回っている。他に都市と農村の格差、GDP の 50% を占める公共投資頼みの構造、それに伴う地方政府のシャドーバンキング問題など解決すべき課題は山積してはいる。しかし市場としての中国、工場としての中国は世界のどこから見ても強大でその動きに関心を持たずにはいられない状況である。つまり、経済力については問題はあるものの、ある程度夢に向けたメドはつきつつあるとみているのではない。

次に軍事力である。ここは、アヘン戦争、アロー戦争でイギリス、フランスに歯が立たず、その結果、半植民地化と屈辱的な不平等条約を締結せざるを得なかった重要ポイントである。

現在では、経済成長に伴って、軍事面の増強は急ピッチで進行している。日本との尖閣問題、フィリピン、ベトナムとの南沙諸島、西沙諸島の問題を抱えながら、着実に軍事力は増強・拡大している。2012年には初の空母「遼寧」も就航した。

中国は「第一列島線」「第二列島線」(図 57) という軍事戦略上の防衛ラインを想定している。仮想敵国をアメリカとしての国防ラインである。「第一列島線」は日本の鹿児島から沖縄、台湾、フィリピン、ボルネオに至るラインであり、「第二列島線」は伊豆諸島、小笠原諸島、グアム・サイパンのラインである。「第一列島線」は台湾、南沙諸島、尖閣諸島を含んでいる。中国の海軍力を強化する計画は 30 年前からあり、2000 年までには沿岸海域、2010 年までには「第一列島線」内の制海権確保、2020 年までには「第二列島線」内の制海権を確保し、2040 年には超大国アメリカの太平洋支配を崩すという長期計画である<sup>218</sup>。アメリカは戦後のサンフランシスコ講和にあたって、日本をアジアにおける自由主義陣営の中核として再建しようとし、その防衛ラインをアリューシャン列島から日本列島、沖縄、フ

<sup>218</sup> 石平(2015)『なぜ中国は覇権の妄想をやめられないのか』: 139-140 頁。

フィリピンを結ぶ線としていた<sup>219</sup>。まさに中国の第一列島線と同じである。2013年に中国海軍艦船が「第一列島線」を越えて、太平洋での演習を行ったというニュース（2013年10月27日『朝日新聞』）があったが、中国にとっては既定路線である。



図 57 第一列島線、第二列島線（出典：2015年10月20日『朝日新聞』）

つまり、軍事力についてもアメリカとのバランスがとれるまで強化するのが何千年の歴史を持ち、長期の思考に慣れている中国の遠大な計画である。この計画も60年に及ぶ計画ですでにその半分が経過している。「第一列島線」が日本、フィリピンなどを通る線を想定しているだけに当然のこととして摩擦は起きる、現に起きている。他国にラインを引いてこの線は中国の防衛ラインであるというのは常識的には乱暴な発想である。しかし「中華思想」の考えをもってすれば、そうおかしなことではない。つまり、世界の中心は中華であって、中華が中華たるには当然に必要な行動である、中華は強くなければならないと考える。そのためには当面の多少の摩擦はやむを得ない。今すぐは無理でもこれは正しいことなのだから既成事実を積み上げていけばいずれそうなることを確信しているようだ。

そう考えると、今の南沙、西沙や尖閣問題も中国の論理の上ではなんら問題はないことになってしまう。加藤徹（2006）は中国人の縄張り感覚についてこう述べる。「日本人の感覚では自分のものでないなら手を伸ばさないが、中国人は中間にあるものには手を伸ばす、という大まかさがある。物品だけでなく知的所有権も」「領土意識としてはいまだに清朝が

<sup>219</sup> 福永文夫(2014)『日本占領史 1945-1952』: 238頁。

心情的基準で時の冊封国は中国の縄張りに入る」<sup>220</sup>と。

日本や南シナ海各国との二国間関係において時には友好的に時には対抗的になることがあるが、その底流は変わらないという認識が必要だろう。

## (2) 一方の常識は他方の非常識

加藤隆則(2011)は「中国では見えない掟が社会を動かしている」と述べ、これを「潜規則」とした<sup>221</sup>。中国人にとっては当たり前の常識、しかし日本人や欧米人にとっては「なぜ？」となる暗黙のルールのことである。

まず、事例についてみてみることにする。日本で2012年12月、中央自動車道笹子トンネルで天井板の崩落事故があり9名の犠牲者を出した。その後、天井板の設計、施工、老朽化、定期点検の状況などが検証され、事故後およそ2ヶ月の通行止めの時間を経て完全復旧した。また事故の教訓は他の同様な状況にあるトンネルに展開され緊急点検も実施された。この手順は「安全と水はタダ」<sup>222</sup>と考える日本人には当たり前の手順である。タダという意味は個人が特別なコストをかけないでいい、すなわち社会が準備、確保すべきものという認識で、安全確保のための再発防止は人々の社会への要求なのである。「安全と水はタダ」と考えられる幸せな民族は世界中で日本しかないがその安全確保のための手順が一つのコンセンサスとなっている。ただしその対応には時間はかかる。

中国ではどうか。先の事例で2011年7月に浙江省温州でおきた高速鉄道の追突、脱線事故(図58)がある。この事故は先行していた列車が故障のため停止していたところに後続の列車が衝突し先頭の4両が脱線、1両が高架から転落し、40名の乗客が死亡したものである。問題はそのあとの処置で起こった。原因究明が求められる中、事故車両は現場で穴に埋められ、4日後には再び掘り起こされ搬送された。列車の運行は事故の2日後には再開された。

---

<sup>220</sup> 加藤徹(2006)『貝と羊の中国人』: 64,180頁。

<sup>221</sup> 加藤隆則(2011)『中国社会の見えない掟』: 7頁。

<sup>222</sup> ベンダサン, I. (1970)『日本人とユダヤ人』: 14頁。



図 58 高速鉄道事故

日本人からみると、現場検証もそこそこに、原因の特定も未完のまま 2 日後の運行再開は「暴挙」にしかみえない。過去にもある。2003 年の SARS（新型肺炎）では中国・香港を中心に 770 名余りの死者が出た。この時も「情報公開」が遅れ、東南アジアを含めてパンデミックな状況に拡大したとされている。ここには、事故や問題をできるだけ大げさに扱うのではなく、「小さなこと」として処理をしようという動機が働いている<sup>223</sup>。これは「中国式問題解決手法」の定石で、小さな問題でも公にすれば、お互いに傷つけあうことになり大きな問題になる。そうなる前に手を打ってしまおう、「問題が起きましたが既に解決しましたよ」という対応なのである。

こういう問題解決法はたしかに日本社会にもある。地域社会での小さなトラブルの解決法、「まあ、ここは一つ、私の顔に免じて、水に流して・・・」である。「水に流して」などは完全に「なかったことにしよう」という日本伝統の方法である。また種々のトラブルも「かくかくしかじかの問題が発生した」ということに対して「ではどうする？」という対策は当然必要である。「が、このように対応する」「が、このように対処して解決のメドがたっている」とすることで大きな問題ではないと認識をする。問題に対して対策を講じることで問題を小さくすることは解決手法として十分に機能する。

しかしこの場合の日中の違いは事故と公共性、社会性との関わりについての認識である。企業内や限られた地域社会での事件と公共交通機関のトラブルでは扱い方が日中で異なる。

<sup>223</sup> 加藤隆則(2011)『中国社会の见えない掟』: 76-77 頁。丹羽宇一郎(2013)『北京烈日』: 167 頁。でも同様の指摘がされている。加藤は「大事を小事に変え、小事を無にする」方式と言い、丹羽は「責任隠蔽主義」と言う



日本での「水に流して」という解決法は限られた身近な社会集団ではよく見られるが、一旦、事が社会性、公共性を帯びたものになると、自らの責任ではなんともならない範疇にはいる。そこで公共性を確保している管轄の政府、地方自治体、あるいは事業者に対し、公共の安全、安心確保のための対策を要求することになる。つまり「水に流していいものといけないもの」の区別が公共性という観点にある。一方、中国は社会性、公共性といったことに対する認識が日本とは異なる。安全、安心は自らの責任で確保しなければならないと考える。自己責任である。社会にはいたるところに危険が潜んでいる。この危険を回避するために社会や政府に期待するのではなく、自ら対策を講じなければならない。そもそも社会性、公共性という概念が希薄だから「事件を小さく、できればなかったことに」という伝統的問題解決法が表面化し実行されるのである。

ここで「公」の意識についてある在日中国人の見方を紹介しておく。「公」の場にはマナーやルールがある、「公・私」の区別は厳格にしないとイケない、というようなことは分かり切ったこととする日本人的発想に対して、中国人はそうは考えない。「公」というのは「私」の集合体のようなイメージである。個人個人のつながりが拡大していった結果「公」という場になる。あくまで個が優先するのである。その結果、マナーやモラルのレベルの問題がとりわけ海外で顕在化する。最近では中央の指示で減ったようだが少し前までは、例えば役所や所属単位の車を私的に使用することは大きな問題ではなかった。しかしこれを公私混同と言って批判するだけでは済まない。これも少し前までは許される行為だったのである。自らの利益のために「公」を犠牲にすることは皆がそう考えていればそれが社会規範になってしまう。

### (3) 相互理解のためのフレームワーク

これらの事例のように、日本人、中国人の間には行動をとる時に異なる判断基準が存在している。このことは、近くて遠い日中関係を象徴的に表している。今提示した事例は日本をはじめ海外でも大きく報道されたために多くの人が承知し、海外の論調は概して批判的であった。が、中国人にとっては「問題は問題だが、ありそうなこと」という感じ方ではないだろうか。この事故から数年が経った今、「あの事故は不幸な出来事であったが、高速鉄道網の発達、発展のためにはやむを得ない教訓だった」とする肯定的な見方もある。

つまり時間が経った今では「そうたいした問題ではなかった」で処理されてしまう。

そもそも「問題」ということばに対する認識が日本と中国では違うのである。日本では「問題」は当然のように起こるもので、それは解決すべきものである。したがって問題解決能力は個人にとっても組織にとっても重要な資質となると捉え、「問題」そのものを否定することは少なく、「問題意識」の有無やその起こった「問題」に対して再発防止がしっかりできたかどうか「問題」になる。さらにその「問題」を解決することで一段と管理レベルが上がる、という改善につながるというように考える。

しかし中国では「問題」を悪と捉え、「問題」が起きれば直ちにその「問題」の責任を追求するというに慣れている。中国的個人主義的な考えをする国柄では個人の成果を評価することの裏返しに個人の責任を追求することも多いのである。したがってできることなら「なかったことにしよう」が起きる。

このような「なぜ？」に結びつくズレは、日常のビジネス場面、生活場面でも事の大小こそあれ毎日のように日本人と中国人の間で起きている。そこで本稿ではさらに分析を進めるため、「ジョハリの窓」風のフレームワークをおいてみることにする。

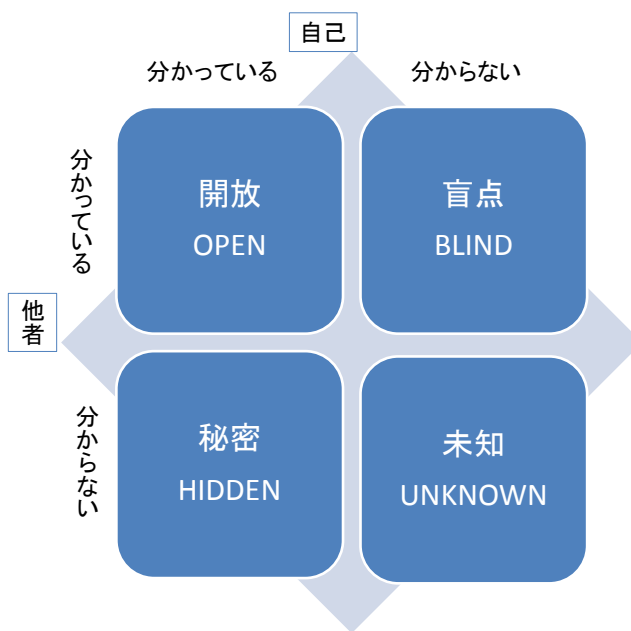


図 59 ジョハリの窓 (安藤清志・大坊郁夫・池田謙一(1995)『社会心理学』: 51 頁より著者作成)

「ジョハリの窓」は本来、自分自身を自分からみて分かっている、分からない、他人か

らみて分かっている、分からないの四つの領域に分け（図 59）、それぞれ「開放(OPEN)の窓」「盲点(BLIND)の窓」「秘密(HIDDEN)の窓」「未知(UNKNOWN)の窓」と呼ぶ。「開放(OPEN)の窓」は自分も他人も分かっている自分、「盲点(BLIND)の窓」は自分は分かっているが他人からは分かっている自分、「秘密(HIDDEN)の窓」は自分は認識しているが、他人には知られていない、隠している自分、「未知(UNKNOWN)の窓」は自分も他人も気づいていない自分ということになる。このモデルにおいて「開放の窓」を広げていくには2つの方向がある。すなわち自己開示を進めること（「秘密の窓」を小さくする）で他者とのコミュニケーションを活発にし、そのことに対する他者からのフィードバックを通してそれまで気づかなかった自分を自ら認識すること（「盲点の窓」を小さくする）である。人は他者に対して自己開示することで、自分自身をより「知る」ようになり、これが個人の精神的健康を維持する一つの条件となる<sup>224</sup>。また自己開示を通じたコミュニケーション能力の向上は能力開発の重要なポイントとなることから企業内での研修などにも応用されている。

さて「ジョハリの窓」は自己及び他者を軸として自己を分析するが、ここでこのフレームワークを参考に日本人、中国人を軸とした視点に置き換えて展開を試みる。そうすると、日本人も中国人も分かっている窓、日本人は分かっているが中国人には分からない窓、中国人は分かっているが日本人には分からない窓、そして双方がまだわかっていない窓という四つの窓が想定される。そして、日本人は分かっているが中国人には分からない窓を日本的な「暗黙の了解」の領域、逆に中国人には分かっているが日本人には分からない窓を中国的「潜規則」の領域と呼ぶことにする。この日本人だけが分かる「暗黙の了解」と中国人だけが分かる「潜規則」の窓を小さくしていくことが相互理解、コミュニケーションの円滑化につながることは「ジョハリの窓」同様、容易に理解できる。なお、ここでは本来「ジョハリの窓」が想定した自己の意志によって開示する、隠すといったことやあくまで自己が分析の対象であることはいったん考慮から外しておく。

高速鉄道の事故処理方法の事例は中国人には「分かっている」が日本人には「分からない」行動である。つまり「潜規則」の領域に分類される。ここでは「大きな問題を小さくし、できればなくす」という中国式問題解決思考に起因するものという理解がないと日本人には「分からない」。

言うまでもなく、この「暗黙の了解」と「潜規則」の領域が大きいと相互理解を妨げ、

---

<sup>224</sup> 安藤清志・大坊郁夫・池田謙一(1995)『社会心理学』: 51 頁。

誤解を生む温床になる。お互いにその考えがわかったからと言って全て同意できるものではないが、異なる考え方があるということとその内容をまずは理解することが必要である。この出発点がなければ、一步も前には進まない。もともとそれぞれの文化の中で育った者どうしが何らかの関係をもち相互理解を深め、行動をしようとするのだから当然のことである。では、この中国的「潜規則」領域や日本的「暗黙の了解」領域にはどのような項目が考えられるのであろうか。

#### (4) 中国的「潜規則」の領域

中国における「潜規則」<sup>225</sup>、これは日本人を含め外国人にはなかなか理解できない。本稿では、①共産党の独裁体制によると考えられる事項、②中国人の面子を重視する行動によるもの、③個人主義的な行動に駆り立てる要因、④中国人の「ウチ・ソト」意識という四つの面からみていくことにする。

##### ①共産党の一方独裁

中国は 1949 年以来共産党の一方独裁体制である。このことは誰もが承知しているが、これが一般のビジネス場面や日常生活の場面にどんな影響を及ぼしているのだろうか。この政治体制が日本、欧米諸国とは異なるために中国人には当たり前、外国人には分からない、が現出することがある。独裁体制は、立法、行政、司法の三権にそれを指示、指導する立場に共産党があるということで成立している。立法は全人代（全国人民代表大会）、行政は国務院、司法は人民法院と管掌は分かれているが、すべて党の指導のもとにある。軍隊である人民解放軍ももとは共産党の軍隊であって人民共和国の軍ではない。

中国の伝統的な「易姓革命」という考えに基づけば、現共産党政権も人民の信頼を失ったときには、政権を継続することが困難になり、新たな考え方の政権を「天」がつくるということは認識しているだろう。13 億余りの人民の生活を保証し向上させることのみが政権を維持していくことにつながる。年率 10%以上の経済成長を続け、近年は低下したとはいえ 7%程度の成長を確保することは、これくらいの伸びを確保しなければ 13 億の人民に

---

<sup>225</sup> 本章（2）参照

恩恵が行き渡らないということである。日本のようにゼロ成長や 1,2%ではもたない状況である。

1970年代に日本を含む諸外国を視察したとき鄧小平は当時の中国社会の遅れを痛感し、このままでは中国は立ちいかないことを認識し、「改革・解放」路線に大きく舵を切り農業、工業、国防、科学技術の「四つの近代化」を進めた。さらに1992年には天安門事件（1989年）で民主化運動を弾圧したことから保守回帰が強まりつつある雰囲気の中で「南巡講話」を実施、これによって改革開放、市場経済推進路線の継続、強化を再度指示、方向性を改めて指示した。

この1989年から92年の4年は中国共産党にとって大変重要な時であった。

1989年はそれまでの世界の共産主義諸国にとって悲劇的な年になった。「東欧民主化革命」<sup>226</sup>でソビエト連邦の衛星国であった東欧各国の共産党政権が崩壊し、民主的な新体制が誕生した。まず、ポーランドのワレサ議長率いる自主管理労組「連帯」の登場である。「連帯」はその名の通り、もとは労働組合であったが次第に民主化運動の主役になっていった。反体制の「連帯」と政府で公開協議が何度も行われ穏健的な民主化への移行が実行に移された。

ハンガリーは共産党政権のもとで複数政党制を導入して党と政府を分離し、共産党の指導性を破棄した。さらに経済面では西側の資本を積極的に導入し、またオーストリアとの国境も開放した。

東ドイツはハンガリーとオーストリアの国境が開放されたことで一気に民主化に向けて動く。それまで東ドイツでは同じ共産圏のハンガリーとの往来は許可されていた。が、このことでハンガリーを経由して西側のオーストリアへ行き、さらに西ドイツへという大脱出ルートができ、実際に市民が大挙して移動した。この「汎ヨーロッパピクニック」<sup>227</sup>と呼ばれる市民の流れに、政権側の鎮圧はきかず、「ベルリンの壁崩壊」が起こり、翌1990年に東西ドイツの統一が成った。

ベルリンの壁の崩壊は東欧民主化の流れを一層加速した。チェコスロバキアでは、民主化勢力が共産党政権との話し合いによって、一党独裁の放棄と複数政党制の導入を決めた。極めて穏健な手続きによる民主化であったことから「ビロード革命」と呼ばれている。

ルーマニアでは武力衝突によって民主化が成された。共産党政権の最高指導者チャウシ

---

<sup>226</sup> 東欧革命全般については、マイヤー、M. (2010)『1989 世界を変えた年』を参照した。

<sup>227</sup> マイヤー、M. (2010) 前掲書：176-186頁。

ェスクを殺害することで、事は決まった。

こうして 1991 年 7 月、ワルシャワ条約機構が廃止され、12 月にはソビエト連邦が崩壊する。こうして、米ソを核とする東西冷戦は終結し、以後アメリカの単独覇権という一極体制が明確になった。

ガルブレイス, J. K. (1992) はその著『満足の文化』で共産党政権崩壊の原因を、一つは計画中心の硬直的な経済政策体制では消費者の意向に沿ったサービス、需要の変化を満足させることができなかつたこと、二つ目は社会が機能するために必要な人々—科学者、ジャーナリスト、大学教授、芸術家、詩人や特に学生—は社会への参加が必要なのだが、これらの人々に沈黙を強いたり統治制度から締め出したりすることが不可能なのだということを十分に認識できなかつたことにある、また「表現の自由」や「市民の政治参加」は建前上確保されていても経済発展がある点を越えるとそれらは社会的に不可欠なものになり、政治的に押しとどめておくことができなくなるということが理解されていなかつたと分析している<sup>228</sup>。

この時、「満足せる人」すなわち共産党政権の指導者たちは、「満足していない人々」が「満足せる人々」になろうとすることを拒否したのだが、「満足していない人々」は国境を接する西ドイツなど西側諸国が物質的、文化的にどのような生活水準にあるかを承知していた。自分たちもそうなりたいのになれないのは体制の責任だと考えた。このことは自然なことであった。

同じ時期、中国でも民主化運動が起こる。が、共産党中央はこれを武力で制圧した。1989 年 6 月 4 日の天安門事件である。東欧での民主化運動は共産党独裁政権の崩壊という結果をもたらしたが、中国ではそうはならなかつた。今なお共産党の一党独裁は続いている。それはなぜなのだろうか。

中国は毛沢東の死後すなわち文化大革命終結後の 1979 年以來改革開放政策をとっていた。が、内部では保守派と改革派の主導権争いが続いていた。

改革派の胡耀邦は鄧小平の信任を得て、1981 年に党主席に就任し（82 年には総書記）、改革開放路線の指揮をとっていた。86 年に「百花齊放百家争鳴」（批判も含めて様々な意見を発表する）のスローガンを建て、言論の自由化を推進しようとした。しかし、これは共産党一党支配を揺るがし共産党エリートの地位や利権を損なうとして、胡耀邦路線の行き過ぎを批判する保守派、長老グループの存在が次第に大きな勢力となり、ついに 87 年

---

<sup>228</sup> ガルブレイス, J. K. (2014) 『満足の文化』: 17-20 頁。

には胡耀邦は総書記を解任されてしまう。

天安門事件は改革派の指導者と目されていた胡耀邦前総書記が死去したことに哀悼の念を表すため、多くの市民、学生らが天安門に集まり始めたことがきっかけになっている。この民主化要求を武力で鎮圧した共産党中央の内部では事件の後、保守派が勢力を伸ばしはじめる。しかし、改革開放路線を推進してきた最高実力者鄧小平はこの保守回帰の流れに強い危機感を持ち、自ら「南巡講話」を実施し「社会主義自由経済」という旗印を改めて掲げなおした。共産党の一方支配は継続し社会主義体制は変えないが、経済は自由にする。豊かになれるものから豊かになってその富を社会に還元せよ、という主張である。この経済面での方針転換は民主化を求めて生活水準の向上を目指した運動と方法論は異なるもののおおむね目標は合致する政策である。ガルブレイスの分析した社会主義崩壊の2つの要因のかなり大きい部分に実質的に対応したものとなった。

その結果豊かになった人々、つまり「満足せる人々」が次々と誕生した。そのプロセスの中で改革・開放政策開始当初からの懸案であった「国有企業改革」も重要な政策のポジションを占めていた。これらの企業を基本的には民営化することで効率的で需要に柔軟に対応できる企業に生まれ変わらせることを目指した。中には国有企業のもつ建物、設備、これらは当然国の資産だが、これらを市況に比べ極端に安い価格で新しい事業者売却し、買主はそれだけで大きな利益を得る。このような副作用もあったが、ともあれ国有企業改革の名のもとに民営化は推進されていった。こういうしかけによって、「満足せる人々」を徐々に増やしていくことに成功した。

もう一つの民営化の副作用は失業者の増加である。民営化とはすべての経営にかかわることの結果を自ら負わなければならないことでもある。従来の国有企業では効率の悪さが問題であった。もし同じ事業を同じようにするだけなら、より少ない人数でやるということになり、失業者が発生する。このことは社会的には大きな問題となる。そのことは間違いないが、ガルブレイスは「下層階級なしには社会は機能しない」<sup>229</sup> とする。単純で退屈な作業、重筋作業、農作物の収穫、社会のサービス作業など、決して愉快でない仕事を「満足せる人々」はやらなくて済む。ここには影響力の比較的大きい「満足せる人々」の政権に対する批判を減少させるという裏がある。

現在に至るも依然として「言論の自由」や「政治への参加」は事実上閉ざされた状態にある。個別に不満があっても全体としては、あるいは相対的には「満足せる人々」が引き

---

<sup>229</sup> ガルブレイス, J. K. (2014) 『満足の文化』: 41-45 頁。

続き漸増している状況であり、天安門事件のあとも、民主化を求める活動、事件や政府に対する抗議活動も各地で散発しているが、大きなまとまった勢力にはなっていない。これを経済成長による「満足せる人々」の増加の証左とみるか、あるいは地下にたまったマグマのようにエネルギーを蓄えている状況なのか、いずれにせよ貧富の格差の問題や共産党幹部の腐敗の問題がある沸騰点を越えれば大きな爆発を起こす可能性は否定できない。

こうして、東欧で起こった民主化革命は中国では共産党のというよりは鄧小平のリーダーシップ、対応によって回避され、社会主義市場経済体制の推進という方向性が明確になった。

その後、後継の江沢民は「三个代表」という理念を発表、共産党は中国人民の生産力、文化、人民の利益を代表しなければならないとし共産党への信頼、支持を確保しようとした。胡錦濤は「和諧社会」を提唱した。鄧小平の「黒猫白猫論」<sup>230</sup>「先富論」<sup>231</sup>に導かれた改革開放があまりにも急速に拡大した結果、貧富の差が急拡大、とても共産社会の理念とは相容れない状況に至ったことから「和諧」、すなわち調和のとれた社会づくりを目指した。そして現、習近平体制は「中華民族の偉大な復興」を掲げ、世界の中での存在感をさらに高めようとする一方、党員の腐敗・汚職については厳しい処置を取り、国民の信頼を確保しようとしている。このように共産党政権は国民生活の向上による信頼の獲得をめざして内政、外交戦略を展開している。「易姓革命」が生まれないように。

独裁政権であるから、政権に批判的な者は排除する。「言論の自由」は事実上制限されている。2013年広東省の週刊誌『南方週末』の新年の社説を共産党広東省の宣伝部は内容の変更を指示、『南方週末』はこの要求に対応した<sup>232</sup>。また民主化活動への制限は引き続き厳しい。2010年の民主化運動活動家のノーベル賞受賞への反応である。受賞者はその活動により拘束、投獄されていた。選考段階、受賞が決定した後も国際社会に向けて厳しい反論を示した。

---

<sup>230</sup> 政治面では中国共産党の一党独裁、経済面では生産力拡大を目指し対外開放政策を取った。生産力増大のためにはイデオロギーに拘らず「白猫であれ黒猫であれ、鼠を捕るのが良い猫である」と考えた。もともとは人民公社の改革のため、一定量以上の収穫があれば、その分は個人の所有とし生産力の増大を図ろうとしたことから始まる。(伊藤正(2012)『鄧小平(上)』: 271頁。)

<sup>231</sup> 鄧小平の改革開放の原則で「できる者、地域から先に豊かになれ、そして模範を示し遅れた者、地域を助けよ。これは先進地区の義務である。」(平野聡(2014)『「反日」中国の文明史』: 235頁。)

<sup>232</sup> 社説は政治の民主化、言論の自由、人民の権利向上を求めるものだったがこれを修正した。(ウェブサイト: 櫻井よし子オフィシャルサイト(2015)「南方週末事件、習近平体制の揺らぎ」, ウェブサイト: Wikipedia(2015)「南方週末社説差し替え事件」, ウェブサイト: WEDGE Infinity「南方週末事件「共産党 VS 記者」全面対決の結末と「深い意義」より)



このように「言論の自由」は表面上認められてはいるが、事実上「検閲」によって規制されている。大多数の民間人からすれば、このような状況下で共産党や政治姿勢に対して別の考えを表明する、まして反対意見を述べるなどはそのリスクを考えれば慎重にならざるを得ない。

オリンピックで金メダルを取った選手が CCTV（中国中央電視台）のインタビューに答える時、最初に口にする言葉は「党の指導のおかげで・・・」である。チームのメンバーやコーチ、また家族などは後回しである（在日中国人談）。党の要人が地方に出れば、その車列が通る前から道路は封鎖され、大渋滞が起こる。党は法（交通ルール）の上にいるのだから、「守らない」というよりは「ルールは関係ない」のである。また、通行は事前に予告されない。従って、突然の交通マヒに巻き込まれた側は大迷惑だが、「いつものこと」である。故に庶民が赤信号をちょっと無視し、横断歩道でない場所を横断し、多少逆走することや二重、三重駐車などはこれに比べれば大したことはない。党が守らないのにどうして庶民が守らないといけない？と考えている。

権力を持つ党あるいは党員である有力者に自分のプラス、メリットが生まれるように動いてもらいたいと思うのはごく自然である。その結果、何にしても自分の好意を相手に伝える方法として最もわかりやすい方法としての贈収賄事件が多くなる。これはいいことではないがこの流れの中にある。中国では贈収賄イコール悪とは考えていないのではないかとすることさえある。まず件数が多く、日常的に大きなものだけがニュースになっている。表面化するだけでも結構ある。実際上の数は正確なところはよくわからないが、2013年は17.2万件の案件があったという情報<sup>233</sup>もある。これだけ日常化するという事は、贈収賄は悪という認識はあっても、そのことによって得られるであろうメリットと比べてリスクをとるかどうかで判断しているように考えられる。つまり、メリットの多少に関わらず頭から悪と決めつけるのではなく、現実的な判断をしている。

先ごろ話題になった「シャドバンキング」<sup>234</sup>は政府の規制が生んだ経済問題とも言える。これは世界経済を今や牽引している中国経済の崩壊につながるかもしれない、ひいては世界経済にリーマンショック以上の打撃を与えるかもしれないと言われていた。中国の銀行の貸出金利、並びに預金金利は中央によって決められている。銀行が独自の判断をする余地はない。一方で各地方政府は中央からその年の経済成長率の目標達成を指示されて

<sup>233</sup> 江原規由(2014)「中国における腐敗の現状その対策」『季刊 国際貿易と投資』95；132-161頁。

<sup>234</sup> 丹羽宇一郎(2014)『中国の大問題』：70-74頁。ウェブサイト：東洋経済オンライン(2015)「「銭荒」と、高めの金利を容認する政府」

おり、その達成のための投資が必要になり、各地方で大型のプロジェクトが計画される。その資金はということになると、銀行からの融資をあてにし、銀行は預金者からの資金をあてることになる。預金者は政府の決めた預金金利では最近の物価上昇率すら確保できない、もっと利率のいい金融商品を求め、そこに投資しようとする。それが「理財商品」と言われるこの時問題となった金融商品である。地方政府にとって、本当に必要な投資かどうか、それも最低限の金額で効率のいい投資かを判断するがそれ以前に中央政府の指示する経済成長達成を目的とする投資だから、その投資を回収できるかどうか問題となるが、それは甚だ心もとない状況にある。これが回収できなければ大変なパニックとなるから「シャドーバンキング」問題が浮上したのである。ここにも中央政府の「政策」とそれに対応する地方政府の「対策」が生んだ危機が潜んでいる。

なにせ 13 億の人口を統治する独裁政権であるが故に国民の側から見れば、政府の政策を待って対策を考えるという「上有政策、下有対策」（上に政策あり、下にそれに対抗する対策あり）にならざるを得ない。国民自らが選挙を通じてトップを変えるということもできない。党を信じその上でしかるべく対策をとるしか選択肢はないのである。

これらは日本や欧米社会が大切にする「自由と民主主義」の立場から見ればおかしなことだが、13 億の人々を幸せに導くための「独裁による社会主義」体制から見れば、「自由と民主主義」は国家の崩壊につながりかねない無責任な思想だということになる。このことをまず認識する必要がある。

## ② 面子を立てる

日本でも同じ意味で「面子」を使う。「顔を立てる」「顔をつぶす」「面目ない」などであるが、中国人は感じる重みが異なる。中国人は日本人が思っている以上に「面子」を大事にする。似たような用語、使い方だけに誤解を生みやすい。

加藤はこの面子のもとには儒教の名分論にあるという<sup>235</sup>。社会は身分階級の差があることを認めその秩序が保たれるためには人がそれぞれに与えられた身分、つまり「名」をもち、その身分に応じた「分」が求められる。この「名」「分」は不可分であるが、この「名」の部分で面子の観念を発達させた。しかし次第に形式化、形骸化し「名」と「分」が乖離す

<sup>235</sup> 加藤隆則(2011)『中国社会の見えない掟』: 31 頁。

ると現代的には世俗権力と結びついた「名」が肥大化したといういびつな形の面子になっている、と述べる。

2012年9月、日本政府が尖閣諸島の国有化に踏み切る直前、ウラジオストクのAPECの会議場で野田首相と胡錦濤総書記が立ち話をしている映像が流れた。この立ち話の内容は明らかになっていないし、想像の域を出ないが、仮に時の日中関係の状況から見て尖閣の国有化に関するコメントがあったとすれば、APEC会議終了後直ちに国有化を実施したことは、大いに中国側のそれもトップである総書記の「面子」をつぶした<sup>236</sup>ことになってしまう。このこと自体のよし悪しは別としても中国側の「面子」という点では大事件である。

次元は異なるが、要職にある人物の子弟が事件、事故をおこした場合、その事件、事故そのものが公にならないことが多いという（在日中国人談）。加害者、警察、被害者間で裏取引が行われ解決してしまうのだ。先に述べた、問題の矮小化という中国式問題解決法でもあるが、このことが公になれば「要職にある人の面子」をつぶすことになる。それを回避するための処理である。

身近なところでは、会食などの席では誘った方が全額支払いをするというのが常識である。これも誘った人の「面子」を立てるということである。割り勘はない。誘われた方は別の機会にお返しをするというのが通例である。宴席を設けたのは、その人と付き合っていきたい、もっとお互いに知り合いたいと思うからである。形式的な会合ではなく、相手を信ずるに足るかどうかを見極めているとも言える。仕事は仕事、宴席は宴席ではない。ビジネスの前に人間関係の構築が必要ということである。少し大げさに言えば、人脈というのは「安心のネットワークづくり」である。個人レベルで困ったときには助け合い、互いに役立つ関係づくりを大事にする。言い換えれば政府や企業が個人を守るということをしないということでもある。

今話題の「爆買い」と言われる中国人訪日観光客の多額の消費は普段手に入りにくい、あるいは手に入っても国内では高額になる、品質に定評のある日本製品をこの機会に大量に買い込むとともに、旅行土産として親類、縁者、それに人的ネットワークの人たちに渡し、その人たちに対して面子を保つという一面もある。

またビジネスの場面では部下を皆の前で叱責してはならない。今では日本でも気をつけるようになってきたが一昔前は日本人社会、企業ではよくあることであった。日本人、企

---

<sup>236</sup> 丹羽宇一郎(2013)『北京烈日』: 22頁。

業も海外での仕事が増加するにつれ、こういうことにも注意を払うようになったが、まだまだ形式的に注意しているだけであって、各国の人の価値観まで踏み込んで理解した上でそうしているかと言われれば、まだ心もとない状況であろう。日本では叱責を「育成」のためと勝手に思い込んでいるが、中国では「面子つぶし」、ちなみに欧米では「屈辱」である。

面子というのはつまるところ、自分がいかに重要な人物であるかを認めてもらいたいという欲求の裏にある。ビジネス場面で言うと、日本的チームワークとは対極になってしまう。仕事の成果はどの個人によってもたらされたかを明確にすることは、頑張った個人の面子をたててあげることになる。すなわちモチベーションを大きく高めることにつながるのである。逆の面から見ると、できそうにないことにチャレンジする意欲は低い。うまくいかないと「能力がない」と判断され、個人としての面子を傷つけられることになる。したがって失敗するとそれを「隠す」、あるいは「(失敗は)自分のせいではない」という言い訳が必ずついてくる。チームとしての成果、日本人はこれを大事にするが、中国人はその曖昧さをあまり評価しない。

このように国家レベルから個人レベルまで大小の差はあれ、個人の「面子」を意識しながら生活している。

### ③ 為我主義的個人重視の行動規範

現在の中国人の行動を見ていると、個人重視の考えに基づくことが目立つ。東洋思想と西洋思想という括りをする、東洋思想が人と人との関係を重視するのに対し、西洋思想は個人の自由、平等、人権を大切にすると考えられてきた。しかしながら現在の中国はむしろ伝統的な東洋思想を離れて、独特の個人中心的考えをしていると考えられる。「独特の」と表現するのは、西洋思想の個人主義の背景には神との契約、罪と罰の文化がある。しかし中国では、思想的にはやはり東洋文化の伝統を持ちながらの個人中心主義であるという意味である。これを為我主義的と呼ぶことにする。為我主義というのは中国戦国時代の諸子百家の一人、楊朱<sup>237</sup>の説である。孔子、孟子らの儒教に対する老子、荘子の思想という

<sup>237</sup> 宇野哲人(1980)『中国思想』: 135-138 頁。

合山究(1991)『故事成語』: 241 頁。「荀子」に「楊朱、岐に泣く」という成語が紹介されている。徹

見方をすると楊朱は老荘の流れにあると言える。自己の主体性を確立し、社会的なものには干渉されない純然たる個人主義をとる。個人として充実した人生を過ごすことが自然であり大切であるとした。ずいぶん身勝手な説とも見えるが、明日はどうなるかわからないという戦国時代のなかにあって個人がどう生きるかという一つの解であったろう。老子思想の中核となる「清静恬淡」<sup>せいせいいてんたん</sup>「無為自然」も心が静かで落ち着いていて誘惑や欲を捨てる、自然に任せ人為を交えない生き方を言っていることからするとそのつながりを理解しやすい。

先に述べた交通ルールの不遵守などは上が守らないからということはあるとしても、社会の安全確保優先するという意識があれば行動は異なるはずである。何かを買うための、例えば列車や飛行機などのチケットの行列なども大都市では最近はかなり改善されてきたが割り込みはよくある。また、チケットを買うわけでもないのに、係員としゃべりはじめ、列に並んでいる人はうんざり顔ということもよく見かける光景である。道路をはじめ公共の場所にゴミをすてるのはかなり当たり前の感覚、というのは一方で掃除することを職業とする人がかなりの数いるということがあるかもしれない。

このあたりの問題意識は相当以前からあった。90年代の半ばころ、上海を訪れた当時の虹橋空港にある立て看板があった。また街中でもよく見かけた。書いてあるのは「上海市民“七不”規範」(上海市民のやってはいけない七つのこと)として、

- 一、不随地吐痰 (そこらに痰を吐かない)
- 二、不乱扔垃圾 (ゴミをポイすてしない)
- 三、不損坏公物 (公共物を壊さない)
- 四、不破坏绿化 (緑を壊さない)
- 五、不乱穿馬路 (みだりに道路を横切らない)
- 六、不在公共场所吸烟 (公共の場所でタバコを吸わない)
- 七、不説粗話○話 ○は月々に庄 (汚い言葉で話さない)

つまりは、こういうことを守りましょうという政府の呼びかけがあった。ということはそういうことができていない実態があったということを知っていたということであり、実際にそうであった。この看板はかなり印象的だったのでよく覚えている。また 2010 年

---

底した個人主義者であった楊朱が一度だけの人生を真剣に生きようとして、岐路に立った時一つの道を選ぶことで他の道を捨てることへの感傷などが号泣に至らしめたのであろうという。

の上海万博開催にあたってこの“七不規範”は復活した。これはそうは言ってもなかなか定着しなかったということでもある。

これらの事例は「公」の意識の違いや「ルール、規則」に対する考え方の違いから来ていると考えられる。前にも少し触れたが「公」というのは個人のつながりの集合体であって、あらかじめ社会全体、みんなのための「公」という概念があるわけではないのである。だからルールや規則についてもそれを守るかどうかは個人の判断に属するのであって、守らなかった場合の罰則とそのリスクを負っても得られるであろう利益とのバランスで個人が判断するということである。

ビジネス場面でも日本人からみれば、「分からない」行動がある。教えられたこと、もらった資料はその個人に属してしまう。教えた側としてはその人をキーにして部下や横に展開されることを期待するのだが何もしなければ残念ながらそうはならない。その財産は個人のものである。部下や横に展開することは自分のポジションを危うくする危険があると考える。これは解雇や転職が日常的なことであり、労働雇用環境が安定しない国では当然のことかもしれない。したがって、個人力を高めるために知識を得ようとする意識は強く、そのことについては非常に努力をする。その意欲に応えようと懸命に育成してどうやらものになりそうという時になって、あっさり転職、ということもよく見かけるパターンである。「レベルがあがったのに給料が上がらない」とか「自分が発展する空間がなくなってきた」というのがその時の主たる理由である。今は多少の不満はあるが、長期的に考えて今辛抱しておけば将来いいことが必ずあるだろう、とは考えない。今、いいことがなければならぬ。自分を活かすことが組織の役割である。活かさなければ活かしてくれるところに行く。日本人のように組織優先で物事を考えない。組織全体のために個人が辛抱しないといけないこともあるという考えはない。日本的発想では組織が先にありそれに個人を当てはめる適材適所を考えるが、中国では個人を活かすマネジメントが必要である。

成果が出たときは、関係者間で成果の取り合いになることもしばしばある。個人の人事評価には神経質である。とにかく現在の仕事に見合った給料が他人との比較においてあるいは他の会社の似たような立場の人との比較において合理性があるかを問題とする。会社の業績と関連づけて考えることはしない。あくまで自分の仕事と給料の関係であって、会社の業績に責任をもつのは自分ではないのだから会社の業績は関係なしである。

#### ④ 「ウチ・ソト」意識と崗位

第2章IVで見てきたように、中国伝統の住居を切り口としてみると、その中には「天命思想」「華夷思想」といった「中華思想」につながる考え方や、現実問題としての戦乱などの社会の混乱からいかにして身を守るかという住まいの上からの知恵、さらにその中で暮らすための必要な役割分担や重要な価値を垣間見ることができる。

「ウチ、ソト」意識は日本人、中国人ともに持っているが、中国人のそれは日本人に比べて、一段と明確で厳しいものであると考えてよい。ソトは場合によっては戦うべき相手になるかもしれない、と考える中国人、ソトは何かいいモノや情報を持ってきてくれるかもしれないと思う対象と考える日本人の違いがある。もちろん、これは大陸と島国といった地理的要件、つまり周囲には異民族がいて常に境界を脅かされる危険がある大陸と海という自然による強力な防衛ラインがあり異民族と接しない日本、さらにはその地域の乾燥した砂嵐などの多い気候的条件なども影響している。

中国人とじかに接する機会のある人には殆ど同意してもらえることと思うが、中国人の「ウチ」「ソト」意識ははっきりしている。重要な朋友のためなら利害を顧みず骨身を惜しまずに協力する。信頼を得ることは簡単ではないが、いったん信頼されるととことん付き合う、こういう行動様式は特定の集団内では大きな団結力を生む。そのルーツには四合院や土楼でのプライバシーなど無い状況の中で、「ウチ」の人に対する信頼がなければともに生きていけないという生死にかかわる環境にあったことが大きな要因であるだろう。逆に「ソト」に対しては、無関心、冷淡、場合によっては攻撃的すらある。

これは中国人に限らず、どこの国でも同じではないかと言われそうである。だれしも気の合う人とそうでない人では交際のしかたが異なるのは当たり前でことさらに違いを強調しなくて良いという意見である。また国による違いよりも、個人差の方が大きいのではないかとも言われそうである。

そういう意見に対してはその国、地域の人々の思考や行動がなぜそうなるのかということの説明しなければならない。それは、その国の人々だけが共通に持つ自然環境やそれに対応しながら生活をしていくのかとか、そこから生み出される歴史的、伝統的な価値観、文化やその時々国家的価値から生まれる行動様式などがその違いを生んでいるという視点が必要である。それが共通理解として認められるならば、その上で個人差というもの理解されるべきであろう。

では中国人はなぜ「ウチ、ソト」意識が他国人と比べてはつきりしているのだろうか。少し極端に言えば「ウチ、ソト」は敵か味方かの区別をする態度である。まず現在を生きる人にも体験的理解として認識される「文化大革命」(1966-1976)がある。この国家的内乱は毛沢東による劉少奇からの奪権闘争と認識されているが、「労働者階級の敵」、つまり地主、富農、反革命分子、右派、知識人を打倒するというものであった。この革命の中で批判対象にされてしまえば、その家族も含めて生命の危険にさらされることとなった。さらにこの革命の先兵となったのが紅衛兵と呼ばれる中学、高校、大学生であった。今日、会社の上司や学校の先生を批判集会に引きずり出した者が明日は批判対象にされてしまうこともある。そういう社会環境の中では人々が人間不信に陥り、誰が味方で誰が敵かを見分けることは生死につながる大問題である。当時、天津市の役人であった王輝は文革時の天津の様子を記したその著書<sup>238</sup>で「回顧に耐えない誤った道」と総括する。

文革だけではある特定の時期の特定の指導者の下で起こった事象と捉えることもできるので、次に少し歴史的観点から見てみる。

そもそも中国 4000 年は、統一王朝と内乱の繰り返しである。中国の歴代王朝には外敵から王朝を守り、政権内部からの崩壊も避けなければならないという基本的使命があった。それができなければ「易姓革命」の考え方に基づいて退場を命じられる。外敵に対しては外交力、軍事力をもってあたるが、勝敗の如何を問わず、結果は受け入れなければならない。しかしながら内部崩壊、つまり裏切りや寝返り、内部の権力闘争の結果による崩壊では悔いが残る結末となる。それを避けるために政権の重要ポストは信頼できる身内で固める。「ウチ」で固めることが常道で、当然の策となる。

この「ウチ」で固める意識の強さは現代日本人から見ると異常な程度に見える。しかし中国人の価値からすると「当然のこと」あるいは「少し変だけれどもしょうがない」といったところであろう。一人の人間が出世し相応の権限をもてば、周りにその恩恵にあやかろうとする人たちが大勢取り巻く。その人の出世のために働いたとして、その権力者の「ウチ」に入ろうとする人々である。事件が表面化すると、「悪」というタテマエを通してくるが、そうでなければ「ありそうなこと」としてそのまま潜在化する。

このルーツはおそらく隋代に始まった「科挙」にある。官吏登用の制度であり、これに合格することは地位と富を保証されることになった。しかし合格のためには四書五経などの古典の深い理解や、中国文化の神髄たる詩や文章能力を高める訓練が必要で、そのため

---

<sup>238</sup> 王輝(2013)『文化大革命の真実 天津大動乱』: 205 頁。



には家庭教師を雇ったりふさわしい学校に通ったり、とにかく「カネ」がかかった。それを親類、縁者が支援をするわけである。だから合格のあかつきにはお世話になった親類・縁者にそのお返しをしなくてはならなかったというわけである。

企業のトップは何を最優先に考えているだろうか。中国では董事会（日本でいう取締役会）というものがある。このメンバーはできれば身内で固めたいと考えている。そこで会社の重要案件、たとえば経営管理層の任免、重要契約の審議、新規事業への投資等が決定される。団結して身を守るため人のつながりを重視し身内で側近を固める、というのは古代からの戦乱を避け、生き残る中国伝統の行為であった。中国の「人治主義」はこのような由来を持つが現代の官僚組織、企業組織にも影響を与えている。

もうひとつ、伝統建築四合院、客家土楼のところで<sup>239</sup>、中国における建築の基本は「壁」にあると述べた。

「壁」のもとになる「辟」という漢字は元々、君主、天子、主人という意味がある。もちろん「かべ」も意味する<sup>240</sup>。ということは、「壁」で囲んだその場所は天子、君主、主人の居る空間ということを表している。

この「壁」を維持するには「見張り」が要る。現在も「崗位」<sup>gangwei</sup>という地位、ポストを示す言葉がしばしば使用されているが、もとの意味は「軍や警察が守るべきところ」「見張り」<sup>241</sup>である。「見張り」という役割は集団を守るためには極めて重要だが、そのことが現代の地位、ポスト、業務の意味に転化した。

ここで「崗位」の現在的意味を見ておく。つまり職位、職務というのは「守るべきもの」というニュアンスを持っているということであり、これから中国の組織構造や組織力学を理解するうえで重要なポイントの一つである。逆に言うと「守るべきもの」を過不足なくやることがいいことであって、やりすぎも良くないのである。

まず、「崗位」という言葉が重要な意味をもつようになった背景から触れておく。共産党の中国が成立して以来、30年間は政治、経済、社会のどの分野においても混乱が続いていた。大躍進政策や文化大革命の影響が大きく人々は貧しさからなかなか抜け出せないでいた。1976年、毛沢東の死去、文化大革命の終結が大きな転換点になる。この状況を打破するため、鄧小平を中心とした指導部は遅れた中国の社会を発展方向に向けるため、農業、

---

<sup>239</sup> 本稿 56-59 参照

<sup>240</sup> 鎌田正・米山寅太郎(2004)『新漢語林』: 1287 頁。

<sup>241</sup> ウェブサイト: 百度百科「崗位」原指军警守位的地方。也泛指职位(著者訳)もともと軍や警察が守る場所という意味だが職務上の地位や役目を指すようになった

工業、軍事、科学技術の「四つの近代化」政策<sup>242</sup>を強化することに大きく舵を切った。その中で農業、工業については従来の人民公社、国営企業の体制では生産性が低く、働く意欲を生み出す力に問題があるとみなされていた。それは、農業分野の人民公社については生産した農作物などはすべて公社の所有、つまり国家のものであり個人の努力が報われるというしくみになっていなかった。そこで、請負制というしくみを取り入れ、一定の量を公社に納めればあとは個人として自由に処分ができる、という形をとった。その結果、一気に大幅に生産性が向上し 80 年代半ばには「万元戸」<sup>243</sup>といわれる富農層が生まれるまでになった。

一方、工業、商業分野で主体となる国営企業の改革は今なお継続して行われているが、当時の国営企業は農業分野と同じく働いても働かなくても給料もなにも変わらない。「大鍋飯」<sup>飯</sup>（中国版の親方日の丸意識。大きな鍋で皆で飯を食う）意識が強く覆いかぶさっていた<sup>244</sup>。ノルマさえ達成していればとやかく言われることもなく、よりいいものを低コストで作るということは必要のないことであった。そこで政企分離政策が採用されたわけだが、これは、国家が企業を所有するが、その企業の経営は企業に任せるという考え方である。すべてが国の指示によって動かされていた国有企業にわずかながら自主経営という要素が入ってきた。その結果、経営責任という重責も企業側に求められることになった。従業員の賃金も従来は働いても働かなくてもそう大差ないということから意欲の低下を招いていたが、この制度では企業側がその賃金の配分について決定していかなければならなくなった。では何を根拠に個人個人の賃金を決めればいいのか、しかもやる気を生みかつ企業活力の源泉となる個々の力量を引き出すことができるのか、という問題意識から生まれたのが「崗位技能賃金制度」<sup>245</sup>なのである。この制度は 1990 年代の中国の企業で多く採用されたため、以下に述べるような考えが改革開放時代の賃金制度として一般に広く理解された。

崗位技能賃金とは、崗位つまりどういう仕事を担当しているか、そしてその仕事を決められた通りやっているかとその仕事を担当するにあたって必要とする技能のレベルはどの程度かということをもとにして決めようとするものである。崗位を評価する視点としては、

---

<sup>242</sup> 1975 年 1 月第 4 期全人代第 1 回会議で周恩来の政府報告で「今世紀内に農業、工業、国防、科学技術の全面的な近代化を実現する」と提唱していた。（天兒慧(1999)『中華人民共和国史』：105 頁。）

<sup>243</sup> 平野聡(2014)『「反日」中国の文明史』：214 頁。

<sup>244</sup> 計画経済体制では計画第一、価格第二。社会主義社会建設の必要に基づき何をどれだけ生産するかを決めるため欠損が出ると国家が計画的に補てんをして解決する。

<sup>245</sup> 竇少傑(2008)「崗位技能賃金制度」『評論・社会科学』86：261-285 頁。

労働技能、例えば技能知識、仕事の複雑さ、取扱い設備に対する知識とメンテナンスに関する能力、次に労働責任の重さ、すなわち品質や生産量に対する責任、さらに労働強度、これはその仕事で肉体的な負担がどれくらいあるかや作業環境の悪さの程度というような事柄を考慮して決めていく。これを中核の概念として、年功や各種の手当を付け特定の仕事に対する個人の賃金を決めていく。

つまり、個人が「崗位」を過不足なく果たすことが、賃金のベースとなる。「崗位」を越えて他の業務をすることは他の人の「崗位」を犯すことになりかねない。ここには日本的な他に忙しい業務があればそれを応援するという考え方は成立しない。したがってチームワークという概念もすんなり中国人の組織には入っていかない。そもそもチームワークという中国語がなかったのである。「団体精神」というような訳もあるがこれも最近のことである<sup>246</sup>。配置転換もそう簡単なことではない。配置転換をしようとする「崗位」に対して何か不都合があったのかという反論に応える必要がある。新しいニーズに基づく業務を追加しようとする、当然それに見合った賃金はどうするのかということは想定しておかねばならない。

「崗位」は日本人にはなじみが殆どない言葉であるが、中国の組織に関わると大きな意味をもつ言葉であることは認識しておきたい。

## ⑤ 個人主義の「米・中」比較

中国人の為我主義的個人中心的傾向を示す事例をあげてみたが、次にアメリカ型の個人主義との比較をしておく。アメリカ型の個人主義は戦後の日本の急速な経済成長が両国間で経済摩擦を生み、構造協議に発展した 1980 年代の後半から 90 年代に日本の集団主義と比較して論じられたことで日本人一般の理解が進んだ。アメリカ人は全ての人々が自他を問わず個人の生命 (Life)、自由 (Liberty)、Happiness (幸福) を重視する。このことこそが、誰にも等しく機会が与えられている、個人の能力と努力によって社会的、経済的に豊かになれるというアメリカンドリームを可能にする原点なのである。一方、日本人に根強くある「武士道」精神は命 (Life) より大切なものがある<sup>247</sup>とし、個人の自由 (Liberty)

---

<sup>246</sup> 王敏(2008)『日本と中国』: 100 頁。

<sup>247</sup> 佐藤隆三(1990)『菊と鷲』: 121 頁。

を犠牲にしても組織、集団のために奉仕することを美德とする。アメリカは移民の国であるために人の移動、流動性が高い。これをまとめるための「ルール」を遵守することが国民のコンセンサスである。一方、日本は民族的に同質であり定着性が高いため、「ルール」はかえって他人行儀なもので、ルールが無くても以心伝心でやっていけると考えている<sup>248</sup>。そういった日米間の主に経済関係から生じた摩擦について比較文化の面からの分析があり、日本人にとってもアメリカ人に対する理解が深まっていった。

中国における為我主義的に個人を重視する考え方をまず現象面からみると、先の事例にもあるように自己の成長、発展に大きな価値をおいて行動している点があげられよう。それぞれの専門分野においての知識欲は旺盛であり、現在所属する集団、組織、企業でそれ以上の個人の発展がないとなれば、それを可能とする場を求めて動く。今現在の場で辛抱していれば将来いいことがあると考える日本人には素直には理解できない。これはアメリカでも同じような事情である。アメリカで大学を卒業してもビジネススクールなどでさらに専門性を高め、その能力をもって企業、団体などに職を得るが、やはり個人の能力がその場では発揮できないとなれば、同様に場を移る<sup>249</sup>。この点においては日本が「異なる考え方」を持つ。そこで日本人は「自分を大切にせず、会社、組織のために働いている」と中国人やアメリカ人には映り、真面目で熱心なのはわかるが毎日長時間の残業が当たり前で何が楽しいのでしょうか、と揶揄される。

次に個をとりまく社会環境・階層についてアメリカ、中国、日本の見方の違いを考えてみる。個人と世界の間には身近なところからいけば、家族・親戚、グループ・組織・地域社会、国家といった中間レベルの個人が依拠する集合体なり階層なりがある。個人と国家の考え方はアメリカと中国の間では似たものがあるが、これら中間レベルでは現時点でかなり考え方に差異がある。

まず、個人の周りには家族、縁者、これらは生まれながらにして所与のものである。その次に、居住地域の集団がある。組織、団体、これらは自らの意思によって参加するものである、もっとも組織、団体側の合意のもとで。その外には社会、国家の広がりがあり、その中に個は存在する。では、個人に影響を与える環境要素の中でアメリカ人、中国人、そして日本人はどの要素を大事にしているのだろうか。アメリカ人はこれまで述べてきた

---

<sup>248</sup> 佐藤隆三(1990)『菊と鷲』: 103 頁。

<sup>249</sup> 佐藤隆三(1993)『グローバル・ユーズム』: 30-32 頁。

ように、個や社会の公正さを大事にする。また国家についてはその安全保障に関わるとなれば国民の合意は容易に形成される。過去の太平洋戦争、ベトナム戦争、対テロ戦争などは軍事力の行使を国民が支持、容認している。

中国人は自分の次は自分の周りの家族、縁者を重視する。また自らの利益につながるであろう人々を自らの周囲からはじめて知り合いの知り合いというふうに広げ、いわゆる「縁故」を形成する。中国の人治主義といわれるものがここにある。東洋的な人との関係を重視する思想がその背景となっている。「ウチ・ソト」意識をはっきりさせる中国では自らのために役立つ人的つながり、すなわち「ウチ」の拡大には熱心である。

これまでの多くの日本人論で指摘をされているところである日本人の特徴は身近な人々、集団、組織、世間である。したがって企業や所属する団体に忠誠を尽くすことを通じて、個人の幸福を実現しようとする。最近是个を大切にしようとする世代が増加しつつあり、以前のように典型的な集団、組織指向は徐々に弱まってきているが、チームワークを大切と思わないという人はまだ少数派であろう。世界に誇る日本のモノづくり力は集団としての力そのものである。先の例にもあるように、ビジネスの世界ではこの集団、組織に対する態度の違いが往々にして、お互いの思考、判断に異なる考えをもたらし、とかく「中国人は・・・」とか「日本人は・・・」という不満を引き起こすことになる。企業は中国人にとっては「ソト」、日本人にとっては「ウチ」という見方が概ね妥当であろう。

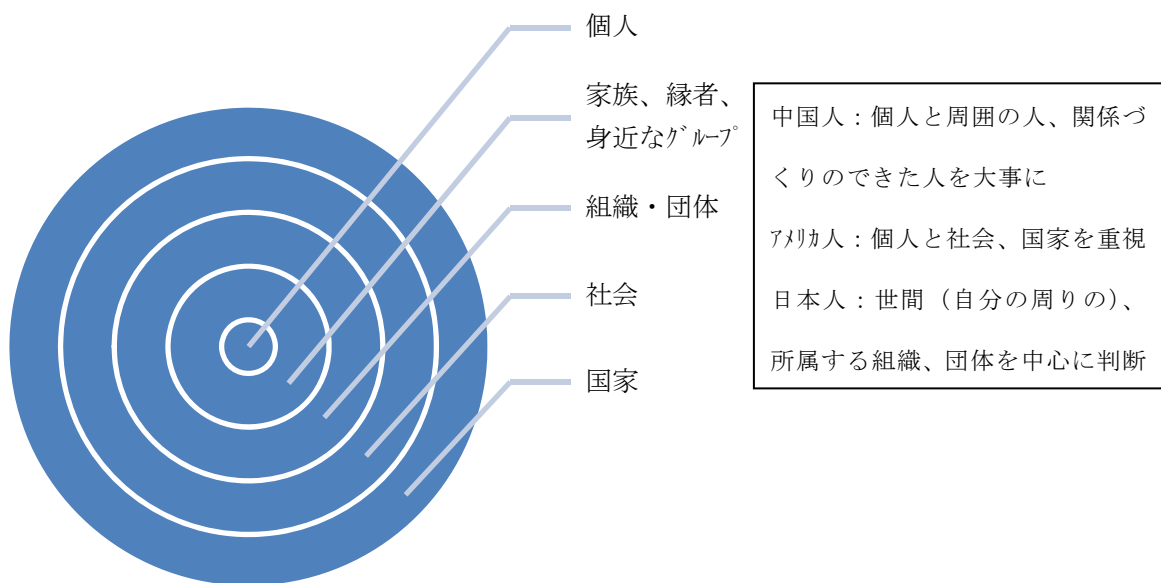


図 60 個をとりまく環境

東洋文化の中心であった中国では儒教的な「人と人とのつながり」を重視する規範が伝統的と考えられるが、四千年の歴史の中で時の政権によって儒教精神が否定されたことが2度ある。一度は秦の始皇帝による「焚書坑儒」である。始皇帝は戦国七雄と言われた群雄割拠の時代に終止符をうち、封建体制を改め郡県制を採用、儒教を否定し法による支配を徹底し歴史上初めての中央集権体制による統一国家を立てた。しかしながらわずか15年で秦は滅亡し、劉邦による漢が代わっていく。漢は儒教を復活させたばかりでなく国教と位置づけ、北方の匈奴、東の朝鮮、南方の雲南、貴州まで版図を拡大し、前漢、後漢をあわせて400年の王朝となった。

もう一回が現共産党政権の「批林批孔」である。共産党政権というよりは毛沢東のと言ったほうが正しいかもしれない。と言うのは、この運動は共産党内部の権力闘争の一環として毛沢東が飛行機事故で死亡した当時のNO.2林彪と儒教的価値観を退けようとしたとも言われているからである。肉親や教師をも批判する文革には孔子の儒教精神は不要だった。文化大革命で暴れる紅衛兵は中高生である。それが自らの親を「走資派」といって批判し、学校の先生を「知識分子」と言って攻撃するわけである。こういう行動をとらせるためには儒教精神は都合の悪い思想だったのである。結果として儒教は完膚無きまでに破壊された。この「批林批孔」運動は、動員大会が各地で行われたり資料が配布されたりした。いずれにしてもこれ以降、殆ど儒教精神を教材とした学校教育は行われてこなかったが、最近になって儒教教育が見直されているようである。

以下はテレビの特集番組からの情報であるが、今中国では「儒教を学ぶ」集会在盛んに行われるようになってきている。市場経済の中で「利」を追求し、その他の価値には目もくれず猛進してきた人々が、とりあえず、所期の目標は達成したものの何かしら心の空虚感が膨らんできたのだと解説している。また彼らの子供たちも豊かな一人っ子であり世間からは小皇帝、小公主と呼ばれているが、やはり「儒教教室」に通っている姿が映し出されている。「批林批孔」運動から40年。「儒教を復活」とは言えないだろうが、実質的に儒教容認、あるいは一歩進めて側面支援という空気が生まれつつあるように感じられる。教育には時間がかかる。国民全体の意識変革には、世代をまたぐ時間が必要かもしれない。この道徳欠如の元が「批孔」でそれを起点とすれば、40年かかって得た病は40年かかって治す。

こう考えてくると中国の為我主義的な個人中心の考え方は、アメリカのように建国以来

の精神に基づくものでもない。そして、現在の個人中心の考え方は「受け身」的な要素が強い。現在の政治・経済の体制下において、そうすることが生き抜くための処方箋なのである。「上有政策 下有対策」の実践である。独裁政権下で言論の自由や政治活動の自由も制限される中で、経済に対する考え方が変わり、市場経済、自由経済を受け入れ「先に豊かになれる者から豊かになる」ことが公認されたことから「我れ先に」現象が起きているとも言える。その結果、個人の利益が公共心、道徳心に優先するためこの項のはじめに述べたような事例が起きている。少し前の文化大革命の時代には国じゅうで紅衛兵による暴力的な批判集会が行われた。批判の対象となれば、その本人はもとより一族関係者も社会的に抹殺されてしまうということだから、中国人の「個」を守る意識が想像以上に強いのは当然である。そして経済面で自由度が増したところへ権力も知恵も集中しているのである。人間は特定の時空の中に産み落とされ、その時空にがんじがらめにされている。人間の価値観はその時空を形成している歴史や文化に圧倒的に制約されるのである<sup>250</sup>ことからすると、現在の中国人の価値観、意識が人民共和国現代史の制約を圧倒的に受けたものであることは間違いない。

中国社会はまだまだ安定したわけではない、これからどうなるかわからないと考えているのは中国人自身であろう。これは不安な状態である。その社会が政治、経済で大きな変化を起こしたとしても自分の安定は少しでも確保しておきたいという為我主義である。それは決して利己主義でもなく、独善でもない。接してみればわかるが個人個人は人との関係を大切に、その範囲の中ではお互いに役立つ存在でありたいと考えている。しかし今は全体としてみれば、中国人が伝統的に本来持ち合わせている文化、価値観とは異なる行動規範が支配的なのではないかと思われる。

#### (5) 日本的「暗黙の了解」の領域

では次に中国人からみれば「わからない」、日本人にとっては「知っている」、「わかっている」領域について述べる。日本人から言えば「暗黙の了解」事項である。

##### ① 集団、組織第一主義

---

<sup>250</sup> 青木人志(2005)『「大岡裁き」の法意識』: 15頁。

日本人の行動様式、思考様式の特徴として「個人」よりも自分の所属する集団、あるいは組織を優先しているということが種々の観点から指摘されている。ベネディクト、R. は日本人はその集団の中でひとりひとりがふさわしい位置を占め、ふさわしい行動をとることが日本社会では重要と述べ、中根は日本社会を理解するカギは「集団のタテ構造」社会にあるとした。日本的集団主義的思考の特徴としては、「私の属する集団は私にどういう期待をしているか」「皆の考え方、行動が同じであることを望んでいる」「同意を得ることができる分野、領域を見つける」ことが挙げられる。このあたりをいわゆる個人主義と対比してみると、個人主義の特徴として「私は自分の意思でこうしたい」「それぞれの考えは違うのが当たり前でありその考えを出しあって議論すればいい」「同意がなければ多数決で決める」ということになる。集団主義的思考は日本のように文化的に価値観が近ければ成立しやすい。一方、多民族の集合体では文化的に複雑な状況になり、一定のルール、規範を伴った個人主義が成立しやすい背景となる。日本は前提条件として島国で共同作業を必要とする農耕・漁労民族であったと考えられてきた。外敵の侵入もなく、皆で仲良く農耕・漁労に精を出していれば安定した生活ができた。考えようによっては幸運な民族である。つまり、典型的な「集団主義」が成長する背景を持っていた。というより、それしか適合する考え方がなかったのかもしれない。これは集団から外されること、「村八分」では生きていけないことを意味している。同調性を大事にすることが生きることだったのである。

このことは、中国人からは理解しにくい。中国は長い歴史を誇るが、その歴史は戦いの歴史である。「天命思想」「易姓革命」の考えがなければ、中国は中国でなかったかもしれない。秦の始皇帝による中央集権国家成立以来、孫文の辛亥革命まで 2100 年にわたって皇帝制が続く。その間、漢民族以外の異民族が支配した期間はモンゴル族の「元」と満州族の「清」を合わせて 380 年、さらに各国が覇権を争った魏晋南北朝や五代十国の時代も 420 年。現在では漢民族を中核とした 56 民族からなる国であるが、今もチベット族、ウイグル族の地域では政情不安が伝わってきている。これとて、中国ではそう大事件として捉えていない。つまり、中国は多民族で人口も 13 億人、版図も王朝の強さによって変化してきた。流動性の高い国家、国民である。したがって先の日本社会の特徴が集団主義に適したものとすれば、その前提条件は大きく異なっており、特に現在の中国の「我れ先に」「豊かに」競争の状況を合わせて考えると集団主義の成熟は当面はないといって過言では



ない。

さて日本に話を戻すと集団主義は日本人にとっては当然の領域だが、中国人にとっては見えない領域である。このことを日本人は理解しておかなければならない。あわせて「なぜ日本人がそう考えるのか」ということを改めて説明可能なレベルで認識しておかねばならない。「暗黙の了解」のままにしておいてはいけない。

こういう集団主義的日本システムは企業組織の活動の中で多く見ることができる。意思決定システムとしてのボトムアップ、稟議方式が優勢でトップダウンは少ない。したがってある程度の時間が必要で、他からは「遅い、なにをやっているのか」と映る。合わせて、根回しによる事前の意見調整方式とそれを前提とした会議の形式化がある。チームワークを大切にし、たとえ結果オーライでも個人プレーは望ましくないと考えている。

問題を改善の智恵を出すテーマととらえ、個人の責に帰すのではなく、全体の仕組みや手順の解決すべき課題とする。このような経営システム、しくみが機能している。また組織に対する忠誠により、実績を積み社会的なポジションを上昇させ、以て個人の幸福につなげるという公式が、最近になって変容は見られるものの基本的にはあるいは相対的には日本企業の特徴として挙げられる。人の認識の方から見ると、会社や所属する団体、集団に寄せる最も端的な事例は自己紹介の時のあいさつ、「〇〇会社の××です」、必ず所属する社、団体がまず重要なのである。欧米人の”My name is ××、Nice to meet you”とは一味違う。

〇〇を言うのは日本人。

## ②曖昧さを以て美德とする

日本人の曖昧さ、意見をはっきり言わないあるいは何を考えているのか分からないという外国人からの評価は定評となっている。そしてこのことが日本人社会の特徴に根ざしたものなら、意識しつつまた訓練していかないと無加工のまま外国人に比較すれば個の差はあるものの平均的には「そうだ」と結論されてもやむを得ない。

共同作業、移動が少なく与えられた場も安定している社会の中では、争いは共同生活に重大な支障をきたす。集団の構成員全体がその当事者でなくとも争いは不快な感情をもたらす。また、対立する一方に肩入れするなど立場を明確にすることは対立の激化を惹起し

かねない。現在でも人気の高い大岡越前守のいわゆる「大岡裁き、喧嘩両成敗や三方一両損」など、場を「丸く収める」手腕に視聴者が拍手喝采を送るのである。つまり白黒をはっきりさせないことが良策なのである。

対立、争いが起こってしまえば大岡裁きを上策とする。そして対立予防策としての幼少時からの親の教育がある。典型的には「そんなことをしたら笑われるでしょ」「恥ずかしいでしょ」等の言い方は、「注意深く周囲の空気を読んで行動、発言せよ」「そんなことを言ったら何が起こるかを事前に考えよ」と教えているのである。対立が起きる可能性の芽を出させないようにしている。「空気を読む」は現在の若者の単なる流行語ではなく日本人共通の大事な能力、ただし日本の中のある限定された社会で生きていくための能力である。

この曖昧さがビジネス場面でよく具現化するのが「契約」文書である。実にこの点においては維新後西洋から法の体系を持ち込んだ時に日本人の「曖昧に」「丸くおさめる」意識とは相当の乖離があった。西洋の体系は契約上の権利、義務が詳しく規定されることが良しとされるのに対して、日本人の考え方では紛争が起きた時にその時その時の状況に合わせて最善の解決しようとする。そもそも明治の初めに西欧流の法体系を整備しようとするときに「権利」ということば自体が日本には存在していなかったのである。つまり文言でいうと「紛争が生じた場合には互いに誠意を以て協議するものとする」ということになる<sup>251</sup>。これを日本の契約文書は多用するが、欧米人にも中国人にも理解できない。

そもそも、「協議する」では何も契約上は決まっていけないのでは非常に不安になる。紛争が起きた場合にとんでもない要求をされるのではないか、そもそも「誠意」とは具体的にどういうことかとか不安が尽きない。欧米人も中国人もたとえば保障の上限が決まっているとか、計算式があるとかそういう具体的な指標があって安心して契約できるのである。例えば不良品を納入してしまった場合の補償についても「事後協議」は大きな不安を与える。その不良品が与えた損害の範囲がどこまでかによって補償額は大きく異なるケースがある。損害範囲を当該部品代に限定するのか、その不良品を使用した製品価格全体を補償対象とするのかで大変な違いがある。これは事前に取り決めておく、つまり補償限度を取り決めておくのが欧米、中国型であり日本はそこまで事前には決めておかないのが一般的である。つまり、日本ではそういった事故がおきた場合でもその責任割合や負担能力などの条件を考慮しつつ「事後協議」して最終的な結論を出すということである。

---

<sup>251</sup> 川島武宣(1967)『日本人の法意識』: 113-116 頁。

「誠意をもって」の処置ではどう理解していいのかわからない。少なくとも「誠意をもって丸く収める」とは理解できない。日本人としてみればそもそも契約を結ぼうとする以上、相手に対する信頼があるから契約しようとしているのであってそのことが大事なのである。その信頼をもとに誠意をもってすれば紛争の解決くらい何でもないということになるのだが、そうは理解してもらえない。日本人からみれば非常に美しい考え方であるが、残念ながら国内でしか通用しない。トラブルが起こってからの誠意というのは難しいと思うのである。日本人は伝統的に権利の意識が弱い、一方で欧米は権利の主張は当然のことで義務の履行を相手に強く求める。では、中国人はどうかというと明らかに欧米型である。日本人は契約に関して狭い同質的な当事者間の日本国内での契約感覚と中国、欧米との契約を締結することの感覚を使い分ける必要がある。日本が世界のなかで特殊なのだからこれは仕方がない。とともに海外でのビジネスでは国内ビジネスのように義務履行を優先する考えをいったん横に置いて、権利の主張と相手方の義務の履行を意識する態度も場合によっては必要である。日本人には一般的には馴染まないがそれがグローバルスタンダードである。

孔健（1997）は日本語会話の「……ですが、・・（無言）」にその曖昧な表現がよく表れていると指摘する<sup>252</sup>。「あなたのおっしゃることはもっともですが……」。この「……」には「私は同意できない」というニュアンスがある。しかし外国人からみると、この軽い「が……」、この一音を過小評価して「もっともだ」、すなわち「同意した」と考えてしまう。「……が……」と言って結論を言わず、さらに相手の出方を見る、そういうやりとりの中で、「私はあなたの言うことを十分に聞きましたよ。十分に検討しましたよ。ですが結論はNOです」という相手の立場、今後の関係まで視野に入れた会話をするのである。相手からみても、「今回の話は受け入れられなかったが、よく話は聞いてもらったので、まあよしとするか」という形での幕となる。

日本人の曖昧性は相手に対する気遣いであり、YES、NOをはっきりさせず、自ら気づかせることを重要視し、それが得意の集団主義を支えている。これは中国人にとってはあるいは欧米人にとってもとんでもない発想と映るということを理解しておかなければならない。日本人自身も自らの曖昧さについて諸外国人から指摘され、自覚もしている。しかしながら、多くの日本人の意識の中では「外国人と会話をするときははっきりとしたもの言いをしなさいといけない」くらいの認識ではないだろうか。大事なことははっきりとした

---

<sup>252</sup> 孔健(1997)『中国人からみた日本人』: 44頁。

自らの考え、判断を持つことである。表現だけの問題ではない。ともすれば日本社会は「タテ社会」と言われ、「上」の判断、「上」の考えを伺う姿勢が強い。これではなかなか「自らの・・・」が育たない。

日本人は国際的な交渉力が弱いとよく言われる。外国人からすれば日本人との交渉は面白くない。これは交渉力以前の問題である。その中身は何かと云えば、自分の意見を明確に主張する、つまり論理的に説明することが下手であるということに尽きる。だから、まず、相手の主張を傾聴して反応するという立ち位置になりがちである。まずは受け入れてみる、聞いてみるから開始するという典型的な＜論理和＞的思考方法である。自らの論理がはっきりしないから相手の主張に対する理路整然としたカウンター提案が出せないのだから「合意点を見出す」「妥協点を探る」という「譲る」ことができない。相手から見ると交渉にならないので面白くないというわけである。おまけに時間がかかる、交渉担当者の権限はどこまであるのかはっきりしないこともある。

激論はしたくない、激論はその後の当事者間の関係を悪化させるのではないかと心配する。日本国内ではそれは「正しい思考」と言えるかもしれないが、これもグローバルスタンダードではない。

その点、中国人はグローバルスタンダードに近い。そもそも、中国は儒教の国と言っても儒教だけでなく諸子百家と言われる諸説があつてその中で後の為政者が儒教、朱子学思想をもとに政権運営をしたために儒教国と括られてしまいがちであるが、秦の始皇帝は法家重視であるし、唐朝では仏教が盛んである。また儒教・朱子学の基本思想となる陰陽説は陰と陽という対立概念があり、互いに相手を認めることで自らの存在があるとする、つまり反対意見がないと自らの立場もはっきりさせることができないということになる。であるから、自らの考えを主張することについても何の抵抗もなく、むしろそれができないことは能力がないと判断されるのである。

日本の「タテ社会」と言う特徴に対して言うならば、現在の中国は「ヨコ社会」と言える。多くの若者の夢は自分で商売をし自立すること、自らが経営者（老板）となることである。したがって企業の中で埋没するようなことは考えていない。そのための各種各様の人的ネットワークをつくることに余念がない。このネットワークづくりこそが「ヨコ」の関係を拡大する。中国人は友人を非常に大切にす、そのために損得は度外視して動く。それが当然と思っている。この情報ネットワークは日常生活の場面でも大いに機能する。

「昨日〇〇部でこういう事件があった」とかのニュースはだれもが翌日には知っている。ある会合セレモニーのための **BGM** を作るという課題があったとき、彼らの行動はそういう技能をもつ友人を探し出すことであった。そして見事にその課題をクリアした。その友人は徹夜して **BGM** を作成してくれたそうである。この人的ネットワークこそがヨコに強い中国人の社会である。

本章は論文「暗黙の了解と潜規則」（追手門学院大学ベンチャービジネス・レビュー第6号2014年）を加筆、修正した。

顧みて、今や日本人は 113 万人もの人が海外に居住している。本稿は中国を中心とした東アジアとの関係で論じているが、他の海外諸国との関係においても視点としては共通するところがある。多くは企業、政府、団体、研究関係かと思うが、日本の「いいもの」も「そうでないもの」も直接発信できる人達である。経済のグローバル化が言われて長い時間がたち、多くの日本企業は海外に進出した。諸国の成長力を取り込むことで自らも成長していこうとしている。しかし今後、日本人が海外で活動していく上で経済面だけでなく、何かをプラスアルファとして考えていかなければならないのではないかと。単に経済合理性だけでなくその地域のために、という視点が今後ますます重要になる。

その前提として、異文化に対する偏見は捨てておかねばならない。青木(2001)は「日本人は明治維新のきっかけともなった西洋文明にあこがれる一方でそれまで主要な教師であった中国文化をスミへ追いやるばかりか、劣位の文化と認識した。そうした傾向は現在の日本でも色濃く残っていると言わざるを得ない。そうした近代日本の傾向はアジア全体にも拡大され、それをアメリカや西欧の文化と同格には置かないようになった。一方へのあこがれはもう一方への軽蔑とか嫌いとかの極端な態度になる危険性がある。あこがれも軽蔑もささいな、断片的な知識、印象だけで結論付けてしまいがちになる」<sup>253</sup>と言う。たしかに明治維新以降の日清戦争、日露戦争での勝利もあってますます日本人一般のオリエンタリズム的態度が形成された。それが第二次大戦に臨む基本的態度であったとも言える。第二次大戦ですべてをなくしたが、戦後においてもわずか 30 年ほどの間に世界の経済大国にまで復活したこともあってその態度は大なり小なり残っているのではないだろうか。

確かに世界トップレベルの製品品質や開発技術、生産技術をもつことは多くの異文化圏からみれば明治初期に日本が西洋文化に対してそうであったように憧れの対象ではあろう。しかし、あくまでそれは日本の技術、品質に対してである。異文化を知らないことは自文化中心の押しつけがましい考え方、行動につながりやすい。

本来、相互理解は相手のもつ文化、宗教、民族などが異なることを前提にして、その上でどう理解しあい共生するかということの意味する。そのために必要な態度、考え方と適切な知識が必要になる。自国の主張だけでなく相手の主張も理解した上での相対化が必要

---

<sup>253</sup> 青木保(2001)『異文化理解』: 38-39 頁。

である。知識面という観点でこれまでの章では東アジア各国の立場から俯瞰してきた。この最終章では、実際に海外で生活をする、国内で外国人と接するなど異文化、異なる価値観、異なる歴史をもつ人たちへの理解および彼らとの協働の考え方、態度について考える。

#### ① 相互理解促進のためにー長崎の事例から

現在、中国で 13.4 万人の日本人が生活をしている。企業拠点数は 32,667 拠点にのぼり全世界拠点の 48%を占める<sup>254</sup>。海外へ進出する動機は企業によってさまざまであるが、多くは中国の巨大な市場をめざし、または生産コストの競争力を高めるためである。本来の企業目的からすれば、よい商品をより安く、多くの人に提供するのだからそれでいいし、このことに異論をはさむものではない。しかしさらに企業活動を円滑に地域の協力も得ながら進めていくためには、もう一工夫がほしいものである。

論語『子曰、放於利而行多怨』（子曰く、利によりて行えば怨み多し。自分の利益だけを優先していると人に怨みを買う）。経済的な要素だけで活動するのは少なくとも尊敬はされない。利を得ることを否定しているのではない。しかしそこには利の使い方も道義的な観念もあるだろうということを孔子は言っている。

長崎へ航海の危険を冒してやってきたかつての中国人たちは、交易という本来の目的以外にも地域の人々に貢献する活動をしてきた。たとえば、興福寺の黙子如定は眼鏡橋を中国の技術、資金を使って架け（図 61）、崇福寺では 1682 年の天和の飢饉の際には大釜<sup>255</sup>を作って、<sup>せじゆく</sup>施粥を民衆に施した。さらに、隠元禅師はインゲン豆をはじめ多くの農産物を日本に伝え、食生活を豊かなものにすることに多大な貢献をした。

---

<sup>254</sup> ウェブサイト：外務省「海外在留邦人数・進出日系企業数の調査結果（平成 27 年要約版）」

<sup>255</sup> 大釜は崇福寺に現存。



図 61 中島川・眼鏡橋（左）と橋の横に立つ黙氏如定<sup>256</sup>像 （2013年9月著者撮影）

長崎の氏神、諏訪神社は長崎の人にとっては地域の守り神である。この神社への奉納の出し物に「蛇踊り」をはじめとする中国発祥の出し物が多くある。今や観光の目玉商品の一つである。日本の神社への奉納に中国の舞があるのは理屈では考えにくいところだが、いかに当時の中国人が長崎の人々と交流を密にしていたかをうかがわせる。

ペーロン競争もしかりである。ペーロンの起源は古く、中国の戦国時代の楚の屈原の逸話<sup>257</sup>によるとされている。楚が西の強国秦と戦うか和睦するかで議論があり、その決定に絶望した屈原が入水自殺した。その時に彼を慕う人々が先を争って船を出し屈原を助けようとしたという。また屈原の身体が魚に食われないように、米をくるんで投げ込んだ、これがちまきであるといわれている。この日が5月5日であったことから、ペーロン、チマキは5月5日の節句に行われている。ともあれ、中国の龍船を使ったペーロン競争が長崎の人々に受け入れられていること日本人、中国人の区別なく共存していたことの証ともいえるだろう。

在日華僑の人たちはいつの時代にも順風だったわけではない。日本の政治、経済環境や本国の情勢によって、あるいは日中間の国際関係によって大きく影響され、どちらかといえば厳しい環境下に置かれた時の方が圧倒的に長かった。長崎の唐人屋敷が建設され、そこに閉じ込められたのは、「定高制」<sup>258</sup>を採用せざるをえなかった日本の経済状況があっ

<sup>256</sup> 黙子如定 1632年来日、2代目興福寺住持。中島川には木橋があったが大雨が降れば流されることが多く住民は不便を強いられていた。川の両側に住む人々が安心して行き来できるように石橋（眼鏡橋）を架けた。（長崎県(2011)「旅する長崎学 17」：38頁。横山宏章(2011)『長崎唐人屋敷の謎』：195頁。）

<sup>257</sup> 横山宏章(2011) 前掲書：115-118頁。ウェブサイト：Wikipedia(2015)「屈原」

<sup>258</sup> 本稿第5章(1)③参照



た。

安政の開国では 1859 年に、日本はアメリカ、イギリス、フランス、オランダ、ロシアの 5 カ国と修好通商条約を締結し、函館、下田（のちに横浜）、長崎を開港し外国人居留地が設けられるが清との間での条約締結は 1871 年まで待たねばならなかった。その間、中国人の身分は不安定なものとなった。唐人屋敷は取り壊され外国人居留地を借地することもできず、新地の倉庫地あたりを中心に集まっていった。中には、条約国の会社に雇ってもらい身分を守ってもらう代わりに、日本側との交渉を円滑に行う役割を担っていくという互惠関係もあった<sup>259</sup>。つまり生きていくこと自体に智恵と工夫が必要だった。

日清戦争時には直接両国が戦争状態であったが、長崎華僑 600 人の内、半数は帰国しなかった。長崎県知事の「華人保護」の声明もあり、長崎市民の良識、自制がそれを可能にした。戦後には再び多くの中国人が来日している。これも戦時という最悪の環境下においても、その中で生きるという華僑の強い信念が順風時の拡大を呼ぶことになった。

1911 年辛亥革命が中国本土で起きる。清朝は滅亡し、中華民国が建国される。中国で孫文は台湾では国父と呼ばれるが、その孫文は何度か来日しており、日本にもその活動を支援した人達が大勢いる。その中の一人が長崎人梅屋庄吉である。1885 年頃香港で写真館を営んでいた梅屋と孫文が会おう。ここで梅屋は孫文の考えに共鳴、以降の孫文の活動を資金面から支援していく。梅屋は写真館のあと映画ビジネスでも財を為すが、ここで得た利益も孫文の革命の助けとなった。孫文の死後、孫文の功績を称え、後世に伝えるため、銅像を制作し中国に寄贈した。今も南京、広州、澳門にあるそうだ。そして辛亥革命 100 年となる 2011 年、中国から長崎へ梅屋夫妻と孫文の像が贈られた<sup>260</sup>。

こう見てくると、逆境時のいき方がその後の関係に大きな影響力をもつと言える。開国後は交易の中心は神戸、横浜に移っていき、長崎での交易の量的ポジションは下がっていたが、長崎に開いた中国文化の融合拠点としての位置づけはさらに強くなっている。

両国の関係は順風も逆風もあるが、考えてみればそれは当然なことでもある。その時々々の状況に一喜一憂するのではなく本来友人でいたいのか喧嘩相手でいたいのか、日常における相互理解がやがて相互信頼関係の構築につながる。

---

<sup>259</sup> 長崎県企画「旅する長崎学 9」：32 頁。

<sup>260</sup> 長崎県企画「旅する長崎学 17」：16-17,20-21 頁。

② 互いの強み — 商売上手とものづくり名人 — を活かす

日本人はものづくりが得意である。まず日本人の考え方を整理しておく。日本は資源の無い国であるので、原材料を輸入してそれに付加価値がつくように「加工」して製品化する。この半製品あるいは完成品を品質、コストで、あるいはサービスを含めた商品力で国際的競争力のあるレベルに仕上げ、これを輸出して外貨を稼いでいく他に生きていくすべを持たない。これが日本の基本構造である。したがって、いかに「加工」するかすべてがかかっている。「ものづくり力」は日本の競争力の源泉であるし、そこにあらゆる経営資源を投入してきたのである。

では、中国の構造はどうか。中国人はよく「商売上手」と言われる。そう言われるのは「加工」ではなく「何が必要か」「何が売れるか」を的確に把握することが上手なのである。そのニーズが分かれば、その必要なものを調達し販売する。必要なものには素材も半製品も最終消費財もある。「加工」のように手間ひまをかけず「商い」をする。日本人がいかにものをつくるかという”How to”を重視するのに対し、中国人は何を扱うかという”What”を重視する。

この日本人と中国人の得手とするところの違いは「もの」を「製品」と捉えるか「商品」と捉えるかの違いでもある。

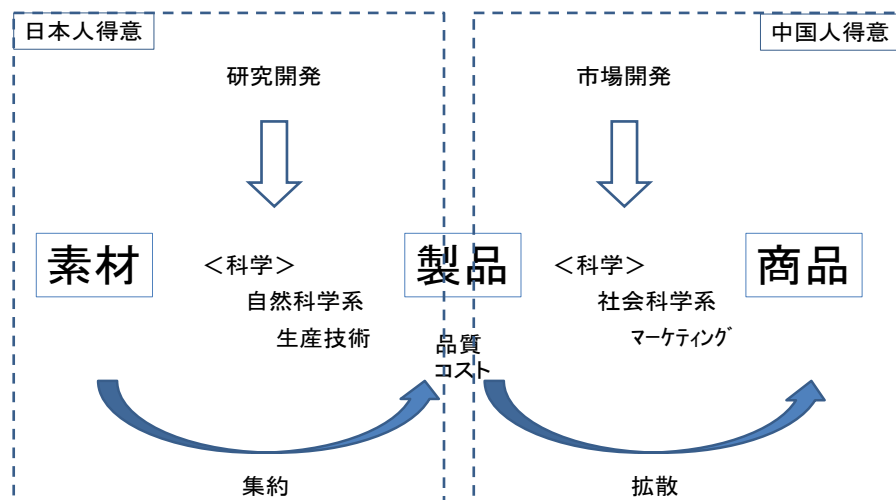


図 62 「製品」と「商品」

日本人は（図 62）に示す左半分のプロセスを得意とする。つまり素材を集めこれらを加工あるいは組立て製品として作り上げる。その前提として開発、技術的な研究開発が機能することは当然である。素材を製品に変換していくには科学のサポートが必須であるが、ここでは主として自然科学系分野が有用である。その目標とする品質やコストを作りこむためにヒト、モノ、カネを効率的に投入する。企業には技術開発、調達・購買、品質、生産、人事、経理などの主要機能があるが突き詰めて言えばこれらの各機能の目的はすべていい製品づくりに集約されなければならない。それを実現するためには内部統制力が必要であり、チームワークも欠かせない。こういったことはタテの社会構造をもつ、また伝統的に「和」の精神をもつ日本人には得意な分野である。

中国人が得意とするのは図の右半分である。ものづくりの基礎となる「研究開発」に対しては「市場開発」が、製品を商品として扱うためにはマーケティングや広告・宣伝などの社会科学的分野がこれをサポートする。これを実現するためには、多くの人、機能を一つの目標に集約していくというよりは、社会全体に対して働き掛ける、あるいは個別撃破する突破力や情報ネットワーク力が重要になる。これまでに述べてきた、個人主義的であるが人的つながりを大切にする国民性がそのまま生かされる。

もちろんこういう「商い」のしかたは現在急にでてきたものではない。中国伝統の思想、価値などに基づいていると考えられる。唐の都長安には東西に大きな「市」があった<sup>261</sup>が、ここでは主として西からシルクロードを通して西域から物資がやってきて日常的に国際交易がおこなわれていた。東は日本から遣唐使が海を渡って、朝鮮からも中華皇帝に拝謁するために朝貢という形でも貴重な物品が集まってきた<sup>262</sup>。中華はモノを作らなくても、必要なものが集まってくるところだった。

清の最盛期、乾隆帝の時イギリスは交易条件改善のため、マカートニー卿を北京に派遣した。交渉内容は、イギリスが管轄できる貿易拠点の確保、貿易条件の改善、常駐使節の交換等であったが、皇帝への謁見儀礼<sup>263</sup> が合わないこともあり交渉は不調に終わる。清としてはイギリスと交易をしなくとも、中華には必要なものは何でも揃っており何も問題はない、しかし、イギリスがどうしてもと言うのなら慈善の精神で交易はしてやっても

---

<sup>261</sup> 若山滋(1990)『ローマと長安』: 81,82 頁。

<sup>262</sup> 唐からすれば日本の遣唐使も「朝貢」とみなされていた（壇上寛(2012)『永楽帝』: 27 頁。）という見方がある。

<sup>263</sup> 石橋崇雄(2011)『大清帝国への道』: 202 頁。三跪九叩事件と言われている

良い<sup>264</sup>。そう豪語できるほど中華にはモノが集まっていた。商才があればよしである。

「加工」ということに関して、共産党の中国がここに挑んだことがある。毛沢東である。建国10年の後、理想の共産主義社会の実現のためにも国家の基幹となる「鉄」の生産増大は必須要件と考え、「大躍進運動」を展開した。農業の人民公社化とあわせて二本の柱としたのだが、残念ながら鉄を原材料から加工していく技術を全く持っていなかった。そのため「土法高炉」と言われる方式で、ナベ、カマ、クワ、スキなどの鉄製品を簡単な装置で熔解して鉄を生産した。この燃料に多くの木材が使用されたため極端に森林伐採が進み保水力を破壊し、その後の洪水被害を大きくする要因ともなった。折しも農業分野では凶作が続き、数千万の人々が飢餓によって死亡した。毛沢東はこれで一時実権を失うことになった。

現在もやはり中国は「加工」がうまいとは言えない。加工産業はもちろん存在しているが、その多くは外資とのパートナーシップによって運営されているとみていい。現地系の企業では一般的に言って加工品質の維持、確保やそのベースとなる技術的知見に困難を抱えている。

日本のものづくり力と中国の商売上手が組み合わせられれば経済の上で世界に大きな貢献ができるように思える。

### ③ 脱ステレオタイプ思考

今、日中関係は戦後最悪の状況にある。中国から見れば共産党政権発足以降ということになるだろうか。日本の言論NPOと中国国際出版集団の「日中共同世論調査(2015年)」<sup>265</sup>の結果によると、日本人の88.8%、中国人の78.3%が相手に「良くない印象」をもっており、その理由として日本人の半数以上が「歴史問題等で日本を批判する」「資源、エネルギー、開発などの行動が自己中心的に見える」をあげ、中国人は70.5%が「侵略の歴史をきちんと謝罪し反省しない」、68.1%が「魚釣島を国有化し対立を引き起こした」からとしている。両国とも昨年よりは「良くない印象」は減少しているが依然高い水準である。この調査は継続して実施されており、2006年調査では日本人が中国に「良くない印象」を持っ

<sup>264</sup> 陳舜臣(1985)『実録アヘン戦争』: 44頁。

<sup>265</sup> ウェブサイト: 言論NPO(2015)「第11回日中共同世論調査」

ているとした人は36.4%、2007年の中国人が日本に「良くない印象」持つとした人は36.5%であったが、時間の経過とともに悪化する傾向にあって、その流れの中で領土問題が出てきたため決定的な最悪数字（2013年調査では日本人の90.1%、中国人の92.8%が相手国に対して「良くない印象」を持っていた）が出てきたのである。現在はその水準からは改善しているがまだまだ相手国への印象は「良くない」と言える。また、この調査の対象者で相手国に行ったことある人は少ない（日本人は15.1%、中国人は7.9%）し、相手国人友人がいる人は日本人で19.2%、中国人では7.3%（前年の3.1%から急増してはいる）であること、合わせて自身の考えの元になる情報は自国のメディアからのものであることは留意しておかねばならない。

確かに、2005年、12年の反日デモと日系企業への破壊活動、毒入りギョウザ事件、漁船衝突事件、そして尖閣問題と次々に問題が出てくる中で、「相手国についていい印象がありますか」と聞かれれば、「NO」と回答する人が殆どになることは想像に難くない。しかし、この状況を放置しておいていいというものでもない。

現実に中国で生活する日本人は13.4万人いる（外務省：海外在留邦人調査統計）。日本で活躍する中国人は永住資格者、留学生を含めて66万人（法務省：在留外国人統計）にのぼる。因みに先の在中国邦人は企業を中心とした民間人とその家族が多数を占めており、進出企業拠点は32,000ヵ所を超えている。彼らは、日常ナマで相手国人と交流し生活している。そういう意味では日中交流の最前線にあってどう感じているのか、やはり上記の世論調査と同じように感じているのだろうか。「良くない印象」を持ちながら一緒に仕事をし成果を上げることは基本的に困難である、相手に対する信頼がなければ、共同で事にあたることはできない。多方の人は世論調査とは異なる感じ方をしているのではないだろうか。

例えば、反日デモで日系企業が襲撃された時、日本車（正確には日本と現地の合弁会社で中国人が製造した車）も攻撃対象にされた。日本人に対するタクシーの乗車拒否や日本車のエンブレムの上に中国国旗のステッカーを貼って、愛国の意志を示すドライバーもいた。しかし、多くの中国人の考えは「どうしてそこまでするのか」「一部の人間だけだ」というもので過激な動きをとった人とは一定の距離をおいていた。ただ積極的に「反対」「そういう行為はやめよ」という行動までにはいけない雰囲気があったのは事実である。ただ文句をつぶやくというおおよそ一般的中国人らしい動きである。

その後、多くの被害を受けた日系企業も中国人スタッフと力を合わせ、早期の復旧に取

り組んできた。ニュースは襲撃されたことのみを伝えるが、その後の粛々とした復旧に向けた取り組みを紹介することはない。その過程において建物、設備の回復、生産、販売の再開までには多くの困難があったと推察されるが、日本人だけの力では事が進むはずはない。中国側、中国人との共同作業によってのみ成り立つものである。「雨降って地固まる」。事件は不幸なことだが、そこから回復を目指す活動、行動を通じて内部の日中間の信頼関係を一層強くすることにつながる。

「相互理解の促進」は今後の日中関係のキーワードになるだろう。まずはお互いを正しく知ることから再出発しないといけない。論語に曰く、「知之者不如好之者 好之者不如樂之者」(それを知っているというだけではそれが好きな人にはかなわない、その人もそれを楽しんでいる人にはかなわない)。ではあるが、まず「知ること」がなければ先に進まない。

「無知」「無理解」という状況の中で相手のことをあれこれ言っていたのでは、ますます誤解を増幅するだけである。先の世論調査を見ると、日本人はお互いの歴史を知らない、中国人は現在の日本の姿を知らない、と指摘されている。一部具体的に言うと、「日本、中国について思い浮かべるものは何か」という質問に対して日本人は、大気汚染、中華料理、反日感情・反日デモ、万里の長城、尖閣問題。対して中国人は、釣魚島、南京大虐殺、電気製品、桜、旧日本軍である。こういう結果になるのはそれぞれの国の中でのメディアの報道の仕方に大きく影響されている部分もあるが、その報道だけを鵜呑みにせざるをえないくらいの情報、認識しかもっていないということの反映でもある。

少し過去を振り返ってみると、1972年の日中国交正常化、78年の「日中平和友好条約」の締結を受け、「日中友好」のスローガンのもと、両国間には協力、協調関係が数多く現れた。当時の中国は改革・開放に舵を切り具体的な施策として諸外国の資本や技術を積極的に活用して一気に近代化を進め豊かな社会を築こうと考えていた。そのためには驚異的な戦後復興を遂げた日本の経済力の活用は最も有効な方策の一つであった。日本も更なる成長戦略を描く中で中国の市場は大きく魅力的であった。それぞれの思惑はあるものの、この「日中友好」の空気が「お互いを知る場」を数多く演出したことは間違いない。国交回復という形で政治が先行し、自治体も中国の各都市との間で「友好都市」協定を締結していった。次いで経済は政府 ODA の拡大、民間企業の中国への進出検討も進んでいった。それにつられる形で、中国悠久の歴史とか中国の世界遺産といった文化の紹介も盛んになった。

現在でも日本、中国がお互いの力を必要としている。思惑はそれぞれにあれども、糸口

はあるはずだ。自治体の友好都市は 1973 年の神戸市、天津市の友好都市協定を皮切りに 356 件（2015 年 1 月現在）<sup>266</sup>にも上っている。

中国は大気汚染 PM2.5 で苦しんでいる。食の安全、安心も国民の関心が高い問題である。政治、経済を問わず、官、民を問わず、あらゆるチャネルであらゆる年代層で相互理解に務めること、10 年かかって悪化した相互の感情は 10 年かけて修復するくらいの中期的な視野をもって粘り強く続けることが肝要である。

以上

---

<sup>266</sup> 日本国自治体国際化協会北京事務所(2015)ホームページ

## <巻末資料>

「はじめに」 ヒアリング結果 2013年4月

### 1. マナー

- ・列に並ばず、割り込みもある
- ・ゴミのポイすて
- ・子供、ペットの排便処理はせず

### 2. 交通ルール

- ・「中国式過馬路」 信号のないところでの勝手な道路横断  
渡り方にはルールあり。一定の速度、ゆっくりめに。あまりクルマを見ない。
- ・赤信号でも渡る自転車、歩行者（安全の判断は自分でしている）
- ・クルマの逆走
- ・二重駐車も

### 3. TV放送

- ・突然の黒画化

### 4. 反日デモ

- ・中国人所有の日系車を破壊
- ・「愛国無罪」の発想
- ・大多数の市民は静観だが積極的に反対することはない。

### 5. 市場で

- ・「一物多価」は当たり前
- ・価格と品質は当然ながら正比例
- ・注文品の納期は遅れることも 言い訳は十分に用意してある

### 6. 人間関係

- ・一度できると親切、家族同様の扱い
- ・知らない人とは「関係ない」の関係

### 7. 人事、教育

- ・知識欲は旺盛 学ぶ姿勢は熱心、ハングリー精神
- ・ただし、その知識は自分限り、周囲へ展開することは少ない

### 8. 仕事観

- ・離職率は日本に比べて高い。成長感がなければあっさりとやめる。



- ・「責任」を伴うことは避けたがる。難題は指示待ちの姿勢（失敗の責任を考える）。
- ・逆に「成果」の配分には神経質。
- ・計画性は強くはないが現場合わせは強い。
- ・部門間調整は苦手。
- ・事務処理能力は正確で早い人が多い。
- ・他人との給料の比較は当然。疑問があれば説明を求めるのも当然。
- ・今頑張れば将来の給料に差が出る（反映される）は通用しない。
- ・交渉はトップ交渉でやらないとなかなか決まらないことが多い。
- ・自らの主張（意見）はしっかり言える、譲らない。

## 参考文献

- 青木保(1999)『日本文化論の変容——戦後日本の文化とアイデンティティ』中央公論新社。
- 青木保(2001)『異文化理解』岩波書店。
- 青木直人(2013)『誰も書かない中国進出企業の非情なる現実』祥伝社。
- 青木人志(2005)『「大岡裁き」の法意識——西洋法と日本人』光文社。
- 天児慧(1999)『中華人民共和国史』岩波書店。
- 天児慧編(2013)『日中歴史の変わり目を展望する』勁草書房。
- 安随友和(2013)「中国文化と日本の地域文化 ①長崎」『追手門学院大学経済・経営院生論集』第11号:225-238頁。
- 安随友和(2013)「長期思考の中国」『追手門学院大学経営学学生論集』第19号:1-18頁。
- 安随友和(2014)「暗黙の了解と潜規則」『追手門学院大学ベンチャービジネス・レビュー』第6号:35-46頁。
- 安随友和(2014)「中国文化の原構造へのアプローチ」『追手門経営論集』第20巻第2号:163-201頁。
- 安随友和(2014)「冊封体制下の中華とその周辺」『追手門学院大学経営学学生論集』第20号:1-22頁。
- 安藤清志・大坊郁夫・池田謙一(1995)『社会心理学』岩波書店。
- イノリヨシ  
李御寧(2007)『「縮み」志向の日本人』講談社。
- イギョテ  
李圭泰(1995)『韓国人の情緒構造』新潮社。
- イェチエンルウオン  
葉千栄 監修 志田唯史(1992)『漢字の謎』KKベストセラーズ。
- 石井寛治(2012)『日本の産業革命——日清・日露戦争から考える』講談社。
- 石橋崇雄(2011)『大清帝国への道』講談社。
- 磯崎新(2003)『建築における「日本的なもの」』新潮社。
- 五木寛之(2014)『隠れ念仏と隠し念仏』筑摩書房。
- 伊藤清司(1996)『中国の神話・伝説』東方書店。
- 伊藤ていじ(1966)『日本デザイン論』鹿島出版社。
- 稲田孝・立間祥介・村松暎編(1997)『中国の故事名言集』平凡社。
- 揖斐高(2014)『江戸幕府と儒学者』中央公論新社。
- 今里隆(2014)『屋根の日本建築』NHK出版。
- 岩井宏實編(2002)『日本の神々と仏』青春出版社。

- 岩田龍子・沈奇志(1997)『国際比較の視点で見た現代中国の経営風土——改革・開放の意味を探る』文眞堂。
- 上田正昭(2010)『新版 日本神話』角川学芸出版。
- 上田正昭(2012)『渡来の古代史——国のかたちをつくったのは誰か』角川学芸出版。
- ヴォーゲル, E. F. 広中和歌子・木本彰子訳(1979)『ジャパン アズ ナンバーワン』ティビーエス・ブリタニカ。(Vogel, E. F. (1979) *Japan as Number One*, Cambridge: Harvard University Press)
- 内田樹(2009)『日本辺境論』新潮社。
- 内山正熊(1983)『神戸事件』中央公論社。
- 梅棹忠夫(1974)『文明の生態史観』中央公論新社。
- 梅原猛(1980)『空海思想について』講談社。
- 宇野哲人(1980)『中国思想』講談社。
- 江原規由(2014)「中国における腐敗の現状とその対策」『季刊 国際貿易と投資』No.95 国際貿易投資研究所: 132-161 頁。
- 王<sup>おう</sup>輝 橋爪大二郎・張静華監修 中路陽子訳(2013)『文化大革命の真実 天津大動乱』ミネルヴァ書房。(王輝(2013)「天津文革親歴紀事」台北: 蘭臺出版社)
- 太田博太郎(2013)『日本の建築——歴史と伝統』筑摩書房。
- 大谷正(2014)『日清戦争』中央公論新社。
- 大橋武夫(1990)『兵法・孫子——戦わずして勝つ』マネジメント社。
- 大橋良介(1992)『日本的なもの、ヨーロッパ的なもの』新潮社。
- 岡倉天心 桶谷秀昭訳(1994)『茶の本』講談社。(Okakura, K. (1906) *The Book of Tea*, New York: Fox Duffield)
- 岡田英弘(2009)『倭国の時代』筑摩書房。
- 岡田英弘(2014)『岡田英弘著作集IVシナ(チャイナ)とは何か』藤原書店。
- 岡本顕實(2013)『元寇』(郷土歴史シリーズ Vol. 4) さわらび社。
- 岡本隆司(2011)『李鴻章——東アジアの近代』岩波書店。
- 岡本隆司編(2013)『中国経済史』名古屋大学出版会。
- 岡谷公二(2013)『神社の起源と古代朝鮮』平凡社。
- 沖縄県立博物館・美術館編(2014)『久米村—琉球と中国の架け橋』。
- 小倉紀蔵(2012)『入門 朱子学と陽明学』筑摩書房。

- 小野信爾(1977)『人民中国への道』講談社。
- 海洋博覧会記念公園管理財団総監修 高良倉吉・福島清・平良啓監修(1992)『首里城 甦る琉球王国』海洋博覧会記念公園管理財団。
- 加地伸行(1984)『「論語」を読む』講談社。
- 加地伸行(2013)『中国人の論理学』筑摩書房。
- 葛兆光 かつちようこう 辻康吾監修・永田小絵訳(2014)『中国再考——その領域・民族・文化』岩波書店。
- 加藤隆則(2011)『中国社会の見えない掟——潜規則とは何か』講談社。
- 加藤隆則(2013)『「反日」中国の真実』講談社。
- 加藤徹(2005)『西太后』中央公論新社。
- 加藤徹(2006)『貝と羊の中国人』新潮社。
- 加藤陽子(2007)『満州事変から日中戦争へ』岩波書店。
- 金谷治(1993)『中国思想を考える』中央公論新社。
- 柯隆・朱炎・金堅敏(2009)『華人経済師のみた中国の実力』日本経済新聞出版社。
- ガルブレイス, J. K. 中村達也訳(2014)『満足の文化』筑摩書房。  
(Galbraith, J. K. (1992) *The Culture of Contentment*. Harmondsworth, Middlesex : Penguin)
- 河合隼雄(1982)『中空構造日本の深層』中央公論社。
- 川口謙二(1983)『神仏混淆の歴史探訪』東京美術。
- 川島武宣(1967)『日本人の法意識』岩波書店。
- 河添房江(2014)『唐物の文化史——舶来品からみた日本』岩波書店。
- 川添雅夫(2000)「異文化における日本的経営の進化モデルの創造」関西大学大学院『人間科学』第52号:101-117頁。
- 姜尚中(2008)『在日』集英社。
- 姜在彦 カンジュエン(2006)『歴史物語 朝鮮半島』朝日新聞出版。
- 金重明 キムチョンミョン(2013)『物語 朝鮮王朝の滅亡』岩波書店。
- 金尙基 キムヤンギ(1989)『物語 韓国史』中央公論社。
- 杳澤虔太郎(2007)『日中合作——中国No. 1ソフト企業誕生の物語』小学館スクウェア。
- 窪徳忠(1996)『道教の神々』講談社。
- 呉宏明・高橋晋一編著(2015)『南京町と神戸華僑』松籟社。
- 小池和男(2008)『海外日本企業の人材形成』東洋経済新報社。

- 孔健(1997)『中国人から見た日本人』ごま書房。
- 孔健(1997)『がんこな中国人 あいまいな日本人』PHP研究所。
- 神戸市教育委員会編(1975)『神戸の史跡』神戸新聞出版センター。
- 合山究(1991)『故事成語』講談社。
- 合山究(1993)『雲烟の国——風土からみた中国文化論』東方書店。
- 国立歴史民俗博物館編(2009)『日本建築は特異なのか——東アジアの宮殿・寺院・住宅』。
- 古田島洋介(1990)『「縁」について——中国と日本』新典社。
- 小林善文(2012)「南水北調政策の課題と展望」『神戸女子大学文学部紀要』45 巻：47-58 頁。
- 小室直樹(1996)『小室直樹の中国原論』徳間書店。
- 齋藤孝(2012)『数学力は国語力』集英社。
- 酒井三郎(1992)『昭和研究会』中央公論社。
- 坂出祥伸(2010)『日本と道教文化』角川学芸出版。
- 堺屋太一編著 浅川港／マーグル, S. G. / 葛慧芬／林曉光(2009)『日本米国中国 団塊の世代』出版文化社。
- 坂野潤治・大野健一(2010)『明治維新 1858-1881』講談社。
- 坂本勝監修(2009)『古事記と日本書紀』青春出版社。
- 崎山昌廣監修(2006)『神戸学』神戸新聞総合出版センター。
- 佐藤隆三(1990)『菊と鷺』講談社。
- 佐藤隆三(1993)『グローバル・ユーイズム』日本生産性本部。
- 産経新聞「毛沢東秘録」取材班(1999)『毛沢東秘録(上、下)』産経新聞ニュースサービス。
- シタラム, K. S. 御堂岡潔訳(1985)『異文化間コミュニケーション——欧米中心主義からの脱却』東京創元社。(Sitaram, K. S. (1976) *Foundation of Intercultural Communication*, Columbus: Charles E. Merrill Publishing Company)
- 島尾新(2013)『「和漢のさかいをまぎらかす」——茶の湯の理念と日本文化』淡交社。
- 島田裕巳(2015)『八紘一字——日本全体を突き動かした宗教思想の正体』幻冬舎。
- 清水忠男(1991)『行動・文化とデザイン』鹿島出版会。
- 清水美和(2008)『「中国問題」の内幕』筑摩書房。
- 清水美和(2009)『「中国問題」の核心』筑摩書房。
- 司馬遷 小竹文男・小竹武男訳(1995)『史記6 列伝二』筑摩書房。

- 司馬遼太郎(2008)『街道をゆく2 韓のくに紀行』朝日新聞出版。
- 司馬遼太郎(2009)『街道をゆく28 耽羅紀行』朝日新聞出版。
- 渋沢栄一 守屋淳訳(2010)『現代語訳 論語と算盤』筑摩書房。
- 上海辞書出版社(2000)『日本僑民在上海 1870-1945』。
- 白井聡(2013)『永続敗戦論——戦後日本の核心』太田出版。
- 白川静(1980)『中国の神話』中央公論新社。
- 人民美術出版社(2000)『天津舊影』。
- 人民美術出版社(1999)『大連舊影』。
- 杉本良夫／ロス・マオア(1995)『日本人論の方程式』筑摩書房。
- 関晃(2009)『帰化人——古代の政治・経済・文化を語る』講談社。
- 石平(2011)『中国人の正体』宝島社。
- 石平(2015)『なぜ中国は覇権の妄想をやめられないのか』PHP研究所。
- 千田稔(2013)『古事記の宇宙——神と自然』中央公論新社。
- 叢小榕<sup>そうしょうよう</sup>編著(2013)『老荘思想の心理学』新潮社。
- 大本山萬福寺(2013)『黄檗山萬福禪寺』便利堂。
- 高木桂蔵(1991)『客家』講談社。
- 高木桂蔵(1996)『「中国はノーと言える」の読み方』ごま書房。
- 高多理吉(2014)「世界の水危機」『季刊 国際貿易と投資』No.95, 国際貿易投資研究所：  
58-74 頁。
- 高良倉吉 2012『琉球の時代——大いなる歴史像を求めて』筑摩書房。
- 竹内弘行(2008)『十八史略』講談社。
- 竹内実(1967)『中国の思想』日本放送出版協会。
- 武光誠(1999)『藩と日本人——現代に生きる〈お国柄〉』PHP研究所。
- 武光誠(2013)『七福神の謎77』祥伝社。
- 武光誠(2014)『日本の古代史——本当は何がすごいのか』育鵬社。
- 田尻祐一郎(2011)『江戸の思想史』中央公論新社。
- 田中修(2001)『新中国事情』(財)大蔵財務協会。
- 田中良平(2005)『天津今昔招待席——租界、にんげん模様』眺。
- 田中良平(2008)『続・天津今昔招待席——租界、にんげん模様』眺。
- 檀上寛(2012)『永楽帝——華夷秩序の完成』講談社。

- チアン, J / ハリディ, J 土屋京子訳(2005)『マオ——誰も知らなかった毛沢東(上、下)』講談社。(Jung Chang/Jon Halliday(2005) *Mao : the unknown story*, London: Jonathan Cape)
- 池東旭<sup>チドンク</sup>(1997)『韓国の族閥・軍閥・財閥』中央公論社。  
中国摄影出版社(2002)『旅順口大観』。
- 張慧芳<sup>ちょうけいほう</sup>(1995)「中国と日本の住まいー『公と私』を考える」大阪女子大学人文社会学研究科修士論文。
- 陳舜臣(1985)『実録 アヘン戦争』中央公論新社。  
陳舜臣(2005)『日本人と中国人』恒文社。  
陳徳仁・安井三吉(2002)『孫文と神戸』神戸新聞総合出版センター。  
陳優継(2009)『ちゃんぽんと長崎華僑』長崎新聞社。  
筑紫申真(2002)『アマテラスの誕生』講談社。  
中国常識系列編委会(2007)『中国歴史常識』外語教学与研究出版社。  
次田真幸(1977)『古事記(上)(中)(下)』講談社。  
達日出典(1986)『神仏習合』臨川書店。  
筒井清忠(2015)『満洲事変はなぜ起きたのか』中央公論新社。  
鄭大均(2010)『韓国のイメージ』中央公論新社。  
鄭麗芸(1999)『目からウロコの日中比較文化論——ことば・文化・芸術』駿河台出版社。  
デニング, S. 高橋正泰・高井俊次監訳(2012)『ストーリーテリングのリーダーシップ——組織の中の自発性をどう引き出すか』白桃書房。(Denning, S. (2007) *The Secret Language of Leadership: How Leaders Inspire Action through Narrative*, San Francisco, CA.: Jossey-Bass.)
- 土居健郎(1971)『「甘え」の構造』弘文堂。
- 竇少傑<sup>トウショウケツ</sup>(2008)「崗位技能賃金制度——1990年代の中国における賃金制度」『評論・社会科学』同志社大学人文学会、86: 261-285。
- 富坂聰(2013)『習近平と中国の終焉』角川マガジズ。  
鳥居幸雄(1982)『神戸港 1500 年』海文堂出版。  
長崎県企画(2008)『旅する長崎学 9』長崎文献社。  
長崎県企画(2011)『旅する長崎学 17』長崎文献社。  
長崎県企画(2012)『旅する長崎学 16』長崎文献社。

- 中根千枝(1967)『タテ社会の人間関係』講談社。
- 中村信幸監修(2008)『心にひびく論語』永岡書店。
- 夏目漱石(1978)『私の個人主義』講談社。
- 二階堂善弘(2002)『中国の神様』平凡社。
- 新渡戸稲造 矢内原忠雄訳(1991)『武士道』岩波書店。(Nitobe, I. (1905) *Bushido, The Soul of Japan*, New York: G. P. Putnam's Sons)
- 日本媽祖文化交流協会編(2008)『媽祖ものがたり』長崎文献社。
- 丹羽宇一郎(2013)『北京烈日——中国で考えた国家ビジョン 2050』文藝春秋。
- 丹羽宇一郎(2014)『中国の大問題』PHP研究所。
- 野中郁次郎・竹内弘高(1996)『知識創造企業』東洋経済新報社。
- 野村茂夫(2004)『老子・荘子』角川学芸出版。
- 野矢茂樹(2006)『入門！論理学』中央公論新社。
- バード, I. 金坂清則訳(2013)『中国奥地紀行 1』平凡社。(Bird, I. L. (1899) *The Yangtze Valley and Beyond: An Account of Journeys in China, Chiefly in the Province of Sze Chuan and among the Man-tze of the Somo Territory*, London: John Murray)
- バード, I. 時岡敬子訳(1998)『朝鮮紀行』講談社。(Bird, I. (1897) *Korea and Her Neighbours: A Narrative of Travel, with an account of the Vicissitudes and Position of the Country*, London: John Murray.)
- パイル, K. B. 松本三之助監訳 五十嵐暁郎訳(2013)『欧化と国粹——明治新時代と日本のかたち』講談社。(Pyle, K. B. (1969) *The New Generation in Meiji Japan: Problems of Cultural Identity, 1885-1895*, Stanford University press).
- 蜂屋邦夫(1997)『孔子——中国の知的源流』講談社。
- 服部岑生(2006)『「間取り」の世界地図』青春出版社。
- 服部龍二(2008)『広田弘毅』中央公論新社。
- 濱口恵俊(1988)『「日本らしさ」の再発見』講談社。
- 原田禹雄(2003)『琉球と中国 忘れられた冊封使』吉川弘文館。
- 範雲涛(2008)『中国ビジネス とんでも事件簿——商文化の違いに迫る』PHP研究所。
- 樊建川<sup>ハンケンセン</sup>編著(2007)『兵火の大地—日本側の戦時報道写真で見る抗日戦争』外文出版社。



- ピーターズ, T. J. / ウォータマン, R. H. 大前研一訳(2003)『エクセレント・カンパニー』英治出版。(Peters, T. J. / Waterman, R. H. (1882) *In Search of Excellence*, New York: Harper & Row)
- 平野聡(2014)『「反日」中国の文明史』筑摩書房。
- 広瀬和雄(2003)『前方後円墳国家』角川書店。
- 兵庫県神社庁神戸市支部編著(2000)『神戸の神社』神戸新聞総合出版センター。
- 藤田正(1990)『内なる赤穂浪士』ナカニシヤ出版。
- 福澤諭吉 齋藤孝訳(2009)『現代語訳 学問のすすめ』筑摩書房。
- 福澤諭吉 齋藤孝訳(2013)『現代語訳 文明論之概略』筑摩書房。
- 福永文夫(2014)『日本占領史 1945-1952』中央公論新社。
- 船橋洋一(1988)『内(neibu)部 ある中国報告』朝日新聞社。
- 船曳建夫(2010)『「日本人論」再考』講談社。
- 古田博司(1995)『朝鮮民族を読み解く——北と南に共通するもの』筑摩書房。
- ベネディクト, R. 長谷川松治訳(2005)『菊と刀 日本文化の型』講談社。  
(Benedict, R. (1946) *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture*, Boston: Houghton Mifflin)
- ベンダサン, I. (1970)『日本人とユダヤ人』山本書店。
- 細谷雄一(2015)『歴史認識とは何か——日露戦争からアジア太平洋戦争まで』新潮社。
- ポーロ, M. 青木富太郎訳(1969)『東方見聞録』社会思想社。
- ポランニー, M. 高橋勇夫訳(2003)『暗黙知の次元』筑摩書房。(Polanyi, M. (1966) *The tacit dimension*, Garden City, N.Y.: Doubleday)
- ホイテイング, A. S. 岡部達味訳(2000)『中国人の日本観』岩波書店。(Whiting, A. S. (1989) *China eyes Japan*, Berkeley: University of California Press)
- マイヤー, M. 早良哲夫訳(2010)『1989 世界を変えた年』作品社。(Meyer, M. (2009) *The Year that Changed the World*, London: Simon & Schuster)
- 孫崎享(1993)『日本外交 現場からの証言』中央公論社。
- 松尾正人(1986)『廃藩置県』中央公論社。
- 松本健一(1993)『近代アジア精神史の試み』中央公論社。
- 真鍋俊照(1991)『マンダラは何を語っているか』講談社。
- 丸山真男(1961)『日本の思想』岩波書店。

- 水野直樹(2008)『創氏改名——日本の朝鮮支配の中で』岩波書店。
- 水野直樹・文京洙(2015)『在日韓国人 歴史と現在』岩波書店。
- 三田村泰助(1963)『宦官』中央公論新社。
- 宮家邦彦(2014)『哀しき半島国家 韓国の結末』PHP研究所。
- 宮崎市定(1963)『科挙』中央公論新社。
- 宮崎市定(1995)『中国文明論集』岩波書店。
- 宮嶋博史(1995)『両班』中央公論社。
- 宮本常一(1985)『塩の道』講談社。
- 村上泰亮(1998)『文明の多系史観——世界史再解釈の試み』中央公論社。
- 文京洙<sup>ムンギョンス</sup>(2005)『韓国現代史』岩波書店。
- 茂木計一郎・稲次敏郎・片山和俊(1991)『中国民居の空間を探る——群居類住—光・水・土—中国東南部の住空間』建築資料研究社。
- 諸橋轍次(1973)『中国人の智慧』講談社。
- 山上徹(2013)「ホスピタリティ・ビジネスにおけるコミュニケーションも進化・深化——  
ジョハリの窓を事例にし」『政経研究』第49巻第3号：559-588頁。
- 山室信一(1993)『キメラ——満洲国の肖像』中央公論社。
- 安井三吉(2005)『帝国日本と華僑——日本・台湾・朝鮮』青木書店。
- 安田喜憲(2001)『龍の文明・太陽の文明』PHP研究所。
- 安富歩(2015)『満州暴走 隠された構造——大豆・満鉄・総力戦』KADOKAWA。
- 安丸良夫(1979)『神々の明治維新』岩波書店。
- 俞成華<sup>Y u Chenghua</sup>(2013)『日中合弁企業のマネジメント——技術・資金・人的資源』ミネルヴァ書房。
- 湯浅邦弘(2014)『入門 老荘思想』筑摩書房。
- 由良弥生(2013)『眠れないほど面白い「古事記」』三笠書房。
- 横田健一(1990)『神話の構造』木耳社。
- 横山宏章(2011)『長崎唐人屋敷の謎』集英社。
- 吉澤誠一郎(2010)『清朝と近代世界 19世紀』岩波書店。
- 吉田光男編(2004)『日韓中の交流——ひと・モノ・文化』山川出版社。
- 吉成直樹監修(2013)『琉球王国がわかる』成美堂出版。
- 六反田豊監修(2013)『朝鮮王朝がわかる』成美堂出版。
- 魯迅 竹内好訳(1955)『阿Q正伝・狂人日記』岩波書店。

若槻禮次郎(1983)『明治・大正・昭和政界秘史——古風庵回顧録』講談社。

若山滋(1990)『ローマと長安』講談社。

渡辺正恵(2013)「在日コリアンの定着」追手門学院大学大学院経営学研究科博士論文。

和辻哲郎(1979)『風土』岩波書店。

和田武司・市川宏編(1997)『中国の故事名言』徳間書店。

王敏<sup>ワンミン</sup>(2008)『日本と中国——相互誤解の構造』中央公論新社。

<ウェブサイト>

AFP(2015)「中国政府、劉氏へのノーベル授賞決定に反発」

<http://www.afpbb.com/articles/-/2764421?pid=6302568>

GLOBAL NOTE(2015)「世界の名目GDP 国別ランキング統計・推移 (IMF)」

<http://www.globalnote.jp/post-1409.html>

GLOBAL NOTE(2015)「世界の1人当たり名目GDP 国別ランキング推移 (IMF)」

<http://www.globalnote.jp/post-1339.html>

WEDGE Infinity(2015)城山英巳「南方週末事件「共産党 VS 記者」全対決の結末と「深い意義」」 <http://wedge.ismedia.jp/articles/-/2509?page=7>

Wikipedia(2015)「屈原」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B1%88%E5%8E%9F>

Wikipedia(2015)「南方週末社説差し替え事件」

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%97%E6%96%B9%E9%80%B1%E6%9C%AB%E7%A4%BE%E8%AA%AC%E5%B7%AE%E3%81%97%E6%9B%BF%E3%81%88%E4%BA%8B%E4%BB%B6#cite\\_note-reuters20130104-8](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%97%E6%96%B9%E9%80%B1%E6%9C%AB%E7%A4%BE%E8%AA%AC%E5%B7%AE%E3%81%97%E6%9B%BF%E3%81%88%E4%BA%8B%E4%BB%B6#cite_note-reuters20130104-8)

Wikipedia(2015)「劉曉波」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8A%89%E6%9A%81%E6%B3%A2>

外務省(2015)「海外在留邦人数・進出日系企業数の調査結果 (平成 27 年要約版)」

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/index.html>

韓国観光公社(2015)「伝統的韓国家屋」韓国観光公社ホームページ

[http://japanese.visitkorea.or.kr/jpn/CU/CU\\_JA\\_2\\_1\\_5.jsp](http://japanese.visitkorea.or.kr/jpn/CU/CU_JA_2_1_5.jsp)

京都市歴史資料館情報提供システム (2015) 「寝殿造りから書院造りへ」

<https://www2.city.kyoto.lg.jp/somu/rekishi/fm/nenpyou/htmlsheet/bunka06.html>

言論NPO(2015) <http://www.genron-npo.net/pdf/2015forum.pdf>

神戸市立図書館(2015)「貴重資料デジタルアーカイブス」

<http://www.city.kobe.lg.jp/information/institution/institution/library/top/>

甲南大学(2015)「現代中国経済」 <http://kccn.konan-u.ac.jp/keizai/china/04/frame.html>

国土交通省神戸港湾事務所(2015)「神戸と華僑 林同春氏」

[http://www.pa.kkr.mlit.go.jp/kobeport/\\_enjoy/culture\\_study\\_04.html](http://www.pa.kkr.mlit.go.jp/kobeport/_enjoy/culture_study_04.html)

国立国会図書館(2015)「続三綱行実図」国立国会図書館貴重書展

<http://www.ndl.go.jp/exhibit/50/html/catalog/c022.html>

櫻井よしこオフィシャルサイト(2015)「南方週末事件、習近平体制の揺らぎ」

<http://yoshiko-sakurai.jp/2013/01/24/4513>

斯文会(2015)「史跡湯島聖堂」 <http://www.seido.or.jp/yushima.html>

鈴木商店記念館(2015)鈴木商店記念館ホームページ

<http://www.suzukishoten-museum.com/>

中国の「南水北調プロジェクト」(2015)「南水北調プロジェクトの概要」

[http://www.geocities.co.jp/NatureLand/9598/c\\_web/project1.html](http://www.geocities.co.jp/NatureLand/9598/c_web/project1.html)

中国網 Japanese(2015)「中国のジニ係数、6年連続で低下 所得格差が縮小」

[http://japanese.china.org.cn/business/txt/2015-01/21/content\\_34619029.htm](http://japanese.china.org.cn/business/txt/2015-01/21/content_34619029.htm)

ドイツ連邦共和国大使館・総領事館(2015)「ベルリンの壁崩壊 25周年 1989年8月19日」

<http://www.japan.diplo.de/Vertretung/japan/ja/05-politik/25jahre-Mauerfall-2014/20140819-mauerfall-3.html>

日本国自治体国際化協会北京事務所(2015)「友好都市提携の支援」

[http://www.clair.org.cn/activity\\_4.htm](http://www.clair.org.cn/activity_4.htm)

日本の人事部(2015)「ジョハリの窓」 <http://jinjibu.jp/keyword/detl/736/>

百度百科(2015)「民以食为天」 <http://baike.baidu.com/subview/118815/5141429.htm>

百度百科(2015)「崗位」 <http://baike.baidu.com/view/443923.htm>

上記ウェブサイトは 2015 年 12 月 25 日現在閲覧可能